

犬兄弟の適当な長男

丸猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

その男は、誰よりも父に似ていた。その容姿も、力も、誰よりも血を色濃く受け継いでいた。けれども、いささか、適当過ぎる性格であり、そうして人にも妖怪にも気安いありかたであった。

けれど、彼はどこまでも人でなしであった。

犬夜叉みたいに半妖だからこそその人と妖怪との付き合いかたも、殺生丸のような分かりやすい残酷さもいいんですが。

どんなに人の姿をしていても、どんな優しく振る舞っても、所詮は妖怪みたいなお兄

ちゃんをちよつと考えた結果です。

目次

犬兄弟の兄

1

面影を憎んだ

18

面影はどこにもない

27

父の真意

50

平等の魔物

70

偽りも真でもない情

87

人と妖は交わらない

107

ひとでなし

135

芽吹くことなく枯れ落ちて

165

優しい兄

214

神様が微笑んだ

236

簡素な試験

263

気まぐれの死

292

繰り返す代役

316

母に勝てる息子はおらず

338

虚像の愛

357

牙の本性

373

犬兄弟の兄

「おーおー、親父殿。行くのか。」

それは、どこか弾んだ声だった。まるで酒に酔っているかのような陽気な声だった。それに、男は淡く微笑み、眺めていた空から視線を外して振り返った。

ちらちらと、真つ白な雪が降る。

二人の男は、雪景色の中に溶け込んでしまっただけに色がなかった。

そこには男と、鬪牙王と瓜二つと言っているほどの男がいた。

男は豊かな銀系の髪を一つに束ね、鎧を纏っていた。鎧の見た目の差異はあれど、まさしく鏡に映ったかのように二人の男は似ていた。

強いて言うならば、彼らは互いに浮かべた表情は違った。鬪牙王の宿す感情が静ならば、男の宿す感情は動であった。

「……殺生丸よりも早かったのだな。風牙。」

「そりゃあ、親父の死に目だ。はやくだつてなるさ。」

けろりとしたあけすけな言葉に、鬪牙王は苦笑する。風牙は、雪の降り積もった地面に座り込み、酒を呷っていた。男の吐く息は、冷気の中でも白くなることはない。

その、親の死に目への立ち合いとは思えない出で立ちであった。けれど、その言葉は確かに事実なのだ。

鬪牙王は、満身創痍であった。血と、傷。それにまみれた男は、今にも倒れ込んでもおかしくはなかった。けれど、そんな傷さえも関係なく、男は誰よりも強いのだと、風牙は知っていた。

「止めぬのか？」

「そりゃあ、止めたいさ。お袋の事や、未だに親父離れできてない愚弟やら、この荒れる状態ほっぽって、女の下に駆けてく薄情野郎になんて声をかけりゃあいんだか。俺には、見当もつかないな。」

「……嫌味なことを言う。」

「どうだ？ 死出の一杯に雪見酒でも？」

「魅力的だが、止めて置こう。すぐに、殺生丸が来る。」

苦笑交じりに、鬪牙王は言った。けれど、それを気にすることはない。己の長子である風牙は、幼いころから良くも悪くも場を讀まない子どもであった。

鬪牙王も、時折、何を考えているかは分からなくなることはあったが。

それでも、災厄を振りまくようなものでないことは知っていた。

「まあ、だからって止めりゃあしないさ。あなたの最期の願いを否定するほど不躰であ

る気はないさ。まあ、親父も分かっているだろうが。俺は、別に死に目の挨拶だけをしに来たわけじゃない。」

風牙は、そう言つて立ち上がり、呷っていた酒壺を肩にかけた。そうして、鬪牙王の背中や腰にある三本の刀を指さした。

「その厄介なものの処分をどうするか聞きたいんだ。」

「・・・これか。」

「死に方なんぞ、勝手に決めりゃあいい。殺生丸は置いといて、お袋も他の奴も親父の決めたことにガタガタいう奴はいない。だがな、その刀の処分はきっちり決めといてもらわにやならん。」

鬪牙王の持つ、三振りの劍。

一振りで百の敵を薙ぎ払う、鉄碎牙。

一振りで百の命を救う、天生牙。

一振りで百の亡者を呼び戻す、叢雲牙。

「どれもこれも、一つの国を潰すじや済まん戦いが生まれるほどのものだ。どうするか聞いときたいんだ。下手すりや、俺がその処分を決めることになるぞ。」

「ほう、珍しいな。風牙。お前が、これを望んでいるのか。」

鬪牙王は、風牙がどんな意味でそんなことを言ったのか分かりながら、あえてそう

言った。風牙は、呆れたように言った。

「誰が、そんな扱いの面倒なものを望むやら。まあ、殺生丸は欲しがらるだろうなあ。なんとなつても、あいつには親父の象徴で、形見になるんだし。」

「お前は、父の形見を欲しがりはしないのか？」

「形見なんぞ貰わなくても、親父からはすでにたんと貰つてるさ。まあ、くれるつていうなら貰うかもしれねえが。」

どうするんだ？

それに、鬪牙王は淡く笑った。

「お前は、この刀を、力を求めぬのか？」

「特別には。」

風牙はそう言つて、身の置き場がないというように空を見上げた。それに、鬪牙王は頷いた。

彼の長子は、幼いころから何かを望むということが少なかった。

周りに流されて、鍛練や勉強を続けているという部分があった。だからといって、己がないというわけではなかった。

ただ、あるがままに。

ただ、そこにいた。

執着は見えず、さりとして薄情というわけではない。
望まぬがゆえの空虚さを抱えているわけではない。

芯がないというわけでないが。目指すべきものがあるというわけではない。

「……お前は、何を望むというのだ？」

それは、鬪牙王からすれば、初めての問いかけであった。

鬪牙王は、慈悲の心がないわけではないが、だからといって所詮は妖怪だ。

彼の子は皆、幼いころから強く、そうして賢しかった。だからこそ、さほど表立って関わることはなかった。

彼らには、守る必要はなかったからだ。

殺生丸のことは、よく聞いた。彼の傘下の者たちは、殺生丸のことをまさしく長に相応しいと称えた。

情けというものはないが、彼はどこまでも人でないものらしい。

けれど、けれど、だ。

風牙のことになる、皆は何とも言えない顔をした。

鬪牙王の子らしく、風牙は強い。強くは在れど、争い事を好まず言葉を携えて場を収めようとする彼を、皆は変わり者と言った。

直接的な強さではなく、妖術の収集を好んでいる部分もそれに一役買っていた。

鬪牙王は、己が息子の望みを知りたいと思った。

殺生丸は、ある種、鬪牙王にとつては分かりやすい。けれど、この長子はどうなるのか、ほとほとわからなかった。

風牙は、それにきよとりを目を見開いた。その顔が、ひどく殺生丸の驚いた顔にそっくりで、少しだけ可笑しくなってしまう。

風牙はふむと、頷いて少しだけ考えるような仕草をした。そうして、うんと言った。そうして、まるで、幼子のように無垢な微笑みを浮かべて、口を開いた。

そこには、焦土が広がっていた。

どうやら、大きな屋敷があつたらしい残骸だけが広がっていた。そこには、三種三様の妖怪たちがいた。

一つは、まるで小さな蚤のような姿の冥加。もう一つは、痩せこけた翁のような姿をした刀々斎。そうして、最後は鞘という幽霊のような白髪に白い髭の妖怪だった。

彼らは、それぞれが全く違う妖怪であつたものの、鬪牙王という大妖怪を中心に集まつたものたちであつた。

彼らが現在いるのは、鬪牙王が愛した人間の女である十六夜のために戦い果てた場であり、その子である犬夜叉の生まれた場所であった。

そんな場で、彼らは一つのこととて困り果てていた。彼らの懸念とは、叢雲牙と呼ばれる刀のことだ。その刀は、他の刀とは違い、鬪牙王がもともと持つていたものだ。太古の悪霊が取りついており、並の者であれば逆に操られてしまうだろう。

「……どうするんだ？」

「そりゃあ、お館様の遺言通りにだろう。」

「じゃがのお。叢雲牙を、風牙様にか？」

彼らの間にある共通した感情は、何故なのだ、であった。

鉄砕牙を犬夜叉に残すのはまだ理解が出来る。半妖である赤ん坊には、守り刀が必要であるだろう。

けれど、何故、あえて天生牙を殺生丸に、叢雲牙は風牙なのか。

逆ならば、まだ納得がいくのだが。

彼らが信頼する主である鬪牙王の遺言に戸惑いを覚えるのは簡単な話で、風牙という存在がどういったものなのか理解しきれていない部分があるためだ。

もちろん、風牙は強い。それこそ、誰よりも鬪牙王の血を濃く受け継いでいると思える。鬪牙王と瓜二つな容姿は、それこそその血を証明している。

けれど、その心根はどうかと言われれば、分からない。

三人から見て、風牙は陽気な男だ。飄々として、気ままで、殺生丸のことでさえ揶揄う様な男だ。

けれど、ただの気のいい男と思つた瞬間に、底冷えのするような落差を感じることがある。

殺生丸ならば、まだいい。

彼は、揺るぐことなく、叢雲牙を使いこなすだろう。

けれど、風牙はどうなるのだろうか。

その強さから、叢雲牙に呑まれることはないだろうが。

何だろうか、面白そうという一言で叢雲牙に乗っ取らせて行いを傍観することさえ考えられるような危うさとも言えるものを彼は持つているのだ。

三人は、うーんと唸り声を上げて互いの顔を見た後に、ようやく頷き合つた。

「ふん、ふんふん。」

ふらり、ふらりと、男は鼻歌を歌う。

豊かな白銀の髪を一つに束ね、ふかふかとした白い毛皮を纏っている。独特な様相の鎧を纏つた男は、鋭利そうな見目麗しい容姿に、人好きのする笑みを浮かべている。

男の後ろには、黄金の髪を簡素にまとめた、十二、三歳ほどの少女がいた。僧衣に似た衣を纏い、錫杖に似た杖を持っていた。

「……主様。」

「なんだ？」

「今日も、犬夜叉様の許に？」

「まあな。嫌か？」

少女の言葉に、男はまったりと微笑んだ。それは、己の異母弟が封印された場所に行くにしては、あまりにも気楽な様子であった。

けれど、少女は男が五十年という年月の中でずっと弟を解放する術を探し続ける程度に情のある存在であると知っている。

(……皆は、主を恐ろしいというけれど、そんなことはない。)

少女は、幼いころに命を助けられたのだ。誰よりも、彼女は男の情を知っていると思っている。

「風牙様が望まれるならば。」

少女は、ゆつくりと目を伏せて、肅々と男の後を追った。

「あゝ。」

男の驚きの声が、辺りに広がった。風牙の前には、まるで夢のような美しい花畑が広がっていた。

それは、彼の弟からすれば憤死ものなのだが、犬夜叉が封印されてから少しして手持無沙汰な彼がせつせと貢いだ供え物の花が自生し、そうして繁殖した結果だった。

おかげで、とある少年少女の出会いが中々にファンシーな光景になったのだが。それは、風牙の与り知らぬところだ。

そうして、風牙の目線の先には、花畑の中心である大木だった。風牙は大木に駆け寄り、封印されていた犬夜叉の姿がないことに辺りを見回す。

「……白縫。」

「ありえませんか！ あれば、封印した当人でなければ解けるはずがないものです！ そんな、桔梗が、生き返りでもしない限りは。」

茫然と呟く白縫に、風牙はため息を吐いた。

「……まあ。手がかりがないわけじゃないな。」

風牙はそう言って、ゆっくりとある方向に目線を向けた。それは、桔梗が生まれた村の方向だった。

「かごめ！早くしろ！」

「分かっているわよ！もう、何をそんなに苛々してるの？」

「・・・早くしねえと、あいつが来るかもしれねえだろ」

「あいつって？」

かごめが不思議そうにそう聞くが、犬夜叉はゆっくりと視線をそらしてしまう。

ちようど、二人は四魂の玉のカケラを探すために先に行こうとしていた。

そうして、またせかせかと先へ急ぐとする。そこで、ぴくりと体を震わせた。次の

瞬間に、かごめの体を攫うように抱き上げて走り出した。

「え、えええ!? な、なに?」

「いいから、黙って・・・」

「いーぬーやーしゃ!!」

かごめの耳には、そんなエコーがあった声が耳に入った。そうして、急にぐるりと視界が回り、浮遊感に襲われた。

何が起こっているのか分からずに、身を固くした。

それと同時に、彼女の体は宙に放り投げられる。思わず身を固くしたが、予想に反し

てかごめの体は誰かに受け止められた。

「……………大丈夫でしょうか？」

「え？」

かごめが見たのは、自分と同一年ほどの金の髪をした少女だった。かごめがそれを確認すると同時に、ぼすんと白い煙と共に、少女は十二、三歳ほどの存在に変わっていた。

「え？ど、どういうこと？」

「驚かせたのなら、すみません。ただの変化です……………」

「犬夜叉！あああああ！この時をどれほど待たろうなあ！目覚めたのなら、なんと言わないんだよ！兄不孝な奴め！」

「があああああああ！放しやがれ！愚兄が！」

かごめはきよとんと眼を瞬かせた。

目の前には、なんとも不思議な光景が広がっていた。

そこには、犬夜叉に頬ずりをする一人の美丈夫がいた。

「つれないなあ、育ての親の兄に向かつて。ほんとに、お前も殺生丸もすっかり可愛くなくなつた。」

「だーれがあんやろうと一緒だつて!？」

「いや、でもやはり、お前の方が可愛いな！」

そうやって、犬夜叉への頬ずりを続けようとする猛者の男に、かごめはなんと言葉を掛けていいか分からなくなる。

そこで、ふと、男の顔がかごめに向いた。

(わあ、綺麗な顔。)

状況に戸惑っているとはいえ、かごめからしてもその顔立ちは美しかった。いや、それに加えて精悍さも感じられたその見目はなんとも魅力的だった。男は、そのどこか冷たそうな顔立ちには少々不釣り合いな、陽気そうな笑みを浮かべた。

「君がかごめちゃんかな!？」

男は犬夜叉のことを放すと、つかつかとかごめに向かって来た。

「いや、楓からは聞いてただけだな？俺、風牙っていう。まあ、犬夜叉の異母兄に当たるとんだが。昔、こいつがガキの頃世話した身でな。これが封印されてからも何かと会いに行つたんだが。こいつもひどいだろ、目が覚めたつていうのに俺に会いに来ないなんて薄情だよなあ。まあ、弟なんてそんなもんだらうけど。にしても、いやあ、可愛い子だな！なるほど、確かに桔梗に似た匂いだなあ！いやでも、お前さんの方が愛らしい。そういうえば、四魂の玉のカケラをぶちまけたのも君だっけ？大変だけど、頑張るんだよ？俺も手伝つて良いが。まあ、これでも俺も忙しいこともあつてな。」

「だあああああ！うるせえぞ！風牙！」

「はあ、昔のように兄上と呼んでくれないのか。」

「だーれが呼ぶか！この、くそ兄貴!!」

また始まる目の前の喧嘩に、かごめは分からない状況に嫌気がさし、叫んだ。

「もう！いい加減にして！」

それに、二人はきよとりと目を瞬かせた。

「もう、どういう状況なのか説明してよ！」

「そ。」

「そうだな。俺も、犬夜叉に会うって目的を果たしたし。そうだな、次に移るか。」

「え？」

それと同時に、辺りに霧が巻き起こる。

「風牙！」

「案ずるな。ただ、少しでも話がしたいだけだ。」

辺りが白い霧で包まれると同時に、犬夜叉の声も遠く、姿も見えなくなる。

そこには、風牙と呼ばれた男と、かごめだけが残った。

「な、なに？」

「安心しなさい。これは、さつきお前さんを助けた白縫の力だ。あの子の幻覚は天下一

品だからなあ？」

目の前でにこにここと笑う、犬夜叉の兄だという存在にかごめは身を固くした。けれど、先ほどの様子を思い出して、そこまで危険ではなさそうだと少しだけ気を緩めた。

「さて、そうだな。聞きたいことは？」

「えっと、あなたは、犬夜叉のお兄さん？」

「ああ、そうだ。さつきも言ったが、俺はあれの異母兄でなあ。」

「お母さんが違うんですか？」

「ああ。俺の親父は西国を制した化け犬でな。俺の母親は、同じ化け犬だったんだが。あれの母は人間だったんだ。いやあ、親父が気に入るのも納得な美しい女だった。まあ、兄弟が、俺にとっては同じ母を持つ弟が一人いるが。ああ、かごめちゃん、弟の殺生丸には近づくなよ。機嫌を損ねたら殺されるかもしれないから。」

「ハ、ハ、ハ？」

「おう、軽く死ぬからな。」

かごめは、良く分からない犬夜叉の家系に混乱していると、それを見ていた風牙は心の底から嬉しそうに笑った。

「いやあ、よかった。」

「え？」

「桔梗の生まれ変わりだって聞いたから、心配してたんだけど。」

「……どういう、意味ですか？」

一瞬だけ、かごめは、何故かその陽気そうな、人好きのする笑みに怯えを感じた。それと同時に、その言葉に何か、寒気のようなものを感じた。

聞かない方がいい。

そう思うのに、何故か、一瞬の戸惑いに言葉が口から漏れ出てしまった。

「お前さんが、もしも、桔梗と似ていたら、殺そうと思ってたんだ」

ぞわりと、かごめの背筋に今度こそ寒気が広がった。そんなかごめを気にすることなく、風牙は話す。

「あの時は、犬夜叉の選択だからって見守ってたけど。やっぱり駄目だなあ。清く在ろうとして、自我を薄くしてたから、あんな分かりやすい策略で全部崩壊させるんだよ。今度もあんなつまらない結末になるんなら、そうなる前に終わらせようと思ってたんだけど。よかったなあ。」

お前は、違うと信じているよ？

柔らかな声だった。陽気そうな微笑みだった。優しそうな瞳だった。美しい顔立ちだった。

けれど、けれど、かごめは、ああと。

ガタガタと震える体を必死に支えた。

そこにいたのは、優しそうな男だった。美しい、男だった。けれど、そこにいたのは、どこまでも人間ではなかった。

面影を憎んだ

「……うーん。このモチモチとした触感。やっぱ、団子はあそこの辻の店が一番だな。」
風牙は、そう言いながら縁側に転がって団子を頬張った。

春の麗らかな日差しの中で、風牙はのんびりと寛いでいた。風牙がいるのは、彼が独り立ちした折に作った屋敷だった。彼の術によって作られたそこは、特殊な方法でしかいくことが出来ない閉じられた箱庭だ。

使用人も最低限しかおらず、屋敷の中は静まり返っている。屋敷の中の季節は、風牙の気分によって変わることもある。

「……で、殺。お前さん、こんな旨い団子を前に、何をそんなに仏頂面なんだ？」

風牙は寝ころんだまま、己の隣りに座る殺生丸に目を向けた。殺生丸は、凍土のような殺気を出しながら、己の兄を睨み付ける。

「……隣に座れば、鉄碎牙のある場所を教えると言ったのは貴様だ。」

「俺が言ったのは、話したいならまず腰を落ち着けろって言ったんだよ。つーか、お前は天生牙貰ったんだろ？ 兄貴なんだから、弟の貰ったもんぐらい我慢しろや。」

「貴様には分からんだろう！ 叢雲牙を受け継いだ貴様には！ 何よりも、何故、半妖風情を弟などと言えるのだ!？」

殺生丸は、苛々した中で放り込まれた風牙の言葉に激高したように叫んだ。殺生丸の瞳は赤くなり、本性が透けて見える中で、風牙は相変わらずまったりと団子を頬張っていた。

そうして、呆れたようにため息を吐いた。

「己が妖としての在り方を誇るなら、年端の行かない幼子のように本性を曝すな。」

風牙はそういって、とんとんと己の目元を指で叩いた。

叱りつける様な言葉に、殺生丸は思わず黙り込む。黙り込んだ己に対して怒りが湧いてくるものの、風牙の言っていることも事実であるために口を噤むことしか出来ない。

風牙にそんな情けない姿を見せたことに、そうして黙り込んでしまった己に、ぎりぎりと歯噛みする。

それを、風牙はやはり呆れながらため息を吐いた。

「お前な。駄々捏ねる餓鬼じゃねんだから。親父がためえの持ちもん、ためえで決めた行き先だ。ガタガタいうなよ。まあ、お前は昔っから親父のこと大好きだったよなあ。毎日せつせと構った兄貴差し置いて、親父はいーつつもいとこばっか取ってくんなんなあ。」

後半になるにつれ、ぶつぶつと愚痴を吐き出す風牙に、殺生丸は青筋を立てて、手を払った。それによって、辺りをじゆううと溶ける様な音が広がる。

怒りに燃える殺生丸は、本気で己が兄を殺そうとした。

「・・・お前なあ。さすがに、人ん家で毒華爪はないだろう。」

「な！」

毒華爪の標的であった風牙はというと、殺生丸の掲げた手の上で逆立ちになって弟に呆れた様な視線を送っていた。

「ちー！」

殺生丸は風牙を振り払うように手を払った。風牙はそれに軽々と宙がえりをしながら降り立った。そうして、周りを見回して、ため息を吐く。

「あーあー。たく、人ん家に何してくれてんだよ。お前も、修理を手伝えよ。」

「そんなこと・・・」

「あーあー!!殺生丸はケチだよなあ!短気だし。自分のやったことに責任が取れねえぐらい餓鬼のまんまなら、親父はおろか、俺にだって勝てねえだろうなあ!」

その言葉に、殺生丸は隠しきれない程度に、ぴくりと震えた。それが手に取るように分かり、風牙は言葉を続けた。

「まあ、いいか!お袋へのいい土産話が出来たと思うか!殺のやつが、未だに駄々捏ねて

困るって……」

「ちっ！……あとで、手を回す。」

「まあ、それでいいか。」

機嫌を直した風牙は、ふんふんと鼻歌をうたう。それを見て、殺生丸は苛々と腕を組んだ。昔から、殺生丸は風牙という存在が好きではなかった。

嫌いや軽蔑などには至らないのが、風牙という存在が殺生丸にとって父同様に超えるべき存在であつたからだ。

皮肉なことに、風牙は鬪牙王に匹敵するほどの力だけは持つてはいた。

けれど、中身ははつきりいってお粗末なものだった。殺生丸が知る中で、誰よりも、鬪牙王と似通っているというのに、その陽気さは殺生丸の苛立ちを増幅させた。

また、風牙は殺生丸が一等に苦手な母親と仲がいいのもまた、彼にとっては不利になる理由の大半を占めていた。

その、兄にあたる男はいつだって、殺生丸にとって無価値なものに価値を置いた。何をそんなに楽しいのか、まるで虫のように消えていく命を愛でて、淡く笑っていた。

殺生丸には、風牙の愛でるその感情を理解できなかった。

弱者に価値はない。けれど、風牙はよく弱者を拾つて来た。

殺生丸はすんと、鼻を鳴らす。

そうすれば、風牙の拾って来た半端な何かの臭いを感じることが出来た。ざわり、ざわりと、微かな声が聞こえた。

そこには、風牙が作った箱庭には、どこにも行けない者たちの安寧があった。気に入らない、気に入らない、気に入らない。

自分にとって価値のあるものを、風牙はまるでどうでもいいというふうに放り投げる。

それが、それが、ひどく、父とダブって見えて。

殺生丸の奥底で、ふつつつと、父にさえ感じたことのない怒りを感じるのだ。

その男の目を覚まさせてやりたいと、いつか、その感情を踏みにじってやりたいと、そんな燃える様な何かを感じるのだ。

それでも、殺生丸はその男に勝てたことがない。どこか、ぼんやりとして、ふらりふらりと何もかもを受け流す。

殺生丸が必死に吠えたてても、風牙はいつだって興味がないと土俵にだつて上がってこない。

それが、負けに至ったとしても、少しだつて興味を持たない。

何故だと、殺生丸はいつだって思う。

同じ腹から生まれ同じように育つても、兄はいつだって殺生丸の見えない何かを見て

いた。いつだって、殺生丸と風牙の視線は交わらない。

(・・・鉄砕牙を手に入れる前に、叢雲牙を手に入れる方が先か。)

そんな思考を察したのかまではわからないが、風牙は呆れたように言い捨てた。

「お前の場合、鉄砕牙を欲しがる前に、俺に勝てるようになるこつたな。つか。鉄砕牙は、たぶんお前さんじゃ手に入らんじゃないか。」

「・・・どういう意味だ？」

「親父がお前の考えを読まないわけがないだろ。ぜってえ奪いに行くつて分かるもんそのまま放置するもんか。」

「何故だ。」

殺生丸は、けして声を荒げることなくそう言った。けれど、風牙はそれが怒りに満ちたものだと何となく察した。

風牙は自分よりも少しだけ背の低い弟を見た。それは、まるで駄々をこねる子どものようにぎらぎらとした目をしていた。

「何故、あのような生き物のために。」

それは、風牙への言葉ではなかった。きっと、殺生丸自身への言葉だった。

風牙はふうとため息を吐いた。

「駄々をこねる子どもと言えない歳でもないだろうに。」

風牙はそう言つて、思いつきり伸びをした。

それは、殺生丸にとつて凶星以外の何物でもなかつた。黙り込んだ殺生丸に、風牙はにやりと笑つた。

庭に立つたその男は、まるで全てを知つてゐるかのような、柔らかで泰然とした笑みを浮かべる。

「なぜ、理解できんのだ？」

「・・・どういふ意味だ？」

「なぜ、誇りが服を纏つて歩いてゐる様なお前が、人の力に執着する？」

蜜よりも、甘い声で兄は囁いた。それに、殺生丸は頭痛に似た鈍い痛みを感じた。神經という神經を逆なでされるような、甘い声。

風牙は、緩慢な仕草でまた、笑みを浮かべる。

「強くあることに拘るといふならば、なぜ、お前は己の牙で刀を打たない？」

「・・・有効に使えるならば、それを使うことに理由はない。」

「はははははははははは!!」

風牙はけらけらと笑つて、殺生丸を愛らしいものを見るかのような目で見た。それに殺生丸は神經を逆なでされるような感覚がした。けれど、それよりも前に冷静に殺生丸は自覚する。

目の前の男には勝てない。

少なくとも、今の自分では。

「お前の、そういうとこ、本当に可愛いなあ。」

あり得ないことを言つて風牙は笑う。

愛おしいものを見る様に、愛らしいものを見るかのように。

「お前はもう少し、自分の知らないものを理解する努力をしないとなあ。己を理解してもらいたいというならば、なおさらに。」

殺生丸はそれに何かしら、反論をしようとした。けれど、それよりも前に、その風牙の微笑みがあまりに似ていたから。

本当に、父とよく似ていたものだから。

それに、殺生丸は歯噛みする。

何時だつて、その男はまるで殺生丸さえ知らない殺生丸のことを知っているかのような表情をする。

だからこそ、殺生丸は心底、兄が嫌いだった。

そこで、風牙は小さく肩をすくめて、くすりと笑った。

「……まあ、確かに気になるのは確かだな。」

会いに行つてみるか？ 俺とお前の弟に。

そう言つて風牙は何もかもを知っているかのような笑みを浮かべた。

面影はどこにもない

人は、いや、生き物というものはいつだって残酷だった。

とたとたと、幼い足音がした。それに、人はきつと健康な幼子を思い浮かべるだろう。けれど、その足音の主というのはいささか、そういつた想像からは飛び出ていた。

まず、目を引くのは何で染めたかもわからないほど、見事で鮮烈な赤く、紅く、朱く、染め上げられた衣を纏っていた。そうして次に目に映るのはまるで雪のような、月のような銀の髪。そうして、ぼっかりと浮かんだ満月の、瞳。

それだけならば、それだけならば、どれほど幼子にとつても、母親にとつてもよかつたのかも知れない。

それだけならば、彼は人でしかなかった。

ただ、毛並みの違うだけの、人であれただろう。

けれど、幼子の受け継いだ、人でないものの証が彼の頭がひよこりと飛び出ていた。幼子は、走ることが楽しい。

とたとたと、軽い音を立てて、走るのは楽しい。

だって、それぐらいしかすることがない。

幼子、犬夜叉はその年端としてはしつかりと自分の立場、扱いについて理解していた。屋敷にいる貴族たちは、犬夜叉と母を害することはしない。けれど、いつだって彼らはひそひそと遠巻きに、犬夜叉が一人であることを示して見せる。

いつか、丸い毬を、大人が、子どもが蹴り上げて遊んでいる場面に出くわしたことがある。それが、なんだか楽しそうで。

遊んでほしかったのだ、混ぜてほしかったのだ、何も知らなかったのだ。いれて、ぼくも、それにいれて。

無邪気に駆け寄った彼から逃げる様に、そこから誰もいなくなり、ぼつんと残った毬だけが犬夜叉を待っていてくれた。

その意味を、彼は理解できなかった。ただ、困ってしまった。どうして、そうなったか分からないからこそなおさらに。

母の涙を、そこで見て。

ただ、自分は泣かぬようにと思った。自分が泣けば、母はきつともつと悲しくなるだろうから。だから、彼は一人でいるのだ。

それでも、寂しいと、感じないわけではない。

そんな時は、未だ幼い体にいささか大きすぎるあかい衣に顔を埋めるのだ。

そうすれば、仄かに、知らない匂いがする。己でも、母のものでも、屋敷の者のものではない、知らない匂い。

(・・・きつと、これが父上のおいなんだ。)

見たことも無い人。

それでも、母はいつだって自分の顔をいとおしむように撫でるのだ。

月色の、瞳と髪と。

(・・・父上と、同じだって。)

それは、よすがだ。幼いその寂しさを慰めるための、優しく、柔らかなおまじないだった。

かたん、と。

音がした。

それに、十六夜は急いで近くにいた犬夜叉を抱え込むように引き寄せた。犬夜叉は、まだ深い眠りの中にいた。

(・・・こんな夜更けに私を訪ねて来るなんて。)

子を一人生んだとはいえ、未だ若く美しい十六夜の局に夜更けにやって来ると言え、真つ先に夜這いか何かを想像するだろう。

けれど、十六夜はそれを真つ先に否定した。

十六夜は、彼女の親戚筋に当たる家に身を寄せていた。

子を孕んだ彼女を一応はその家は受け入れはしたが疎まれていた。けれど、彼女の産んだ子供でその針の筵は一気に恐れに至った。

月色の、瞳と髪。そうして、ひよこりと頭の上に生えた畜生の耳。

家の者は、それを呪いと言った。それを、悍ましいと言った。それを、おそれた。

犬夜叉を産んだ時、十六夜はどれほど嬉しかつたらうか。

愛しい男に似た息子。忘れ形見。愛しい、愛しい、影法師。

犬夜叉を産んでなお、彼女が屋敷を追い出されないのは偏に異形を産んだ女を疎つてたたりでもないかと恐れているのだ。

そんな彼女に手を出そうというものはいない。

かたんと、微かに御簾が動くような音がした。

「誰ですか？」

声が震えてしまったのは仕方がないことだろう。十六夜は、非力な女だ。己の子を守るとしても、その身を犠牲にすることぐらいつか思いつかない。

十六夜は、犬夜叉を抱える様に抱きしめた。そうして、彼女の局を覆っていた几帳の向こうに大柄な人影が見えた。

「へえ。」

聞こえてきたのは、年若い男の声だった。妙に、どこか、聞き覚えのある柔らかな声だった。

「なるほどなあ。」

ゆらりと、暗闇の中に一人の男が立っていることに、十六夜は気づいた。

「あ、なた……」

茫然と、十六夜は呟いた。それに無意識に犬夜叉を強く抱きしめてしまう。

それによって、幼子の満月の目が見開かれた。

幼子は、何故、母に抱きしめられているのかを不思議に思つて、ふと、自分の目の前に男が立っていることに気づいた。

真ん丸の、満月の瞳に、その姿が映り込む。

月色の、髪と瞳。

犬夜叉と、同じ。

(おんなじ、めだ。)

くんと、香つたその匂いは、なんだかたまらなく懐かしくて。

(……きものの、においと、おんなじだ。)

「父上？」

無邪気な声音が、そう呼んだ。

それに、男は目を丸くして、一言、囁くように言った。

「おうおう、愛らしいねえ。」

甘ったるい、どこか軽薄そうなその声音に、十六夜は目の前の存在が彼女の恋い慕った誰かでないことを覚った。

「残念ながら、俺はお前の父上ではないんだよ。」

「じゃあ、えつと、だれ？」

「うーん？そうさな。お前の腹違いの兄にあたるんだよ。」

「あに？」

男は、十六夜には目もくれず、己に興味を示した犬夜叉ににこにここと笑いかけた。犬夜叉と同じほどの視線になる様にと屈みこんで、その顔を覗き込む。それを、十六夜は無言で見つめた。

正直な話をすれば、どんな反応を取ればいいのか分からなかつたのだ。

男は、本当に彼女の愛した男に似ていた。それこそ、一瞬本人と見まごうほどに。けれど、蓋を開ければ、よくよく見れば端々に違う誰かが垣間見える。

それが、奇妙な違和感となりたまらなく齟齬を感じるのだ。

なにか、彼の人の仮面を被った別人が現れたかのような、そんな気持ち悪さ。

もちろん、別人なのだから当たり前ではある。けれど、それを無視するには男は余りにも彼の人に似すぎていた。

「・・・風牙様、でしようか？」

十六夜の虫の鳴くような声に、ゆるりと細められた。その、どこか人を揶揄う様な雰囲気、やはり似ていないなと思った。

「おお、俺の名前を知ってるか？」

「・・・はい。あの方から、お話を聞いています。」

震える様な声の十六夜に、男はやはりくすくすと愉快そうに笑った。

「相変らず、おしゃべりな人だねえ。」

十六夜は己の背を流れる冷や汗に、ぶるりと少しだけ震えた。

男に、息子が二人いるのは知っていた。寝物語のように、少しだけ聞いたことがあったのだ。

男は、そこで楽しそうに息子のことを話していたのだが。

彼は、殺生丸という二人目の息子に関しては自慢げ、というのだろうか。父親らしい顔で殺生丸のことを話していた。

けれど、男は何故か長男であるらしい風牙という青年に関してはどこか奥歯に物が挟

まったような言動をする。

悪いものではないのだが。そうだな。十六夜、会うことはないだろうが。あれにはあまり深入りせぬ方がいいだろう。

その言葉の意味を、本人を前にしても十六夜にはよくわからなかった。こういつては何だが、目の前の男というのは近寄りたさとは無縁のように見えた。

それこそ、その容姿さえ差し引けば氣の良さそうな只人としてどこかであつて良そんな空気を纏っていた。

彼女の記憶の中にある男とそっくりの容姿は、その落差を強調していた。

「母上、あにつて?」

「……この方は、お前の父君の御子息です。そうですね、犬夜叉、あなたの兄上にあたります。」

「兄上? ぼくに兄上がいたの!?!」

犬夜叉は母を見上げていた瞳に歓喜を宿して、くるりと風牙の方を向いた。

それも当たり前だろう。

子一人母一人。おまけに友人と言えるような存在もない幼子は、おそらく寂しかったのだろう。そんな中、兄がいると言われれば子ども心にその歓喜も仕方がないだろう。

「兄上ー」

無邪気な声が局に響いた。それに、風牙の目が大きく見開かれた。

その時、また御簾から誰かが入ってきたような音がした。

それに、十六夜は風牙の後ろに目を向けた。そこには、犬夜叉や風牙とよく似た容姿の青年が立っていた。

その容姿から、十六夜はその青年が男の言っていた、もう一人の息子である殺生丸であることを察する。

「風牙、いつまでかかっている。」

まるで冬の夜のように静かで、冷たい声音で殺生丸は風牙に目を向けた。その瞳は、十六夜には目もくれず風牙と犬夜叉に向けられていた。

「それが、犬夜叉か？」

「えっと、だれ、ですか？」

「・・・殺生丸様？」

名を呼んだ十六夜に、初めて殺生丸の瞳が向けられた。それに、十六夜はまた体を震わせた。

その瞳には、人への蔑みだけでなく隠そうともしない嫌悪と敵意が渦巻いていた。

それに、十六夜は羞恥で顔を伏せた。

その感情の理由が分からないほど愚かではない。

自分たちは、彼の父親の死によって生き残ることが出来たのだ。

自分たちのせいで、彼の父は死んだのだ。自分の、愛しい彼は死んだのだ。

彼は、奪われた側なのだ。

十六夜は、迷う。

その敵意のままに力を振るわれれば自分たちは死んでしまおう。ただ、逃げ切れるかもわからない。行動を起こそうかと迷っている中、犬夜叉と向かい合っていた風牙が突然に倒れた。

「兄上!?!」

いの一歩に驚いたような声を出した犬夜叉は倒れ込んだ風牙に縋りつく。風牙は、口を押えて小さく震えていた。それに、殺生丸が怒号のように言った。

「貴様ら、こいつに何をした!?!」

「な、なにも・・・」

「ならば、これはどういうことだ!?!」

自分たちに向けられる明確な殺意に、十六夜は震える声で反論した。犬夜叉も茫然と、殺生丸を見上げた。その時、震える声で風牙が呟いた。

「・・・もう一度。」

「え？」

倒れ込んでいた風牙の様子に、皆が耳を傾ける。

「犬夜叉、もう一度、兄上と。」

「兄上？」

「……兄様と。」

「に、兄様？」

「兄者は？」

「あ、兄者？」

「……おにいちゃん。」

「お、お兄ちゃん！」

繰り返された言葉の内、最後のお兄ちゃん、風牙は飛び起き、そうして犬夜叉を抱き上げて叫んだ。

「愛いいいいいいいい!!!」

もしも、未来の人間が居たならば某獅子の王を思わせるような抱き上げ方だった。

そうして、風牙は心底嬉しそうに犬夜叉を抱き上げて、くるくると回り始めた。

「うわあああああ！かーわーいーいー!!殺生丸の時とはまた違う愛いさぞ！あの、懐かない、誇り高さも悪くないが、この素直な愛らしさも格別に愛いぞ！」

風牙は、犬夜叉に頬ずりをして、でれでれと相好を崩した。十六夜は呆氣にとられた様にそれを眺めた。犬夜叉はというと、自分の兄という存在がとにかく元氣であること、そうして自分を好いてくれていることを察したのかきやつきやと笑っていた。

そうして、最後に殺生丸はというと、自分の目の前で起きていることへの收拾が付かないのか固まっていた。

その、きよとりとした顔の幼さに、十六夜は彼が己よりもずっと年上であるというのにまだ子どものような感覚を覚えた。

けれど、殺生丸は目を赤く染めて本性を浮き彫りにして、風牙に斬りかかる。けれど、それを風牙はまるでじゃれ付きをいなす様に背負っていた大剣で受け止めた。

「何するんだ。」

「それは私のセリフだ!!唐突に倒れ込むから何かと思えば、何をしている!?!さっさと鉄砕牙を出せ!」

「そんなにカリカリすんなよ。つか、遅くなつたのだつてお前が騒いだからだろ?」
「叢雲牙を洗濯竿代わりに使っているのを見て、騒がぬ理由もないだろうが!?!」

「だつてさあ。この刀くつそ使いにくいんだよ。使うと、それこそ大騒ぎになる様なことにはかなんないし。もうちつと、普段使いの出来る刀が欲しいぞ、俺は。それにさあ、こいつの話つままないんだよなあ。天下が欲しくないかつて馬鹿の一つ覚えみたくで、

話術のカケラもねえし。というか、人を思い通りにしたいならある程度こっちがお、何々って話を聞かかって感じに持つていけって話だろ？さつきもさ、話を聞いてやるかってワクワクしてたけど、蓋を開けたらくっそつまんねえし。今も、めんどくさいからもって話を練つて来いって封じといたけど。」

「貴様は、もつとその刀を丁寧に扱えと言う話だ!!」

「いやあ、この刀別に、厳密に言えば親父の刀じゃねえし。あの人も、どつちかというと仕方なく持つていた感もあるけどなあ。」

「なら、私に寄越せ!」

「それは駄目。」

唐突に無機質な声音に、殺生丸は固まった。じつと、己を静かな目で見る、父によく似た兄の顔を凝視した。

「お前には、このおもちゃはまだ早い。」

そう言つて、ゆるりと微笑むその様の、父によく似た面差しよ。

思わず、殺生丸は黙り込んでしまう。黙り込んで、その顔を凝視した。

何故か、その笑みを見ていると途方に暮れる様な感覚を覚える。手を、伸ばしたくなる。

けれど、分かっているのだ。彼が望んだものはもう、手が届かぬと兄の顔を見ている

とまざまざと分かるのだ。

そこで、風牙は抱き上げた犬夜叉に顔を向けた。

「まあ、そうだな。そろそろ、行こうかね。」

そう言つて、風牙は犬夜叉の右目に指を向けた。すると、犬夜叉の右目から、黒い玉がするりと転がり出て来た。そうして、その黒い玉を殺生丸に振った。

「ほれ、黒真珠。これで、鉄砕牙があるところに行けるわけだが。」

ふむと、風牙は頷いてくるりと十六夜に顔を向けた。

「……よっしゃ、身内でちよいと親父の墓参りでもするか。」

黒真珠によつて送られた世界は、まさしく異界という言葉がよく似合っていた。

岩の山脈、骨でありながら羽ばたき飛ぶ鳥、霧の湧き立つ世界。

そうして、その中心に座す、山のような大きな骨。

「ほれ、これがお前の親父さんだ。」

「わあああああ!!」

空からぐんぐんと迫る巨大な骨に、犬夜叉は感嘆に似た声を上げた。

訳の分からない、世界の、その骨を父と本当に認識できたわけではない。けれど、怒涛のように教えられる真実の中で、その大きな骨は確かに彼に父の巨大さというものを

本能的に分からせた。

そうして、犬夜叉はちらりとその横で落ちていく殺生丸に目を向けた。

殺生丸は、犬夜叉と十六夜がこの墓に来ることをよく思つてはいないようだった。ただ、風牙のごり押しが面倒になったのか、同行を認めた。

犬夜叉と十六夜は現在、風牙に抱えられる形で墓を訪れていた、

犬夜叉はちらりと、殺生丸と風牙を見比べた。

自分に、兄がいた。

それを知った時、どれほど嬉しかったろうか。

犬夜叉という幼子の世界は、母以外に誰もいなかった。それこそ、たしかに彼の周りには人は多く居たが、彼らは犬夜叉のことを遠巻きに見つめていた。誰もが、犬夜叉の世界に入ろうともしなかつたし、入れてくれはしなかつた。

犬夜叉は、ちらりと風牙を見た。

そうして、殺生丸を見た。

殺生丸のことは、少し怖い。けれど、話してみたいと思う。

風牙は陽気そうで、もしかしたら遊んでくれるかもしれない。

殺生丸は、怖そうであるけれど、素直にかっこいいと思つた。

お話しできたらいいのに、遊んでくれたらいいのに。

(・・・言つてみようかな。)

遊んでと、お話しよう、兄上つて呼んでいいかと。

ただ、その身に混ざつた嬉しさに、犬夜叉はへにやりと笑つた。

降り立つた父の亡骸の内部にて、皆は降り立つた。

骨の敷き詰められた亡骸の中、その中心に丸い台座。そうして、それに突き立てられ

た刀。

殺生丸はそれにまつすぐと近寄つていく。

犬夜叉は物珍しい光景に興奮したのか、風牙の腕からたんと躍り出た。十六夜はというと、骨だらけの床では危ないからと風牙に抱えられたままだつた。

十六夜は、夫の以外の腕の中にあることに戸惑いはしたが、それでも彼の息子であるのだからと割り切ることにした。というよりも、それ以上に彼女はようやく、男の墓参りが叶つたことに歓喜していたのだ。

その、山ほどの遺骸。

それに比べれば、あまりにも小さな自分。

それでも、確かに、己は彼のものを愛したのだ。男に、愛されたのだ。

三年間、ずっと、押し込めていた感情が決壊する様に様々なものが溢れ出た。

「……ありがとうございます。」

震える声で、女は言った。風牙はほんやりと殺生丸と、はしやぎまわる犬夜叉に何かないかと気を配っていた目を十六夜に向けた。

女は、泣いていた。

まるで、水晶のような涙を、ぽろぽろと流していた。

「……ここに連れてきてくださったことを、感謝します。叶わぬと、諦めていた犬夜叉とのあの人との再会も叶いました。何か、お礼を。」

「美しいなあ。」

「え？」

涙を流していた十六夜は、その言葉にかたまつた。風牙はそんなことなど聞こえていないかのように十六夜の顎を掴んで、己の方に引き寄せた。

「親父が狂うのも分かるなあ。なるほど、お袋とは真逆だ。」

そう言つて、風牙はゆるりと楽しそうに笑つた。

「あの時、殺さなくてよかつたよ、本当に。」

「ころ、す？」

掠れた様な声に、風牙はまるで犬夜叉のように無邪気な笑みを浮かべた。

「ああ。親父があんたを見初めて、そこまでは別に何ともなかったんだがなあ。ただ、犬

夜叉を孕んだ時はさすがに家の中が色々とうるさくてなあ。」

殺そうかと思つてたんだよ。

まるで天気の話をするかのように、それは気楽そうな声だった。そうして、その声と共に、風牙は十六夜の頬に触れ髪を梳く。

「いやねえ。人の女を愛でるまではいいいんだけど。子どもまで作られたら、それこそみんなが騒いでなあ。お前さんが親父の弱みになつてもそれこそ面倒だし。殺しとこうかと思つただけだよ。止めといてよかつたよ。」

「どうして、ですか？」

十六夜はぐらぐらと恐怖と混乱で狂いそうになり意識を必死につなぎとめた。ただ、まるで目の前のことが夢のようにさえ感じた。

だって、そうだろう。目の前の男は、あんまりにも彼の人に似ているというのに。

まるで、美しい面影の中からどろりと湧き出た、悍ましい何かに十六夜は恐怖した。そんな言葉が漏れ出たのは、男の本心を少しでも知りたかつたのだ。

彼の人の血を引く息子が、何か、恐ろしいものであると認めたくなかつたのだ。

それでも、男はそんな言葉にあつさりと言ひ捨てた。

「だって、その方が面白そうだろう？」

平然と、そう言い切つた。

「もしも、お前さんが親父さんの寵を貰ったとして。お袋はどんな反応するのだろうか？あの人、あんまり感情を剥き出すことがないからさあ。愷気がどんなものか興味が出たんだ。あと、親父と人の間に生まれて来るのはどんなものか興味があったしなあ。バケモノか、もつと面白いものか、知りたかったしなあ。まあ、変なもんでも始末は付ける気だったしよお。殺生丸の反応も面白そうだろう？ほら、さっきの駄々のこと見てみろよ。かあいいだろお？あいつもなあ、親父のしたいことが分からんから、犬夜叉のことやら俺に焼きもち焼いてんだ。でもなあ、俺からすれば逆だぜ？気に掛けられてんのは、犬夜叉と殺生丸だけ？あいつらは、形見分けの刀は貰いはしたが、俺はどっちかっていうと後始末を任されたようなもんだぞ？なんて、まあどうだっていいだろうが。いや、にしても、犬夜叉はかあいいなあ。殺生丸とは別のかあいらしさだ。本当に、お前を生かशीといてよかった。知らんだろうが、ずっとお前のことを守ってたんだぞ？馬鹿なことを考えるのはいるもんだからなあ。あの時、長い面倒さに負けて始末しないでよかった。本当に、あの時俺、よくやったなあ。」

甘ったるい声で、風牙は自由になる片手で十六夜の頬や髪を愛でる様に弄った。すると、己の顔をはい回る手の感触を感じながら、十六夜はがたがたと小刻みに震える。それでも、必死に男の囁く言葉に耳を傾けた。

恐ろしかった。

男の言葉の中には、確かに弟たちへの情があった、愛らしさへの情があった。けれど、端々から零れ落ちる、言葉に出来ない不快さと恐ろしさは何なのか。

それは、言葉に出来ない。

悪意があるわけではない、情がないわけではない、不幸を願っているわけではない。けれど、けれど。

その男の端々から感じる、言葉に例えられない何かの感情はなんなのか。

顔を青くした十六夜を気にした風も無く、彼はくすくすと笑いながら、微笑みかけた。

その顔があまりにも恋しい男に似ているものだから、余計にその奇妙な齟齬が恐ろしかった。

何か、自分が何か、一瞬間でも間違えれば、男の皮が破れて訳の分からないものが飛び出すんじゃないかという恐れ。

「……俺が怖いのか？」

唐突に放たれた言葉に、十六夜は身を固くした。震える顔で、風牙の方に目を向ける。そこには、心配そうに十六夜を見つめる男の姿があった。

まるで、先ほどのことが夢であったのではないかと錯覚するほどに、彼の様子は父親とよく似通っていた。心の底から、十六夜のことを心配しているかのような顔をしていった。

それに、十六夜はほつと息を吐く。

夢だったのだ。きつと、さっきのは聞き間違いで。

恋しいあの人の息子が、そんな恐ろしいものであるはずがない。

「お前は本当にかあいいなあ。」

風牙の言葉で、ぶつりと十六夜の思考が途切れた。十六夜の視界いっぱいには、いいと厭らしい、獣のような笑みを浮かべた男がいた。

ぎゅつと、空気を呑む様な音が十六夜の喉からした。

これは、なんだ？

漠然とした思考の中で、そんなことを思い浮かぶ。

これが、あの人の息子だと？ 犬夜叉の兄だと？

否定を重ねる十六夜に、するりと腹を撫でる手があった。それに、十六夜は身を固くした。

くすくすと、にたにたと、男は笑う。

楽しそうに、これほどに楽しいことはないというように、男は笑う。

「親父が気に入ったのも分かるなあ。」

その、男の目に映った、それは、情欲に似ていた。どろりとした喜悦のそれは、それでも情欲とは言い切れない何かがあった。

ただ、そこには、純粋な子どものような感情があつた。
小さな虫を前にした子どものような、感情が。

「兄上？」

無邪気な声に、十六夜は悲鳴を呑み込んだ。声の方に目を向けると、足元に幼い少年がいた。

「母上も、どうしたの？」

逃げなさいという言葉が、十六夜の口から漏れ出そうになった。けれど、それよりも前にくるりと風牙が犬夜叉の方を向いた。

「何でもないぞ。まあ、ちつと疲れが出たんだろ。」

そこにいたのは、今まで通りの陽気そうな、人好きのする男だつた。十六夜は、まるで悪夢から醒めたかのような心地で冷や汗の流れる体を摩つた。

「ほんとうに？ だいじょうぶ？」

「え。ええ。大丈夫ですよ。」

本心を言えば、そんなことはなかったが、それ以外の言葉が浮かばなかった。

犬夜叉を宥める様なことを風牙が言っているのを聞きながら、十六夜は男の腕の中にいるしかない。

そんな中、ぼそりと独り言じみた風牙の声がした。

「父上の食べ残しを喰うのは、さすがに意地汚いなあ。」

それに、十六夜は風牙の顔を見た。風牙は、平然と何ともないような顔で笑った。そこには、悪意も敵意も、欠片だって存在しなかった。

だからこそ、十六夜はようやく理解したのだ。

彼の人、鬪牙王の言葉の本当の意味を。

人でないものが、本当は、どういったものであるかを。

父の真意

ばかりと、自分の手に走った衝撃に殺生丸はじつと刀を見た。

分かっていなかった。

兄である風牙とて言っていた。

簡単に手に入るはずがない。

それは、不本意ではあるが、確かに血の繋がりがあつた犬夜叉に贈られたものなのだ。己の手に入るかなど、分かり切つたことだつた。

けれど、少なからず衝撃を受けていた、受けてしまった。

明確な、父からの拒絶。

それは、未だに父の喪失への割り切りを済ませていない殺生丸からすれば、言いようのない感情だつた。

(・・・何故ですか。)

そう、心の中で囁いた。囁かずにはいられなかつた。

いつだつて、そうありたいと、超えたいと願う父は殺生丸の知らない何処かを見てい

た。殺生丸の知らない、どこか。殺生丸の理解できない、何か。

そうして、たった一人だけ。

胡乱な目が、父を殺した女を抱き上げた、そっくりな兄に向けられる。

にこにここと、人間の女に向けられる、微笑み。

いつだって、自分の知らない何かを共有するのは、飄々とした、恥知らずの兄だった。

殺生丸の原初の記憶とは、父の背中とそれを見送る母の姿だった。

ただ、その記憶だけで、父という存在がどれほど大きなものか理解できた。

父の偉大さと、そうして強さを知った殺生丸の最初の願いはその隣に並び立ちたいというある種、幼子らしいものだった。

そのために努力、強くあることも、賢しくあることへの鍛錬を欠かしたことがなかった。

ああ、なりたい。その背を、ただ、追い続けた。

見事だと、そう微笑む姿は嫌いではなかった。

「……お前は、本当にかあいいねえ。」

そんな中に放り込まれた、楽しそうで、甘ったるい声。

その時のことを、殺生丸はよくよく覚えている。

父とよく似た男、自分よりもはるかに年上の、兄。

その容姿を見た時、殺生丸はその中身も父にそっくりであることを期待した。けれど、蓋を開ければ中から出てきたのは、享樂的で、刹那的な、一族全てに変わり者と呼ばれる男だった。

殺生丸が生まれたころにはすでに独り立ちしていた彼は、殺生丸が生まれたころにはよく幼子に会いに来るようになった。

父と似た顔で、でれでれと崩れる男のことがあまり好きではなかった。

それでも、幼心に、その強さにだけは兄であることが誇らしかった。

母は、そんな兄を面白いと笑い。父は、呆れたように笑った後に、いつだって兄と肩を並べていた。

幼い殺生丸は、その後を見送るしかなかった。

その背を追いたい。

その願いは、いつしか父を超えたいという願いに変わったが。

殺生丸は時折、兄へどんな感情を抱けばいいのか分からなくなった。

嫌いであるのだと思う。けれど、彼の強さを好ましく思っているのも事実だった。

父と同じ顔で、父と同じどこかを見ている兄のことが嫌いで。それでも、父の子らしく、己が兄らしく強者として立つ男を超えたいと願うこと、人が憧れと呼ぶその幼い感

情を殺生丸は抱えていた。

認めたくない、知りたくない、それでも殺生丸は幼いころからずっと兄と父が二人だけで笑い合う姿が嫌いだった。

守るべきものはあるか、その言葉を何よりも覚えていられる。分かっていなかった。どうして、父がそんなことを言うのか。

けれど、たった一つだけ分かることがあった。

兄ならば、きつと、その言葉の意味が分かるのだろう。

きつと、分かるのだろう。

殺生丸には分からない、父の考えが分かるのだろう。

(父上、あなたは、風牙と何を見ていたのですか?)

幼い子どもが、そこにいた。

「……なーんで、親父とお袋の血を受け継いであんなに繊細になるんだろ。」

十六夜は、恐ろしい得体のしれないものの腕の中にあることさえ忘れて、殺生丸の茫然とした姿に意識を向けた。

それは、確かに置いてきぼりにされた者の末路だったからだ。

「よくよく見ておけ、人の子よ。」

十六夜は、それに体を震わせた。

その声は、何故か、愛した男の声とひどく似通っているように聞こえた。

風牙の腕に腰かける様な体勢のせいで見下ろすような形になった十六夜は、彼の静かな面持ちを見つめた。

(・・・似て、いる。)

その顔は、ひどく、彼の父と似ていた。血の繋がりに以上に、まるでそこで彼の人立っているようにさえ思った。

「あれが、お前のなしたことだ。」

それに十六夜は、恥じる様に顔を伏せた。風牙はその恥を気にした風も無く、ぼんやりと殺生丸を眺めていた。

「殺生丸は別段人を軽んじてるわけじゃない。あいつはなあ、弱いものが嫌いなんだ。弱いくせに欲しがって、傲慢に濡れて、自分が強者だと思ってる恥知らずが嫌いなんだよ。」

十六夜よ、お前は、弱者として傲慢だなあ。

間延びした声音が、それだけが、風牙が彼の人ではないという証であった。

「・・・十六夜よ、お前は弱さによつて愛した男を殺したのだ。自分は弱くあるという自負。必ず、強者である父が迎えに来てくれるという思考。庇護されてしかるべきとい

う在り方。それが、親父を殺したんだらうなあ。」

それは、責めているわけではなかった。ただ、淡々と、事実だけをうたっていた。風牙はぎよろりと眼球だけを動かして十六夜を見た。

「覚えていなさい。己の弱さと、奪った事実を。」

目を伏せた十六夜に興味を失ったのか、風牙は軽く息を吐いた。十六夜は、その言葉に、やはり男のことが余計に分からなくなる。

今の風牙は、そんな例え方もなんであるが、どこまでも真面であつた。先ほどの、二タニタとしたあの笑みがまるで夢であつたかのよう。

十六夜は、ぶるりと背筋を震わせた。

そんな、母と異母兄のことなど目もくれずに、犬夜叉だけがそんな殺生丸に駆け寄つた。そうして、なんの戸惑いも無しに、鉄碎牙を引き抜いて見せた。

「抜けた！」

はしやいだよな声に、風牙がケラケラと笑つた。

「お前が抜けないで、誰が抜けるんだか。」

そう言つた後、風牙は己の着ていた着物を脱ぎ捨て十六夜をその上に置こうとした。それに、さすがに十六夜が戸惑いの声を上げた。それに、風牙はあつさりと言つた。

「お前はここで待つていろ。この上なら、怪我もせんだらう。」

そう言った、風牙の面差しは十六夜の見知った彼の人に良く似ていた。

その顔は、誰かを想っていた、案じる様な願いを持っていた、手を伸ばそうとしていた。

だからこそ、十六夜は、恐ろしかった。

目の前の存在の本当が何なのか。

十六夜はまた分からなくなった。

「おーおー、抜けたか。」

きやらきやらと、笑い声が聞こえてきそうな陽気そうな声に殺生丸は今まで犬夜叉に向けていた目を瞬かせた。

「これが父上がぼくにくれた刀？」

「ああ、そうだ。鉄砕牙つつつてな。親父の刀の中でも使い勝手は抜群さね。ちよいつと貸してみ。」

風牙は殺生丸のことになど目もくれず、犬夜叉にそう言った。それに、犬夜叉は素直に刀を差し出した。

それは、風牙は何の支障も無く、受け取った。

それに、殺生丸は目を見開いた。

どうして、と、そう、まるで幼子のように思った。

風牙はふんとその錆び付いた刀を振るえば、身の丈ほどの大剣に変わった。そうして、くんと鼻を鳴らすとそのまま無作法に大剣を振る。

それと同時に、辺りに突風と衝撃が走った。

ばちばちと、そんな余韻と共に、骨が敷き詰められた床は地面が捲れ、父親の遺骸には傷が入った。

「あー……ま、親父なら気にしないだろう！」

そう言って、また錆び付いた刀に戻った鉄碎牙を犬夜叉に渡した。犬夜叉と殺生丸は自分たちの目の前で起こったことに目を丸くした。すぐに、犬夜叉のはしゃいだ声が響いた。

「すっごーい!!ねえ、ぼくにもできる!?!」

「うーん。今はちつと無理だな。もうちつとでつかくなつて。鼻が利く様になればいけるぞ。」

犬夜叉には、鼻が利く様にという言葉の意味は分からなかったが、それでもいつか自分にも先ほどの業を使える可能性があること自体が嬉しかった。にこにここと笑って、己に遺されたという刀を抱え込んだ。

「何故だ。」

その光景を茫然と見つめていた殺生丸は叫んだ。

「何故だ！風牙!!」

咆哮のような声が、響いた。

犬夜叉はびくりと体を震わせて、風牙の後ろに隠れた。風牙は、その口元に淡く微笑みを浮かべてそれを見つめた。

「何故、貴様がその刀に触れることができる!?!」

「大前提が違うんだ。この刀は、妖怪が触れられないんじゃない。人を蔑んだお前を拒んでいるんだよ。」

「何?！」

「この鉄砕牙は、犬夜叉の母親を守るために親父が作ったもんだ。生まれ出でた理由を否定する主人を受け入れる刀も無いだろう。」

きやらきやらと笑った風牙に、殺生丸はどうとう耐えきれなくなったかのように叫んだ。

「何故だ！なぜ、父上も、お前も、人間なんぞに肩入れする!?!」

それは、何か、きつと、何かが決壊した。

殺生丸がそこまで感情をあらわにすることはひどく珍しい。けれど、それも仕方がないのかもしれない。

彼は、まだ、妖怪の歳からすれば大人でもなく、目指すべき旗を失い、そうして、目の前にいたのが風牙であったから。

その兄の前でだけ、殺生丸は抜き身のような感情を爆発させた。その兄にだけは、剥き出しの遠吠えを叫んだ。

その兄は、憧れと目標を抱くには近く気軽過ぎ、侮蔑を持つにはその強さを知りすぎた。

それでも、その兄だけは、いつだって父のことを理解していた、同じものを見ていた。いつだって、二人は殺生丸の一番近い場所にながら、背を向けて知らない何処かを見ていた。

殺生丸には、分からない。どうして、二人が、そんなにも人間などという弱く、愚かで、醜い生き物に手を伸ばすのか、分からなかった。

分からないことが、たまらなく嫌だった。

風牙はそれに目をきよとりと瞬かせた後、不躰に殺生丸に手を伸ばした。その、美しい銀髪をぐしゃぐしゃにしなから頭を撫でた。

突然の行動に、殺生丸は反応できずにいると、さっさとその手は退けられた。

「あのなあ、殺生丸。お前さんはまだ、親父に守ってもらわなくちゃいけない程度に餓鬼なのか？」

「な、にを。」

「親父が犬夜叉にこれを残したのは単純だ。ただ単に、庇護がいる子どもを残して逝くのが忍びなかったただけだろう。お前と俺は、一人でもやっていけるつつう信頼の上でここにいるんだ。」

「……ならば、天生牙でも構わなかったはずだ。」

「天生牙は扱いがむずいんだよ。それにな、お前、勘違いしてるだろ。」

天生牙が、癒しだけの刀だと本当に思ってるのか？

それに殺生丸は反応した。風牙は困ったように微笑んで、指を一本立てた。

「……なら、せめて謎解き用の鍵をやろう。いいか、犬にとつて牙は武器だ。在り方つつうのは、そうそう変えられねんだ。いいか、所詮武器は武器でしかない。」

よく、考えてみ。殺す刀に、癒すことしか出来ないわけがないだろう？

柔らかな声音に、殺生丸は己の腰に差した刀に思わず手をかけた。その時、兄たちの間にあるぴりぴりとした空気を感じ取ったのか、犬夜叉は持っていた刀を殺生丸に差しだした。

「あげる。」

突飛な言葉に、殺生丸と風牙の目が大きく見開かれた。

殺生丸は自分に鉄碎牙を差し出してきた犬夜叉をじつと見た。

「これ、ほしいんでしよう？だから、あげる。」

「……私を、憐れんでいるのか？」

平淡で、氷のように冷たい声だった。それは、屈辱に震える声だった。

けれど、犬夜叉はあっけらかんと言つてのけた。

「?えっと、分かんないけど。でも、これ、あげるから。その、兄上つて、呼んでいい？」
はにかみながら、幼子は、殺生丸を見上げた。その眼が、あまりにも似ていた。自分で、分かるのだ。

ずつと、そんな目をしてきたから。

それは、父を見上げた、いつかの自分と同じ目だった。

「……面白いだろ？」

風牙はそう言つて、犬夜叉の頭を撫でた。

殺生丸は、胡乱な目で風牙を見た。

「……お前は、よく人間風情がと言うがな。なら聞くが、妖怪なら、お前は気に入るのか？」

「何を言っている?」

「お前が親父を慕っていたのは、親父が妖怪だったからじゃないだろうが。あの人が、お前が超えたいと願うほど強者であったがゆえの話だろう。俺も、親父も似た様なもん

だ。ただ、心を震わせる存在に人間が入っていただけのことだ。俺と親父は似ていたよ。何であるのかではなく、どう在るのかを俺たちは求めたからなあ。」

まあ、似たようなところなんざそれぐらいしかなかつたが。

風牙は犬夜叉の頭から手を離した。

「面白いぞお、人間は。短い時間だからこそ、走りぬいて。突拍子もないことをして、自分でも分からん感情に振り回されて、際限のない夢に死んでゆく。」

面白いぞ。弱いからこそ、その生き足掻くさまは面白いぞ。

甘い声が、殺生丸の耳朶を打つ。

「……いらないの?」

「それは、父上が、お前に遺したものだ。」

「うん。でも、ぼく、つかえないし。だからね、あのね、時々ね、刀見せに来て。父上の話、聞かせて。」

ねえ、いいでしょ?

にこりと、無垢な笑みが殺生丸に向けられる。

理解しがたかつた。

鉄碎牙なのだ。そう、殺生丸までも求めてしまう、彼の人の忘れ形見。強さの証、力の象徴。

欲しかった、それが、ずっと欲しかった。

それを手に入れれば、もう、潰えた夢に手が伸ばせるような気がしたから。けれど、今は、本当に途方に暮れてしまった。

目の前の、わけのわからない、理解しがたい行いをした半分血のつながった半妖を前に、困り果てていた。

その行動で、殺生丸にとって、犬夜叉という存在が憎らしいものでなく、わけのわからない理解できない者になった瞬間だった。

風牙は犬夜叉の持っていた刀を無理やりに殺生丸に持たせた。もう、刀は、殺生丸を拒まなかった。

「それはお前が預かつとけ。犬夜叉がそれを持つにはまだ時間がかかるしな。その間はお前が持つても罰は当たんねえだろ。」

黙り込んだ殺生丸に、風牙はなおも続けた。

「それを持つて、少し考えてみ。それは、十六夜に会うまでは存在しなかったものだ。親父は、それがなくとも覇道を歩んだ。なら、どうしてお前がそれを求めるのか。その、刀を求める心が何なのか。寂しいという感情をお前はゆっくり考えろ。俺たちは、もう、一人で立つちまつてる。俺たちに、守られる意味はない。なぜ、自分に遺されたのが天生牙なのか。もうちつとじっくり考えてみ。」

「……貴様には分かるのか。」

蚊の鳴くような声で、殺生丸は応えた。それに、風牙は困ったように首を傾げた。

「何となしにな。まあ、それは自分で導き出したほうが良いだろう。ただなあ、殺生丸。」
殺し続けるだけが霸道なら、そりやあちくつと遊びがねえと俺は思うぞ。

ゆらりと笑った男の顔は、本当に、父に似ていた。握りしめた、古びた刀の感触がやけに生々しかった。

その時、己の膝に何かが飛びついた。下を見れば、そこには己と同じ月光色の髪がゆらゆらと揺れていた。

そつと、手を伸ばしてみた。

さらさらとしたそれに、まろい頬に笑みを浮かべた幼子がにいと笑って顔を上げた。

その顔が、どこか、やはり父の顔と似ているような気がした。

(……まあ、殺生丸は大丈夫だろう。)

風牙は、父の墓場から脱した後、鉄碎牙を持たせた殺生丸と別れて帰路についていた。どこか、何かを考える様な殺生丸に対して、まあ大丈夫だろうと太鼓判を押した。

きつと、彼は、犬夜叉に関してはまだ蔑み、拒絶することはないだろう。

彼は、変わらない自宅の縁側にて、寛ぐように寝転がっていた。

「……親父も、面倒なことをやってくれたなあ。」

昔から言葉が足りない人ではあったと思う。

父親が、天生牙を殺生丸に遺したのは単純な話だ。殺生丸にも言ったが次男坊は別段一人でも十分に生きていける程度の力があるからだ。

天生牙が鉄砕牙から分かれた事実に関しては、話してはいないもののいつかは元の形に戻るだろう。

そう言った意味では、天生牙は結局のところ犬夜叉のものと違って良い。

（ま、俺の叢雲牙もいつかは処分するように言われてるし。何も残してくれなかった意味では同意なんだがなあ。）

結局のところ、父親はすでに独り立ちしている息子たちに関しては信頼を置いてはいたのだ。だからこそ、赤ん坊のまま残して逝く幼子にことさら過保護にしたのだろう。

「……ああ、なんでさあ、そんなに親父も殺生丸もかあいんだらうなあ?」

突然吐かれた、甘ったるい声音と、ニタニタとした笑み。

もしも、彼と共に行動していた者がいたのなら、恐怖に引きつった声の一つでも吐いていただろう。

風牙はにやにやと笑いながら、かあいいなあと、幾度も呟いた。

殺生丸はかあいい。

だって、自分の感情を把握できず、自分や弟に嫉妬して駄々をこねているところなんて本当にかあいい。父親のことが好きで、慕っていて、寂しいという感情を処理できずに八つ当たりしているとことなんて本当にかあいいじゃないか。

父であつた男のことも、かあいいと風牙は思う。

彼の人は、結局のところ、殺生丸に慈しみの心を持つてほしかったのだろう。殺し続けることの意味を、もつと重く受け止めてほしかったのだろう。

(・・・所詮は、殺すことしか出来なかつたくせに、慈しみを求めてるなんて親父はかあいいなあ。)

所詮は、殺すしか出来ない者に慈しみの心があるなんて幻想を持った男を、風牙は本当にかあいいと思う。

(大体なあ、人間をまるで、清らで、可愛くて、真摯なものみたいに思つてた親父は本当にかあいいよなあ。)

「しよせん、妖怪なのか人なのかかかか、この世の悪戯にしかすぎんだろ。」

人を食べる妖怪は悪であるか？

否々、それならば獣を食らう人として悪だ。

人を貶める妖怪は悪か？

否々、人が人を貶めることとて星の数ほどあるだろう。

所詮は、敵対し合う相いれなさど、捕食関係にある連鎖が並んでいるにすぎないのだ。だからこそ、風牙は面白くてたまらないのだ。

人も、妖怪のことも、面白くてかあいくて仕方がないのだ。

自分たちを清くて妖怪をけがれたものだと思っている人間のことも、人を弱者と蔑んで自分たちを強者と思ひ込む妖怪のことも、愚かにかあいくて仕方がない。

愚か者は好きだ、かあいいいから。賢いものは好きだ、滑稽だから。醜いものは好きだ、撫でまわしたくなる。美しいものは好きだ、衰えていく様が愛いからだ。清らかなものは好きだ、濁つていくから。けがれた者は好きだ、衰れだから。可愛がられた者は好きだ、潰したくなる。蔑まれた者は好きだ、強かだから。

ああ、好きだ。人も、妖怪も、かあいくてしかたがないから、好きだ。

「ああ。おやじい、本当に面白いことをしてくれたよなあ。」

殺生丸はこれからどうするだろうか？自分でその感情に決着をつけるのだろうか。天生牙の秘密にたどり着けるだろうか？父親の望んだとおり、慈しむということを覚えるのだろうか。

手がかりはやったが、それ以上のことをする気はない。父親の真意を話す気はない。だって、殺生丸自身で答えを引き出したほうが、ずっと面白い。絶対に、楽しいに決

まっている。だから、風牙は何もしない。その過程を楽しもうと思っている。

そこで、殺生丸が人を愛しても面白いし、人を蔑むことになっても面白い。

いく人死んでも、風牙はさほど興味はない。自分のお気にいりが殺されぬように気は配っている。それ以外が死んでも、さほど興味はない。

どうなつても、面白い。

(……少ししたら、適当に十六夜と犬夜叉を迎えに行こう。)

風牙は愛らしい弟が気に入ってしまった。かあいくて、かあいくて、仕方がない。

寂しい所も、自分に父親を見出しているところも、餓えているところも、本当にかあいいい。

「かあいいなあ！かあいいなああああああ！」

漏れ出た歓喜に、風牙はけたけたと笑う。

かあいくて仕方がない、何も知らぬ幼子と、怯えた美しい女が気に入った。

美しい、箱庭を用意しよう。

彼らが永遠に、そこに捕らわれる様な、美しい安寧を用意しよう。

殺生丸の時は、失敗してしまった。つんと澄ました態度もかあいいのだが、あの、素直ならうたしさには心が惹かれる。

変わることはないように、美しい箱庭を用意しよう。大人になどならぬように、かあ

いいままであるように、柔らかな揺り籠を用意しよう。

殺生丸の顔を見た、十六夜のあの顔。

きつと、彼女はそれを拒まない。拒めない。そう思わせるために、責めたのだ。

風牙は、ゆつくりと起き上がった。

彼らが心地よく住めるよう、綺麗な着物を用意しよう、楽しいおもちゃを用意しよう。

風牙はにたにたと笑って、ゆつくりと立ち上がった。

平等の魔物

「なあああ、狼野干。」

その声が、狼野干は好きだった。

犬の大将の長子がひどい変わり者であることは、風のうわさで知っていた。

曰く、妖怪らしくないとそれを知る者たちは裏でこそそそと言いつつ合っていた。

狼野干はそれに関して、さほどの関心は寄せてはいなかった。確かに、彼の住む場所は犬の大将の縄張りに当たる。

だからと言つて、彼が別段そんな跡取り息子に会えるような立場ではない。だからこそ、関係ないことと、気にしていなかった。

そんな狼野干と噂の長子である風牙と会ったのは単純な話で、狼野干が過ごしていた森にふらりと訪れたためであった。

狼野干は、風牙のことが好きだった。

良くも悪くも雑な狼野干の話を、風牙は面白いと言つてはきやらきやらと笑ってくれたし、どんなことをしてもにこにこしながら頭を撫でてくれた。

狼野干は、その顔の広さを買われて、風牙の使い走りのようなことをしていた。

どんな簡単な使いでもあっても、風牙はにこにこしながら、狼野干の頭をかあいいなあといひながら撫でてくれた。

かあいいという言葉には不服を感じないわけではなかったが、きつちりとした上下関係はある。狼野干には拒む術はない。

ただ狼野干としては、風牙にならばそう言われることは嫌いではなかった。

その上手い撫で方が好きだった。

何よりも、風牙は狼野干に対して仕事へのご褒美をくれた。

まるまるとした鹿だとか馬だとか。

時折、柔らかくて甘い、女の肉をくれることもあった。

(・・・あの時は、不思議に思ったっけ。)

人間にもわけ隔てないという話の風牙がくれるものにしてはあまりにも場違いのようには思えたからだ。

狼野干はあつけんらかんと言つてのけた。

「人間好きの変わり者つて聞いたんですが、違つたんですかい？」

その言葉に、風牙はやはりきやらきやらと笑つた。そうして、耳の後ろを搔いたりだとか、頭をぐりぐりと揉みこむだとか、狼野干は思わず喉をぐるぐると鳴らしてしまふ。

そうして、撫でながら狼野干の疑問に応えてくれた。

「それなあ、俺を払おうとした巫女の肉なんだよ。いきなりだったもんだつたうっかり殺してしまったんだが。でもなあ、勿体無いだろ？それに、殺しちゃったんだから食つて、無駄にしないことが一番の弔いになるしな！」

俺以外にそういう口きくのやめろよ、殺されるからな。

そんなことを聞いて、狼野干もなるほどと納得した。そういうこともあるのかと。

別段、それを狼野干が気にすることも無い。肉は旨いし、強者から可愛がられるのは悪くない気分だ。

所詮は、狼野干も犬なのだ。

群れを成すというその在り方には抗えない。そのために、狼野干は自分を可愛がつてくれる強者である風牙をことさらに慕っていた。

自分に優しい、獣を慕っていた。

「この頃なあ、嫌なことがあつてなあ。かああいいい、かああいいい、弟がなあ。眠つたまんなんだよ。」

「おこ。」

狼野干は取りあえず返事をした。

くと、香つたのは血と腐敗の匂いだ。狼野干は、がたがたと震える体に必死に鞭を

打った。

「好きな奴がいるからってさああ。だからなあ、見守るだけで辞めといたんだよ。妖怪嫌いの巫女でなあ。俺の事を、ゴミみたいな目で見るんだよ。」

「そいつは、むかつきますね。」

反射的に、狼野干は己の主人を貶めた存在にそう言った。それに、狼野干の周りにいた妖怪たちが軽くざわついた。

けれど、風牙は珍しく嘲笑する様にくつりと言った。

「ああ、むかついたがなあ。でもなあ、俺を見るとなあ、まるで野良犬みたいに喚きたるところがかああいかつたんだよなあ。でもなあ、あのあばずれは間違えたんだよ。」

ぶわりと、広がった風牙の殺意に、狼野干はがくがくと震える体を縮こませた。狼野干の後ろでは、どたりと倒れる様な音もした。

狼野干の目の前で、適当にあつた石の上に腰を落ち着けて、膝を立てていた。肩には、父親の形見だという大剣を立てかけている。

「でもなあ、あの女もなあ、かあいんだよなあ。今でもなあ、かあいんだよ。だつてなあ、哀れな奴だったんだよなあ。半端になあ、聖人の振りしてなあ、揺るがないふりしてなあ。結局なあ、人並みの幸福に振り回されてなぜーんぶおじやんにしてなあ。かあいいだろお？だからなあ、抱きしめてやりたいんだよ。赦してやりたいんだよ、甘やかして

やりたいたんだよお。結局、恋さえ出来ていなかった、あの女。妖怪を払う巫女のくせに、半妖に恋した愚かなおんなあ。ああ、かあいいねえ、かあいくてなあ、かあいくてなあ。殺してやりたいんだよ。でもなあ、生きてないんだよなあ。死んだんだよなあ。でもなあ、苛々してなあ。あんな下らない戯言に嵌ったあばずれがなあ、本当に気に入らなくてなあ。最後の最期まで、おきれいなままに死んだ女が反吐が出るほど嫌でなあ。でもなあ、哀れで可愛かったんだよお。だからなあ、今日はなあ、楽しみにしていたんだよ。だつてなあ。丁度いい、八つ当たりが出来ると思ってたんだけどなあ。」

つまらんなあ。

そう言つて、ゆつくりと風牙は崖下を見下ろした。

そこには、一言でいえば、地獄絵図が広がっていた。

猫がいた。

狼野干は豹猫族を殺すためにやってきた。けれど、彼らは狼野干たちになど目もくれずに、身内でひたすらに殺し合っていた。

豹猫族と戦をすると聞いた時、狼野干はもちろん風牙について行く気であった。犬の大將に恩が在るのは事実であったが、それ以上に主人の争いに顔を出さぬ理由などなかった。

けれど、戦いは、ほんの一瞬で終わってしまった。

目に見えて不機嫌そうな風牙は猫たちがやつてくる方向に向けて背負った大剣をおもむろに振った。それと同時に黒い龍が戦場を駆けた。

それだけならば、まだいい。

けれど、それ以上に恐ろしいのは、斬られた者たちが物言わぬ屍としてよみがえり味方であつたものたちを殺し始めたことだつた。

群れを成す狼の性を持つ狼野干から見て、それはむごいの一言に尽きた。

「なあああああああ、叢雲牙ああああああ？ お前さあ、言つたよなあ？ 力に酔えばよお、少しは気も晴れるつてなあああああ？ どこがだ？ 覇者にしてやる？ 力に酔う？ てめえさあ、本当につまんねえよなあ。お前は、所詮、悦楽を知らんのだ、愛憎を知らんのだ、咆哮を知らんのだ。快楽を知らんのだ、憐れみを知らんのだ、美しいを知らんのだ、恍惚を知らんのだ。ああ、叢雲牙、お前は本当につまらんよ。世界なんぞ、手に入れずともこの世は面白おかしく、俺を楽しませるだろうに。殺して何になる？ それは、いつか、俺の楽しみを生み出すかもしれないというのに。だめだなあ、やつぱり、お前を使うのはだめだなあ。当分は、洗濯竿だなあ。」

つまらん。

一言だけ、そう言い捨てて、風牙は気だるそうに息を吐いた。

それが、狼野干はひどく恐ろしかった。

別に、相手を皆殺しにする勢いが恐ろしかったわけではない。所詮、彼らは敵だ。どんな目に遭ってもさほどの興味はない。

ただ、今の風牙が、狼野干は恐ろしかった。

狼野干は、これでも自分が風牙のお気に入り、愛でられているかあいいなあ、と、自分を撫でる手の感触も、声もよく覚えていた。

けれど、だ。

今になって思うのだ。

風牙の中に、誰かとの区別というものが存在していたのだろうか？

風牙は、謳う。

弟たちのことを、かあいいと、かあいいと、そう謳う。

気に入りの者たちを、狼野干を含めて、かあいいと笑う。

弱者である人を、その無力さの中の足掻きをかあいいと愛でる。

けれど、だ。

風牙は、憎悪の中にあるはずの、あばずれと呼んだ女のことさえもかあいいというのだ。

そうだ、そうなのだ。

(……風牙さまにとって、この世の全てに区切りがついていないのだ。)

妖怪とて、人として、特別なものはある。

狼野干にも、よく酒を飲み交わすものはいる。風牙のことをことさら慕っているし、彼が幸せならある程度のことはどうでもいいかと割り切れる。

けれど、風牙は違うのだ。

愛らしいもの、健気なもの、安らかなものも、賢いものも、美しいものも、憎いものも、下らないもの、災厄を運ぶものも、愚かなものも、醜いものも、区別などなく、等しくかあいいものなのだ。

それが、狼野干には恐ろしい。

あの、頭を撫でる手も、褒美を取らせる言葉も、なんだか全てが無意味で、味気なく、ぞんざいなものになってしまったような気がする。

彼にとつて、狼野干も敵もさほどの区別がないのだ。

分かるだろうか、この感覚が。

昨日まで、自分をかあいいと褒めた手が、何の前触れも無く刀に伸びるかもしれないという、そんな理不尽。

理由があるならばまだいい。前触れがあるならば、なおいい。

そう言った時に近づかなければいい。けれど、憎しみも、苛立ちも、かあいいと塗り潰してしまう風牙は、いつか狼野干のことを殺すかもしれない。

(いや、風牙様が俺を殺すことはない。)

彼の思考からして、おそらく興味をなくすだけだろう。二度と、話すことも、会うことも、なく。

ただ、切り捨てられることへの、長に捨てられることを狼野干は徹底的に恐れた。分らない。

今まで、ただ、優しいだけだと、甘いだけだと、そう思っていた男への自分が持っていた無理解が恐ろしい。

これはなんだ。

この、全てに対して、平等すぎる男は何なのか。

(……殺生丸様のほうがよほど恐ろしくない。)

彼の人は、まだ、憎悪というものの、蔑みというものの、境がはつきりとしている。區別がある、自分の存在が彼の中でどこにあるのかを理解できる。

けれど、風牙は違う。

全てが平等であるからこそ、特別なものなどない。

分かるだろうか。

先ほどまで、楽しく酒に酔っていた同胞が笑みのままに刀を振り下ろすような、気味の悪さ。

妖怪であるならば、そんなこととてないわけではない。

貶めることも、優位に立とうとすることも、ないわけではない。

けれど、風牙には、決定的に、悪意が、敵意が足りない。

それが無いというのに、いつか、敵に向けた切っ先が自分たちに向けられる可能性があることが恐ろしい。

それとて、妖怪であるならばないわけではない。ただ、優しいと思っていた男の顔に透けて見えた、その落差が恐ろしいのだ。

「やっぱりなあ、つまらんなあ。そうだろお、冬風？」

そう言つて、甘い声が掛けられたのは、冬の空のような髪と瞳をした美しい女だ。といても、それも化けただけの姿だ。

冬風と呼ばれた女は、それぞれ逆方向にねじ曲がつた四肢を必死に縮こませてがたがたと震えた。

「ほうら、見てみるよおおお。お前らがさあ、大手を振つて一族集めた結果がこれだぞお？ 大事な存在が殺されて、そいつらに自分も殺されるなんて、かあいそうだよなあ。でもなあ、俺、百五十年前も、言つたよなあ。もう、来るなつて。」

どろどろとした、腐敗臭がしそうなほどに、その声は甘い。

けれど、そこに慈悲という感情は欠片とて存在しなかった。

狼野干も哀れになってくるほどに、その冬嵐という女は震えていた。

「あの時さあ。親父がさあ、お前んとこの大将殺したからさあ。慈悲出して逃がしてやったけどなあ。」

風牙はきやらきやらと笑った。

「あの時はなあ、楽しかったなあ。お前らさあ、確かに機動力はあるけどなあ。連帯は無理だからさあ、大らしく追い詰めて、弄って、たーくさん、殺してなあ。不評だった、木天蓼の罠にさあ、ばかみてえに引つかかってなあ。でもなあ、年若い奴は、上に従ってただけだろうって逃がしてやったのになあ。勝てるって思ってたのか？」

笑う、笑う、風牙は、笑う。何が楽しいのか。分からないけれど。

「死ぬなあ、お前のかあいい弟や妹が、お前の馬鹿な復讐心で、死ぬんだなあ。」

「・・・やめてくれ。」

掠れた、蚊の鳴くような声だった。冬嵐の言葉に、風牙は等々、げらげらと笑った。

「やだ。」

単的で、分かりやすい言葉だった。

風牙はにたあああと笑って、冬嵐の髪をひつつかんだ。

「だあああれが、赦すって思うんだよお？てめえの傲慢と、無知さ、その愚かさよ！それが、てめえの弟妹と殺すんだ！なあ!?どうして勝てると思っただ？お前、俺が、お前

らをどんなふうに潰して回ったか、知らないわけじゃねえだろ!? 今回も、俺の仕掛けた幻覚と、特製の木天蓼で捕まってよお! 痛い目見たくせに、なあああんにも学んでねえなんて。本当に愚かだなあ!」

けらけらと、風牙は笑う。まるで、壊れたおもちゃのように、全てがどうだつていいと言っているかのように、今でさえ、冬嵐を弄っている様で、実際の所はどうだつていいとおもっているかのようだった。

「……むかつくなあ。俺を見てるみてえだ。犬夜叉、かあいい、犬夜叉。やつぱり、あんな中途半端な女に任せるんじゃない。あんな、結局、巫女としての在り方に縋るしかない、哀れな、女。ああ、やつぱり適当な理由で殺しとくべきだったのかなあ。でもなあ、あいつもなあ、かあいいかったんだよな。」

変わることもなく、甘ったるい声音に、誰も動くことが出来ない。自分の行いが、今の風牙の気を引くことを誰も恐れたのだ。

「あああああ、残念だなあ。お前も、ものすごいかあいいのになあ。そんなに、弟妹たちのこと、大事に思つて、泣き叫んで。ああああああああ! かあいいいなああああああ!?! でもなあ、殺さなくちやいけねんだよなあああああ!?!」

げらげらと、風牙は笑つて、目が赤く染まる。耳まで割けた口が、彼の本性を現しているようだった。

とうとう、彼の後ろに控えていた妖怪たちはがたがたと震えて、地に伏せ、逃げ出した。何かおかしいのか分からない。

分からないことが、恐ろしい。

自分たちが、何を恐ろしがつているのか分からない。

その、敵を屠る残虐さも、無慈悲さも、自分たちには馴染み深いというのに。恐ろしくてたまらないことが、何を恐れているのか分からないことが恐ろしい。

「……おい。」

その時、まるで天からの声のように、その無愛想で冷たい声が響いた。

声の方向には、不機嫌そうな顔をした殺生丸が立っていた。

まるで、時間が止まったかのような、静まり返った空気が辺りを包む。

「うーん、どうしたんだ、殺生丸。お前、敵の本体取りに行つたんだろ？」

「……すでに屠つた。」

「そうかあ、さすがは、殺だなあ。ちよいつち待つとけ。もうすぐ、全部殺せる。」

ぐりんと、頭を殺生丸に向けた風牙に、弟はふうとため息を吐いた。

「帰るぞ。」

「……どうしたんだ。少し待て、もうすぐで、全部殺せるんだよ。」

ぼんやりと、光をともしない瞳に、殺生丸は無言で近づきおもむろにその腹に突きを

一つ加えた。

無防備であつた風牙は、それに掴んでいた冬嵐を離し、崩れ落ちた。それを見守つていた妖怪たちは、ひゅつと息を飲んだ。

「帰るぞと、私は言つたんだ。」

「……どうしたんだよお、殺生丸、らしくねえなあ。」

ゆらりと立ち上がった紅い瞳をきらきらとさせた、認めたくはないが、兄に殺生丸は言つた。

「酒が飲みたい。」

「は?」

驚いたような声に、殺生丸はくるりと踵を返した。そうして、もう一言付け加える。

「酌をしろ。」

風牙はそれに目をきよとりとした後、陽気そうな声を出した。

「何だ、殺生丸、兄ちゃんと酒が飲みたいのか!」

先ほどまでの本性のにじみ出た顔は鳴りを潜め、にぱつと微笑んだ。それは、狼野干の見知つた、いつも通りの風牙だつた。

「そうだな、勝利の美酒を味わいたいよなあ。よし、兄ちゃんがとつておきの、親父も好きだつた秘蔵の酒を出してやろう!」

風牙はそう言つて、剥き出しにしていた叢雲牙をさつさとしまった。それによつて、まるで地獄のように広がつていた亡者たちの軍は、まるで夢であつたかのように消えていく。

そうして、今までなぶつていた冬嵐のことなど目もくれずに、歩き出した殺生丸を追つていく。

そうして、まるでじゃれ付く様に殺生丸の肩を抱く。

「そうだなあ。せつかくお前が手柄を立てたんだもんなあ、お祝いせにやならんな！よしよし、兄ちゃんに任せとけよ、とびっきりの美酒と、料理を用意してやろう。酌だつてちゃんとしてやつからな！殺も、俺に酌してくれるよな!? いいなあ、かあいい弟からの酒なんて、どんだけ旨いんだろうなあ！」

きやらきやらと笑つた風牙はいつも通りの、優しい彼の人のままだつた。

殺生丸は、それに無言で歩いて行く。そこでふと、風牙は今気づいた様にくるりと集まつていた妖怪たちに振り返つた。

そうして、無言で狼野干に近づいた。

「今日は良く集まつてくれたな！」

風牙はそう言つて、集まつたものたちに軽い労いをした。狼野干に対しても、ぐりぐりと頭を撫でた。

「まあ、つって、俺と殺が全部しちまったんだが。まあ、集まってくれたんだし。あとで酒でも届けてやるよ。ただな、あれの処理頼めるか？焼いてくれりゃあ、いいからよ。」
そう言つて、指さしたのは、夥しいほどに広がった豹猫族の死体の山だ。妖怪たちは無言で、刻々と頷くだけで終わった。

「それに、狼野干、駄けつけてくれたんだなあ。かあいいな、お前は。よし、そうだ、特別におまえにはいい酒をやるうか。」

その顔が、あまりにも、いつも通りで。いつものように、優しい手つきで、頭を撫でて。

だからこそ、分からなくなる。

あの、先ほどの全てはなんであつたかと。

くるりと踵を返した風牙に、狼野干が思わず声を掛けた。

「あの……」

「うん？どつたの？」

「あ、あの。その。あの、猫はどうしますか？」

何を言えぱいいの分からなかつた狼野干は、ぼろ雑巾のように転がった冬嵐を見た。それに、風牙は今気づいたかのように頷いて、冬嵐を抱えた。

「そうだな、こいつは俺が持つて帰ろう。かあいいし。まあ、戦利品だし。なんて、適当

に手当てして返してやるさ。」

風牙はそのまま、殺生丸を追っていき、じゃれ付く様に弟に擦り寄った。殺生丸はそれを微動だにせず、無視をする。

遣された妖怪たちは、何も話すことなく、命じられたことのために手を動かし始めた。何かを、話す気にはならなかった。

そうして、ぽつりと誰かが言った。

「……犬の大将の後を継ぐって、どっちだろ。」

それに妖怪はぶるりと背筋を震わせた。なぜ、噂で殺生丸の方が支持されているのかという理由を、今、察したのだ。

ああ、そうだろう、無慈悲で、冷たい殺生丸の方が、あれよりも数倍はましなはずだ。そんな中、狼野干だけが、じっと己の主人の歩いた後を見送った。

結局のところ、嘘ではないのだ。

風牙がいつもする顔も、先ほど見た、恐ろしい顔も、全てうそではないのだ。狼野干は、それでも、風牙を恐ろしいと思うし、慕っている事実途方に暮れた。

偽りも真でもない情

弥范という男は、その日、それに会ったことをどんなことよりも後悔した。いつそ、会わねばよかつたと、幾度もそう思った。

弥范は、開けた道を歩いていた。

年若い法師である彼は、人づてに頼まれた妖怪退治の帰りのことであつた。

法師と言えど、生活していくには金がかかる。もちろん、貧したものに何かを求めるといふことはない。けれど、富めるものからはきつちりといただくスタンスだ。

幸いなことに、今の弥范の懐はほこほこと温まっている。

(・・・今回は当たりだったな。)

ホクホクしながら、彼は道行きにある森へと足を踏み入れた。

それは、よくある光景と言えば光景だった。

打ち捨てられ、焼き捨てられ、未だ煙の微かに立ち込める村。森の中に、まるで隠さ

れた様に存在したそこに、弥菴は顔をしかめた。

別段、泣き叫ぶようなことではない。

よくあることだ。

弱者がそんなふうに蹂躪されることなど、よくあることだ、見知ったことだ、当たり前のように世に溢れていることだ。

それでも、弥菴は、顔を歪めずにはいられなかった。

悲しや、悲しやと、嘆かぬだけ、彼はこの世を受け入れていた。

弥菴は、ゆつくりと、散らばった肉塊に祈る様に目を閉じ、弔いのための念仏を唱えた。

時折、燃え尽きた家が崩れ落ちる音だけがした。

弥菴は、妙に達観して気分で、ゆつくりと村を歩いた。

ああ、きつと、ここに生者はいないのだろう。弔うことしか、出来ぬのだろうと。そう、高をくくって。

けれど、その村は、ひどく可笑しかった。

不思議と、村の人間は安らいだかのような顔をし、そうしてきつちりと衣服が整えられ、まるで眠る様に横たわっていた。

もしかすれば、彼らを憐れんだものがいたのかもしれない。

けれど、村をかける風は、未だに何かが燃え落ちる臭いを纏っていた。そんなものがあったのなら、弥菴に既にあつてゐるはずだ。

ふと、彼の耳に何か、音が聞こえた気がした。

彼は、それに弾かれた様に走り出した。まだ、息がある者がいるならば。

そこまで広くない村の中、彼は音の正体が何であるのかを理解した。

「……おや。」

まるで、月がそこに立っているかのようにあつた。

弥菴が見たのは、焦土に立つ、人影だつた。

人の姿をしていたが、人でないことはすぐに察せられた。

それは、人にしては、あまりにも美しかった。そう、それこそ、まさしく、月のような男だつた。

上等そうな着物に、変わった形の鎧。そうして、背負つた大剣。

けれど、それ以上に目を引いたのは、その美しいかんばせと、色彩だつた。一番に目を引いたのは、白銀の髪。陽の光を浴びて、煌々と輝くさまはそれこそ、言葉通り月光を背負っているかのようにだつた。

ゆるりと、薄く微笑みを浮かべたかんばせは、まるで高名な彫刻家が彫り込んだ如く

美しかった。白磁のような肌はまるで深窓の姫君が如くであった。

そうして、その眼。

まるで、黄金を埋め込んだかのような、瞳。満月を埋め込んだかのような、瞳。全てが、それが人でないことを示していた。

男は、まるで幼子に向けるかのような、柔らかな笑みを弥范に向けた。

「おや、おや。死人の村に、生者が来たか。」

ゆるゆると、謳う様な声音に弥范は逃げる様に体勢を整えた。

人の姿に、人のように振る舞う妖怪ほど警戒しなくてはいけない。そんな常識に弥范は駆け出そうとした。けれど、彼の瞳に飛び込んできたとある事情のために、叶わなかった。

その、白銀を纏った妖怪の腕には、幼子が抱かれていた。妖怪は、まるで赤子を抱く様に、柔く、幼子を抱えていた。矢が背に刺さったその痛ましい姿ではあれど、確かに息をしているのが見えた。

「……その子をどうする気だ？」

本音を言えば、さっさと逃げ出してしまいたかった。賢しく、上手く化ける妖怪などと誰がやり合いたいものか。

それでも、彼は、幼子の姿を見てしまった。これから、異形に何をされるのか、考え

たくもない。

彼は、若かった。未だ、幼かった。

守られるべきものというものを夢見てしまった。

妖怪は、それに、ゆるりとやはり微笑んだ。

「そうさな、食うてやりたかったのだ。」

弥范は、それに妖怪からの何かしらの攻撃の手が来るのだと予想した。護符を構えようと、懐に手を入れたが妖怪はそんなことも気にせず、あやす様に子どもの頬に擦り寄った。それは、まるでいと子を抱く、母の様だった。

「喰らえば、血となり、肉となる。らうたし、これを永劫共に。されども、分かっているのだ。人には、永劫は長く、苦しかろうとなあ。ゆえに、夢の内に殺してやろうと思っているのだよ。」

妖怪の言っている意味が分からずに、弥范は身を固くした。けれど、妖怪は気にしたこと無く、ただ悲しむように目を細めていた。

「妖の身では死を悼む言葉を知らず、祝詞を口にせず、念仏を唱えることは叶わぬ。それ故に、苦しみの少ない眠りの内に送ったのだ。そうして、これが最後。」

その言葉で、弥范はなぜ、今までの村の者たちらしい遺体のものがあんなにも安らかな顔をしていたのかを察した。妖怪は息の荒い子どもにうつすらと微笑んだ。

「これは、走ったのだ。村の誰よりも、生きるべく足掻いたのだ。されど、もうこれも長くはないだろう。ゆえに、送ってやるのだ。父母のいる場所に。」

「……殺したのか？お前が、この村のものたちを？」

「それは、是であると同時に否だ。殺したのは、人だ。それ以上でも、それ以下でもない。共食いに巻き込まれたにすぎんだ。ただ、苦しみもがくさまが哀れであった。それ故に、出来る限りの幸いを与えた。」

妖怪はそう言つて、子どもを抱いていた手の反対の手に、何かを持っていた。それは香炉であった。くんと、そこで弥范は微かに甘い香りがした。

弥范は着物の袖で口元を覆った。

「安心しろ。これは、ただ、眠りへ誘うだけだ。善き夢をもたらしてくれるだけだ。ただ、弱ったものは永遠に目が覚めないが。」

それに弥范は妖怪に向けて破魔の札を投げつけた。妖怪はそれを容易く払いのけた。けれど、妖怪は変わることなく笑みを浮かべて弥范を見つめた。

「どうした。まるで駄々をこねる幼子のように。」

「……黙れ、その子を離せ！」

そう言い話しても、弥范はどうしようもなく目の前の妖怪が気味が悪くて仕方がなかった。

妖怪とは、ある種その願いの在り方が分かりやすいものだ。

それは、人を食らうだとか、そういつた弥菴にも理解しやすいものだ。けれど、目の前の妖怪の目的というものがなんなのか見当もつかない。

死者の弔いをするなどという妖怪、聞いたことも無かった。だからこそ、弥菴は気味の悪さでいっぱいであつた。何を望んでいるのか分からない。

それでも、幼子を殺そうとしてゐるそれに、彼は立ち向かわずにはいられなかつた。

「……何もせずとも、これは死ぬ。矢に射られた傷は膿み、すでに熱を持っている。幼子ではけして耐えられるものではない。ゆえに、安らかな終わりを与えてやるのもいいだろう。」

そう言つて、妖怪は徐に幼子を地面に横たえた。弥菴は思わず目を丸くした。妖怪の行動の理由というものが全く分からなかつたのだ。

「……好きにするといい。助けられるのならそれもいい。救えるというなら、それもいい。されども、人では人が救えぬゆえに、貴様らは神と仏を継り、浄土を夢見、徳を積み上げるのだろう。」

生を夢見るだけでは救われぬからこそ、死した後の快樂を夢見るのだろうに。何をそこまで忌避するのか。

妖怪は、人でなきものは、するりと滑るように幼子から離れた。そうして、消える様

に森の暗闇に溶けていった。

「見ていてやろう。その様を。安心しろ。我らは、神仏よりも、より、お前たちに近いものなのだから。」

甘い声だけが、しんと静まり返った、焼け焦げた村に響いていた。

弥范は、その残された幼子を畏か疑いながら、それでもなお子どもを医者に見せるために駆けた。矢を抜き、手当てをし、その熱に苦しむ身を抱えて男は走った。

背負ったその身の小ささと、その熱さよ。

命が燃えているのだと思った。

そう幻想するほどに、その身は熱かった。

妖怪の、甘い声が耳に響いた。

救えぬだろうという言葉が、耳に響いた。

(……遠すぎる。)

弥范はその土地の全てに通じているわけではない。彼の知る、一番に近い、医者のような町はあまりにも遠いのだ。そこを目指しては、幼子の体力が持たない。

かといって、闇雲に走っては絶対にたどり着けない。

「……かあちゃん。」

背から聞こえた、微かな声。もう、意識ももうろうとしているのか、ぼんやりとした声は継りつく様に母を呼んだ。

それに、弥菴は泣きたくなる。

ああ、ああ、呼んだところで母はいない。母は、もういない。

もしも仮に生きていれば、母である、父である存在たちは幼子を探したことだろう。けれど、あの村にいたのは死者だけだ。おそらく、文字通り、父母はこの世にいないだろう。

(……それとも、あの妖怪に殺されているか。)

あの妖怪。弥菴はそれを思うだけで、頭が痛くなつた。何とも言えない、気持ちの悪さを感じた。

何がしたいのか分からない。何を目的としているのか分からない。

それが、ここまで気持ちの悪いものであるなんて。

弥菴は、妖怪の微笑みを思い出した。

優しく、柔らかで、穏やかで。それは、なんて。

(……まるで、仏像に刻まれた、仏が如く。)

そこまで考えて、弥菴は首を振る。何を馬鹿なことをと、首を振る。

それは、愚かな考えだ。あんな悍ましいものが、仏であるはずがない。仏であつてい

いはずがない。

そう思つて、それでも、弥菴は何となしに察していたのだ。その妖怪からは、一欠けらとて悪意と言えるものを感じることが出来なかつた。

それから、目を背ける様に弥菴は道を進んだ。

けれど、彼は悟っていた。このままでは、幼子の命は持たぬのだと。

彼は、覚悟を決めた。

自分の持てる知識の範囲での薬草を集め、煎じ、幼子に施した。ちょうど、川に近い洞窟を見つけ、そこで野営の形を取つた。

荒い息をする幼子に、必死に川の水で冷やした布を当ててやつた。

「……あ。」

「大丈夫だ。もつと、熱が下がれば……」

「か、ちゃん、どこ？」

掠れた声に、弥菴は泣きたくなつた。幼子は、苦しみにもだえる中、唯一、母の幻覚をよすがにしていた。

分かるのだ。幼子の命が、少しずつ、薄れていくのが、まざまざと。

目は虚ろに、体の力は弱く、そうして、声も小さくなつていく。

弥菴は少しずつ、苦しみの中に命を薄れさせてゆく存在に、齒齧みした。

正しかったのだろうか、そう思ってしまったのだ。

こうやって、苦しみを長引かせ、死に向かわせる事しか出来ぬ自分は、何がしたかったのだろうか。

死を、受け入れさせることは出来なかった。妖怪の手に、その命を委ねさせることを赦しておけなかった。弱きものの命を、見捨てることが出来なかった。

けれど、その、救われることなく、無為に消えていく幼子を前に、弥范はその手を握ることさえできなかった。

正しかったのだろうか。

弥范は、川辺で水を汲みながらそんなことを思う。ざばりと、そんな音がした。

ゆるゆると流れていく水を見て、弥范はぼんやりと賽の河原を思い浮かべた。

一つ、積んでは父の為。二つ、積んでは母の為。三つ、積んでは故郷のきょうだいわが身と回向して。

(・・・あの幼子は、賽の河原に行かなくて済むのか。)

そんなことを一瞬考えて、そうしてたまらなく、自分のことが嫌になった。

「正しかったのか。俺は・・・」

それは、幼子のような声だった。泣く寸前の幼子のような、声だった。

「・・・何を後悔することがある。」

するりと、いつの間にか、己の頬に手が滑りこんだ。びくりを、弥菴は体を震わせ、そうして嗅いだばかりの甘い匂いに、身を固くした。

ぶん、と振り切った腕を、後ろにいたはずのものはやすやすと避けて見せた。

それは、変わることもなく、うつすらと宥める様な笑みを浮かべていた。

「あの地獄を見ただろう。まるで狩られる獣が如く、無意味に、無慈悲に、無造作に殺されゆく同胞を見たであろう。この世に幾多もある当たり前の帰結をお前は見ただろう。死者はしやべらず、見ず、祈らず、そこにあるは肉の塊にすぎぬ。それでもなお、祈ることをお前は選んだのだ。」

もう一度現れた妖怪に、弥菴は固まった。それでも、妖怪から、不思議と悪意だと、殺意を感じることはない。まるで、凧いだ海のような目を、妖怪は弥菴に向けた。

「分かっていただろう。死に触れたことがない処女でもあるまいに。あの幼子がすでに死に魅入られているのだと。分かっているながら、それでもなお、お前はあの子の生を祈ったのだろう。例え、叶うことがない願いであろうと、祈りを持つことが人の持ちえた美であろう。」

「……何を貴様は、したいんだ。」

掠れた声に、妖怪はまるでそこにいないかのように。確かにそこにいるはずだというのに、まるで霞のように薄れて行くような感覚がした。

「……あの子は死んだよ。」

弥范の目が、見開かれた。妖怪は、己の手をじつと見た。

「この、節くれた手に縋り、母よ母よ、泣いて微笑んで死んだのだ。されどな、勘違いしてはならん。」

望まれ、祈られ、手を尽くされたあの子を不幸と謳うのはあまりにも傲慢だ。

妖怪は、己の手に残る何かを見つめる様に、目を細めた。

「何がしたいと貴様は問うたな。そうだな、ただ、情があつた。その情を、どうにか報わせたかつた。悼む祈りというものを、してやりたかつた。」

「人を食い物にする、相容れぬ妖怪が情を語ってなんとするのだ!」

弥范は吠える様にそう言った。

何を語る、そんな戯言をどうして語る?

妖怪と人は相容れぬ、ありかたが違う、食らうものが違う、世界が違う、何もかもが違う中、交わることなど叶わぬ人ならざるものが、まるで仏のような、穏やかな笑みを浮かべてなんとする。

「貴様が殺したのだろうが! 救われるそれは、ただ、手折ることしか出来ぬ妖怪が!」

「それでも、この身は人と交わり、子をなすこととて出来るのだ。」

突然の言葉に弥范は目を丸くした。

「人の女と交わりて、子をなすこととて出来るだろう。妖の女が、男と交わり子を孕むこととて出来るだろう。生まれくるは、どちらでもない半妖であれど。それでも、我らは、子をなすことができるのだ。繁榮の道を託すことが叶うのだ。それは、人でなきものと、人であるものが情を交わす術であり、証明だ。」

法師よ、人の終わりに祈りを抱く者よ。

お前は知らぬのだな。子を失い、嘆きに狂う妖の狂気を。お前は知らぬのだな、親を失い、途方に暮れた化け犬の遠吠えを。

人の子よ、人の子よ、それを情と言わずして、お前たちは何を情というのだろうか。笑う、笑う、まるで神仏が如く、妖怪の男は微笑んだ。

「何がしたいと、お前はいったな。そうだな、ただ、あの幼子が救われたことを教えてやりたかった。情を孕んだその事実を、知らせてやりたかった。法師よ、お前は間違っていないかった。終わりゆくことを恐れ、生き続けることを賛美することは間違っていないだろう。」

ただ、お前が己を責めることが忍びなかったのだ。

「俺が、自分を責めるだ」と。

「お前は、法師だ。医者ではない。生かすのではなく、お前の本業は祈ることだ。せいぜい、祈ってやれ。」

どこから、音がした。

ほーほーと、どこか間抜けで、そうして、寂しくなるような音だった。

声のする方に目を向けた。

そこには、どこか赤子のような妖怪と、その周りでくるくると笑う幼子たち。

ほーほーと、音がする。

「たたり、もっけ……」

そうして、その幼子の中で見つけた、助けたかった幼子。

笑っていた。

痛みも、苦しみも知らぬというように、ただ、無邪気に笑っていた。それと同時に、くんと強く、甘い匂いがした。力が抜け、どきりとその場に崩れ落ちた。

起き上がることも叶わない、声を発することも出来ない。あるのは、心地の良い眠気だけだ。

「……あの子は、少なくとも解放されたのだ。痛みも、苦しみももうない。満足するまで遊んだら、あるべき場所に行くだけだ。あの子のために、祈っておあげ。それは、お前の救いだよ。」

頭を撫でられた。今まで、知る中で、一番に優しいだけの手だった。それに、何故か、弥范はぼたぼたと涙があふれ出した。

赦されたのだ、ただ、漠然と思つた。

『お前さん、何がしたかつたんじや?』

「どういう意味だ?」

のんびりとした言葉に、鞆は顔をしかめた。

叢雲牙の封印をしている鞆に宿るその老人の姿の妖怪は珍しく外に出ていた。

それも、風牙が話し相手がいないためという適当な理由であつた。

たたりもつけと共に在る幼子の霊たちを遊び始めた時は、さすがにもう気にはしなかつた。その気まぐれはよくある話であつたためだ。けれど、唐突に、夜盗か何かに襲われたらしい村で生き残りたちの弔いをし始めた時は何がしたいのかと困惑した。

『だつてよ。お前さん、別に、あの死にかけて人間たちを生かすことだつて出来ただろう?』

「生かしたところでどうにもならないだろ?というか、めちやくちや手間だろう?」

『まあ、そうじゃけど。』

さすがに風牙とて人を生き返らせる手段は持つていない。まあ、完全にでなければ、死人に生きてゐる振りをさせることは出来るだろうが。さすがに完璧な蘇生となれば、殺生丸の天生牙を使うぐらいしかできないだろう。

（殺生丸は、まだ天生牙を使いこなすことは出来んし。）

『でもよお、息がある奴らを生かすことは出来ただろう？』

「生かした奴らだけで村を存続させることは出来なかつただろうさ。生かすだけ。残酷な結果になるだけだ。」

風牙は気だるそうに息を吐いた。それを見ながら、鞘は一番に気になることを口にした。

『……だいたいよお、あの村、お前さんが作つたようなもんだらう？』

森の中に、隠された様に作られた村は、元々、何を考えていたかは鞘にも分からないが、風牙が各地で焼け出されたりしていた人間を集めて作つた村だった。

けれど、代表をしていた人間が、人でないものの力を借りることは出来ないと高尚な事を言ったために一時的に関係を切っていた場所だ。

といつても、風牙は何くれと村のことを気にしていたが、それでも、分かつていたはずだ。

村が無事であつたのは、所詮は、風牙が手を加え、夜盗を、妖怪を排除していたためだ。守護の手がなくなれば遅かれ早かれ、滅びていたはずだ。

『お前、あの村が滅びるって分かつててどうして手を引いたんだ？』

別段、鞆は村が滅びることに關しては特別なことは考えていない。今の時代ではよくあることだ。けれど、そこそこに手間のかかった村をどうして手放したのか、それは氣になつた。

「人がそう決めたからだ。」

簡潔な答えに、鞆は眉を顰める。それに、風牙は付け加えるようにつた。

「あの場所は人が生きるために作つた場所だ。そこでどうやつて生きていくかは、中身の奴らが決めればいい。まあ、さすがに責任はあるからな。だから、どうやつて滅びるかは確認したし、後始末もしたんだ。」

骨が折れた。わざわざ、弔いの出来る人間を呼び寄せてやつたんだぞ？

ため息を吐く風牙に、鞆は思わず言つた。

『あの法師、お前さんのこと、神でも見るよう目だつたぞ。妖怪だろうに。』

「ははは、おかしなことを。神も妖怪も、しょせんは、紙一重だ。ただ、崇め奉られた存在を神と呼び、縛られぬ強き何かを妖怪と呼んでいるにすぎندらう。まあ、あの法師に關しては、無力さを赦されたがつているようだったからな。望まれた振る舞いをしてやつたんだよ。」

語られることを聞きながら、鞆はぶるりと背筋を震わせた。

風牙のおかしなところはそこだ。

それは、多くの情を語るくせに、未練というものが無いのだ。

幼いころのこと、彼はある時、弱い鼠の妖怪を拾って来た。もちろん、知性も無い獣同然のそれだ。彼はそれを愛玩動物のようにして飼っていた。

その偏愛ぶりは確かなもので、何くれと世話をしていたように思う。部下のものたちは甘すぎると影で言っていたものの、鞘はそれを嬉しく思っていた。

彼の慕う大将の長子に、彼と同じように慈しむ心が在るのだと。

けれど、それは、鞘の酷い見当違いであった。

ある時、彼の母、御母堂にその鼠の妖怪を見せた事があった。けれど、彼の母に怯えた鼠は、その着物に尿を引つ掛けてしまったらしい。

それに、風牙は、その鼠の頭を握りつぶしたそうだ。彼は、美しい母になんてことを怒り、侍女たちに母を着替えさせるように言った後、鼠の墓を作ったそうだ。

そうして、悲しそうな顔をしていたと、聞いた。

鞘は、それに、どうしようもなく薄気味悪い気分になる。

鼠を慈しんでいたのも、母が好きであったのも、そうして、死んだことを悲しんでいたのも本当だろう。

けれど、それを一緒にくたに、ぐちゃぐちゃに見せつけられる気分はまるで、血に濡れた花を見ている様な、歪な何かを見出すのだ。

分からない、その、慈しんだ顔と、容易く気に入らない者を壊す顔が、どれが本当か分からないからこそ、恐ろしい。

(・・・風牙、お前さん。)

村を態々、滅ぼしたんじゃないだろうな？

そんな言葉が口から出そうになった。けれど、鞘はそれを口にすることはなかった。真実を知るには、あまりにもその、慕った男の息子の本性を信じていたかった。

(・・・駄目だな。)

鞘の考えていることなど露とも知らず、風牙は考える。

(・・・手間をかけて、慈しんで、情を持ってばいいとおもったんだが。)

大事にしていた箱庭が壊れても、風牙は感じたかったそれを見いだせなかった。

(十六夜が死んだときの、あの、激情は訪れなかった。)

それを残念に思いながら、それでも今日、見いだせたかあいいものを想って風牙は微笑んだ。

人の死を嘆き、生を願う、かあいいかあいい、男を想って、風牙は微笑んだ。

人と妖は交わらない

「……というのが、私の祖父から語られている話です。」

弥勒はそう言って、話を切った。彼の祖父が出会ったという白銀の妖怪の話に皆は、特に犬夜叉は口をぽっかりと開けて聞いていた。

それを見ながら、弥勒は慣れた様子で、うんうんと頷いた。

「まあ、祖父は良くも悪くも直情的で欲望に素直な方だったようですが、妙に理想家な部分がありますね。その理由というのが。」

「……風牙、さん。」

かごめが取りなす様に言えば、弥勒はまあ、と妙に達観したような顔をした。犬夜叉は顔を覆い、ぐったりと体を丸めた。

それは、珊瑚がかごめたちの仲間に加わって少ししてからのことだ。日も暮れ、野営の準備をしていた時のこと。ふと、犬夜叉が視線を感じ、そちらの方を見れば何故か珊瑚がいた。なんだと言った犬夜叉に、珊瑚は少し迷う様な素振りを見せて口を開い

た。どうも、ずっと気になっていたことがあるらしい彼女は、犬夜叉にこう問うた。

「あんだ、身内に風牙って奴いない？」

もちろん、それに犬夜叉は思いっきり顔をしかめた。

彼の経験則からして、兄、とくに長兄関係で碌な目に遭った覚えがないためだった。

「……いるが、なんだよ。」

「やっぱり！」

「えっと、珊瑚ちゃん風牙さんと知り合いなの？」

「……知り合い、っていうのかなあ？」

珊瑚はそう言っつて、心底困り果てた様な顔をした。そうして、おもむろに口を開く。

「うちの里に妖怪の皮とかの加工技術を教えたのが、風牙、だったらしいんだ。」

「妖怪の風牙さんが、妖怪退治の里に協力してたってこと？」

何とも不可思議な話に、犬夜叉がぼそりと、やるだろうなあ、と呟いた。それを聞いていた七宝は思わずというように言葉を漏らした。

「……うーん、犬夜叉とは本当に違うのお。」

それに犬夜叉の拳が七宝に振り下ろされる。

「わーん!!」

「わーん!!」

「それで、珊瑚。あのくそ兄貴、お前らになんかしたのかよ？」

「……なについて、わけでもないんだけど。よく、してくれた、と思うけど。」

珊瑚は奥歯にものが挟まったようなことを言った。それに、犬夜叉は苛立ったように顔をしかめた。

「おい、言いたいことがあるならさっさと話せ。」

珊瑚はそれに、五人で囲んでいた灯りの焚火をじっと見た。そうして、ふうとため息を吐きながら口を開いた。

私も、そんなに風牙つてやつのことを知ってるわけじゃないよ。ただ、あいつはよく、うちの里をふら付いてたんだよ。

……妖怪退治屋の里に妖怪がとか言わないでくれよ。あいつ、まるでイタチかなんかみたいにするって入り込むんだよ。里の人間も諦めてたし。大体、あいつが本気になれば、うちを潰すぐらい出来てたからね。だからまあ、うん。まあ、仕方がないって放置してた。

風牙に最初に会ったのは、うちの御先祖様だったらしい。

まだ、妖怪退治屋もそこまでしつかりしてなかったころ。そのご先祖様つていうのが死にかけてる時に、銀の髪に金の瞳をした妖怪に助けられたんだと。

もちろん、そのご先祖様も死を覚悟したらしい。でも、なぜかそのご先祖様は、豪奢

な屋敷に連れていかれて、豪勢なもてなしを受けて、おまけにたくさんのお土産まで持たされそうになったんだって。

そりゃあ、おかしいと思うよ。だから、そのご先祖様もなんでか聞いたんだって。

その理由っていうのが、ご先祖様が死にかけて殺した妖怪っていうのが、あいつにとつて鬱陶しいものだったらしくてね。

退治してくれた礼だったらしい。でも、風向きが変わったのがそれから。

風牙は、ご先祖様が持ってた武器を見て、もう少し何とかならないのかって言ったんだと。

ご先祖様は、そりゃあ、それに怒り狂ってね。

妖怪退治に武力を用いるのってあんまりよくないんだ。再生力が強いのかに当たったら地獄だし。だからこそ、巫女とか、霊力が強い人がいいんだよ。でも、霊力なんて才能が大きいからさ。

だから、うちの里は、ただ、技術を磨いた。妖怪たちの弱点を知り続けた。積もり続けたそれだけが、私たちの宝だった。

でも、人が作った武器はすぐに駄目になる。毒を吐き出す奴の前じゃあ溶けて意味がない。

そんなに文句を言うなら何か武器をくれって。

殆ど、夢見心地のやけっぱちのご先祖様は、風牙にそう言ったんだって。

それに、風牙はこう言った。

「なら、武器をやるう。尽きることもなき、武器を作る術をやるうって。」

ご先祖様は、土産の金銀財宝の代わりに妖怪の皮なんかを加工する術が書かれた巻物を貰って帰ったんだって。

おかげでうちの里はぐつと生きて帰る確率も、退治の成功率も上がった。

それからだよ。時々、風牙がうちの里に来るようになったのって。

あいつは、妖怪の皮とか牙とか、ほかにも酒とかお土産を持って来たらしい。少しの間だけ、交流もあったらしいけど。もう、交流もなくなつて結構たつよ。今じゃ、風牙の一方的なじゃれ付きだけだね。

……どうして、交流がなくなつたかつて？

「怖かつたんだよ。」

「怖かつた？」

七宝の疑問符が付いたようなそれに、かごめは顔を下に向けた。

かごめは、犬夜叉の兄であるという彼と初めて会った時のことを覚えている。あの後、彼はまるで今までが夢だったかのようにどろりとした目をしまい、子どものように

けらけらと笑った。

まあ、心配はなさそうだね。

そう言つて、風牙はまるで風のように去つていった。

かごめは、あの時のことを犬夜叉には言つていなかった。悪態はついても、犬夜叉の中にある彼への信頼や親愛のようなものは透けて見せた。

言つて信じてくれるかは分からなかつたし、それと同時に、かごめ自身、風牙の変わり身の早さに全てが夢であつたかのような気がしていた。それでも、風牙のことを考えていると感じる寒気は本物であつたし、恐怖のようなものがこびり付いて離れない。

鮮明な悪夢が忘れられないような感覚だつた。

「……あの妖怪は私たちに武器の作り方や食料や、妖怪の情報をもたらした。けどね、あれは何も私たちに望まなかつた。」

「それつてなんか悪いことか？何もせずに色んなもんくれるならいいことじゃろ。」

七宝の言葉に、今まで黙り込んでいた弥勒が口を開いた。

「そうはいつでもですねえ。七宝、例えばの話、明日から犬夜叉が急に優しくなつたらどうしますか？」

「優しくへ？」

「自分の分の団子を分けてくれるとか。何の理由もなしに。」

「なんじゃそりやあ！不気味じゃあ!!」

「そういうことですよ。ましてや、妖怪が無償で何かを与えるというのはそういうことです。」

淡々とそう言った弥勒は困ったように首を傾げた。その向かいで、七宝がまた犬夜叉に殴られた。

それを何とも言えない目で見つつ、珊瑚は思い出す様に目を細めた。

遠い昔、珊瑚の先祖は、その妖怪に問うたらしい。

望みはなんだ。代価に何を望むのだと。

それに、人でないものは、微笑んだという。

何も、と。

それはどこまでも、微笑んでいたという。

何も望みはしない。ただ、健やかに、強く、幸福におまえたちが生きてくれればいいんだよ。

代償を求めぬ悪魔はおらず、贄を求めぬ神はおらず。

代価を求めぬ妖も又、存在しない。

ならば、それは何なのか。

何も求めぬ、人ではない、親愛を謳うそれはなんなのか。

それは、微笑んだ。

まるで、仏のように、慈悲深き神のように。まるで、心底、退治屋たちを思っているかのように。

人でないバケモノは、微笑んでいた。

珊瑚は、昔伝いにきいたそれを、ぼんやりと思い出した。

関わってはならなかったのだ。話してはならなかったのだ。求めてはならなかったのだ。

けれど、近づいてはならなかったのだ。

珊瑚、珊瑚。強き娘よ。人のふりをする何かに近づいてはならないよ。彼らは、人ではないのだから。理解など、出来ないのだから。

いつか、我らは、求めた力の代価を払う日が来るのやもしれん。

そう言つて、何故か、それを語る父である頭領は悲しそうな顔をした。

何故かと、珊瑚は問えば、父は懺悔するように言つたという。

人でない、何かを好きになりたかつた誰かの話だ。

それは、理解できなかつた、バケモノを想つた誰かの話だ。

「あいつはそれを拒まなかつたそうだよ。話しかけて来ることもないし、関わって来ることも無い。うちの里に出入りしてたのも、風牙と関わつた先祖の墓参りをしてたから

だしね。」

「……それで、お前は俺の返事が聞けて満足なのか？」

含みのある犬夜叉の言葉に、珊瑚は後ろめたさを感じる様に視線を逸らした。

「もしも、あなたの兄さんとの関わりを断たなければ、うちの里があんなことになることはなかったか？」

掠れた様な、弱々しい言葉に犬夜叉はあつさりとは答えた。

「ならなかっただろうな。あいつなら、どんな手段を使つても防いだらうさ。」

それに珊瑚は歯噛みする。先祖のなしたことを、非難する気はない。妖怪と妖怪退治屋が関わつてもいいことはなかったはずだ。

それでも、それでもだ。

もしかすれば、防ぐことのできた手段が身近に転がっていたことが、狂おしいほどに苦しい。

そんな珊瑚を前に、犬夜叉はまるで物思いにふけるように俯いていた。かごめはそれを氣遣うように見る。

犬夜叉は、時折、妙に神妙というのだろうか。老いた目をするところがある。

かごめは、未だに風牙のことを犬夜叉に聞けないままであった。

そんな微妙な空気の中で、弥勒がおもむろに口を開いた。

「……ところで、犬夜叉。前に、あなたの兄であるという殺生丸がいたでしょう？」
「ああ。そうだが。」

犬夜叉の腰には、弥勒に会う以前に殺生丸に渡された鉄碎牙が差してある。次兄曰く、借りていたらしい刀は風牙に会ってからすぐにやって来た殺生丸から返されたものだ。

その後、弥勒が旅に加わった後も、鈍っていないかといきなり戦闘になったのは良い思い出なのか。

ただ、あの兄らしいとは思う。

特に、手合せ後に精進を怠るなど言い捨てていくところなどらしい。

「……実は、私の家系に、というか祖父から語り継がれていることがあるんですが。」

その話が冒頭のそれに繋がったわけである。

犬夜叉は、はあとため息を吐いた。

別段、風牙が悪いことをしたわけではない。ただ、そこから起こるかもしれない面倒事を考えるのが憂鬱なのだ。

「……祖父の最期の言葉は、その妖怪に会いたいだそうで。」

「やめろ、これ以上どぎついこと聞かせんな。」

ぐったりとした犬夜叉の言葉に、弥勒もさすがに衰れに思ったのか、はいはいと頷いた。

「にしても、犬夜叉。お前、やけに疲れ切ってますね。お兄さんのこと、嫌いなんですか？」

「……お前ら、お犬様って知ってるか？」

「お犬様？」

犬夜叉の呟きにかごめが聞き返した。犬夜叉の言葉に、弥勒たちはああと頷いた。

「ああ、あの有名な。」

「有名なの？」

「まあね。まあ、噂というか、伝説みたいなもんだよ。真っ白な犬の神様がいて、正直なものも助けてくれるって言うね。」

「妖怪の間でも有名じゃぞ！弱い妖怪じゃろうと、何かは知らんが条件さえ満たせば助けてくれるって奴じゃろ。」

「……それが風牙だよ。」

犬夜叉の心から不服そうな声に、珊瑚と弥勒、そうしてかごめは顔を見合わせた。

「まじか？」

「……まじだよ。」

心底不服そうな顔で犬夜叉は頷いた。

幼いころ、彼が風牙の元を出奔した当時のこと。

彼は行く先々の人間にお犬様と呼ばれた。

どこぞの村では、狂ったようなもてなしを。どこぞの村では、煮えたぎる様な殺意を。果てには、恐ろしいまでの信仰を。

そのせいか、犬夜叉はお犬様という言葉がほとんど嫌になった。というよりも、たった一つの存在にあそこまでの感情をむけることが恐ろしかった。

「なるほど、お前がそこまでお兄さんのことが苦手な理由が分かりました。」

基本的に、殺生丸のことならば軽くは話す犬夜叉は風牙のことになると口が重くなる。その理由を察して弥勒は頷いた。

けれど、かごめだけが何となしに、もっと違う何かがあるのではないかと考えていた。けれど、そこまで踏み込むことも出来ずに、黙り込むことしか出来ない。

妙に静かな空気が辺りを包んだ。そうして、そこに、ちりんと、鈴のような音が響く。皆の目が、そちらに向いた。

「……犬夜叉様。」

そこには、金の髪を簡素にまとめた美しい少女が立っていた。

犬夜叉は、その少女の姿を認めた瞬間、素早く鉄碎牙に手を掛けようとした。が、それよりも先に、少女が立っている方向とは逆から、銀色の何か飛び出してきた。それは、犬夜叉を巻き込んで林の中を転がっていった。

「犬夜叉!?!」

驚いたような声を上げて、かごめがそれを追う。そうして、それを他の三人が追いかけた。

そうして、残った少女が困ったように呟いた。

「……. そちらから主様がいかれると言おうとしたんですが。」

「犬夜叉ああああああ!! ああ、鉄碎牙を殺生丸から返してもらったんだな!! それなら俺に言えばよかろうに。まったく、二人だけで鍛練なんて楽しそうな事をして。どうして、お前たちはいつつも俺に秘密にするんだか!」

「くっそがああああああ!!」

木々の先では、言っては悪いが非常に面白いことになっていた。

犬夜叉に飛びついたのは、殺生丸によく似た男であった。その男は、満面の笑みで犬夜叉を抱え込み、嬉々として犬夜叉に頬ずりをしている。犬夜叉はというと、男がびく

ともしていない所から見て内心嫌ではないのかもしれないと一瞬感じたが、引きはがそうとしている手に血管が浮いていることからそうではないようだった。

ただ、正直言えば、殺生丸と似ているというのにそこまでの落差と言えるのだろうか、犬夜叉の反応も相まって弥勒には大層面白い光景であった。

その、一方的で熱烈な感情を抱く、一瞬殺生丸に見える存在は非常に、何と言えぱいのか分からない感情を抱かせる。

「くそつたれがああああああ!!!」

どうしていいかわからない一行が、その光景を眺めている中、犬夜叉が必死の抵抗に風牙を投げ飛ばした。彼は、それをくるりと回って地面に降り立った。

その間に、犬夜叉は素早く立ち上がり、鉄碎牙に手を掛ける。

「……何の用だ、風牙。」

「何のようとは、寂しいことを言うなあ。兄が弟を可愛がるのに理由があるのかい。」

ゆらりと、立ち上がった風牙の浮かべる笑みは、優しい。

本当に愛しいものを見るかのような、柔らかで穏やかな笑みであるものだから。犬夜叉は、鉄碎牙から手を離した。

そうして、風牙は犬夜叉を追って来た彼の仲間にも目を向けた。

己に向けられた、温く穏やかな目に、かごめは体が固まった。それは、確かに温度が

あつて、恐れる必要でないものなのに。

息を吞んでしまった。

体の奥に沁みついた、何か。体を心底凍えさせる、何か。

そこで、風牙はかごめに視線を向けた。びくりと体を震わせた。

「うん、仲がいいのはいいことだね。」

柔らかな声音に、かごめの体が微かに震えた。それに気づいたのは弥勒くらいで、他の三人は目の前の男に目を奪われていた。

「……そんで？俺に何の用だ？」

「いや、今日はお前に用はないんだよ。」

その言葉に犬夜叉は虚を突かれたような顔をした。

いつだって、風牙は犬夜叉のことを一番に考えていた。だからこそ、今、ここにいるのだって自分が目的なのだと思うていたのだ。だからこそ、今、ここにいるけれど、いつもと違って、その眼は自分の斜め後ろに向けられていた。それに、何故

か、ひどく動揺してしまった。

風牙は、ひどく、ゆっくりとした足取りで自分の目的であつた存在に近づいた。

「……………やあ、珊瑚。」

慈悲の混じる、黄金の瞳。日にキラキラと輝く、銀の髪。まるで夢幻のような、美し

い顔立ち。

まるで、神様のような、優しい微笑みを浮かべた、バケモノであるはずのそれは。

「珊瑚。」

まるで、宝物のように、少女の名前を囁いた。

「……何の用だ。」

喉から絞り出す様に出た、その声は珊瑚の動揺を如実に示していた。けれど、そんなことお構いなしに、風牙は柔らかな声を出した。

「俺のことは知っているね？」

「有名だからね。それで、そんなあんたが、今更私に何の用だつていうんだ？」

その声にあるのは、どこか未練のような、どろどろとした苛立ちだった。

珊瑚の中にあるのは、強烈な後悔だった。

もしも、もしもの話。

目の前の存在との繋がりを切らなければ、親しきもので在り続けければ。

(……誰も、死なずには済んだのだろうか。)

ぐるりと、脳裏を巡るのは、血と泥にまみれた、惨めに死んでいく父と仲間と、そうして弟の姿だ。

もう、面影も無い故郷の村の姿だ。

無くして、亡くして。

己の手の中から、全てががらがらと抜け落ちていった。

全ては終わってしまった事だ。

時間は巻き戻らず、起こってしまった出来事は覆らない。

それでも、珊瑚の抱えた後悔は、ずっと彼女の胸にのしかかるのだ。

具体的な、それを防げたかもしれない手段があれば、なおのこと。

「苦しいか？」

頭の中をぐるぐると回るその感情に押しつぶされそうなとき、まるで蜜のように甘い

声が耳に滑り込んだ。

すると、珊瑚の頬に温かく、大きな手が滑るように添えられた。

それに促されるように、顔を上に向ければ、そこにはまるで、神様のように微笑む男がいた。

「悲しいなあ。」

そう言って、男の瞳から、ぽたりと一滴だけ、溢れ出た。

お前の父は、優秀だったなあ。

それと一緒にこぼれ落ちたのは、確かに珊瑚の知る、大事な誰かの記憶だった。

その、人外は、ぼつりぼつりと、彼女の故郷の者たちの話をまるで本の頁を捲るように呟いた。それは、珊瑚に言っているというよりも、自分の思い出のための言葉であるようだった。

その予想通り、風牙はその手を珊瑚に添えているというのに、その視線はまるで夢を見る様に宙を見ていた。

囁くような、昔話を紐解くような、優し気な声だった。

そうして、最後の最後に、言った。

お前の弟は、良い子だったな。

それに、珊瑚は、ああと微かに声を上げた。まるで、それに誘われるように珊瑚の瞳から涙がこぼれた。

ああ、だって、だって、仕方がないじゃないか。

例え、目の前のそれが人でなくとも、たとえ、それが、自分たちとは別たれた存在であつても。

それでも、目の前の存在だけが、珊瑚の愛しい人たちを、悼んでいたから。

ぼろぼろと、こぼれ落ちた涙が、やけに生暖かく頬を濡らした。

「珊瑚。」

もう一度、呼ばれた己の名前に顔を上げた。

そこにいた、それは、本当に優しく、本当に珊瑚のことを想っていてくれて。

(・・・神様)

そんな、言葉が頭をよぎった。

「俺の所においで。」

「あんたの、とこ？」

「・・・俺は、何をすることも赦されなかつた。何も、救えなかつた。かあいい、かあいい、あいつの故郷。あいつの、墓。あいつの、箱庭。」

だから、お前だけでも、守ってやろう。お前だけでも、何も、これ以上、傷つくことのないように。

「あいつのように、もう、喪うことのないように。」

俺の所に、おいで。守ってあげる。どんなものの、何よりも。

それもいいかもしれない。

そんな考えが頭をよぎった。

普段ならば、そんなことも絶対に考えなかつたはずだ。鼻で笑って、終わらせたはずだった。

けれど、その時は、思ってしまったのだ。

それもいいかもしれない。

だって、だって、疲れていたのだ。

何もかも失って、何もかもが、空っぽで。ただ、なんだか、ようやく流せた涙で疲れた思考がマヒしたかのような、そんな感覚で、優しいようにしか見せないそれに縋りつきたかった。何もかも、思考を放棄して、少しの間でいいから泥のように、安寧の中で眠りたかった。

(・・・優しそうだ。)

父のために、仲間のために、弟のために、その妖は泣いてくれた。

だから、きっと、それは優しいのだ。

怖かったと言った。

何も望まないそれを、先祖は怖かったと言った。

いいや、違うのだ。きっと、違うのだ。

それは、優しいからこそ、優しすぎるからこそ何も望まなかったのだ。

ぐずりと、涙を流した珊瑚が口を開こうとしたとき、その肩を押し戻す手があった。

「それは止めておきますよ。」

「法師、さま？」

「あなたは妖怪。彼女は、人。交わらぬ方がいいのですよ。」

断言するような声音に、風牙は少しだけ目を細める様な仕草をした後に、肩を竦めた。

「そうですね。」

納得したような声音に、珊瑚は少しだけ心細そうな顔で風牙を見上げた。彼は、珊瑚のことをじつと見た。

「お前は、どうしたい？」

何の気もなしに吐かれたその言葉に、珊瑚は領きそうになる。けれど、それよりも先に、かごめが口を開いた。

「どうしてですか？」

「何がだ？」

「だって、わざわざ、風牙さんの所に行かなくても。危険だっていうなら、他の、適当な村に行けばいいのに。」

どうして、そんなに珊瑚ちゃんに執着するの？

掠れた様な、その声音に風牙は心から不思議そうに言つてのけた。

「だって、かあいいだろう？」

まるで、幼子を愛でる親のような、甘い声音だった。

そうして、何故だろうか。

その、声音に、ぞわりと背筋に寒気が走った。

「弱いくせに、勝てないのに、立ち向かうのが本当にかあいいんだよ。そうだ、あれもそ

うだった。あれも、本当に、無力で、弱くて、そのくせ誰よりも嫌だと足掻いていたなあ。それがなあ、本当に、かあいかったんだよ。」

うつとりとした顔で、風牙はそつと珊瑚の頬にもう一度手を滑らせた。その、生暖かさに生唾を飲み込んだ。

見上げた先にいた、男は、本当に、美しく、柔らかに、微笑んで。

そうだ、本当に、優しそうな顔で笑っていたのに。

どうしてだろう、さつきまで、確かに優しいものだ、思っていたのに。

「お前も、本当にかあいいいから。だから、大丈夫だ。守ってやろう。苦しいことも、悲しいことも、全部俺に任せて、ずつと憂いも無く、生きればいい。何も心配しなくていい。」

お前が、幸福に生きることが、俺にとって何よりの礼なのだから。

その言葉に、珊瑚は、ようやくどうして風牙のことを恐ろしいと言ったのか、昔の退治屋たちが彼との縁を切ったのか。

ようやく、理解した。

その眼は、けして、珊瑚を人として見ていなかった。

その眼は、友人に向けるものでも、懐かしいものに向けるものでも、親しいものに向けるものでもなく。

己の庇護下の愛玩動物に向ける目であったからだ。

人でないものと、関わってはいけけない。理解できるなどと、思ってはいけけない。

それは、どんなに同じ姿、微笑み、仕草をしていても。

(それは、人ではないのだから。)

遠い昔に聞いた、そんな忠告が脳裏をよぎった。

「……よろしかったのですか？」

小さな、使いの言葉に風牙はうーん？と気の抜けた返事をした。

結局のところ、振られてしまった風牙はあつさりと引き下がった。それは、白縫は不思議な気持ちで見っていた。

風牙が、何故か、退治屋の村に執着しているのは知っていた。

風牙はよく人を助けていた。村を作り、守り、望むものを与えていた。

けれど、大抵の人間は、ある時から恐ろしくなるのだ。

何故、それは何も求めないのか。

神でさえ、貢物を望む。けれど、風牙は何も求めることはなかった。

風牙という在り方を知っているものからすれば、彼の手を振りほどいた人間を愚かと言うものはいた。

人に求める様なものが風牙にはなかったのだ。彼にとって、人々が楽しみに笑い、喜

びに踊り苦しみにのたうち回り、悲しみに暮れる様こそが何よりの対価であった。

それにこそ、彼は何よりも喜悅を見出していたからだ。

けれど、人はそれを理解しなかった、分からなかった。

白縫は、それを責めようとは思わない。

理解の出来ないものも、分からないものも、恐ろしいだろう。それを、白縫は知っている。

風牙は、己の手を振りほどいたそれらを責めず、いつも静かにそこを去った。

そうして、いつだって、どんな風に死んでいくかを見つめていた。

滅ぶのも、繁栄するのも、じっと見ていた。

けれど、何故か、退治屋たちの村にだけは執拗に、墓参りをしてまで関わっていた。

「まあ、別にいいさ。嫌がることをしないのが人と関わっていく基本だからな。」

のんびりとした声音に、白縫はそうかと頷いた。己の主がそう思っているなら、それでいいのだ。

そこで、風牙がふと思いついた様に口を開いた。

「……ああ、本当に、悲しいなあ。目の前で、皆殺されてしまったというのに、俺には何もしてやれなかった。」

その言葉通り、風牙は心の底から悲しそうな顔をしていた。今にも、涙を流しそうな

顔をしていたけれど、その瞳は乾ききっている。

それを見ながら、白縫はぼんやりと退治屋の里が滅んでいく様子を思い出していた。珊瑚たちは勘違いしていたが、別に白縫たちは退治屋の里が襲われることを知らなかったわけではない。

あそこまでの規模の里を滅ぼすとなれば、それ相応の噂にはなるのだ。

風牙がそれに反応したときは、てっきり助けにでもいくと思っていた。

けれど、それとは予想とは正反対に、風牙は文字通り、何もしなかった。

妖怪たちに蹂躪されていく里をただ眺めていた。

悲しいなあ、悲しいなあ、とそう言っただけ。

誰かが殺されるたびに、ああ、あれは誰の子でどんな奴なのかと囁きながらそれを眺めていた。

あまりにも悲しいと言うので、助けないのかと問うてみた。そうすると、風牙ははてりと首を傾げた。

だって、関わらないで頼まれているじゃないか？

心底不思議そうな顔で、そう言った。

もう二度と、関わらないでくれ。助けだっていらんから。

悲しいけれど、彼らはそう望んだから。それを叶えなくてはいけなйдらう？

これ以上、嫌われたくないから。

そう言つて、風牙は微笑んだ。悲しそうに、寂しそうに。

けれど、その眼には確かな喜びが浮かんでいた。

それを、やはり白縫は不思議に思つて問うてみた。

何が、楽しいんですか？

風牙は基本的に、怒るといふことを知らない。誰かを殺すといふこともない。不愉快なら不愉快といふし、嫌ならば拒絶する。

だからこそ、白縫は素直に知りたことを風牙に問う。

その問いに、風牙は笑つた。ぼれてしまったかと、そんないたずらつ子のよう。

「ああ、だつて。一緒に生きることが出来なかつた。だが、死を看取ることが出来たんだ。嬉しいじゃないか？」

そう言つて、恋人との逢瀬をするように微笑んだ。

その後ろで、誰かの悲鳴が響いていた、血の匂いがした、妖怪たちの笑い声があつた、ぐちゃぐちゃと何かを咀嚼するような音がした。

それでも、風牙はやはり、微笑んでその光景を眺めていた。

(……珊瑚様達は、きつと、主様が里の者を見殺しにしたことを知らないのでしょうか。)

白縫は何となく、珊瑚たちと風牙の食い違いに気づいてはいた。けれど、それを指摘することはない。

主の望みこそが、彼女の望みであるからだ。

(・・・今回も振られてしまったなあ。)

風牙の脳裏にあるのは、それだけだった。

最初に、彼女の先祖に会ったのは本当に偶然だった。人のみで、知識も、霊力も無く、理不尽に抗うために命を削る彼らに氣に入っていた。

ああ、そんなに必死になって、ああ、そんなに無意味なことをして。

どうして、そんなに必死になる。そんなにも、守りたいのか。

ああ、かあいいな。かあいいなあ。

(・・・犬夜叉を守る時の、彼女の様で。)

弱いのに、もつと弱い誰かを守ろうとするその様は、本当に懐かしくて。

だから、求めるものを与えた。欲しがるものなら幾らでも与えた。

けれど、いつだって、人間は何故か風牙の手を離す。

それが何故か、分からない。

(・・・ようやく、なんの仕掛けも無く泣けるようになったんだがなあ。もつと、人

というものを知らなくてはいけないのか。残念だなあ、あいつには振られてしまったから。せめて生き残った珊瑚のことは飼いたかったのに。

生きるものは、愛おしい。たくさんのことに振り回されて、それでもその身を捧げる在り方は本当に美しい。

けれど、人は何故か変わってしまう。

（変わらない様に、あいつのことを飼いたかったんだがなあ。十六夜のように、死なない様に、飼いたかったんだがなあ。）

だから、せめて珊瑚のことは確保しておきたかった。死なぬように、その不屈の在り方を変わらぬように、ずっと閉じ込めておきたかった。

けれど、それはどうやら無理であるらしい。

それでも別に風牙は構わないのだ。

変わりゆく人の在り方もまた、面白くてたまらないのだから。

ひとでなし

(……何だ?)

その日、巫女である桔梗は己が張った結界の中に、何かが入ってきたことを察した。それは、何の抵抗も無く、するりと結界の中に入り込んできた。

桔梗はそれに矢を番え、歩き出した。

己の結界を気にすることも無く入り込んできたもの。

(……力の強いものが入り込んできたな。)

桔梗は小さくため息を吐いた。

道を歩きながら、桔梗は己の頬に冷や汗が垂れることを理解した。

最初は、強く在ろうとも己ならば対処できるだろうと桔梗は考えていた。

が、それに近づけば近づくほどにびりびりと、威圧感があった。

桔梗の守る村近くの森は、珍しいほどに静まり返っている。動物の気配も無く、まるで己の知らない場所にいるような、そんな不安感に襲われる。

一瞬だけ、近づかない方が賢明ではないかと考えた。下手な刺激をしない方がいいの

ではないかと。

けれど、それもすぐに霧散した。

それで、もしも、その妖が村に何か被害があれば。

桔梗はその考えを振り払うように頭を振った。

いきついたのは、森の中にある池だ。桔梗は警戒のために、草木の間から様子を伺っ

た。

(・・・あれ、は。)

そこには、池を眺める形で腰を下ろした人型がいた。それは、小さな杯を片手に、ひょうたんから何かを注いでは飲み干している。

桔梗はゆっくりと矢を放つ準備をする。

「なあ、おい。そんなところでこそこそせずつこつちに来ればいいだろう?」

それに桔梗の手が止まった。

顔立ちは、はつきりと見えなかった。美しい、銀糸のような髪が風に弄られて揺れている。

そうして、桔梗でさえも理解できるほど上等そうな着物を着ている。

その程度しかわからなかった。

桔梗の背に、嫌な汗が伝った。

桔梗はいるのは風下であり、それに加えて妖の死角にいるはずだ。だというのに、それはあっさりとして桔梗の存在を看破して見せた。

桔梗は下手に隠れても無駄かと考え直し、物陰から身をさらした。

「幾分か、力のあるものと見受けうるが。この地に何ようだ？」

問答無用に矢を打たなかったのは、警戒のためだった。

妖怪の言動からして、ある程度知性を持っているのは察せられた。そう言った存在は、ある程度桔梗のような祓う力を持つものへの対抗手段のようなものを心得ている。

まずは、そういったものがどういったことを目的としているのかを探ろうとしたのだ。

桔梗の言葉に、その妖はゆっくりと杯を置くと、桔梗の方に振り返った。

美しい、妖だと、桔梗は咄嗟に思った。

振り返ったことで曝された顔立ちは精悍さを感じさせる。銀の髪に、金の瞳を持つそれはまるで月光のように嫋やかに微笑んでいた。

美しいと、そう思うと同時に桔梗は男に妙な既視感をいるものを抱いた。どこかで、あったことあるような、そんな感覚を。

「ああ、そう警戒するな。別段危害を加える気などないんだ。俺はただお前さんに用があるんだよ、桔梗。」

妖の声に耳を傾けながら、桔梗はその銀の髪を見つめて何に既視感を抱いているのか理解した。

「弟が、犬夜叉がだいぶ世話になってしていると聞いて来たんだ。」

そう言つて、柔らかに微笑んだ顔は、犬夜叉にどこか似ていた。

「そんな人を殺しそうな顔をするな。別にお礼参りに来たわけじゃないんだよ。」

「なら、何をしに来た。」

「弟が粗相をすれば、兄が詫びに来るものだろう?」

その言葉で桔梗は目の前の存在が犬夜叉の身内であることを理解した。

「人の様なことを言うな。貴様も半妖なのか?」

「はっはっは!長く生きているが半妖などと言われたのは初めてだな。」

それに桔梗は思わず警戒の体勢に入る。大抵の妖怪は、半妖などと言われれば怒り狂う。だが、目の前のそれからは怒りなど見えず心底愉快だというように笑っていた。それを、桔梗は不可思議な気分で見つめた。

妖は散々笑つた後に、かいた胡坐の上で頬杖をついてのんびりと喋りはじめた。

「残念ながら、俺はあれとは半分しか血は繋がっておらんのだ。父親が同じでね。少し前まで、俺の元にいたんだが独り立ちをしてしまつてなあ。まあ、いい経験かつて

放っておいたんだが。どうもこの頃、お前さんに面倒をかけてるようだったんでな。一言、詫びはいるかと思っただが。」

このあたりの奴に、お前はこころ辺を通るって聞いて待つてたんだよ。にこにここと、まるで幼子のように笑う妖を前に桔梗は注意深く男を見た。

犬夜叉と名前を出しても信用する気にはなれなかった。

ただ、確かに目の前の存在と似通った雰囲気があった。毒気を抜かれてしまったのは事実だった。

「あれにつけていた目がな、お前さんにこの頃よくよく絡んでるって報告してきてな。なに、有名な巫女の桔梗だつていう話じゃないか。だから、まあ。お前さんへの詫びと、あれへの警告がてらな？」

そうそう、俺は風牙つてんだ。俺だけ名を知っているのは不公平だろう。

風牙はそう言って、くすくすと笑いながら盃をあおった。そうして、その妖はどこからか大量の甘味が盛られた皿やら、美しい反物などを取り出した。

その行為の意味が分からない桔梗に、風牙は微笑んだ。

「ほれ、持つていけ。」

「……どういう意味だ？」

桔梗の言葉に風牙は首を傾げた。

そうして、反物に手を続べられた。

「ふむ、趣味ではなかったか？」

「それがお前の言う詫びということか？」

風牙の反応に、桔梗がそう言えば男はくすりと笑った。まるでどうしようもない子どもを見るような目だった。

「そんなに怯えるな。」

かあいいなあ。

その言動に、桔梗の手が矢へと延びる。それに風牙はお道化る様に肩を竦めると、ゆるゆる笑って立ち上がる。

「まあ、今日はここで暇するか。そこにある土産は好きにするといい。」

そう言つて、風牙は立ち上がり森の中へと消えていく。桔梗は咄嗟にその背へと矢を向けた。

けれど、その矢が放たれることはなかった。

下ろした弓を見つめて、桔梗は息を吐いた。

手を出してはいけないという、己の勘に従ったことが間違いではなかったのかを疑問に思いながら。

「……なあ。」

桔梗は己の前にいる犬夜叉を不思議そうに見た。

犬夜叉は、四魂の玉を狙っているため桔梗に死なない程度とはいえ攻撃は仕掛けて来る。それに加えて、半妖である身のために巫女の桔梗を警戒して寄って来ることなど滅多にない。

けれど、その日は何故か、彼は桔梗の側に寄って来た。

「なんだ？」

今度は何を企んでいるのか桔梗はその少年を見つめた。犬夜叉はどこか思いつめた様な顔で、桔梗を見つめた。

その悪戯が見つかったような顔に、桔梗はもういちど、どうしたと問いかけた。

「……兄貴に会ったのか？」

桔梗の体が微かに震えた。思い浮かべたのは、あのどこか陽気そうな妖の事だった。妙な動揺をしてしまったのは、犬夜叉の顔に浮かんだ、似合わない表情のせいだろうか。

その、顔に浮かんだ感情は、なんと表現すればいいのだろうか。

恐怖、というわけではない。親しみというわけでもない。かといって、疎ましいだとか憎いというものではない。

それは、桔梗もよく知らない感情であった。

「風牙、という妖が訪ねてきたのは確かだ。」

「そうか。」

犬夜叉はそれだけ言うのと、まるで何か遠い場所を見る様に、明日の方へと視線を向けた。それが、ひどくらしくなかった。

まるで、生き疲れたような目で、いつもの生命に満ち溢れた目はまるで枯れ落ちる寸前の花のようだった。

「……なんか、俺に伝言でもあるか?」

「い、いや。特別には、ないが。」

そのらしくなさに動揺していると、犬夜叉は少しだけ顔を伏せて、小さくそうかと頷いた。

犬夜叉はそれに満足したのか、くるりと桔梗に背を向けてしまう。

「……桔梗、たぶん、言っても無駄かもしれないけど一応言っとくな。」

あいつにはあんまり近づくなよ。

簡潔な言葉だった。それに桔梗は咄嗟に声を上げた。

「何故だ?それほどまでの妖怪のなのか?」

桔梗の言葉に、犬夜叉は自嘲気味に笑みを浮かべた。

「……あいつほど、何を憎みも、蔑みもしてねえものはいないだろうさ。ただな。」

犬夜叉は深呼吸でもするように言葉を切った。

「憎しみも、蔑みも、それと同時に怒りがなくなつて何も傷付けねえわけじゃねえだろうや。」

桔梗はそれにどういう意味だと問いたかつた。けれど、そのまるで今にも消えてしまふような、何かを押し殺したような表情に思わず黙り込んでしまふ。

「近づかねえほうがいい。俺だつて、その理由を上手く言えねえけど。あいつのことが、嫌いってわけでもねえがな。きつと、近づきさえしなければまだ。」

犬夜叉はそう言つた後に首を振り、また歩き出した。そうして、振り返しもせず一言だけ言い放つた。

「……もしも、あいつに会つたら、俺は絶対に会わねえつて言つていてくれ。」

唐突に託されたそれに、桔梗は口を開こうとする。けれど、犬夜叉の何か奥底に沈む様な雰囲気黙り込むことしか出来なかつた。

犬夜叉は、言つては何だが変わつた少年だつた。

半分は人間であると言つても、半分は妖怪なのだ。ならば、少々の常識と言えるものの欠落はあるだろうと思つていたのだが。

その少年は不思議と人らしかつた。

何かをされれば礼を言うし、乱暴な口を聞けども弱者に力を振るったことも無い。もちろん、四魂の玉を狙って桔梗を襲うことはあつても決して死ぬような力を振るつたことはない。

犬夜叉から両親のこと等を聞いたことはなかったが、それでもその生き方と言えるものの中に人よりのものたちだったのだと考えていた。

「やあ、桔梗。何を考え込んでいる？」

桔梗はそれに胡乱な目で上を見上げた。さやさやと、この葉擦れの音が聞こえて来た中、そこには、木の枝に寝そべるものがいた。

「またお前か。」

「まあ、そんな嫌そうな顔をするな。あの子の様子を教えてほしいんだよ。」

くすくすと風牙はまるで少女のように軽やかな笑い声をあげた。

それに桔梗は、はあとため息を吐いた。

桔梗は結界の見回りのために歩き回った後、休むために木の根元に腰かけていた。そこに見下げる形で風牙がいたのだ。

桔梗はこの頃、見慣れた顔になったその妖にため息を吐きたくなつた。

風牙は何故かまた桔梗へと会いにやって来た。というよりも、犬夜叉から託された伝言を目当てにやって来たと言つた方が正しい。

彼は、その伝言を聞くと薄い微笑みを浮かべたまま、一度だけ頷いた。

それに満足して、さっさと去るかと思えば風牙は次の瞬間にっこりと微笑んだ。

「まあ、お前さんにはまた会いに来るよ。」

その時の桔梗は、今までにないような間抜けな顔をしていたのは風牙の話であった。

それから、その台詞の通り風牙はふらりと桔梗の元にやって来た。彼は、よくよく犬夜叉の話を聞きたがった。

曰く、本人から聞けないのならそれを知っている存在から聞けばいいと。

確かに、その言葉の通り犬夜叉と接触しているのなんて桔梗ぐらいだ。ならば、確かに彼女以外に少年の様子を聞くことは出来ない。

桔梗もまた最初は拒絶していたのだ。妖とあまり近い状態であることは好ましいことではないと桔梗も分かっていた。

けれど、それは叶わないことだった。

風牙という妖は、それはしつこかった。

さすがに村に顔を出すことはなかったが、人でないものを祓うために森深く入る桔梗にしつこく付きまとった。

追い払おうと桔梗も努力していたものの、最終的に破魔の矢さえも防ぐ風牙に対抗できすることも出来ず、とうとう根負けした。

基本的に風牙は問いかけたことにさえ応えれば満足して帰っていく。それならば、素直に答えた方がずっとましであるだろう。

「よしよし、良い子の桔梗には褒美をやろう。」

「……いらん。」

「そういうな、貴重な薬草だ。」

そう言つて、自分の膝に落ちて来た薬草に桔梗は目を滑らせた。そこにあるのは、桔梗がちょうど欲しがっていた高い効能を持つ薬草だ。

それからはよこしまなものは感じなかった。

上を見上げれば、まるで気の良い人のようににこにここと笑う妖がいた。

風牙は、時折、礼だと言つて贈り物をしてきた。

それは、桔梗が丁度欲しいと思つている薬や情報であつた。

最初は疑つていたものの、それが確かなものであると分かれば妖がもたらしたものと分かつていても、利用してしまふ。それが、貴重であり、村がさほど裕福でないとなればなおさらのことだった。

「いやあ、にしても犬夜叉がなあ。」

桔梗に聞いた犬夜叉の話の思い出しているのか、風牙は笑みを深めてくすくすと笑つた。桔梗は、それにちらりと目だけを動かした。

それに、桔梗はなんだか、酷く不思議な気分になる。

(……まるで人のように笑う妖だ。)

その妖は、良く笑っていた。

それこそ、いつだってにこにここと気の良い人間のように笑っていた。だからといって、桔梗としてその笑みが心からの笑みであるとは思っていなかった。

人をだますために、そう言った親しみやすい雰囲気を作るものは少なくない。

けれど、その妖は本当に、嬉しそうに笑うのだ。

犬夜叉との他愛も無い会話にも、村でのつまらぬ日常にも、男は心底楽しそうに笑うのだ。

だからこそ、桔梗は、何となしに察していたのだ。

その妖には、すべからくとは言われないが、確かな慈しみを持っているのだと。

「あの子は元気になっているんだな。」

良いことだ。

そう笑う妖を見ながら、桔梗はふと肩の力を抜いた。

その妖の側はひどく、気楽だった。

桔梗という少女は、その力を自覚したときから常に心を凪いでいた。そうしなければ

ば、人でないものに容易く食われていただろう。

それ故に、少女は、ひたすらに心に鍵をかけたのだ。

揺るがぬように、潰れぬように、魅入られぬように、喰らわれぬように。

どんなものにも、心を明け渡さぬように。

いつかに、犬夜叉にも言ったように桔梗は人である。けれど、彼女に赦された在り方は人ではなかった。

「……私は、人なのだろうか。」

そんなことを、ぼつりと呟いた。

そんな、弱気のようなものが漏れ出たのはどうしてだろうか。

ただ、その妖は、桔梗が初めて会った、勝てないと察せられる存在であったためだろうか。

それが、やろうと思えば己のことなど殺せてしまうという、ある種の諦めから来る怠惰さが桔梗にある意味素直にさせていた。

きつと、その妖は変わらないだろう。

どれだけ、桔梗が、惨めに愚かに哀れに、落ちぶれ、敗北したとして、それは変わることもなく微笑むのだろう。それは、確かに安堵であった。

変わることはないもの。自分を意識することのないもの。

それは、確かに安堵であった。

風牙の前では、桔梗という少女は何者でもなくなる。

ただ、ただ、生々しいまでに剥き出しになった人に成り下がる。

その妖の前では、桔梗はどうしようもなく人であった。

だって、その妖は心の底から人というものを好いていたためだった。そうして、それが力を振るおうと思えば、幾らでも可能であったせいだ。

自分が無力であるという事実は、桔梗の枷を不思議と取っ払ってしまった。その妖の前では、桔梗は守護者から弱者へと成り下がる。その気楽さたるや！

ふふと、桔梗は笑ってしまう。

そんな疲れ切った桔梗の言葉に、やはり木の葉の間からくすくすと少女のような笑い声がした。

「何を笑う。」

「ううん？ いやなに。おかしなことを言うなと思つてな。」

己の在り方を迷う時点で、お前さんは人でしかないだろうになあ。

くすくすと、男の笑い声がした。

「妖や神は、歩む方向を迷うことがあつても歩み方を忘れることはないのだぞ？ 歩み方にも悩むのは人ぐらいだ。そんなことで悩むなんて、人とは本当に面白いなあ。」

くすくすと、本当に可笑しそうに人でないものは笑っていた。

それは、別段慰めの言葉ではない。ただ、おかしなことを言うものだという呆れを含んだものだだった。

それに、桔梗は苦笑した。

それは、人ではなかった。人ではないがゆえに、桔梗にとってはどうなっても構わなかった。

だからこそ、彼の前ではその女は自由であった。

世界は、桔梗が驚くほどに平和であった。

犬夜叉という、彼女にとっての特別である少年によって自分は弱くなるのだと思っていた。

そのために結界の力が弱くなることや霊力は弱体化などを考えていたが村は平和そのものだ。もしも、そんなことがあれば今まで散々妖怪たちの恨みを買って来た桔梗が平和に過ごせるはずもない。

桔梗は、柄にもなく安堵していた。当たり前のように過ぎていく日々、何の憂いも抱いていなかった。

「隣の村が妖怪にやられたそうです。」

「……またか。」

違和感を持ったのは、桔梗の村の周りで妖怪の出没が増えたことだった。もちろん、桔梗がいるためにそこであぶれた妖怪たちが周りの村に出ることはなかったわけではない。

そのために村の者たちや生き残った者たちはさほどの疑問を持っていなかった。けれどだ、あまりにも多すぎる。

負傷者の手当てをしながらそんなことを持っていた桔梗は抱えた違和感に悩んでいた。

そうして、ある時、力の強い妖怪を追った時があった。

一つの村を襲おうとしたそれは、偶然に通じかかった桔梗によって追撃された。そうして、逃げ出した妖怪を追った桔梗に、その異形は憎悪を叩きつけるように叫んだ。

「人間の巫女が、妖と手を組んだか!!!」

「な!?!」

「犬どもを手なずけたか!」

自分に襲い掛かる妖怪に、桔梗は咄嗟に破魔の弓を放つ。

崩れ落ちていく妖怪に、桔梗は先ほどの言葉について考えていた。

「犬ども、手なずけた、妖怪……」

それに、ようやく全ての違和感の意味を理解した気がした。

「……どうした、桔梗。今日はやけにしよぼくれているなあ。」

穏やかな声が耳朶を撫る。人にとっては安心感さえ感じる様な声だ。

桔梗は、木の枝に腰かけゆるゆると笑う銀髪の妖怪を見た。

「さあ、今日はどんな話を聞かせてくれる？ ああ、そうだ。今度はどんな褒美がいいか？」

幼子に褒美をやるような声で、その妖は桔梗に語り掛ける。桔梗は、押し殺したような表情で風牙を見た

「……お前が。」

「うん？」

「お前が、手下を使って、私の村から妖を追っ払っていたのか？」

押し殺した、震えるような声で桔梗は言った。

それに風牙は心の底から不思議そうな顔で、コテリと首を傾げた。

「ああ、そうだが？」

妖怪は、心の底から不思議そうに無邪気に笑った。

桔梗とは、誰にも口には出していないが贅なのである。

美しく、高潔で、気高い巫女。

そんな彼女を貶めたいと、穢したいと、そうして倒すことで名を上げたいという妖は多い。彼女を襲う妖怪がいるために、桔梗へと被害が集中していた。

そうして、彼女によって張られた結界も又被害を減らす理由であった。

四魂の玉を持ったことで妖の数は多くなった。

結界によって追い込み、桔梗が叩く。

そんな中、桔梗の村を一方的に守り続ければどうなるか。

倒すわけでもなく、追い払うだけではどうなるか。

「貴様なら分かっていたはずだ！」

「ああ。そうだな、お前という餌で釣り、お前自身が撃退していたおかげでこの辺は安全だったからなあ。だが、それをしないせいでこのあたりの村がだいぶ被害を受けてなあ。」

可愛そうに。

そう言つて、それは笑つた。桔梗はそれに固まる。

言っていることと、仕草と、その思考のちぐはぐさに固まる。

「何故、そう思つていながら、何故だ!？」

お前は人が好きなのだろう!?

その妖は良く笑っていた。笑いながら、人を愛でていた。

桔梗の村にふらりと現れては、村の子どもと遊ぶことさえあった。

村人たちも、この頃それに慣れてしまっていた。

それほどまでに、その妖は理知的で、そうして穏やかであった。

困っている者がいれば手を貸し、悲しむものがいれば慰め、苦しんでいるものに慈しみを与えた。

それに、一部の者たちは神仏の様だとさえ言っていた。

その妖は、人をかあいと言って愛でていた。

立ち上がる様が愛おしいと、助け合う様がいじらしいと、子を慈しむさまが恋しいと、妖は笑っていた。

それを、桔梗は信じていた。だって、そう言って笑う妖の笑みは真実だった。それほどまでに、その妖は優しくかった。

犬夜叉の様子は気になりはしたが、血縁関係のある相手というのは複雑なものであることはあるかもしれない。

何よりも、その妖は犬夜叉を育てたのだという。それは、確かに信頼できる事実だ。

「なら、どうして追い払うだけにした!? 貴様ならば、殺すことくらい出来ただろう!」

「仕方がないだろう？ そんなことをして、この村の警備が手薄になつてしまふだろう？ お前さんの結界の力が弱くなつてゐるんだから。」

最後の台詞に桔梗は固まる。それに、風牙は気にした風も無く、のんびりと話を続けた。

「結界とは、もちろん作る手順や手立ても重要ではあるが。それと同時に、張つた本人の状態も必要だ。お前さん、この頃弱くなつてしまつたからなあ。」

風牙は微笑ましいというように微笑んで、ゆつたりと頬杖をついた。

お前は、犬夜叉に恋をしたんだねえ。

まるで幼子の頭を撫でる様な、そんな声であつた。

桔梗は、それに改めて己の今を自覚する。

何故なら、桔梗は弱くてはいけないのだから。人を守護する者。私情無く、人でない者たちから人間を守る者。

「この村を守るのに手間を割いていたからな。あまり、手を増やすと妖怪たちに俺の存在がばれてもお前さんの立場もあるだろう？ まあ、他の村に被害が出てしまつたが仕方がないだろう。」

「仕方がないだとい！何を持つてそんなことを言う！何故、私に結界が弱まっているという事実を言わなかつた！」

心を殺すことぐらいには慣れてる。それぐらい、成して見せた。その思いに鍵をかけ、胸にしまっておくことぐらい、きつと。

「何故、そのぐらいのことでお前が恋心を捨てなくてはいけない。」

ああ、なんて優しい声だろう。

桔梗は導かれるように、風牙を見た。風牙は、まるで御仏のような優しい笑みを浮かべて、桔梗の目の前に立っていた。

そうして、ゆるりとその、美しい少女の顔に手を添えた。

「ああ。人の子よ、美しき女よ。力あるゆえに、弱さを赦されず、高潔さを求められ、恋を禁じた、愛らしき子よ。どうして、お前が人の子たちの犠牲にならねばならぬ？」

力を持ったがゆえに、何ゆえそれを他のために使わねばならん。お前は、優しき子だ、いじらしき子だ。

頑なに、人を守り続けたお前がどうして、その感情を捨てねばならん。どうして、お前が不幸にならねばならん。

「誰かの幸福の上で笑い続けた者たちが、少しだけ代価を支払っただけのことだ。お前が苦しむことはない。良くあることだろう、人が死ぬなんてこと。」

その妖は、笑う、わらう。

本当に、優しげに穏やかに、笑って。

桔梗は勢いよく、風牙を振り払った。揺らぎもしない風牙に、桔梗はギリギリと歯を噛みしめた後に叫んだ。

「よくあることなどという言葉で赦されるはずがない！ 貴様は、貴様は、どうしてそんなことが言える!? 貴様とて、子を、弱きものを慈しみ、柔らに抱いていただろうか？ なのに、どうして、どうして、そんな、そんなふうにあつきりと……」

「そうだなあ、お前の村の者たちも、村々の子らもかあいいのだがなあ。俺はなあ。」
お前や犬夜叉のことが一方が一等にかあいいのだよ。だから、お前たちが幸福であることが何よりも優先すべきことなのだよ。

それは、残酷なほどに素直な優先順位の話であった。

その妖にとって、犬夜叉や桔梗のほうが大事である。その事實は少しだっておかしいことはない。

子を優先せぬ親はおらず、下の子を守らぬ兄弟はおらず。

それは別段真つ当なことだ。

ああ、けれど、けれど。

(これは違う。)

その感覚を上手く言い表すことは出来ずとも、その男が浮かべた慈しみの表情は狂っていた。

その、慈愛に満ちているはずの笑みからこぼれる、悍ましいなにかよ!

「子が死んだのだぞ、幼い子供たちが、死んだのだ! お前は、言っていたじゃないか。子が笑っていることが何よりもだ」と。

そこで桔梗は、彼が反応するであろう唯一の話題を思い浮かんだ。彼女は、それに飛びつく様に叫んだ。

桔梗は、風牙に理解を求めてしまった。

その妖を、理解の出来ない何かだと斬り捨てたくはなかった。

そうするには、風牙はあまりにも優しくかった、穏やかだった、美しかった、慈しみを持っていた。

その妖は、あんまりにも、桔梗にとって柔らかかった。

それを、桔梗は後悔する。どうして、あの時、ただ切り捨てるだけではいけなかったのか。踏みこんでしまったのか、ずっと、後悔する。

「お前だって、犬夜叉に何かあれば苦しいだろう!?子を失った親の気持ちも、親を失った子の気持ちも、分かるはずだ!」

「親が生き残っているならばまた産めばいいだろう？」

その言葉の意味が、一瞬分からなかった。固まった桔梗に、風牙は不思議そうに呟いた。

「子が恋しければ産めばいい。だが、そうだな。確かに庇護者を失った子は哀れではあるがなあ。そういった子なら俺の所に連れて来るといい。俺が世話をしよう。」

「産んだ子に、変わり等、あるわけ……」

思わず漏れ出たそれに風牙はやはり不思議そうに首を傾げた。そうして、何かを思いついた様に頷いた。

「そうだな。確かに。代わりのない存在というものがあるな。そうか、よし、ならば。」

桔梗はその台詞に、安堵を思った。今まで、散々、目の前の存在と自分が違うものだと理解していたというのに。

それでもなお、桔梗は幻想を想いたかった。

愛しい、半妖のあの子の兄がそんな悍ましいものだと思いたくはなかった。

「その子を失った親のことは、早めに殺してやろう。」

「え？」

茫然とした顔で、桔梗は風牙を見つめた。それに、風牙は名案を思い付いたかのよう

に頷いた。

「人は臆病だからなあ。代わりがないほどに愛しいものを失つてなお、後が追えないの
だらうなあ。それは哀れだなあ。よしよし、よいよい。俺が、痛みのないように殺して
やろう。子とて、てて様もかか様もおらんのは寂しかろうになあ。共に在るのが一番良
いだらう、よいよい、それが一番に、一等に良い。」

「そんなの、違う……！」

「何故だ、代わりがないのだろ？ならば、どうして生きていられる？どうして、その喪失
に耐えられる？ならば、後おうだらう？」

俺ならば、そうするのだからなあ？

ああ、その、慈悲深き微笑みよ、その慈しみに満ちた声音よ！

それは、確かに優しくかった、慈悲深かった。

けれど、結局それは人ではなかった。

それつきり、桔梗は風牙に会うことはなかった。

桔梗は、初めて妖怪に恐怖を覚えた。彼女は防衛反応のように、風牙を攻撃した。

それが彼女からの本気の拒絶であると悟ったのか、二度と彼女の前に姿を現すことは
なかった。

そのことを、犬夜叉には言えなかった。彼女に取って、悪い夢のようなものだと思
いたかったのだ。

けれど、いつだって彼女の頭の中に、その美しい妖のことがあった。

幼い、素直ではない半妖の少年を見るたびに思うのだ。

ああ、これもまた、あれと同じ血を引いているのだと。

それは、まるで小さなシミのように彼女に付きまとい続けた。

「……桔梗の墓が暴かれたそうです。」

「ふうん？」

白縫の言葉に、盃を傾け酒を飲んでいた風牙は返事をした。

「どうされますか。骨を奪ったのは、裏陶という鬼術を使う鬼女ですが。骨を使い、何を企んでいるのか。」

「放っておけ。どうせ、その骨から桔梗を蘇生させようとしているのだろう。」

「蘇生、ですか？」

風牙がいたのは、とある泉のほとり。彼は、そこで酒をあおりながら何かを考えているようだった。

白縫には、それが何かは分からない。けれど、彼女はそんなことはどうでもいいのだ。

彼女にとって己が主の目的が達成されることは重要である。例えば、自分がどうなるうとも。

ただ、自分が主の考えを察せられず、手間をかけてしまうことが申し訳なくて仕方なかった。

「……白縫、おいで。」

「はい。」

沈んだ顔をしていた従者を、風牙は柔らかな声で呼んだ。それに、白縫は不思議そうな顔で主に寄る。彼は、にっこりと微笑んで白縫を抱き上げ、己の膝に抱き上げた。

「よしよし、よく知らせてくれたな。お前は良い子だなあ。」

そうやって、己の頭の上に乗せられた暖かな手と、そうして優しい言葉。

それだけで、白縫は体を震わせた。

それだけで、報われた。

（……あなたのためならば、どのようなことでも。）

ひどく昔、何もかもから打ち捨てられた己を救った主に、彼女は深く、深く、そう思った。

（……きな臭いんだよなあ。）

風牙はさらさらとした少女の姿をしたその髪を梳りながら疑念を思っていた。

何故、こんなにも都合のいいことが起こるのか。

風牙にとって、犬夜叉が幸福であることは何よりも大事である。

けれど、今の現状は都合が良すぎる。

犬夜叉が封印されたことに關してはいいだろう。

だが、何故、そんな犬夜叉の元に淡い恋を覚えその果てに殺し合った女の生まれ変わりがやって来た？ その果てに四魂の玉を集める旅に出、共に過ごしている？ そうして、どうして失われた恋を取り戻す様にひかれあう？

(あまりにも、都合がいいのか。)

きな臭さを感じつつ、その理由でありそうな候補をいくつか頭に思い浮かべる。

白縫の毛並みはいいなあと思う。考え事をするときに弄るには最適だ。その、幼子特有の温さも良いものだ。

(・・・まあ、それは追々調べるとして裏陶のことだ。どうせ、噂に上がってる四魂の玉を見つげるために桔梗の人形が欲しいだけだろう。)

だが、すでに桔梗は生まれ変わってしまったっている。ならば、術を失敗するだろう。けれど、だ。もしも、もしも、それは成功すれば？

(いや、成功することはないだろうなあ。高々、そこらの鬼女程度の術じゃあかごめちゃんには負ける。もしも、成功したとしても、中途半端な結果になるだけだろうし。)

それはそれでいい。

半端に蘇生されたのなら、今度こそ役に立つてもらおう。

(結局、犬夜叉のことを信用できずに殺し合うなんてつまらないことをして。ああ、だが、かごめちゃんなら大丈夫だろう。けれど、恋にはやはり試練がいるな。試練こそ、恋を強くする。)

風牙はゆるゆると笑って、これからのことを考えた。

芽吹くことなく枯れ落ちて

「犬夜叉、ようし、ほうれこっちにおいで。」

柔らかな声がある。耳朶を擦る、低く、頼もしく。けれど、どんな声よりも甘やかで穏やかな、安心する声音。

犬夜叉という幼子にとつて、父を連想するのはそんな甘すぎる声音であった。

犬夜叉はとてとと新しくやって来た屋敷を駈ける。犬夜叉が例え、廊下を走つても、庭を駆けまわつても嫌な顔をする者はいないし、咎めを発するものはいない。嫌な目をするものだつていない。

犬夜叉はそれが嬉しかった。始めて、そこにいることを赦されている気がした。

「あーにーうーえー!!」

大きな声で、犬夜叉は探している存在に呼びかける。それを聞いていた、屋敷の使用人の一人はやけどでぐちゃぐちゃになった顔をそつと綻ばせた。

父の墓であるらしい、不可思議な場所に参つて数日が経つた日の事だった。

犬夜叉はその時、なんだろうか、ふわふわとまるで自分が浮いている様な感覚をずつと持っていた。

全てが夢のようだった。

自分に父がいたという事実も、大人びた兄がいたという事実にも、彼はまるで夢を見ているかのような心地にさせた。

何よりも、最後に別れるその瞬間、囁くような声で告げられたのだ。

「待っていなさい。必ず、迎えに行こう。」

そう言つて、兄はまるで御仏の様に美しい微笑みを浮かべていた。

その笑みを想うと、犬夜叉の胸はざわざわと騒ぎ出してしまふのだ。

その幼子は、兄の微笑みを思い浮かべ、その日もぼんやりと宙を眺めていた。

その日の夜、彼はいつも通り母と共に寢床についていた。そこに、かたんと、御簾を動かすような音と、そうして彼にとつてずっと恋しいと思つていた、匂い。

犬夜叉はそれに飛び起き、入つてきた人物を確認もせずに抱き付いた。

「兄上！」

「おうおう、犬夜叉。俺だとよくわかつたね。」

「兄上の匂いがしました！」

「なるほど、犬夜叉はすごいなあ。」

抱き付いた先で深呼吸をすれば、胸いっぱいに大好きな匂いが広がった。母とは全く違う大きく、そうして全体的に硬い体は自分が知る何もかもと違っていた。犬夜叉が飛びついてても揺るぎもしない男は、まさしく頼もしかった。自分に飛びついて来た犬夜叉に、男は、風牙はでれでれと相貌を崩しながら幼子を抱き上げた。

抱き上げられれば、兄の頼もしさというものが更に理解でき、犬夜叉はにこにこ風牙の首にかじりついた。

その時のことを、犬夜叉はひどく、ひどく後悔している。

あの時、もしも、兄がどんな存在であるのか分かっていれば。

あの時、もしも、迎えに来たのがいつそのこと殺生丸であれば。

あの時、もしも、誰も迎えに来なければ。

あの時、もしも、母がどんな顔をしていたのかを理解していれば。

あんなことにはならなかったのだろうか。

連れていかれた屋敷は、ひどく不思議な場所だった。まずは、大きい。犬夜叉が住んでいた屋敷の数倍はあり、間違えれば遭難してしまいそうなほどだった。

兄曰く、空間を弄っているうちに馬鹿みたいに大きくなってしまったらしいが幼子にはよく理解の出来ないことだった。けれど、兄がすごいことだけは理解できた。

次に不思議なのは、屋敷の庭の季節が自由に変わることだった。

兄に頼めば、春にでも、夏にでも、秋にでも、冬にでも変わっていくのだ。

そうして、最後に、屋敷に仕えている存在というのが酷くへんてこであった。

皆が皆、というわけではないのだがほとんどの存在が何かしらの被り物をしていたのだ。

もちろん、していないものもいる。

けれど、大半のものがお面であったり、布で顔を覆っている。面や布は個々人で染めていたり、絵を描いてあったりして見ている分には面白い。

面を被っているものと被っていないものの違いというものは犬夜叉にも分かっている。ただ、何故かということを問う犬夜叉に兄は柔らかに言ったのだ。

「付きたいと本人が望んでいる。それに、隠したいと思うものを無理に暴くものではないよ。」

そう言つて、兄はニコニコと笑っている。犬夜叉は兄の言葉に何となく納得した。兄がそう言うのだから、そんなものなのだろうと。

何よりも屋敷の人間や妖怪は、本当に優しかったのだ。

以前の様に犬夜叉が話しかけても厭うこともしない。声に含ませた嫌悪も、恐ろしさから来る拒絶も、そこにはなかった。

面を顔につけていても、その声は弾んでいて、纏う空気も和やかだった。

何よりも犬夜叉にとつて嬉しかったのは、同い年ほどの遊び相手が幾人もいたことだった。

蹴鞠も、かくれんぼだって、そうして鬼ごっこだってやった。

ただ、残念なのは彼らは屋敷の下働きで少しの時間しか遊べないことだった。

寂しくはなかった。

そうやって時間になり彼らが仕事に向かつて、その時には不思議といつのまにか風牙が迎えに来るのだ。

そうして、あそぼうかといふこと言いながら犬夜叉の手を引いてくれる。

風牙はたくさん遊びをしてくれた。

貝合わせだとかカルタだとか、すごろくに碁や将棋のやりかたも教えてくれた。

それに犬夜叉が飽きると庭の季節を弄って散策した。

そうすると、風牙は使える薬草や食べられるものと食べられないものの区別を教えてくださいました。

犬夜叉は自分に優しく、そうして博識な兄が自慢であった。

そうして、彼に知りもしない父の存在をその陰に重ねていた。

犬夜叉が屋敷にやって来て年といえる時間が経ったが、彼は自分を厭うことのない居

場所が大好きだった。

「母上！」

「……犬夜叉。」

犬夜叉はぴよんと、勢いよく十六夜の自室として使われている部屋に飛び込んだ。以前は同じ部屋で寝起きしていたが、今は犬夜叉のための部屋がある。

時折、怖くなったりしたとき、部屋に忍び込んでいることは秘密だ。

「わあ！すごいね！兄上からの贈り物？」

部屋には色とりどりの反物が転がっていた。犬夜叉の言葉に、十六夜は引きつった表情を何とか引き締め笑顔を作る。

犬夜叉は当たらりに転がったそれを見て回る。どれも美しい色で染められていた。

犬夜叉はそれにニコニコと笑う。

その贈り物は、兄が己が母のことを大事に思ってくれているという証拠だと思つてい

る。
「わあ、これ、母上に似合いそう。」

犬夜叉がそう言つて、一つの反物を持って振り返つた。その先にいた母は、どこか何とも言えない顔で犬夜叉を見ていた。

「どうしました、母上？」

「いえ……」

「犬夜叉様、十六夜様は疲れておられるのですよ。」

低く、しわがれた声でした。

声のする方に目を向けると、そこには犬夜叉よりも少しだけ背の高い何かがいた。

「あれ、一坊さん。」

「母君は、我が主のお相手をされて疲れておられるのですよ。」

「そうなの？」

「ええ、十六夜様は美しいゆえに、これが似合う、あれが似合うと長居をされておられたので。」

のそのそのと近寄って来るその小男は体全体を包帯で覆っている。近づくとつれ、葉草のような匂いがした。

けれど、犬夜叉はその男のことが好きだった。

その男が、いい人であると知っている。

「もう、八つ時です。厨にいったって、おやつを食べられたらどうですか？今日は、十六夜様も休まれるでしょうから。」

「はーいー！」

廊下をたつたと歩いて行く犬夜叉を見送った後、男、一坊と呼ばれたそれはゆつくりと十六夜に向き合った。

「……申し訳ございません。すぐに女手をよこしますので。」

「いえ、ありがとう。」

固い返事をしながら、十六夜は落ち着きなく目の前の存在を見た。

小柄な、男。綺麗な包帯を満遍なく巻き、薬草のにおいをさせたそれは、この屋敷にやつてきた折、風牙にいの一番に紹介されたものだった。

十六夜は、正直な話をすれば二度と風牙という男に関わりたくはなかった。

彼は、いや、あれは簡単に関わってよい存在ではないのだと。

恋しき彼と、重ねていた部分があることは認める。

そうしなければいけないほどに、風牙は鬪牙王とよく似ていた。

けれど、ただ一度、あの瞬間、垣間見た化け物を十六夜は忘れていない。

それさえ、それさえなければ十六夜はこのまま幸福に浸っていられたのだろう。

悪夢の様だと、目を逸らしたかった。

けれど、それは十六夜のそんな心を読んだかのように彼女の前に現れた。

彼女の宝物、愛しい愛しい、幼子をまるで壊れ物を扱うように腕に抱き、自分の屋敷に連れていった。

拒絶したかった。

けれど、それに逆らうことは恐ろしかったし、何よりも犬夜叉の男への懐きぶりを考えればそれは出来なかつた。

犬夜叉が屋敷でどんなに辛い目に遭っているかを知らないわけではなかつた。

といつても、抵抗したとことで無駄な話でもある。

風牙は有無を言わず彼女と犬夜叉を屋敷へと連れて帰つた。

屋敷は、一言でいえば素晴らしい場所であつた。

元々、地位ある家に生まれた十六夜からしてもその屋敷には贅が施されていることは察せられた。

何よりも目を引いたというか、驚いたのは屋敷の使用人たちだつた。

使用人たちはすべからく顔を面で覆つていた。

一部は面を被つていない者もいたが、圧倒的にそちらの方が少ない。十六夜が知る中でも数十人の中の数人だ。

そんな中でも風牙が一番に紹介してきた、使用人たちの頭をしているらしい男、一坊と呼ばれたそれは際立つていた。

包帯でぐるぐるに巻かれた体に、低く、しわがれた声はどこか忌避感を持たせる。

けれど、風牙が彼を一番にする理由も分かるほどに男は優秀であった。

それでも、あまり話すことの少ない男であった。

一応は仕えるものへの一定の距離とも言えたが、風牙への態度を見るに純粋に距離を置かれているとも言えた。

「あらあら、今日もすごいですね。十六夜様。」

「お駒。」

のそのそと去っていった一坊と入れ替わる形で、十六夜の侍女をしているお駒が入って来る。

「本当に主様はおひい様がお好きですね。」

「・・・気にかけては、くださっているのでしょうか。」

「ふふふふ、主様はお優しいかたですからねえ。ほうら、この着物も見てください。私にわざわざ仕立ててくださったんですよ?」

そう言った女は自分の小袖を指さして、ニコニコと笑う。

お駒はそれを見てみると、ひどく幸せそうに見えた。彼女の愛らしい顔立ちには引き連れた様なやけどの跡が走り、右目は痛々しく包帯に巻かれている。

十六夜は、風牙を恐れているのか、それとも親しみを持っているのか分からなかった。

それほどまでに、男の屋敷は、その箱庭は穏やかであった。

男の屋敷にいる使用人たちは、十六夜が見る限り多くが障害をもったものが多い。

手足に欠損があるもの、目や耳がきかないもの、お駒のように顔に傷や火傷があり人から忌避される容姿のもの。

没落していたものの貴族であった彼女には異質過ぎた。それでも、その女も妖と子をなす程度に異質ではあった。

それ故に、使用人たちにはすぐになれた。何よりも、使用人たちは良くも悪くも善良であった。

いつも機嫌がよく、ニコニコと笑い、なにくれと十六夜を氣遣つてくれた。

もしも、もしも、外の世界ならば彼らのような存在は、こういった言い方は何だが人間らしい生活は出来なかつただらう。

真面目な仕事につけるか分からないだろうし、婚姻も出来なかつただらう。

けれど、屋敷の使用人たちは貴族のような豪華な食事も、真新しい着物も、立派な寝具も与えられている。同意さえあれば婚姻とて出来る。

お駒がどんな生活をしていたか、十六夜は聞いていなかったがその痛ましい火傷があつても彼女は幸福そうだ。

子どももおり、穏やかそうな夫もいるらしい。

(・・・誰が、彼らをこんなふうに労われるのでしょうか。)

貴族にも、武士にも、そうしてこの国を統べるものでさえ、日陰で生きていく彼らをこんなにもすくい上げられるのか。

この屋敷に来た時、十六夜は初めてあつた男に聞いたことがあつた。

「・・・あなたは人なのでしょうか？」

「はい。この屋敷にいるものは、ほとんどが人でありますよ。」

しわがれ、掠れた声だった。

その、子どものような小さな体は着物に覆われていない部分の殆どが包帯に覆われていた。それ故に、十六夜は確認のために聞いてみた。

「すいません、不躰でした。」

「いえいえ、聞きたくなるのも分かりましょう。違うものと共に暮らすというのは、恐ろしいことです。」

「・・・何故、妖の元に？」

いつもの十六夜ならば、きつと聞かないことだった。そうして、踏み込むことはしなかった。

それでも、そんなことを聞いてしまったのは、風牙の元にいるという不安感があつたためだ。

そんな中、一坊は変わることなく、穏やかに言葉を紡いだ。

「あの方だけは、私を人として扱ってくれたのですよ。」

言葉の意味が分からずに、十六夜は黙り込む。それに、一坊は無言でそつと包帯を一部解いた。

「ひー」

そこにはぐずぐずに、腐ったような肉があつた。

「あの方は、私を拾い上げ、そうして愛らしきと微笑んでくださった。我が腐った肉を洗い、薬を施し、布を巻いてくださった。」

それだけですよ。

十六夜は口を噤んだ。

それだけ、その、それだけですよ、というたつた一言の重みにひるんでしまったのだ。

一坊は、その後に深々と頭を下げ、部屋を去つていった。

十六夜は考える。

この屋敷は、こういつて何だが、まるで極楽の様だった。

悲しいことも、苦しいことも無い。

使用人たちは、神に奉仕するがごとく仕事を行っている。望んだものが与えられ、傷つけば医術を施される。

その妖は、神であるのではないかと、いつそのこと御仏の様ではないか。

けれど、十六夜はそれのおぞましきを知っている、恐ろしきを知っている。

それ故に、十六夜は風牙という存在に何を思えばいいのか分からなかった。

人でないと恐れ、遠ざけるにはそれは慈悲と愛嬌がありすぎた。

優しきものよと微笑むには、それは人をおもちやとして面白がつていた。

そうして、もう一つ、十六夜としては風牙に関して頭を悩ませていることが在った。

何故か、それは異常に贈り物をしてくるのだ。

反物に始まり、櫛や装飾品など様々だ。

彼は毎日のように屋敷にいるわけではない、時折数日間外に出ていることがある。

彼曰く、鬪牙王の統べていた部下たちの世話などを行っているらしい。

そうして、出かけて帰って来ると彼は多くの贈り物を十六夜にする。

十六夜としては、その過剰な贈り物をされても困る。断ればいいのだろう。風牙の言

動を見る限り、断つても不機嫌になるといふことはないと思う。

「どうだ、十六夜。」

にこにこ風牙は笑って目の前に積み上げた反物を十六夜に見せる。けれど、十六夜は困惑するばかりだ。

「ええ、とても、見事だと。」

「そうだろそうだろ！今、都で流行ってる柄だからな！」

そう言つて風牙は反物を手に取り、合わせる様に十六夜の肩にかけて広げた。

「似合うなあ。ようしようし、さっそく仕立てて……」

「あの、贈り物は……」

風牙の言葉を遮ると、それは十六夜の方を伺うように見た。それに十六夜は困つてしまふのだ。

その時の風牙はまるで子どものような顔をする。

十六夜は美しい。それ故に、それ相応に男からの評価を受け、そうして下心と言うものを察せられる。

十六夜は、風牙からそういつた生々しい、女として求められることも想像していた。けれど、風牙からはそう言つた欲をあまり感じなかつた。

贈り物を持つてくるとき、彼は期待に満ちた目で十六夜を見る。けれど、十六夜から何を期待されているのか分からない。

贈り物が気にいられないと悟ると、今度は執拗に欲しいものがないのかと聞いてくる。無いと答えれば、そうかと落ち込んだ顔をする。

そのまま贈り物の説明をして、無理やりに十六夜に渡して去っていく。

そうして、別の贈り物を持つてくるといふことを繰り返している。

それが、十六夜に何かを期待しているのはわかる。けれど、それが何か分からない。犬夜叉にでさえ、そこまでの贈り物をしていないというのに。

彼の弟のおまけの様な形である自分にそこまでの贈り物をする理由が見つからない。けれど、風牙の目は、恋しいものを見つめるものにしては冷たく、凜いでいた。情欲と表現するには余りにも飢えを欠いていた。

ただ、どんな感情にも当てはまる様な、それ。

踏みこむことも、暴くことも恐ろしくて、当たり障りのない態度を取る。

風牙は、十六夜に触れることはない。

それ故に、男の望みが分からない。

ある日のこと、十六夜の部屋を訪れた風牙が不服そうな顔をしていた。珍しいことだと、十六夜は風牙を見ていた。

風牙は本当に珍しく、どきりと乱雑に座り、だらしなく姿勢を崩していた。

その様は、不貞腐れているようにも見えた。

「……下の者にも、探させていた。」

唐突に話し出しはしたが、十六夜の方を見もせず目も伏せている。

「でも、お前に贈るものが見当たらない。」

そう言った後に、風牙は本当に珍しく乱雑に十六夜にそれを押し付ける。

「あら……」

押し付けられたのはつゆ草であつた。青い小さな花のついた可愛らしい贈り物には控えめな印象を受けた。

「もつといいものを見つけたかつたんだが、全然、下の奴らだつて見つけてこねえし。今度こそ、もつといいものを……」

ぽつぽつと呟いたそれがふつと途切れる。十六夜はそれに気づかず、そのつゆ草を見つめる。

久方ぶりの、外のものだった。

今まで、自分の身の丈に合わないと感じていた着物ではなく、突然渡されたその素朴な贈り物は彼女は思うよりもずっと素直に受け取れた。

(……綺麗。)

十六夜は花を見つめて、思わず微笑んだ。

屋敷の中は季節がめちやくちやなせいで時間と言うものと掴みにくい。

そんな中、もう、そんな季節なのだと思わせてくれた花はまるで締め切られた部屋に入つて来た風の様だった。

じつとつゆ草を見つめて微笑んでいた十六夜は強い視線を感じる。視線の方を見ると、そこには目を大きく見開き、口をへにやりと曲げた風牙の姿があつた。

「・・・た。」

「え？」

「笑った!!」

風牙は十六夜に近寄り、そうして彼女を無断で持ち上げた。

「きゃあー！」

突然の出来事に十六夜が悲鳴を上げる。けれど、風牙はそんなこと聞こえていないというようにはしやぎながら笑う。

「ああ、ようやくだなようやく！ようやく笑ってくれた！」

風牙はそう言ってくるりくると回りながら庭に飛び出る。十六夜はそれに振り回されながら、風牙の台詞を聞いた。

「よかったなあ！この屋敷に来てからずっと笑わなかっただろう？だから、どうにか笑わせてやりたかったんだ！他のものたちのように物をやっても笑わないからなあ。そうか、花か！お前さんは花が好きなのか！」

それに十六夜は驚いて、見下ろす形で風牙を見た。

無邪気に、無垢に、笑っていた。心の底から嬉しそうに、笑っていた。

その笑みが犬夜叉に似ているものだから、彼女は思わずその頭を撫でていた。風牙はそれにきよんとしていたが、それでもされるがままに嬉しそうに笑った。

十六夜はそれにようやく、その男が確かに彼の人の息子であるのだとようやくわかった気がした。

どこか、不器用なその様は、確かに彼によく似ているのだと思つて。

その細やかで、無邪気な好意を受け取る気になつたのだ。

(あ………)

犬夜叉はその日、独りで庭で遊んでいた。兄は外に出ており、他の子どもたちは仕事があつた。

退屈だなあととは思っていたが、丁度いい感じの枝を見つけてご機嫌であつた。

そんな時だ。

犬夜叉はいつの間にか屋敷を囲った塀の端、とある離れについた。屋敷の中は静かだが、その離れの周りは際立って静かだ。

「はい………」

そこは、風牙に近づいてはいけなと言われていた場所だつた。

なんでも体調が悪い人がいるらしく、できるだけそつとしておいてくれと言つていたのを思い出す。

けれど、犬夜叉としては改めてその離れが気になつた。なんといつても、屋敷に来て

ずいぶん経つがその離れの住人とは未だに会えていないのだ。

「……よしー」

好奇心であつた。そんなにも体調が悪いという、誰かのことが心配でもあつた。ただ、それだけの話だつた。

離れには人気は無く、静まり返っている。それでも掃除や手入れはされており、確かに誰かがいるのだらうとは思えた。

犬夜叉は何気なく、障子を開けた。暗い部屋の中を覗き込むと、奥の襖から微かに音がした。

犬夜叉はそろりそろりと中に入っていく。

よくよく聞くと、その音は誰かが泣いている声のようだつた。

犬夜叉はそれに急に心配になり、急いで襖を開けた。

「……風牙様？」

掠れた声で振り返つたのは、母と同じような着物や、長い髪をした人だつた。襖や障子を湿つた暗い部屋の中でよく見えなかつたが声からして女性であるらしいその人は、皆と同じように犬の面を被つていた。

「えっと、あの……」

犬夜叉が何かを言おうとしたとき、その女は動きを一瞬止めた後、ゆらりと立ち上がった。

そうして、ぶつぶつと呟きながら犬夜叉に近づいてくる。

「あ、あのご、ごめんなさい……」

「ああ。憎らしや、怨めしや。貴様の、貴様の、あの女狐のせいだな、彼の君は……」
ぶつぶつと要領の得ない声で囁き続ける。犬夜叉はさすがに恐怖に駆られて逃げようとするが、上手く動けない。そこで、その女は犬夜叉に手を振りかぶる。

殴られると予想した犬夜叉は、自分を庇うように手で頭を覆った。

ばしり！

そんな音がしたが、殴られた感覚はない。

目を開けると、そこには兄が立っていた。珍しく持っていた扇子で、彼女の手を止めたらしい。

「ふ、風牙様！」

「犬夜叉、大丈夫か？」

「う、うん。」

女は風牙に慌てた様子で跪く。風牙は気にした風も無く、犬夜叉を労わりながら抱き上げた。

「水仙、幼子に手を上げるとは感心しないなあ。」

いつも通り、柔らかなそれはどこかどろりと甘い。

犬夜叉は、何故か、その時ひどく怖くなる。何が怖いか分からない。それでも、なんだかたまらなく怖くて体を縮こませた。

風牙は片手で犬夜叉を抱き上げ、ぱらりと扇子を広げて口元を隠した。

「も、申し訳ありません。」

「うん? いや、怒ってなんぞいないさ。なんといつても、体を悪くしているんだ。何か、そうふつと爆発することもあるだろう。だがなあ、俺の愛しい子に手を上げるのは感心せんなあ。」

「その、方が?」

「うん?」

風牙はそう息を吐いた後、扇子の影に隠す様にしながら犬夜叉のこめかみに口づけを落とす。

「おうおう、そうだ。我が、愛しい子。人と妖の間の子。我が守るべき血縁。そうして。」

彼女の子。

囁くような声だった。それに女は微かに震えながら、まるで血反吐を吐くような、犬夜叉にはそう聞こえる様な声で言った。

「めでたきことです。」

「まことになあ。血縁とは、多ければ多いほどに良いものだ。」

「……こちらには、このごとあまり来られなかつたのも納得の事です。」

「ああ、これやあの人に構うので忙しくてなあ。やはり慣れるまではと思つてなあ。お前も、体調さえ良ければなあ。」

「申し訳ありません。」

「うん？謝ることなどないんだよ。」

「私のことなど、忘れてしまわれているのかと思つておりました。」

「うん？忘れるわけないだろう。この屋敷は俺が管理しているのだ。食事も何もかも行き届いていただろう？」

犬夜叉は、ひどく落ち着かない。何かが恐ろしい。

何か、二人の間に齟齬がある様な、そんな違和感がある。その正体が分からなくて、犬夜叉は微かに震えはじめた。

それに気づいた風牙はうんと頷いて、くるりとその場から背を向けた。

「あ……」

微かな女の声があった。けれど、風牙は我関せずというように犬夜叉におやつにしようとして囁いている。

かたんと閉じた戸を見て、犬夜叉は風牙に言った。

「あの、ごめんなさい、入っちゃ、いけないって。」

「うん？まあ、いいさ。だが、分かっただろう。彼女はお前のように行く当てがなくてな。色々世話を焼いているんだが。今は気分が悪いらしくてな。あまり構ってやらないでくれ。丁度良かったしな。」

その言葉の意味が、犬夜叉には分からなかった。ただ、その時は今までの恐ろしさのようなものはないいつも通りの兄に見えた。

だからこそ、犬夜叉は全てが気のせいだと思うことにした。

離れで見えた怖い人は、きつと色々気分が悪いだけなのだと、そう思つて。

その数日後に、母が死んだ。そうして、犬夜叉は屋敷を逃げ出した。

私は、何もかもが嫌いで在りました。

ええ、そうです。男と言うものが、女というものが、嫌いでありました。

何故か、簡単な事です。私には、どちらも悍ましくて仕方がなかったのです。私は、いえ、私が何処の生まれなんてことはどうでもいいのです。

ただ、恵まれてはいたのでございます。

たった一つ、間違いであったのは私がいかに美しすぎたことでしょう。

ああ、何を言っているとお思いでしょうか、嘲笑すらされる方もおられるでしょう。

ええ、そうですね。

そうであれば、よかったです。

笑ってしまうことに、誰もが私を美しいと言い、求めました。

最初の夫は、良き人でした。そうして、私に横恋慕した男に殺されました。

私を奪った男は、また、誰かに殺されました。

死にました、死にました。誰もが私を恋しいと言いながら、手前勝手に殺し合い、そうして死んでいくのです。

そうして、反対に女は、笑えることに私のことを侮蔑しました。

男にだらしがらないのだと。旦那様は騙されているのだと。あの、麗しさよ、妬ましきよ。

ええ、ええ、ええ、誰が、誰が、こんな生を望むものか。

伴侶とするものを奪われ、流浪の身になり、女にさえも蔑まれ。

子を、なしたこともありました。死にました、私の、愛しい、可愛い子。

嫉妬に狂った、男の一人に殺されました。

何もかもが嫌で、それでも男から逃れられない自分の人生が嫌で。

そんな時、あの方に会ったのです。

ええ、ええ、覚えています。

あの日、月の光の下に、私に会いに来られたあの方を。

「評判の美人だと聞いたが、それほどでもないなあ。そんな幸薄そうな、苦しそうな女を美人というとは、情緒がないねえ。」

けらけらと、そう言つて笑つた風牙様は、本当に、この世の物とは思えないほどに美しかったのです。

あの人は、人の世界で生きにくい私を拾い上げてくださいました。生活の全てを面倒見てくださいました。

あの人の目には、情欲も、恋慕も、欠片とて存在しませんでした。あるのは、ただ、ただ、ひたすらなまでの慈しみだけでした。

あの人は、私に何も求めませんでした。毎日のように、私の元に通つてくださいました。そうして、美しい反物に、櫛や装飾品、甘い水菓子。

あの方は、目を細めては私に微笑みかけてくださいました。

子を、幼子を慈しむ様な、そんな情を。

あの方だけでした、あの方だけが、私を装飾品でもなく、ただの人として扱つてくだ

さいました。

その、降り積もった感情が、恋しやと焦がれるものに変わるのに時間はそうかかりませんでした。

あの方も、きっと同じであったはずです。

そうでなければ、どうして容姿だけの女の世話などするものでしょうか。恥ずかしくはありません、はしたないとも思いました。ですが、私が言わなければ、あの優しい方が私を求めることはないと分かっています。

ええ、ええ、それにあの方は応えてくださいました。契りを結びました。幸福でありました、本当に、幸福でありました。

あの女と、子が現れるまで。

あの方があまり顔を出されなくなっていました。

何かあったのかと思いました。ですが、聞くにも会えない日々が続きました。そうして、侍女たちの言葉を聞いたのです。

「主様が、お世継ぎとその母親を連れて帰られるんですって。」

「ああ、それで本殿の方をいろいろと片づけておられるのね。」

「ふふふ、御子が来られるならば、騒がしくなるのでしょねえ。」

さざ波のような声に、私は、ええ、私は絶望しました。

ようやく、居場所が手に入れられたと思いましたが
ようやく、私は人として生きられると思いました。

ようやく、うばわれることはないのだとおもいました。

ええ、ええ、あの人は変わることなく、それでも時折通ってくださいました。

ですが、口を開けば、その女がどれほど美しいのか、その子がどれほど愛らしいのか、
そればかりで。

私は、疎まれるのが怖くて、嫌われたくなくて、笑って、それを受け止めました。

あの人は、それから私があの人たちの元に行くのを認めても、私の所に帰って来ては
くださいませんでした。

欲しいといえば与えてくださっても、自らそれをくださることはありませんでした。

ええ、ええ、ですから、分かったのです。

一番で在り続けたかった、その人の唯一でありたかった。
ですから、あの女を殺しました。

殺すのは簡単でした。

前に貰った短刀を持って女の元に行き、首をかき切りました。

血が吹き出るのを見ると、あの方がいつの間にかいました。

我が君は、あの女に駆け寄りましたがもうすでに虫の息でした。

女は、二言三言、喋っていました。があまり興味はわきませんでした。そうして、女はこと切れました。

ああ、ようやくだと思いました。ようやく、ようやく、私を見てくれる！ええ、ええ、きつとこの人はこれで私だけを見てくださると思えました！

愛されないのなら、憎まれたかったです。この先、永いこの方の生の中で、私はきつと忘れられない存在になるのだと。

そのために死ぬのなら構いませんでした。

ゆつくりと私を見た、あの人は、変わることなく微笑んでおられました。

「うーん、そうかあ。」

そう、一言喋って、ようやく私の方を向き、こう言われました。

「汚れたなあ。水仙、風呂に入りなさい。」

「え？」

「部屋も汚れたなあ。掃除を、ああ、あと墓の用意もせねばならんか。」

「あ、あ、え？」

そこには、欠片の怒りも、悲しみもごぎいませませんでした。

「うん？どうした？」

「わた、殺して……」

「うん？ そうだな。俺の考えた通り、ちゃんと殺してくれたな？」

「え？」

どさりと、私はそこに座り込みました。それは、私にニコニコと言います。

「うん、お前さんのことは一等に気に入ってたんだがなあ。ずっと幸福そうだっただろう？ だから、ものすごく醜くなる場所が見たかったんだ。泣きわめいて、苦しんで、怒り狂っているところをな。」

「・・・私のこと、愛らしいと。」

「だから、一等に気に入っている愛らしいお前だからこそ、狂うように怒って、悲しんで、苦しむところが見たかったんだろう？」

愛しいものの全てを知りたいと思うのは当然だろう？

心底、不思議そうにその人は言われました。

「だからなあ、どうしようかと思ってたんだが。一坊の奴がな？ 嫉妬心を煽るのが一番だと言われてなあ。いやあ、かあいかったぞお。俺の弟や、その母親を妬んで醜くなつていくお前はなあ。」

弟？ 母？

え、だって、あなたの妻と、子どもだと思つて。

だから、私は。

あれ、私の体が、どうして、あんなところに。

「ふむ。」

風牙は目の前の首なし死体と、その背後に立つ一坊を見た。

「これはまた、掃除が大変だなあ。」

のんびりとそう言った風牙に一坊は構えた大きな爪を引つ込めながら答えた。包帯がほどけて、毛むくじやらの子ども程ある手が見え隠れする。

「申し訳ありません。」

「うん？ああ、いや、構わんさ。残念だが、まあ、死んでしまったのなら仕方がな。それは別に生きていても、死んでも構わなかったし。だが、別にこれぐらいで傷つくものではないんだがなあ。」

「……それでも、あなたを傷つけるものを赦せませんので。」
「相変らず重いなあ、もうちつと気楽に生きやあいだろうに。」

風牙はのんびりとそう言った。

そうして、事切れた十六夜だったものに目を向けた。

飛び散った血を擦り付けける様に、美しい女の顔立ちをなぞった。

殺すのは最初から決めていた。そのために、じっくりと水仙を追い詰めたのだ、その

間に望んだものを見れたのだからそれだけで十分に満足しているのだが。

(……ああ。)

「……兄上？」

その声に風牙は振り向く。ころんと、持っていた毬が犬夜叉の手から零れ落ちた。

「母上！」

犬夜叉が十六夜であったそれに駆け寄る。風牙は慌ててそんな犬夜叉をすくい上げた。

「放して、母上が……！」

「駄目だぞお、汚いからなあ。」

それに犬夜叉は動きを止めた。母に意識を向けており、ずっと見ていなかった兄にようやく視線を向けた。

兄は、いつもと変わらずニコニコと笑っていた。それ故に、怖かった。

どうして、この人は、笑っているの？

「あ、にうえ？」

「うん？ああ、そうだなあ。俺もそーいや汚れてるのか。うーん、お前さんも風呂行きだな。」

一緒に風呂に入るか！

にここにこと、にここにこと、笑つて、いる。

それに、犬夜叉は鈍つていた恐怖が湧き出て来る。

どうして、このひとは、ははうえがちをだしてたおれているのにわらつてゐるの？

「母上、は？」

「ああ。十六夜はなあ、死んでるからなあ。これから片づけるから。ああ、でも墓も作るからなあ？」

片づけるつて何？母上はものじゃないよ、お片付けできないよ。それよりもお医者さんだつて呼んでこなくちや。

犬夜叉のそれに、風牙は仕方のないような顔で苦笑した。

「だから死んでるんだよ。困つた奴だな。そんなことしても無駄なんだ。わざわざ仕事を増やしてやるな。」

そんなことを言うのだ。

「なんで？」

「うん？」

「だつて、母上が、助かるかもしれない。死んでなんて。」

「さつき確かめたからだ。死んでる、ちゃんとな。あんまり死人に近づくもんじゃないだろ？」

たしなめる様な声がする。

犬夜叉は愕然と、自分を抱き上げたそれを見つめる。

この人はなんだ？

ぞわり、ぞわりと、寒気が伴ってくる。

ねえ、兄上、母上と仲が良かったよね？綺麗だつて言つたよね？笑つてたよね？お話してたよね？かあいいねえつて、そう言つてたよね？

なのに、どうして、母上が死んで、笑つてるの？

ぼろりと零れたそれに、風牙は仕方がないなあと言うように笑つて、血に濡れた手で犬夜叉のまろく柔い頬を撫でた。

「人が死ぬなんてよくあることだろう？」

あっけんからんとそう言い捨てた。

「そうだな、お前さんは初めてか。ああ、確かに、母がなくなるのは悲しいなあ。ようし、誰か新しくお前の母になってくれる奴を探そうか？」

ねえ、兄上、何を言ってるの？分からないよ、母上は一人だけだよ。代わりなんて、いないよ。

ねえ、兄上、教えて、母上のこと嫌いだったの？

「うん？いや。」

その瞬間だけ、兄は、どこか迷子のような、困った顔を一瞬だけした。けれど、すぐに朗らかに返事をした。

「好きだったぞお。犬夜叉や殺や母上のことを考えなければ、今までにないぐらいかあ
いかったぞお。死んでしまつて、悲しいさ。」

犬夜叉は目の前で訳の分からないことを言い続ける兄にがたがたと震えながら、押し殺したような声で言つた。

「なら、どうして笑つてるの？」

それに、風牙は答える。にこにこ、優しげに、笑つて。

「人なんてすぐに死ぬんだからな。きりがなしなあ、慣れた。」

それに犬夜叉はどうとう耐えきれなくなり、風牙の腕から逃げ出した。そんなことを考えていなかったのか、それとも気にも留めていなかったのか。

あっさりと、その腕から逃れることが出来た。

犬夜叉は走つた。

この屋敷にいたくなかつた。兄に、会いたくなかつた。

恐ろしかったのだ、怖かつたのだ。

ずっと、優しく、強い、そんな兄が好きだつた。

けれど、今あつたあの人は、なんなのか？

違う、自分が、大好きだったあの人は、あんな人ではなかったはずだ。

怖い、何が怖いのかもわからずに、犬夜叉はがむしやりに走る。

どこかに逃げたい、ここではないどこか。

ただ、ただ、ここにだけはいたくない。これ以上、あの人の側にいたくない。

とうとう辿り着いたのは、屋敷と外を繋いでいるらしい門だ。

門番はいない。置く必要もないのだ。

犬夜叉は一先ずは戸を開けようとするが、もちろん開かない。それに項垂れる。

屋敷を囲んだ塀は、飛び越えてもまた庭に戻ってしまうことは知っている。

よくよく考えれば、犬夜叉はこの屋敷に来てから、外に出るとしても風牙が伴っての

ことだ。

自分一人で外に出る方法を知らない。

(・・・どうしよう。)

一度立ち止まれば焦る気持ちは風いでいく。このまま、どうせ出られないのなら、も

う一度帰った方がいいのだろうか？

何よりも、倒れた母のことが気になる。いや、それよりも屋敷内の医術が出来る存在

を探したほうが良いのだろうか。

ぐるぐると、色んな考えが駆けまわる。

それでも、怖い。そうして、先ほどの兄が夢だったのではないかと、そんなことを思う。

「犬夜叉様？」

「え？」

そこには、犬夜叉がよく遊ぶ狐の面を付けた子どもがいた。

「あ……」

犬夜叉は、とっさにどうすればいいのか分からず、門に背を向け後退る様に一歩下がった。

その様子に何を思ったのか、子どもは静かに言った。

「この屋敷を出ていかれるのですね？」

「え？」

どうして分かったのかと言うとしたとき、子どもは持っていた包みを犬夜叉に押し付ける。

「これ……」

「私はこれからお使いに行くはずだったんです。その時に食べるお弁当と、あとお使い用のお金です。持って行ってください。」

「で、でも、怒られちゃうんじゃないか……」

「この屋敷に来られた方たちは殆どここに居付きます。まるで極楽の様だって。でも、ほんの少しだけですが、数人は出て行ってしまふんです。」

風牙様を、怖いと言われて。

犬夜叉はそれに固まる。子どもは、それに顔を伏せて話し続ける。

「……風牙様、お優しいです。優しく、穏やかで、そうして私も恐ろしいと、時々思います。」

あの方は、それでも、妖怪なのです。

自戒を込めたその言葉は、犬夜叉にはよくわからない。犬夜叉の知る妖怪とは、兄と、そうして墓参り以降会えていない次兄である。それゆえに、その妖怪であるという線引きの意味を理解できなかった。

途方に暮れる犬夜叉に、子どもは何も言わずに彼の手を引いた。そうして、木造りの門に近づき、横にある小さな戸に触れた。そうすると、きいと小さな戸が開いた。

「犬夜叉様は半妖です。きつと、外でも生きていけます。」

「君も行こうよ、兄上のこと怖いんでしょう？」

それに、子どもは小さく首を振り、そうして面を外した。

「……私は、外では生きていけないのです。」

子どもの肌には、所々に鱗が浮かんでいた。それに、犬夜叉はようやく目の前の存在

が自分と同じ境遇であると察する。

「半妖の私は、一坊様に拾われました。私は、外がどれほどに生きにくいか分かっています。ですが、風牙様が恐ろしいという気持ちも分かるのです。」

だから、だからこそ、逃げる意思があるうちに、どうか逃げてください。

「どうして、そこまでしてくれるの？」

「……犬夜叉様、私の名は、竜胆と言います。ずっと、名さえ教えず申し訳ありません。」

その言葉に、犬夜叉はまるで霧が晴れる様に一坊以外に、屋敷の者で名を知らないことを思い出す。

(……もしかして)

そうだ、名を知ろうとするたびに、仕事だからと遊びはお開きになり、そうして、兄上が代わりにやって来る。

教えてほしいと請えば、するりとかわされてしまう。

ずるずると芋づる式に気づいたそれに、兄が関連していると理解した。

犬夜叉は、等々耐えきれなくなり、脱兎のごとく門をくぐる。

「御達者で！」

泣きそうな竜胆の声を背に、犬夜叉はただ、ただ、走った。

その後、犬夜叉は自分がどれほどまでに守られているのかを知った。そうして、竜胆の語った妖怪であるという意味も、理解した。

この世は残酷だと、世界を見て回って理解する。そうして、あの屋敷がどれほど優しいものであったかも。

犬夜叉は、風牙を恐ろしいと、理解に至るには無理であるのだと何となしに察していた。

それでも、なお、彼は風牙のことを兄として慕ってしまっている。

風牙は、犬夜叉に多くのことを教えた。

食べられるものや毒になるもの、そうして簡単な金の使い方。人や妖怪との距離の置き方。

それは、確かに彼の人生において知っておくべきものばかりであった。

犬夜叉とは、半妖である。そうして、風牙とは妖怪である。

この違いは、確かに自分たちの間に悉く横たわり、分かたれてしまっているものである。

それでも、なお、あの優しい箱庭を彼の者が作り、そうして自分が慈しまれたということを感じている。

嫌うことは出来なかった。彼の、恐ろしさを、妖怪としての齟齬であると理解できれ

ばなおさらに。

慕い続けることを、止められなかった。

犬夜叉は、風牙の作った母の墓を前にして、いつだって風牙の作った優しい箱庭を思いうち出す。

「よろしかったのですか？」

「何がだ？」

風牙はじつと十六夜の墓として作ったそれを見る。石を簡素に加工し、名を刻んだだけのそれ。

風牙としてはもつと豪華なものをもつた、思えば彼女はそう言った趣向を嫌うことを思い出し出来るだけ簡素にした。

大きな木の根元に作ったそれを前で、風牙はちらりと横にいる半妖を見る。

「十六夜様の事です。本来ならば、妖怪にされる気だったのでしょう？」

「うーん。」

風牙はそれに締まりのない声を上げた。

風牙は十六夜を犬夜叉を屋敷に迎え入れると決めた時から、十六夜を妖怪にすることを決めていた。

今まで、風牙には多くの気に入りの人間がいた。人間というのは、かあいいものだ。愚かで、賢くて、美しくて、醜くて。

けれど、彼らは生じて短命だ。それ故に、風牙は特に気に入った存在を妖怪にして手元に置くことにしていた。

けれど、これには欠点があり、妖怪になったことで心を病み、死んでしまうものがあるということだ。

今までの経験から、十六夜はそれを嫌がることは分かっていた。

「どうして、人間というのは、お前の様に合ってくれないんだらうなあ。一坊。」

「・・・私が、半妖であることを受け入れたのはなかなか特殊な事です。」

「分かっているんだけどなあ。」

風牙は今まで一等に、十六夜という存在を気に入った。

犬夜叉の母であることは何よりもでもあるが、彼自身が非常に十六夜のことを気に入っていた。

是非とも、彼は十六夜を出来る限り自分の側に置きたかった。

(・・・それで犬夜叉と、彼女と一緒にずっと暮らしたかったんだがなあ。)

十六夜に納得してもらうために、命を助けるために妖怪にしたと大義名分が欲しかった。そのために、水仙は丁度良かったのだ。

水仙に殺されそうになり、仕方がなく妖怪にして命を繋いだ。

水仙は一先ず他の所に移動させようと思つていたのだが。

孤独な彼女が、花開く様に幸せになつていくのは本当にかあいいものだった。けれど、やはり幸福な所だけではなく、不幸で、惨めで、苦しくて、悲しい所も是非とも見たかつたのだ。

人間というのは、笑つているところだけでなく、苦痛にのたうち回り、泣き叫ぶところもかあいいのが特に良い所だ。

「だがなあ、一坊。何故、彼女は十六夜を妻、犬夜叉を子と勘違いしただけであそこまでになつていたんだらうなあ？」

「風牙様は、あれを夜伽に呼ばれたでしょう？」

「うん？そりやあな。だが、屋敷には夜伽役なんてたくさんいただらう？」

「彼女は、自分を風牙様の妻だと思つていたようです。」

それに風牙は心の底から、不思議に思う。自分は彼女にそこまで特別なことなどしていただらうか？

（水仙にしたこと？世話をしてやつて、着物やら贈り物をして、夜伽に呼んで。だが、屋敷に仕えている奴らにも同じようなことをしてるんだが？）

風牙にとつて屋敷のものたちは自分を慕つてくれるかあいいものたちだ。何故か分

からないが、周りに距離を置かれる自分のことを慕ってくれるのだから甘やかしてやりたいと思うのも一押しだ。

男だろうが、女だろうが、そうしてほしいというならば夜伽に呼ぶし、それぞれに似合うと思ったのなら、着物だとか贈り物だっしてしている。

特別なことなどしただろうか？

求められるならば風牙はなんだっしてやる。それが、誰であろうとだ。

「……さあ、あれはそう思っていたようです。」

「ふーん。まあ、もういいがなあ。」

そう一言置き、風牙はさっさと水仙を興味の対象から除いた。

そうして、改めて十六夜の墓に目を向けた。

首をかき切られたことを確認して、風牙は意気揚々と十六夜に駆け寄った。そうして、自分に駆け寄った風牙に、十六夜は、今まで見た中で一等に美しい笑みを浮かべたのだ。

(……鬪牙王さま。)

彼女は、そう、言った。それに、風牙は何故か手を止めてしまった。その間に、十六夜は微かな声で、言ったのだ。

ようやく、お会いに出来ました。迎えにきて、くださったのですね。

(愛しい、方。)

ああ、ああ、その眼！

控えめで、静かな彼女にはあまりにつ不釣り合いな、焰のような感情を灯した眼。全てを、焼き払う様な、揺らめくような美しき眼よ！

まるで、清流の様に、澄んだ眼よ！

まるで、大地の様に頑なな眼よ！

その、眼に宿った、魅入られる様な感情に風牙は見とれた。

血が、流れ続ける。命が流れていく。それが分かつて、風牙は女の浮かべた美しい笑みに、強い感情に魅入られてしまった。

(・・・そうか、あれが、恋か。)

あの時、彼女に宿ったそれを、恋と呼ぶのか。

欲しいと、とっさに思った。女の浮かべた笑みが、その感情が欲しいと思った。

それほどまでに、十六夜は美しかった。

(でも、俺への物じゃないんだよなあ。)

それは、己の父へのものだ。父にしか向けられないものだ。

そう思うと、風牙は十六夜に手を伸ばす気が失せた。何となしに、彼女を生かす気が失せた。妖怪にする気がなくなった。

風牙は、そのまま、それでも十六夜がこと切れる瞬間まで彼女を見つめた。

それでも、十六夜は風牙に鬪牙王の幻を見たまま、死んだのだ。

「……死んでも、俺の事を見なかつたなあ。」

何となく、そう言った。

あの時、彼女を人のまま殺してやりたくなつた。掴もうと思つた手を、振り払つた。

そのほうが、十六夜は幸福な気がした。

「まあ、もういいんだよ。うん。」

最期まで、十六夜は風牙を見なかつた。その事実だけで、何となしにもういいやと思へてしまった。

「風牙様は、十六夜様に恋をされていたのですか？」

唐突に聞かれたその問いに、風牙はきよとりと目を瞬かせた。それに、一坊は深々と頭を下げた。

「申し訳ございません。気分を害された様ならば……」

「いや、構わんさ。にしても、恋か……」

風牙は考え込む。

自分は彼女に恋い焦がれていた？

「そんなのありえないな。」

だって、自分が彼女に恋をしていたというならば、きつと彼女を無理やりにも妻にしていたはずだ。

だって、恋とは十六夜の中にあつたあの激情のことを言うのだから。

自分の中に、あんなにも、熱く、頑なで、純粹な、感情があつたのなら。

自分はきつと、十六夜をどんなことをしても手に入れただろう。

孕ませ、記憶を消して、困り込んで、死ぬことだつて赦さずに。

けれど、風牙はそれをしなかつた。

彼女のことを手放した。

「それが答えの全てだろうか？」

あつけんからんと、朗らかに、そう言った。

一坊は、それに深々と頭を下げた。

「そうでございませぬえ。」

「そうだろう？あ、そうだ。犬夜叉の方は大丈夫か？」

「ええ、緊急の避難先として迷い家を使うようにしておきました。そうして、この屋敷に戻りたくなつた時のための連絡手段も。」

「そうか、いや、お前の息子には褒美をやらんとあ。あの子のことを色々と氣遣つてくれたようだし。」

「ありがたいことです。」

「いいさ。あと、この墓にも守りを付けておいてくれ。」

「賜りました。」

「ようし、良い子のお前さんには褒美がいるなあ。そうだ、また風呂に入るか？体を洗つて、包帯も巻き直すか。新しい薬の調合を思いついたんだ。」

そう言つて、風牙は歩き出した。その後を、男は、いやその妖怪と共に生き続けるために妖怪にさえ成り果てたそれはじつと見つめる。

一坊と、名前を付けたその妖怪は、まごうことなく彼にとつて神様だった。

人に厭われる呪いを持った自分を抱き上げ、屋敷に連れ帰り、体を洗い、包帯を巻き。そうして、仕事を与えてくれた。

(・・・あなたのそれを、私は恋と、呼びたくなる。)

それでも、男は何も言わない。

風牙が、神がそう言うのなら、それがすべて真実なのだろう。

そうだ、一坊には興味のないことだ。彼の言葉は、絶対なのだから。

彼は、そう思つてのそのそと歩き出した。

優しい兄

「……犬夜叉、少し顔を貸しなさい。」

「へ？」

それは丁度昼食を取るために川辺で休憩している最中のことだった。

唐突に犬夜叉一向に話しかけてきた、銀髪の美丈夫。

白銀の髪に、黄金の瞳。そうして、上物の着物に、変わった形の鎧。

かごめが思わずびくりと体を震わせてしまうほどに、それは風牙に似ていた。

けれど、すぐにそれが風牙でないことを覚った。何故って、その瞳はあんまりにも風
いでいた。

風牙のような楽しみも、喜悅も、ない。ひどく、静まり返った瞳だった。

何よりも、その存在は風牙に比べて幾分か女性のような美と言えるものを持つてい
た。

「げ！殺生丸！」

「せつしようまる？」

かごめはそう言つて視線を犬夜叉へ向けるが、彼自身がそんな状況ではない。犬夜叉は殺生丸と呼んだ男へ対峙する。その表情には警戒はないが、慌てた色は確かに存在した。

そうして、名前を呼ばれた彼は不機嫌そうな顔で犬夜叉に近寄り、持っていた扇子でぱしりとその額を叩いた。

「兄上と呼ぶように言つたはずだ。」

「だ、だけど……」

「お前も父上の子なのだからそれ相応の態度を持つように言つたはずだ。」

「……兄上。」

(あにうえ!?)

その会話を側で聞いていたかごめはその男をじつと見る。

犬夜叉に風牙以外に兄弟がいたことにかごめは驚く。

そんなことを考えていると殺生丸は犬夜叉に足払いを掛けて転ばせて彼を肩に担いだ。

「借りていくぞ。」

「へ？」

そんな台詞の後に、殺生丸は抵抗する犬夜叉を連れてどこかに去っていった。

ぼかんとそれを見送ったかごめの耳に、また声が入る。

「せつしようまるさまあー！」

つい先ほど認識した名前を連呼する存在にかごめは視線を向けた。そこには、青白い肌をした、子鬼。そうして。

「いぬやしやさまあー！」

冥加の声だった。

「そうか。もう、殺生丸様は犬夜叉を連れて。」

「まあ、どうせ返しに来るんじゃないから待つとればええじやろ。」

「わあつかとるわ、そんなこと！」

かごめは目の前で起こる、邪見という妖怪と、馴染み深い冥加の会話を聞いていた。その会話の向こう側、殺生丸に犬夜叉が連れていかれた森の奥では明らかな爆発音と絶叫が聞こえる。それにかごめは慌てたものの、冥加が大丈夫だと押し切る為一応は置いている。そうして、かごめが恐る恐る問いかけた。

「ええつと。さつきの銀髪の男の人って犬夜叉のお兄さんの、殺生丸さんで、いいんですか？」

「ふん！人間なんぞに教えることなど……」

「わしは別にかまわんが、お前さん、犬夜叉様の身内にそんなこと言うとなら殺生丸様になんか言われるぞ。というか、果ては風牙様が出てくる可能性も……」

冥加の言葉に邪見は思わずと言う様な形で周りを見回した。そうして、何もいないことを覚り、ほっと息を吐く。

「お、恐ろしいこと言うでないわ！貴様こそ、犬夜叉を助ける様に言われとるくせにぜんぜんサボりまくつとるじやないか！」

「そ、それはまあ、風牙様じゃし、御咎めは……」

冥加はそこまで言った後に、視線をウロウロさせ、顔を青くしたり、赤くしたりと忙しない。

「……見とるかのお。」

「分かんぞ？」

ぼそぼそと言いつている冥加に対して、かごめはふとずっと気になっていたことを口にした。

「あの、ちよつと聞きたいことがあるんだけど。」

「なんですかの、かごめ様？」

「風牙ってどんな人？」

それに冥加たちは、予想通りと言うか見事に固まった。そうして、互いの顔をチラリ

と見た後に、恐る恐る口を開いた。

「……かごめ様は、その、すでにお会いなられたのでしょ?」

「ならば、分かるじやろう。あの、あんな感じじや。」

非常に、何というか奥歯にもものが挟まったような言い方だ。かごめもまた言いたいことはわかる。

彼の妖怪を怖いと思う。

あの、人ではない何かをまざまざと覚えている。まるで、初夏のような爽やかな、殺意かどうかさえ今でも分からない、あの声を覚えている。

けれど、だからといって風牙という存在を厭うてしまうかと言われれば悩んでしま

う。かごめは確信をもって、彼の妖怪が自分を殺す気があったと断言が出来る。けれど、殺意を向けられること自体は別段今だって慣れたものだ。

少なくとも今の時点では、といっても桔梗と似ていないから、殺されないのなら一旦は置いておく程度にはかごめはずぶとかつたりする。

けれど、風牙という存在は、何と言うか今でも分からないのだ。

怖いことには怖い。殺意を向けられたのだから当たり前なのだが。けれど、怖いという一言で片づけてはいけないのだと漠然と感じる。

事実、風牙はその殺意を忘れてしまいそうなほどに、人好きのする性格だった。愛想もよく、ニコニコと笑い、よくよくかごめを氣遣った。

だからこそ、かごめはその妖怪からの明確な殺意と呼べるものを忘れてしまいそうになった。元より、犬夜叉と違って出会いなど素晴らしいものではなかったのだ。

だからこそ、かごめはその風牙という存在に、自分とは違うものとしてそれでもそういうものだど割り切ろうとした。

けれど、風牙と別れた後のことだ。

犬夜叉はかごめの前を歩きながら、ぼそりと言った。

風牙のこと、気に入ったのか？

かごめはそれに、また焼きもちか何かかと呆れる。だからこそ、返事を返そうとしたとき、それを遮るように犬夜叉は言った。

「兄上を、心のうちに入れるなよ。」

振り返りはしなかった。いつものように感情をめいっばいに叫ぶような声ではなかった。淡々と、淡々と、老いた老人のように静かな声だった。

あの人に理解を求めな。

(私は。)

何一つだって、返事を返すことができなかった。どうしたのよ、なんて犬夜叉の顔を

覗き込むことも出来なかった。

それは、その声は、目の前の同い年ほどの半妖が自分よりもずっと、長い時間を生きたことを示しているように聞こえた。

踏みこめば、犬夜叉はまったく違う、見たことも無いような顔をしていることはわかった。それを、どうしたって見ようとは思えなかった。

それから犬夜叉は少ししていつもの騒がしい少年に戻った。かごめはそれにほっとして、同じようにいつものごとく振舞った。けれど、今だってかごめの脳裏にはまざまざとその妖怪のことが脳裏にある。

怖いとは思った。けれど、表面上だけではただ、犬夜叉への過剰は心配があるだけのようだった。今までのような、有無を言わずに殺しに来る妖怪たちとは違うように見えた。

恐ろしい部分はあっても、話せばわかる妖怪なのだろうと。何よりも、犬夜叉自身の態度からして悪い妖怪ではないのだろうと。

けれど、かごめは犬夜叉の生き疲れたような声を覚えている。

かごめは、風牙を人ではないと理解した。けれど、距離感さえ間違わなければいいと思つた。ちぐはぐとした印象だけが、嫌にこびり付いて離れない。

「……怖いけど。でも、それだけじゃ片づけられなくて。何か知ってないかなって。」

かごめの言葉に、冥加と邪見は顔を見合わせる。けれど、邪見はくいっと顔を背けた。「なーんでわしが人間の小娘なんぞのためにあの方の関心を買うかもしれない危険なんぞ犯さねばならん!」

「わしだって、しよーじき、あのお方に關しては出来れば無関係でありたいんですぞ!」嫌がる二匹を睨み付けてかごめは憎々しげにこう言った。

「いいわよ!そんな風に言うなら、犬夜叉と殺生丸さんに聞くから!」

それに二匹はごくりと喉をならした。

「い、いやあ。それは止めといた方が。」

「その、風牙さまのことは彼の御兄弟にとつてはよいものでは。」

「教えてくれないならしかたないでしょ?」

かごめがぴしゃりとそう言うと、二人はこれまた何とも言えない顔で互いの顔を見た。

よほど、風牙のことについて犬夜叉たちを刺激してほしくないようだった。そうして、冥加の方が非常に言いにくそうな顔でかごめを見た。

「……わしから聞いたことは他言しないでいただければ。」

「おい、話すのか!?!」

「仕方がなからうが!これで下手に犬夜叉様に風牙様のことを聞かれる方がわしは怖い

わ！それに邪見、お主もあのお方について話すのじゃぞ？」

「は、嫌に決まって！」

「そうでなければ今度風牙様にお会いしたときあることないこといってやるからな！」

それに邪見はぐううとうと苦虫をかみつぶしたような顔をしていたが、それ以上に冥加の鬼気迫る声に覚悟を決めた顔で頷いた。

かごめとしてはいつそのこと、犬夜叉と風牙の間に何があったのかの方が気になっていた。

さて、風牙様がどのようなお方かという話じゃが。わしとて全てを知っているわけではないぞ？あのお方を本当の意味で理解されているのは、御母堂様は分らんが、お館様に出さえ無理であったからな。

わしはあのお方については恐ろしゆうて近寄りたくはなかつたしのお。

じゃが、あのお方のお話については幾つか知っておるよ。

そうじゃの、一番古い話としては、わしも屋敷におつたときに盗み聞いた話じゃが。

風牙様がさほどお年を召しておらん、幼いころのことじゃ。あのお方にも、恐ろしいことに幼いころがあつたんじゃの。

あのお方の元に、何と言うか幾人か、刺客と言うか下剋上を狙った奴らが来たそう

じやった。そやつらがまゝた、微妙に知恵が回る奴らでな。

お館様が人に対して甘い所から、幼かった風牙様を弱みになると思つたんじやろうな。

いや、間違つとるわけじゃないぞ？

お館様も、まあ、いっくら風牙様とはいえ幼いころは可愛がられておられたそうじやし。

うん？その不届きものたちか？

死んだよ。

当たり前じゃろうさ。自分の欲望に負けた奴らの成れの果てよ。己の実力を見誤つたのじゃ。その程度、当たり前じゃよ。

もちろん、そやつらは風牙様の手によつて殺された。

それが、また、むごいことじやった。

「もちろん、全員が皆殺しになつていたんじやが。どうも、風牙さまはその刺客の奴らと鬼ごっこをされていたそうで。」

「鬼ごっこ？」

ずつと冥加の語りを聞いていたかごめは不思議そうに言つた。それに冥加は非常に言いくそうに口元をもごごとさせた。

「わしも、伝え聞いた話じゃから、はつきり言えんが。屋敷の敷地内に结界を張られて、その中で延々と、その、鬼ごっこをされたそうで。捕まったものから一人ずつ、罰だと殺されていったそうなんじゃが。」

かごめは怯えた様に思わず体を摩った。改めて聞く、風牙の持つ幼い残虐性と言うものを字肌で感じて、初めて会った時のことを思い出していた。

けれど、それに反して冥加は首を振った。

「かごめ様は人ゆえにこれだけで恐ろしいでしょうが。我ら妖怪はこの程度の嗜虐心は理解できませんぞ。何よりも、風牙さまの本質は山犬ですし、追いかけるうちに興奮していた可能性もありますしの。ただのお、風牙様が、お館様に見つかった時のことなのです。」

襲つて来た謀反者たちと殺しつくした風牙を父たる鬨牙王は止めた。鬨牙王は確かに妖怪にしては温和で、弱者にも優しくもあるが。それでも彼とて所詮は妖怪だ。自分には向かつて来た、そうして己のかわいい盛りの息子を害そうとした妖怪たちに対して慈悲をもつこともなかった。

そこまではよかつたのだ。ただ、少々妖怪として正しい息子の強さが証明されただけの話だった。

けれど、風牙は予想に反してこう言った。

あれらを連れて帰りたいと。

鬪牙王もこの言葉については不思議に思った。元より、彼の長子は確かに変わり者で、どこかずれた部分は多々あれど、それでも襲つて来たそれらを何故連れて帰りたいのかと。

それに、風牙は満面の笑みで答えたのだという。

はい、あの者たちはたくさん遊んでくれたのです。なので、是非ともお礼に食事でも振る舞つてやりたいのです。

たくさん、たくさん、遊んでくれて、僕はとっても嬉しいのです！

その声は、確かに冥加の口から発せられた言葉のはずだった。けれど、けれどもだ。

かごめは、その無邪気なセリフが、まざまざと風牙の声で耳の中に響いていた。

冥加はひどく神妙なような顔でかごめを見た。

「……かごめ様。妖怪というのはもちろん、人よりはずっと残酷であったり、情と言うものが薄かったりしますがの。それでも、我らとて、殺し合いを心の底から遊びや戯れと思つてはおりません。生死の在り方は確かにそれ相応に扱われておりますので。」

それ故にと、冥加は語る。

それ故に、風牙様を恐れる妖怪は多いのですよ。

「……風牙さんにとって、殺すって楽しいって言う事？」

「そうではないのじゃよ。風牙様に殺された存在など、戦などのことが殆どで、私怨で殺されたものなどほとんどおらんじゃろうな。あのお方にとって、殺すという行為自体がどういった意味を持つのか、よくわからんのじゃよ。」

「何よそれ。」

かごめは冥加の言葉の意味が分からずにぼやくように言った。それに冥加は体は震わせて何とも言えない声を出す。

「……あのお方は、本当によく分からんくてな。憎しみを持つとるかも曖昧で。怒るところなど、犬夜叉様が封印された折に八つ当たりのように戦で敵の妖怪どもを殺しまくっておったぐらいで。それこそ、それを除けばわしだつてあのお方の怒りなど見たことがないわい。どんな無礼も、どんな罪も、笑つて許されておつたよ。」

「それなら、慕われるものなんじゃないの？」

かごめは思わずそう言った。確かに、かごめとて彼の妖怪を恐ろしいと思つた

けれど、妖怪であるならばあのぐらいの恐怖位は普通ではないのだろうか。そうして、そこまで寛大ならば舐められることはあつても恐怖されることはないのではないか。

その言葉に、隣りで聞いていた邪見が呆れた様な顔をした。

「ならば聞くが小娘、お前さん、例えばの話じゃが。自分を殺そうとして来る存在がニコニコと笑っておはようと言つて来たらどうする？」

「え？」

かごめは唐突に話しかけてきた邪見のそれに戸惑いの声をあげる。

「えっと、助けてとか、止めてとか？」

「その存在は変わることなくニコニコと笑つて、可愛い子だねと微笑んで来たら？」

それにかごめは思わずそんな光景を想像する。それに、かごめは思わずぞわりと背筋を震わせた。

はくりと口を開けて、何と言えいいのか分からない。だって、邪見の言うそれはあまりにも意味の分からない状況だったからだ。

自分は殺されそうになっている。ならば、もつと言うべきことはあるだろう。

例えば、怨みだとか苛立ちだとか、優越だとか。はては、食欲だとか、喜悅だとか。かごめは今まで知りえた妖怪たちのことを思い出す。

邪見の語るそれらは、どれともかい離していた。かごめの知る何とも違う気がした。

「・・・あのお方の恐ろしいところはな、何が真か分からんところだ。殺生丸様とて、殺すときには何故かと言う目的を見つけられんことはない。じゃが、あのお方は、何もかもが分からん。」

愛らしいと笑いながら苦痛にのたうち回る様を眺め、けなげだと愛でながら滅びる様を見つめ、拒絶を寂しいと言いながら関心を捨て去り、向けられる情を嬉しいと微笑みながらち芥のように扱う。

邪見の言葉に、かごめは無意識のうちに背筋を震わせた。

自分でも、何を語られているのか分からない。自分でも、いったい何を恐れたのか分からない。

分からないことが、心底、恐ろしいと思った。

「……わしとて、あのお方への、この感覚を言い表すことは出来んが。だが、あのお方の怒りも、喜びも、憎しみも、楽しみも、とんと理解できん。そんな存在に仕えるなど御免こうむるわい。」

「風牙さんは、危険な妖怪?」

それに冥加が間に入る形で返事をする。

「害があるかないかと言われれば困りますなあ。あのお方は怒りを買わねば加害など向けることもありません。あの方の逆鱗は御兄弟のことぐらいなので。」

「直接危害を加えられないからと言ってよいものではないぞ?」

「どぅい、うい、とっ!」

邪見の方をかごめが見れば、彼は非常に嫌そうな顔をしている。

「あのお方は、時折困ったことに人にも助けを出すのだが。一度、食料不足の村に、とある木の実を分け与えた。その木の実は数日で実をつけるが、七日を過ぎる前に切り倒さねばならんものでな。」

「切らないとどうなるの?」

「近くにいる人を取り込み始めるのだ。言いつけを守らずに、滅んだ村は数多くある。」

それこそ、何百人と死んだのだろうな。

ぼんやりとした声音で呟かれた声音にかごめは息を飲んだ。軽々しく吐かれた、その夥しい死の数にかごめは少しだけ風牙の甘やかな笑みを思い出す。

「まあ、人であるお前は風牙様には近寄らん方がよいぞ。あのお方の寵愛は呪いであり、あのお方の無関心は平穩なのだ。良くも悪くもな。」

「距離感さえ何ともないなら、まあ得することもないわけではないが。あのお方に寵愛を受けすぎたものは不思議と厄を被るしの。」

そう言つて、目の前の妖怪たちはぶるりと体を震わせた。

それにかごめはいつの間にかたっていた鳥肌を摩る。かごめとて、人づてに聞いた話だけで

全てを断じる気はなかった。けれど、かごめの中で、風牙というそれへの恐怖心が湧きたってくる。

笑っていた、己への殺意を思い出す。

(……そうか、風牙さんの、殺意は。)

殺そうとしたい、かごめ自身への悪意など欠片だつてなくて。そこにあるのは、ただ、犬夜叉という弟への関心の結果にあつた。

それでも、かごめは、犬夜叉の柔らかなで悲しい横顔を覚えている。

恐ろしいのだと、心底思う。けれど、その犬夜叉のことを思い出すと、恐怖だけを抱いていいのか分からなかった。

分からない、分からない、分からない。

かごめの中にある、その妖への恐怖。そうして、犬夜叉の表情の中に見る風牙への慕い。

かごめのなかで、何かが嘔みあわない。風牙という存在へ抱くべき感情が、何か、嘔みあわない。

人を殺すというそれへの軽やかさを知っている。けれど、犬夜叉に向けられる慈しみの瞳を知っている。

その両方があるのは、妖怪として普通なのだろうか。

かごめは考える。けれど、それだけではないのだ。それだけではないのだらうと、そんな確信は持てるのに、理解が出来ない。

かごめは思わず、重くため息を吐いた。

「……邪見。」

そんな中、かごめの後ろから突然声をかけられた。かごめが振り返ると、そこには白銀の髪をした見目の整った男がいた。そうして、彼は完全に抵抗する気が失せるまでにいたぶられた犬夜叉だった。

「行くぞ。」

「あ、はい！殺生丸様！」

今までかごめが昼食用に焚いていた火に当たっていた邪見は慌てて立ち上がる。そうして、殺生丸は引きずられるままの犬夜叉をかごめの隣りにそっと置いた。

「い、犬夜叉!?!」

かごめは慌てて隣りに放られた犬夜叉に話しかける。犬夜叉はぐったりとしていたが気絶しているわけではなく、すぐに殺生丸に対して怒鳴る。

「つてめ！急に来たと思ったら何しやがる、せつ……!」

犬夜叉が名前を呼ぼうとした瞬間、殺生丸はぎろりと瞳に力を入れて睨んだ。それに、犬夜叉はぐつと言葉を飲みこみ、台詞を吐き出した。

「あ、兄上。」

「・・・お前が久方ぶりにようやく起きたと知らされたのでな。様子を見に来たが。」
殺生丸は呆れたようにため息を吐き、その場に蹲る犬夜叉を見た。

「弱いな。なにも変わっていない。素早さ、手数が多さ、打ち込みの強さ、柔軟性。全くと言つていいほど変わっていない。」

「そ、そんなの、眠つてたんだから当たり前だろうが！」

きさんと犬夜叉が吠えると、殺生丸はちらりとかごめに視線を向けた。

「・・・お前は弱かろうが、風牙が何を代価にしようと守り、生かすだろうがな。その娘は違うぞ。」

その言葉に犬夜叉の顔色が変わる。

「どういう意味だ？」

苛立つようなそれに殺生丸は呆れたようにため息を吐き、そして、持っていたボロボロの刀を一振り、犬夜叉に放り出した。犬夜叉はそれを受け取り、固まる。

「これ、親父の形見じゃ！」

「元より、お前に父上が残されたものだ。使い方はすでに見せたはずだ。次に会う時まで、戦える程度に使いこなすようにしろ。」

「でもー！」

犬夜叉は鉄砕牙を持ったまま激昂する様に殺生丸を見た後、まるで後ろめたいように

地面に視線を移した。

「これ、すげえ、欲しがってたじゃねえか。親父だつて、あんたに使いこなされた方が、切ずつと。」

段々と尻すばみな言葉に殺生丸は呆れたようにため息を吐いた。

「私はお前と違つて父上の庇護は必要ない。せいぜい、守られる程度の強さであることをお前は自覚するがいい、愚弟。」

そう言つて殺生丸はそつと、犬夜叉の頭を少しだけ、それこそ一瞬と言える感覚で撫でた。さらりとした、銀の髪を、撫でた。

「強くなりなさい、私の庇護も、父上の庇護も、そして風牙の庇護も必要ない程度にな。でなければ、もう一度失うのはお前だ。」

その時の、犬夜叉の顔を、かごめは覚えている。まるで、子どものように、幼くて、切なくなるほどに拙い、表情で犬夜叉は殺生丸を見上げていた。

犬夜叉の頭から手を離して殺生丸は次にかごめへ視線を向けた。

「娘、お前もこれと共に在るのなら、風牙には気を付けなさい。」

「え?」

「あれはお前が望まずとも手を差し出すが、それをけして取つてはならない。あれは、人が関わるものではない。」

妖怪も同様だろうが。

それだけを言い捨てると、殺生丸は何の未練も無いというように背を向けてその場から去っていく。それに何の戸惑いも無く、振り返る気配も無い。

犬夜叉は思わずという顔で立ち上がり、そうして渡された刀を固く両手で握りしめていた。

犬夜叉は殺生丸に声をかけることはなかった。けれど、何かを言いたいというように、じつとその背を見つめていた。

かごめはなんて声をかければいいのか分からなかった。だって、その顔が、あんまりにも幼くて。

だからこそ、かごめは何となしに言葉を吐いた。

「・・・よく、分かんないけど。あんたのお兄さん？」

「少しの間、一緒に旅をしたんだ。一人で生きていくために、鍛えてもらった。その時、少しだけ、風牙のこととか親父のことを教えてくれたんだ。」

犬夜叉はそう言つて、自分の手に持つ刀をじつと見た。

「あいつ、認めてねえけど、親父のこと大好きでさ。よく、親父の武勇伝を聞かせてくれたんだ。この刀だって、すげえ、気に入つてて。」

強い人だったんだって、尊敬してた。

掠れた声に、かごめは思わず声を漏らした。

「風牙さんのことも好きだった？」

犬夜叉の顔色が明らかに変わった。けれど、かごめは何かを言われる前に、言葉をかぶせた。

「風牙さんのこと、怖いって思うけど。あんたを大事にしてくれたっていうなら、優しくしてくれたっていうなら。怖いだけじゃないと、思うわよ？」

その言葉に、犬夜叉は心底驚いた顔をした。そうして、まるで泣きそうなほどに、悲しそうで、そうして切なそうな顔をする。

「お前は、風牙は関わるなよ。関わったってろくなことにならねえからな。」
でもな。

犬夜叉はまるで雨だれのような微かな声を出した。

「誰かを大事にしたいと思ってるんだ。こええけどよ。それでも、優しくしてくれただ。ただ、大事にするやり方が下手くそで、よくわかってねえだけで。」

かごめはその、掠れた声に、子どものように拙い声に、そうねとこくりと頷いた。

神様が微笑んだ

けたけたと、宴会が続いている。広々とした広間は、ふすまも取り払われて、皆が皆がそれぞれに酒を飲んでいる。

宴会の客人たちは、統一感というものが欠片もない。

人もいる、その合間には明らかに人ではない魑魅魍魎がうごめいている。

それでも、どれもが朗らかに、楽しげに笑っていた。この世で、これほどに楽しい時間などはないというように。

その中心、一際目立つ男の姿があつた。

美しい男であつた。白銀の髪に、満月のような瞳をしたそれは、まるでこの世の煮凝りのようなものたちを侍らせている。

手足の欠けた人間に、ぎざぎざの歯で笑う妖怪、美しい天女に、醜い子供。

それらは、寸分違わぬように幸福そうに、中心にある男に手を伸ばしていた。

男の姿をした、それはあやかしであろうと人であろうと、望まれれば平等に微笑みか

け、名を呼び、全てを愛でていた。

その時、廊下に通じる障子が開いた。そうすると、広間に少女と男が入ってくる。

少女は黄金の髪をしており、まるで坊主のように袈裟を着込んでいる。男の方はまるで老人のように腰を曲げており、体中を包帯で包んでいた。そうして、それを隠すように茶色く分厚い布をまといっている。

「……宴は終わりだ。休みなさい。」

腰の曲がった男が言えば、宴に興じていた者たちは素直に周りを片付け始める。手早く処理された広間は先ほどまで喧噪など嘘であったかのように静まりかえっている。それに、人の姿をした化け犬、風牙はつまらなさそうに頬杖をついた。

「もう、お開きか？」

「続けられても構いませんが。」

「いや、いい。お前らが来たって事は居場所がわかったってことだろう？それなら、早く動かなきゃなあ。」

「……主様、御母堂様より伝言もございますが。」

「お袋から？また、珍しいな。母上の方から先にしてくれ。」

「はい、その、伝言自体は簡潔なのですが。孫の顔はいつ見せる、と。」

少女、白縫の言葉に風牙はうーんと首をかしげる。

「珍しいな、あの人がそんなことを言うとは。孫ねえ。子ができたことはあるが流れてしまったからなあ。俺の縁談の話でも出てるのか。そういえば、冬嵐はどんな様子だ？子が流れてほしいぶ落ち込んでいたしな。」

「部屋に引きこもられております。」

「そうか、かあいそうになあ。俺が行くと、子のことが申し訳ないと泣いてしまうしなあ。」

「風牙様も、お子を亡くされてお劳しいことです。」

「ああ、まだ見ぬ我が子だ。かあいそうに。きつと、犬夜叉や殺生丸のようにかあいいかったようになあ。だが、死んだのならばその程度であつたのだろうさ。死者を気にしても仕方がない。」

冬嵐は、50年前に風牙が虐殺した豹猫族の生き残りだ。犬夜叉が封印された件で相当の八つ当たりをしてしまったと当時の風牙はひどく反省したのだ。そうして、自分の捕虜に当たる冬嵐のことを手当てし、それ相応に丁寧に扱った。

そうして、豹猫族に冬嵐を返そうとはしはした。

が、豹猫族は酷なことにそれを拒否したのだ。今回の詫びとして、冬嵐については風牙に差し出すと。

風牙はそれに察してしまった。ああ、きつとこの娘は一族に捨てられてしまったのだ

と。

なんて、かあいそうなのだろうか。

冬嵐を風牙が引き取ることに関して文句を言う者は殺生丸以外にはいなかった。風牙としても、殺生丸が冬嵐を側に置くことを嫌がるのもわかる。自分たちに刃向かってきた存在に慈悲をやるのは不愉快かも知れない。

ただ、風牙は冬嵐のことがことさらに哀れであった。寄る辺もないならば、自分の側に置いてこれからの時間をゆつくりと過ごすのもいいだろう。

「子ができれば、元気になるかと思っただがなあ。なかなか上手くいかないものだ。」
風牙が冬嵐に子を生まれせよと思っただのは、一人の彼女も子でもできれば心の慰めになると思っただのだ。

己が母も、子ができれば大抵のことは気にならなくなると言っていた。夫を探してやることも考えたが、豹猫族は自分に彼女を差し出してきたのだ。

化け犬と豹猫族の和解を取り持つ彼女を他人に差し出しては冬嵐の意味がなくなってしまう。

何よりも、周りからそろそろ跡継ぎについて五月蠅くなっていたこともある。

西国の大将については殺生丸で確定してはいる。風牙も父親の後については興味もなくそれで納得している。何よりも、弟を支えるという立場についてはおいしいと思っ

ていた。が、その殺生丸は地位自体に興味はなく、諸国を武者修行で漫遊中だ。

今のところ、諸々の采配や部下たちの世話については風牙と母が行っている。

風牙の名は良くも悪くも有名で、彼が仮とは言え大将の立場にあることに關しては文句はなかった。

ただ、そうは言っても彼自体が暴走する可能性はあった。そのため、彼への抑止力として周りには子供を作らせようと考えたのだ。さすがに、ここまでの化け物はもう生まれてこないだろうという希望的観測も込めて。

冬嵐に子について話したが、特別拒絶もしていなかった。別段、子供の母が人であろうと構わないのだが、それだと自分よりもずっと早く死んでしまう。だからこそ、冬嵐は良くも悪くも母親として丁度良かった。自分の子供への興味と愛着、そうして状況により子を作ることを風牙は決めた。

今まで子がいなかったのも、ただ単に欲しいと思わなかっただけの話だ。ただ、周りから望まれるならば作っても構わないと思いつたに過ぎない。

ただ、流れてしまったことに關してはひどく悲しいとも思う。

「冬嵐には何か、好物でも差し入れてやってくれ。あと、お袋にはまた機嫌伺いに行く」と伝えてくれ。」

「賜りました。」

「それで、坊。足取りは掴めたか？」

「はい、散らばっております配下や人にも探りを入れましたところ、この頃やたらと木々が枯れ落ち、人が病に伏せることが多くなった場所があると。」

「そうか、ならさっさと行こうか。なに、久方ぶりだが、あれのことはよく覚えているよ。あの子は、今、なんと名乗っているんだっけか？」

「……奈落、と。」

その日、奈落はいつものように結界に守られた城の中、奥深くの自室にいた。

眠ることも、何かを食すこともない。

ただ、四魂の欠片を集めるために、思案を進めていた。

そうして、ざわりと背筋が震える。何かが自室に近づいていることを理解した。奈落は、それに気配の方に視線を向けた。御簾越しに、何かを立てていた。

それは、まるで旧友に話しかけるかのように朗らかに声を上げる。

「やあ、久しいなあ。鬼蜘蛛。」

そういつて、それは微笑んだことがわかった。奈落は、自分を訪ねてきたそれが何かわからなかった。今まで接触してこなかったはずのそれに固まったが、それでも彼の本能と言えるもので理解する。

「せっかく会えたんだ。なあ、顔を見せておくれ。」

それに奈落は突然現れた侵入者への動揺よりも先に、操られるように立ち上がる。御簾を越えた先、そこにはまるで仏のように優しい笑みを浮かべたものがいた。

白銀の髪に、満月の瞳。そうして、勇ましくも美しいその美貌。それ、犬夜叉の兄である風牙はにこりと微笑んだ。

「……せん、せい。」

奈落が絞り出した言葉に、風牙は久しぶりに聞いたなあと頷いた。

「何故、ここに?」

「うん、いや。犬夜叉から話を聞いてな。ああ、今は奈落と名乗っているのか。」

風牙はそう言いつつ、その場に腰を下ろした。それに伴って、奈落もまた同じようにその場に跪いた。あぐらをかき、頬杖をついた風牙は愉快そうに微笑んだ。

「何だ、今回は大分男前になっているな。いや、前も俺は好きだったが。手間のかかるやつは好きだぞ?」

そう言つて風牙はすつと奈落に手を差し出した。奈落はその動作の意味がわからずに、その手をじつと見る。

「おいで。」

たった一言だ。それが発せられると同時に、奈落は従ってしまう。己の中の矜恃や、警戒心ががたがたと揺れているというのに、奈落はまるで操られるようにそれに従ってしまう。

風牙の近くまで這いずっていく。そうして、彼の前で正座をし、傳くように目線を下げた。

そうすると、風牙はまるで猫の顎を搔くように奈落の顔をすくい上げる。

そうして、上げさせた顔をのぞき込んだ。

「……ふふふ、お前は変わらなずにかあいいねえ。」

久方ぶりに聞いたそれは。頬を撫でる指にぞわりと背筋が震える。それが危機感によるものか、それともまったく別のものであるのか。

奈落にはとんとわからない。

(……ああ。神様とは、変わることもなく美しいのか。)

頭の隅で遠い昔の愚かな男が嬉しそうに笑っていた。

奈落の元となった人間、野盗の鬼蜘蛛は桔梗によつて命を救われた。確かに、桔梗によつて一命は取り留めたものの鬼蜘蛛は死んでいてもおかしくはなかった。

いくら、体が頑丈であろうと火にかけられ、谷に突き落とされた彼を治すには桔梗た

ちの使う薬草だけでは足りなかったのだ。

奈落の中にある鬼蜘蛛の記憶の中でも、最初の頃はほとんど意識など無かった。

けれど、その時のことだけはよく覚えていてる。

喉の通る、甘くて冷たい何か。頭がくらくらとするような、旨い何か。

かすれた視界が、その時だけはよく見えた。

そうして、その先には光り輝くような何かがいた。

「……へえ、昔かっぱらった霊薬だけだ。ふむ、お前さんには丁度良かったのだな。」

輝くような白銀の髪、夜にぼっかり浮かんだ満月のような眼。上等な着物を来たそれは、まるで仏のような笑みを鬼蜘蛛に向けた。

「だ、れ?」

かすれた声でそういえば、人ではないとはわかる彼はゆるりと笑った。

「俺かい?俺は、風牙。今はお休み、人の子よ。そうしたら、たくさん話をしような。」

今まで欠けられたことのないような甘やかな声の後に、硬い手が自分の目を覆った。それは、信じられないほどに優しい手つきだった。

それから鬼蜘蛛はなんとか命をつなぎ止めることに成功した。桔梗は薬草が効いたのだらうと言っていたが、鬼蜘蛛はなんとなく自分がなんとか命を繋いだのは違うものであると理解していた。

それでも、鬼蜘蛛はそれを口にする気は起きなかった。言っではいけないと言われていたのだ。

自分の世話をする女が去った後。草木さえも眠る丑三つ時だ。

どうせ、眠っていることしかできないのだ。昼間にたんまりと眠って、夜はずっと起きている。鬼蜘蛛は今日は来るだろうか、じつと出入り口を見つめていた。

そうして、人影が見える。

「……よう、こんばんは。」

「せんせー、来たのか？」

「ああ、来たよ。鬼蜘蛛。」

それは、にこりと笑った。

鬼蜘蛛が時折やってくる妖怪を先生などと呼ぶようになったのはいつからだろうか。

ただ、いつの間にか鬼蜘蛛はその妖怪をいつの間にか慕っていた。

きつかけは何だったろうか。鬼蜘蛛は考えるが、よく覚えていない。ただ、風牙という存在は良くも悪くも賢しく、けれど優しい存在だった。

「鬼蜘蛛、どうかしたか？」

「いいや、先生。なんでもねえよ。」

「そうかい。そうだ、前の話の続きを聞かせてくれるか？」

「ああ、わかったよ。前に、ある村を襲ったときの話なんだがな。」

鬼蜘蛛は嬉しそうに話を始めた。

風牙は鬼蜘蛛の話をにこにこしながらよく聞いてくれた。自分がどれほど見事に盗みを働いたのか、どうやって周りを殺したのか、とうとうと話した。

風牙はそうかいそうかいといいながら、それを聞いてくれる。嫌な顔もしない、すごいなあと笑ってくれる。

お前は強いねえ。ああ、ここで命を繋ぐほどにお前は命にあふれているんだ。素敵だな。よしよし、鬼蜘蛛。いい子だ、いい子。

甘い声をする。いい子だと、まるで子供のように扱われるそれが心地良かった。

孤児、いらぬ子、生まれて奪うことしか知らない子。

その言葉には、鬼蜘蛛を蔑むような色は欠片だって無かった。その妖怪には、どこまでも鬼蜘蛛への蔑みはなかった。

桔梗という存在へ焦がれていた。彼女は最初に鬼蜘蛛を見つけてくれた。見ず知らずの自分を拾い上げ、死にかけの自分をいやしてくれた。

己に与えられた無償のそれに焦がれていた。そうして、柔らかな手が自分に触れてきた。

欲しいなとそう、自分に与えられたその女の慈悲にきつと焦がれていた、太陽に手を伸ばすかのように暖かなそれを求めていた。

女を愛するなんて、肉欲でしか知らなかったけれど。それでも、その男は確かに恋をしていたのだ。

けれど、その目にはいつだって憐憫がある、悲しみがある。湿りきった感情がよく理解できなかつた。

けれど、その妖怪の眼は違つた。

満月の眼は、いつだって柔らかに細められていた。

その目に、哀れみはなかつた、悲しみはなかつた。からりと晴れたその感情はいつだって鬼蜘蛛の心を柔らかに慰めた。

それはいつも、鬼蜘蛛のなしたことを責めなかつた。そうして、哀れまなかつた。いつだって、鬼蜘蛛の頭を撫でてどうかいと領いてくれた。

何よりも、彼は鬼蜘蛛にわかる程度に賢しく、それと同時におごりを持たなかつた。鬼蜘蛛自身は気づいていなかったが、風牙は良くも悪くも誰に対しても平等であつたこともある。先生、とそう呼んだのは何故だつたらうか。

ただ、昔、偉い物知りをそう呼んでいた誰かを覚えている。だから、先生と呼んだ。

桔梗は鬼蜘蛛にとって自分とは違う、遠い昔に与えられなかつた美しい何かの象徴

だった。だからこそ、欲しいという渴望があつた。

けれど、その妖怪は違った。

その妖怪は、やけどの痛む日によく現れた。体が、ずくずくとうずくような感覚に襲われる時に限っていつの間にかするりと近くにいた。

いてえ、いてえんだ。

よしよし、そうか。ほら、痛み止めだ。飲むといい。

なあ、手を握ってくれよ。

いいぞ。ほら、眠るまで握っていてやろう。

なあ、眠れるまで何かを話してくれよ。なんでもいいからよ。

そうだな。なら、この国の神様の話をしてやろうか。昔、国を作った神の話だ。

それはよく、桔梗のいない時にやってきた。

仲が良くないから、あまり会えないんだ。言わないでくれな。

そう言っていたのを覚えている。

なあ、あんた。

ああ、なんだ？

なんで俺によくしてくれるんだ。あんた、人じゃないのによ。

不思議なことを言うな。なら、人はお前に優しくしてくれたのか？

でも、わかんねえ。なあ、あんたはどうして。

かあいいからさ。

それは、笑っていた。遠い昔に見た、仏像のように笑っていた。

鬼蜘蛛は、昔聞いた坊主の話を思い出した。

昔、讃岐国にどうしようもない暴れ者がいた。それは、坊主にこんな話を聞いた。

西の果てには仏がいて、阿弥陀仏と唱えれば応えてくれると。

それは、誰も憎まない、どんな人間だって受け入れてくれる。

その後は、どうなったのだろうか。結局、その坊主のことも鬼蜘蛛は殺してしまった。

なあ、あんたはどうして俺に会いに来たんだ？

きっかけは単純だ。桔梗が世話をしていたのを見てな。このままでは死んでしまうから薬を与えたんだが。

生きていて良かったよ。

そう言つて、それは変わることなく鬼蜘蛛の手を握ってくれた。

きつと、と。その時の鬼蜘蛛は思ったのだ。

神様というものが、仏というものがあるのなら、目の前のこれのことを言うのだろうか。と。

だって、神様だって、仏だって、鬼蜘蛛のことを助けてくれるものはいなかったから。

己で探さなくては会えない仏なんてどうでもいい。

それは、自分を見つけてくれた。鬼蜘蛛を見つけてくれた。生かしてくれた、苦しい日に手を握ってくれていた。桔梗のいない時、一番に苦しいとき側にいてくれた。

美しい妖怪は、鬼蜘蛛の神様になった。見上げた先、何の迷いもなく甘えというものをさせるそれは、愚かな男にとって何よりも慕い続ける神様に成り果てたのだ。

「すっかり様変わりしたな。この城の人間を取り込んだのか？」

「はい。」

あぐらをかいた風牙の膝の上に、奈落は頭をのせていた。膝枕のような格好のそれは、べつに奈落が望んだことではない。ただ、風牙は奈落を愛でるためにそうさせているだけだ。

逃げなくてはいけない。

滅びを何よりも畏れる奈落は、畏れに身を震わせる。

早く、逃げなくては。

その男がどれだけ犬夜叉を溺愛しているのか、伝え聞いた話で知っていた。自分の行った所業を知れば、すぐにでも殺しにかかるだろう。

（今更、私に何のようだ!?)

そう思うというのに、その膝の上で愛玩動物のように頭を撫でられると心地よさで頭がゆだるようだった。まるで親の膝の上に居座る子供のように、そこは心地が良かった。そうして、その言葉はまるで呪いのように奈落の身を従わせる。

己の心の奥に残った鬼蜘蛛の感情は、いつにも増して奈落の行動を縛り付ける。

元々、鬼蜘蛛に妖怪との契約についてを教えたのは風牙であった。それを鬼蜘蛛は選択し、そうして奈落が生まれた。

「……先生、何用なのでしようか？」

なんとか喉の奥からひねり出したそれに、風牙はふむと頷いた。そうして、とんとんと肩を叩く。奈落はそれによりやく風牙の膝から解放された。

「いや何。お前の噂を聞いてな。少し、様子を見に来た。」

「様子を、ですか？」

「ああ、お前さん。犬夜叉相手に色々やっっているらしいな。」

それに奈落の体は固まる。目の前で、変わることなく慈しみに満ちた微笑みを浮かべたそれを見る。

殺されると、そう思った。けれど、体は固まって動かない。目の前の存在は、それを見ている。ならば、ここにいないくていけない。何故か、そんなことを考えてしまう。

「私に、罰を下すのですか？」

「何故だ？ああ、そういえばお前さんが桔梗と犬夜叉の仲を引き裂いたのか。もしか、犬夜叉のことを気にしているのか？」

風牙は、変わることなく微笑んだ、いつものように、御仏のように、柔らかに微笑んだ。

気にして無くていい。お前をとがめる気はないしな。

あつけらかんとした返答に。奈落は目を見開いた。

「そりゃあ、当時はそれ相応に怒っていたがなあ。だが、八つ当たりは散々したしな。もう、すつきりしてる。いや、それ以上に俺はお前に礼を言わなくていけないな。」

風牙はそう言った後に、うつとりとした、恍惚的な顔をする。

「俺は、あのとき、怒るといふ感覚を知れたからな。」

楽しいも、嬉しいもわかるんだ。悲しいも、まあわかるんだ。でもなあ、昔つから怒りつてのがわからなくてなあ。

犬夜叉が封印されたときも、何だろう。自分でどう思ってたのかわからなくてな。それで豹猫族との戦いが来て、叢雲牙のやつに怒りを解き放てとか言われたからさ。

「初めてだ！ほかの奴らは、あんなにものをいつだって抱えてんだろ？頭がゆだるみたいで。それと同時に、熱くなって、叫び出したくなるような激情！ああ、何という悦楽か！爆発するようなそれを振り回すあれを、俺は初めて知った！」

まあ、相手が弱すぎて不完全燃焼だった部分もあるがな。

奈落は固まって、目の前の存在を見る。にこにこと、にこにこと、それは心の底から嬉しそうに笑っていた。

そうして、奈落の頬を撫でる。

「そうだ、お前にも褒美を与えなくてはいけないな。」

おぞましいと、奈落でさえも思った。

それは確かに犬夜叉を愛しているのだと思う。封印された当時のことを語るそれは、確かに悲しみに満ちていた。けれど、目の前で、その敵を前に浮かべる慈しみのそれは何なのか？

笑っている。それは、心の底から愛おしいと言うように奈落に笑っていた。

だというのに、頬に添えられた手への心地よさを感じずにはいられない。

「あ、あなたは。」

「ああ？」

「わしに怒りはないのか？」

「どうしてだ？お前は何も悪くないだろう？」

悪いのは桔梗じゃないか。

心の底から意味がわからないというように、それは不思議そうな顔をした。

わからない。わからなかった。

奈落の中にある、鬼蜘蛛の記憶の中で仏のように笑っている男を知っているが故に。そのことがわからなかった。

(いや、違う。わしは、鬼蜘蛛ではない。奈落だ。わしの目で、これを理解しなくては。)
「お前をとがめる気はない。大体、犬夜叉も死んでないしな。妖怪同士ならよくあることだ。ああ、だが。確かにあの子が死んでいたらそれ相応に咎は受けさせたが。なんだからだで生きているしな。」

奈落の中で、仏のように優しい妖怪の影が揺れている。

そうして、目の前で喋る、意味のわからぬそれ。自分は何を見ていた、あの男の感じていた優しさは、どこにある？

慈しみ深かった、優しい、野盗にさえも分け隔てのないあの人は。

人でなしが、そこで笑っていた。

「わしがうごけば、多くの人が死にますが。よろしいのですか？」
奈落は、そう問うた。

何故、そんなことを聞いたのだろうか？

ただ、記憶の中の男ならば、きつとそれを否とすると、そう。自分の中で巻き起こる落差をなんとか埋めようとした。

壊れていく幻想を、必死につなぎ止めようとした。

「何故？」

不思議そうに、妖怪は首をかしげた。

「おかしなことを言うな。お前が殺さずとも、人は死ぬだろうに。」

病で、偶然で、そうして戦で。お前さんが何をせずとも人は好き勝手に死んでいくぞ？

触れてはならない、してはいけない、己だけで生きていけぬ弱さを抱えて、人は結局愚かな選択肢の内に死んでいく。

いくら、俺がやめよと言っても、あれらはそれを無視して死んでしまうと言うのに。

今更、お前が何がしようの結果は変わらないだろうに。

「まあ、死んでしまっても人も、妖怪も新しく生まれてくるからな。死んだそれに執着してもしょうがない。新しいものを愛してやればいいだろう。」

そうだ、四魂の欠片を集める上で利用できるかも知れない。何か、ここで媚びでも売れば、もしかすれば。

ぐるぐると考えていたそれは、風牙のそれでがちやりと壊れる。

必死に奈落として思考を始めようとするが、それよりも先に飛び込んできた単語に持つて行かれる。

「鬼蜘蛛、どうかしたか？」

自分を呼んだ、それ。その名前、それに奈落は初めて自分を縛る何かを引きちぎった。

べり、だとかぐちり、だとか。嫌な音が部屋に響く。

「……わしは、鬼蜘蛛ではない。」

奈落は人の身を解いて、自分に取り込んだ妖怪たちを解き放った。下半身はすでに人ではなく、幾多の妖怪たち一部がうごめいている。

奈落は脅すように、風牙を囲うように自身の一部で覆う。

蟲のようなそれ、ぐちゃぐちゃとしたミミズのような何か、龍に似たうろこで覆われたそれ。

何をしても心地が良いとは思えない、おぞましい奈落の様子に風牙は変わることなく微笑んで見せた。

「すごいな。昔とは大違いだ。これでもう、どこにでも行けるな。」

優しい声だった。その状況とは、あまりにも場違いな声だった。けれど、それでも、奈落は思わず固まってしまった。

似たようなことを、風牙は鬼蜘蛛にもかけていた。

元気になったら、そうだな。一緒に行くか。何も考えない旅というものもなかなか楽

しいぞ。

「そうだ、そんなことを言っていたから。だから、元気になって、妖怪と契約をしてでも。」

桔梗をなんとか手に入れて、そうして、その神様の元で。ただ。

とらわれた思考の中で、自分の頬に、また手が触れた。

「ああ、そうだな。すまない、奈落。そうだ、お前は奈落だったな。」

それに、崩れ落ちるように強ばった体から力が抜けた。それに、風牙は心の底から楽しそうに笑っていた。

「ようし、ようし。そうだな、名前を間違われるのは悲しいな。ようし、ようし、それでもお前は本当にかあいいねえ。」

昔と変わることもなく、仏のようにそれは笑った。そうして、奈落の頬にそつとあやすように口づけをした。まるで、幼子を抱くように、奈落のことを抱きしめる。

「ようし、ようし、かあいいねえ。一人で、何も手に入らない、鬼蜘蛛の影に怯えて。奈落、お前も本当に。」

かあいいねえ。

遠い昔に見た、仏のようなそれは確かに自分と同じ化け物であることを奈落は理解した。

それでもなお、己を写す満月の瞳は変わることなく美しかった。桔梗でさえも、浮かべたことのない、敵意も、蔑みも浮かばない、優しいだけの瞳をしていた。

奈落は呆然と、自室で風のように去っていった風牙を見送った。彼は、また来るといつて言ってしまった。

そうして、奈落の好きなようにするようにと。

四魂の欠片を集めるのも好きにするが、いいと、そういつて。

奈落は犬夜叉と敵対する旨を伝えはしたが、風牙は心の底から不思議そうな顔をした。

変なことを言うな。あれとて俺の弟だ。この程度生き残らなくてどうする？それに、この頃上の弟にも甘やかすなど散々言われているし。まあ、少しは試練を与えてもいいだろう。

まあ、何かあれば助けてやる手段はいくつもあるしな。好きにしなさい。

奈落は、何故、それを殺せなかったと考える。桔梗にでさえも、害そうという意志は持てたというのに。

風牙を前にした瞬間、全ての意識が縛られたかのように機能しない。それにすがり、それに甘え、神を見上げるかのように慕わしいという感情が止められない。

忌々しいと心から思う。今でさえも縛られる己の心に、そうして未練たらしい人である部分に。

殺さなくてはいけない。自分を、何よりもあれは邪魔するだろう。

けれど、心のどこかで風牙は自分を否定しないと無邪気に思っている節がある。

彼は自分の味方であってくれる。彼は自分を守ってくれる。助けてと言えば、きつと、きつと。

(あれは、わしを、愛している。)

身の毛もよだつ考えに、奈落はかんしゃくのように畳を殴りつけた。

「くだらん!」

絶叫のようなそれ。

なんて愚かな考えだろうか。なんて浅ましい心だろうか。

あんなにも笑っていても、結局あれとて畜生の化生に過ぎない!

(あれとて、どうせ、犬夜叉を選ぶ。)

吐き気がする。

犬夜叉、犬夜叉、犬夜叉!!

人であつたいつかが、奈落の中でわめき立てる。最後は、いつだって、選ばれるのはあればかり!

「……桔梗。」

自分を振り返ることなく、日の中に出ていく女の名を呼んだ。暗い洞穴の中で、日差しの中で少年と逢瀬をする女のことを考えた。

そうして、暗闇の中で自分に微笑んだそれ。

「先生……」

無意識に紡いだそれは、まるで子供のようだった。

「面白いと思わないか?」

「何がでしょうか?」

風牙は奈落の城からの帰り道、一坊を連れていた。白縫は丁度、風牙の母への使いに出していた。

「妖怪つてのは、何かの象徴なのさ。俺は、犬。白縫は狐。大抵の妖怪はな、己が生まれた概念つてもものにとらわれる。」

奈落はな、引き離せると思つてるんだよ。己が生まれた起源から。

妖怪は、自分の生まれた起源にとらわれる。犬であること、狐であること、母である

こと、群れをなし、人に畏れられる。

そうあることにとらわれる。

奈落は、永遠に桔梗というものに囚われる。奈落は、永遠に桔梗への憎しみに囚われる。

それが、彼の生まれた理由だから。

そうして、奈落は一生、風牙への信仰心を持ち続ける。彼は一生、風牙へ逆らうことはできない。

「まあ、子は一生親を振りほどけない。俺が奈落を作ったようなものだから。」

風牙は、奈落の浮かべた子供のような顔を思い出す。

さすがのようなそれ、呆然とした、無防備なそれ。

「ですが、放っておいてもよろしかったので？殺すことも考えておられたのでは？」

「いいや、あれは俺を慕っているしな。俺に愛されたいやつを、どうして殺せるものか。それにあれは生かしておいた方がずっと面白いだろうからな。」

風牙の脳裏には、弥勒法師と珊瑚のことを思い出す。

喜劇はもちろん楽しい。だが、そればかりでは飽きてしまう。悲劇ももちろん、愛おしい。そこには、誰かの激情が隠れているから。だが、人と人同士のそれでは単調すぎる。

「いやはや、やはり。一人ぐらいは舞台回しも必要なのだ。」
そういつて、それはにんまりと笑った。

簡素な試験

「……うーん。」

白銀の髪に黄金の瞳をしたそれは、にこにここと人好きの笑みを浮かべていた。火山が近いそこは、地面の下から湯気が立ちこめている。大きな妖怪の死骸を利用したらしい工房には先ほどまで誰かがいたように物が散乱している。

うちかけの刀に火の落ちた鍛冶場。

「主様。」

「うーん？」

男、風牙はその場にしゃがみ込み頬杖をついて主のいない其所を見つめた。そこに、少女がやってくる。白縫はどこか気まずそうに、死骸に残った骨を見る。

「あの、こちらを。」

言われた方に目を向けると、そこにはでかかど引つ越しましたという字が彫られている。その文字を見て数秒、風牙はゆったりと首を傾けて笑った。

「うーん、さすがに踏み倒しはいただけいなあ。」

「……刀についてといでも構わん。ただ、一つだけ条件がある。」

その言葉に犬夜叉一行は顔を見合わせた。

彼らの目の前にいるのは、空を飛ぶ牛に乗って来た妖怪だ。痩せ細った翁の姿をしたそれは、神妙な顔で犬夜叉を見た。

突然やってきたそれは、刀々斎と名乗った。聞けば、彼は鉄碎牙をうった刀鍛冶だという。

刀々斎は鉄碎牙の現状についてぶつぶつと不満そうに呟いていたが、犬夜叉が顔をしかめて刀を研ぎにでも来たのかと問えば観念したかのように目を閉じた。

「条件なあ？」

「わしの、なんというか、命まではねらってる、かはわからんが。その、おそらく、良い結果にならないやつに、おわれとってえ……」

「だーかーらー！はつきり言いやがれって！」

「刀々斎。」

刀々斎のはつきりしないそれに苛立ったように叫ぼうとしたが、それを遮るように高い声が被さった。

声の方に視線を向けると、そこには金の髪に袈裟を着た一人の少女が立っている。それは、しゃらんと錫杖をならした。

「刀々齋、我が名は白縫。知るであろう、わかるであろう。さあ、翁よ。我が主が呼びであるぞ。」

見知った少女は、無機質な眼で刀々齋を見ていた。

「犬夜叉様、その老いぼれをお渡しください。それは、主様に無礼を働いたものです。」

白縫、己が兄に仕えている少女の存在に、犬夜叉は固まる。刀々齋は白縫のことを認識すると、怯えたように犬夜叉の背に隠れた。

「兄貴が、こいつを探しているのか？」

「ええ。その不届き者は主様との契約を反故にし、逃げ出したのです。犬夜叉様、それはこちらに引き渡していただけませんか？」

それに犬夜叉は迷う。確かに、長兄の風牙はお世辞にもまともと言えるわけではない。けれど、約束の一つを反故した程度で殺し殺されという結果に至ることがないことも知っている。犬夜叉は後ろにいる刀々齋を白縫に渡す決断をする。が、それを行動に移す前にかつと力強く肩を掴まれた。

「……頼む、後生だから助けてくれ。」

「別に、殺されるわけじゃねえだろうが。」

「お前、風牙がどんなやつか知らんわけじゃないだろう!？」

「知ってるから言ってるんだろうが。」

「なら聞くが、ほっすとうに、何もならんと言えるのか?」

その言葉に犬夜叉は思わず黙り込む。刀々斎のじとりとした眼に、かごめたちも思わず確かに頷いた。確かに、殺されることなどそうそうないと言えるが、さりとして殺されないとは断言もできない。

数年育てられた身としても、こうであるとは確信を持つことはできなかった。

「頼む、なんとか風牙への言い訳を考えるまでかくまってくれ!」

泣く泣くの見た目は哀れな老人の頼みに、さすがに犬夜叉も良心と言えるものが痛んだ。何よりも、そこまで風牙のことを畏れる気持ちもわからなくはない。

犬夜叉は諦めたかのようにため息を吐き、白縫に向かい合った。

「だめだ、白縫。風牙には俺がそう言ったと伝えておけ。」

「・・・わかりました。」

白縫はそう言った後、錫杖で地面と数度叩く。しゅんしゅんと軽やかな音がした。

「歌えよ、うたえ。」

それと同時に、地面からまるで森が突然現れたかのように木々が生えてくる。蛇のよ

うに、のたうち回るそれを背に、白縫は深々と頭を下げた。

「申し訳ございませぬ、犬夜叉様。」

何があつても連れてこいとの命なのです。

犬夜叉はぞわりと何かを感じ取る。そうして、本能のように鉄碎牙をかまえた。木々はまるで触手のように刀々斎へ向かつていく。

「ハのー」

犬夜叉は鉄碎牙でそれをのけるが、振り払うだけで精一杯だ。その余波を喰らう形で、珊瑚や弥勒も木々に襲われる。

「あ、あの子、めちやくちやじゃない!？」

驚いたようなかごめの言葉に刀々斎に付いてきていた冥加が叫ぶ。

「当たり前ですぞ!彼女は、数年前に滅ぼされた葛の葉一族が生き残り!幻覚はもちろんです、植物を操る有名な妖狐の一派なのですじゃ!おまけに、風牙様の気に入りて手ずから術を教わっているそうですぞ。」

「あの子、そんなにすごいの!？」

犬夜叉はそんなやりとりを聞きながら歯がみする。

風牙はそこまで誰かを連れて行動することはなかった。唯一、記憶にあるのは一坊だけだ。以前から、兄がつれている少女のことは気になっていたが、ここまでとは思えな

かった。

(くそが、こいつ……)

鉄砕牙一本で耐え忍ぶにはあまりにも木々が多すぎる。いくら振り払おうと、絶えずそれらは次々に芽吹き、茂っていく。

「……仕方ありませんね。」

白縫はそう言うのと懐から一つの花を取り出した。淡い桃色のそれを手のひらにのせ、そうしてふうと吹き飛ばす。風に誘われた花弁は、吹雪のように犬夜叉たちに降りかかる。

甘い、匂いがした。頭にたたき込まれるような強い芳香。ぐらりと体が傾いでいく。

「から、だに、ちからが。」

「かごめ……!」

見れば弥勒や珊瑚、七宝も同じように脱力していく。それに、白縫が近づいて来るのが見えた。

「鎮静作用のある花です。咎めは受けますが、申し訳ございません。今は、それを捕まえるのが先なので。」

「……りゃあ、だめだな。」

刀々斎はそう言い放つと、勢いよく炎を吐き出した。白縫はその場から勢いよく飛ん

だ。

熱風に思わず気を取られている間に、いつの間にか犬夜叉たちの姿は見えなくなつた。

それに白縫は悲しそうな顔をして、錫杖で地面を叩く。

「眠れよ、ねむれ。」

それに辺りでうごめいていた植物は見る見るに時を早回しするかのよう枯れ落ちていく。

何もなくなったその場で、白縫はしょぼくれるように肩を落とした。

「……せつかく、風牙様に頼まれたのに。」

その後ろ姿を遠くから、じつとカラスが見つめていた。

「……うーん、犬夜叉の方にいったのか、刀々斎は。」

風牙は己の住処の一室で、片目だけを閉じて頬杖をついていた。そんな彼の近くには手のひら大の木人形が置かれている。

風牙はそう言った後に木人形を指ではじく。それに、人型はあつさり二つに折れた。

おそらく、カラスが一匹崩れ落ちたが、所詮は傀儡の一つだ。

「どうされるのですか？」

部屋の隅にいた一坊の問いに、風牙は少しだけ考えた後に立ち上がる。

「仕事を放り投げたのは刀々齋が悪いしなあ。それに、犬夜叉がちゃんと強くなってるか、そろそろ見に行つていいだろう。」

奈落も、色々と動いているようだし。

風牙そのまま立ち上がる。

「坊、出かけるぞ。」

「はあ、ここまで犬夜叉が弱いとは予想外じゃ。」

「だーれが弱いだあ!？」

逃げた先の河原でそんなことを嘆いた刀々齋を犬夜叉は睨んだ。それに、刀々齋は言い捨てる。

「風牙の部下にさえ勝てねえのにか？」

痛いところを突かれて犬夜叉は黙り込む。ほかの皆も思わずそれに頷いた。

「にしても、風牙のところにはそんなにも多くの妖怪が集っているんですか、冥加様。」

「……まあ。言つちやあなんじやが風牙様の勢力は跡継ぎになつておる殺生丸様

より大きいしのお」

「そうなの?」

「殺生丸様は良くも悪くも自分の強さにしか興味が無いからのお。お父上が亡くなられた後、宙ぶらりんになった西国を仕切っておるのは風牙様なのじゃ。元々、お父上に仕えておった奴らの大半は風牙様の預かりになっておるし。」

「それは、いつかは全て殺生丸に譲られるんですか?」

「そういう約束じゃし。何よりも、風牙様もそういうことにあまり関心がないからのお。大体、それとは別に風牙様の配下がたくさんおるよ。妖怪も人間も、それに半妖もなあ。」

その言葉に珊瑚はなんとも言えない顔をする。

「……すがりついた方が、気楽なこともあるかもね。」

「おまけに、その部下たちも有象無象というわけでもなく、そりゃあ忠誠心もすごくてなあ。」

「でしようねえ。」

半端に野心があつたりすれば近寄りたくない種類でしようから。

弥勒のぼやきに皆が思わず頷いた。

「はあ、当てが外れたこれからどうしたもんか。」

「けっ!刀ぐらいうってやればいいだろうが。」

頭を抱えた刀々齋の言葉に、犬夜叉がそう吐き捨てる。それに刀々齋が首を振る。「だつてえ、うちたくないんじやもん。」

「だもんじやねえよ！」

「仕方がないじやろ!?どーも、あやつへ刀をうつとなると恐ろしゅうて仕方がないわ。どんな刀ができてもいいと言つたがのお。」

あやつは、それで何をするんじやろうか。

刀々齋の言葉に、何故かしんと辺りが静まりかえる。かごめは思わず、犬夜叉の方を見た。彼は、その幼い顔立ちに似合わない老いた瞳でじつと地面を見つめていた。

「刀々齋、お前さん、犬夜叉様の前でそんなことを。」

「だつてよお。言いたくなるだろうが。大体、あいつだつてすでに名刀を一口持つてるだろ?。」

「そうなの?。」

かごめがそう問えば、刀々齋は頷いた。

「さよう。元々、親父殿の持つておつた刀は三口あつての。犬夜叉の持つておる鉄碎牙。そうして、殺生丸の持つておる天生牙、使いこせば百の命を救える。そうして、もう一口。元々、親父さんが持つておつた叢雲牙。あれはなあ。」

「どんな力を持つてるの?。」

「一振りでも百体もの亡者を呼び戻す事が可能と言われておる。簡単に言えば、無限に湧き出る兵士を出現させるようなもんじや。おまけに叢雲牙の放つ獄龍破は、それこそ妖怪を数千も吹き飛ばせるほどの威力がある。」

「そんなに?」

皆は驚いたようにそういった。そうして、それを持っているのが風牙という事実には寒気がした。

「わしらとしては、あれは殺生丸に渡したかったんじやがなあ。あの刀自体、使いこなせるのは犬の大將や殺生丸、そうして風牙くらいじやろうし。まあ、色々と言がある刀なんじや。」

「……一度、あの方が豹猫族相手に暴れたこともありましたが。悲惨でしたのお。」
「あれか。そういや、あれのおかげで大分小競り合いもなくなったぞ?小物は全員、風牙にびびって。」

「まあ、元から大物はあの方とは関わり合いになりたくないでしょうし。おかげですっかり平和ですがな。」

「ちよつと待て。風牙のやつ、何かしたのか?」

「知らないのか?あいつ、お前さんが封印されている間に一度、そりゃあ荒れてなあ。」

「こりゃ、刀々齋!」

冥加の叱りつけるような声に、刀々齋はやべと固まる。かごめはそれに犬夜叉の方を見れば、彼はどこか憂いを含んだ眼で地面を見ていた。

それに、かごめは思わず犬夜叉の手を掴んだ。犬夜叉はそれに、首を振る。大丈夫だというような仕草に、かごめは思わず黙り込んだ。

「まあ、わしはそろそろ行くぞ。ともかくは、時間を稼げ……」

「おうおう、どこに行くんだ、とーとーさあい？」

間延びした声があった。それに、皆が声のした方に視線を向けると、そこには河原にあつた岩の上に腰を下ろして笑っている風牙がいた。

皆は、いつの間に近づいてきたのか、風牙へ警戒するように向き合う。風牙は、刀々齋へじつと視線を向けている。

「仕事を放り出して何してんだ？とつくに納期は過ぎてるはずなんだがなあ。」

刀々齋は犬夜叉の背中に隠れてもごもごと言葉が発する。

「……そのお、なかなか、納得ができるのが作れなくてなあ。あれだ、その、い、犬夜叉と戦つて、勝つぐらいしたら、ひらめきみたいなものが、くる、かも？」

刀々齋の言葉に風牙はゆつたりと眼を細めた。そうして、次にまるで石でも背負い込んだかのように体が重くなる。

かごめは、思わず風牙を見た。

そうして、見てしまった。

赤く光る、らんらんとした眼。頬まで裂けるように笑みを作った口元。

それは、殺意ではなかった。今まで感じた、殺意や悪意はなかった。それに名はつけられない、ただ、例えばどれだけ美しくとも火に触れることを厭うように、どれだけ芸術品でも刀を抱きしめることがないように、ただあるだけで忌避してしまう何かを感じ取った。

それぞれが固まるように、己に向けられる何かが過ぎ去るのを待っていた。

「……刀々齋、何を言うかと思えば、てめえ、俺に犬夜叉と戦えと？」

「あ、その……」

刀々齋は時間稼ぎにと思わず口にしたそれを心底後悔する。が、その威圧感はずぐに霧散してしまう。

「はっはっは！そこまでびびるなよ。別に、怒ってるわけじゃねんだから。ただなあ。」

「おい、風牙。もう、諦めたらどうだ？」

悩むような仕草をした風牙の横に、突然、白いひげを蓄えた仙人のような小人が現れる。おまけによくよく見れば薄く、幽霊のように向こうが透けている。

「鞘！おぬし、生きとったのか。」

「勝手に殺すな！こちとら、ピンピンしとるわい！」

「冥加じいちゃん、あの人、は？」

「あやつは鞘。叢雲牙を封じる役目のやつじゃよ。風牙さまの所に行つてから行方がわからんかつたんじゃが。」

鞘の方を見て風牙はどうしたものかと肩をすくめる。

「そうはいつても、俺もなかなか困つているんだぞ？親父の残した叢雲牙がこれまた使いくくてなあ。だから、もう少し威力の弱いものが……」

ふうふううがあああああああ!!

気だるそうに風牙は頬杖をつきながら考え事を始めると同時。どこからか、低い絶叫が響き渡る。それが風牙の方からしたと理解した犬夜叉たちは視線を向けた。

風牙は心の底からめんどくさそうな顔をして、己の刀を引き抜いた。

龍の意匠があらわれたそれから、声がしているようだった。

「風牙、貴様！あろうことか、この叢雲牙がいるというのに、ほかの刀にうつつを抜かすだど!?そんなことが赦されると思っているのか!？」

「だって、お前使いにくいんだよなあ。いちいち威力もでかいしよお。」

「お前が滅多に！使わぬから！どれほど！この叢雲牙が！優秀か！しかと！見せて！いるのだ！」

「お前、当分物干し竿な。」

それに悲痛な、風牙という絶叫は響き渡る。刀々斎はなんとも言えない顔で、叢雲牙を見た。

「知つとるか。あの刀、下手なやつが持てば操り人形になつて国がいくつか滅ぶような妖刀なんだぞ?」

それを聞けば、目の前で相当ぞんぎいに扱われている刀への哀れみは一押しになつていく。

「風牙、そのなあ、そいつだつて刀じゃし。もうちつと使つてやつたらどうだ? 大体、お前さんが刀を振つて戦うつてそうそうないだろうに。お前さんが封印については全部やつとるから楽させてもらつとるが、いうてのう。やつぱし、叢雲牙が物干し竿にされとるのを見ると、なあ?」

「鞘、鞘!よく言つてくれた!」

「でも、五月蠅いのは変わらないし。大体、使い手の好きにさせられない刀の時点で使にくい。新しい刀は必要だな。」

「風牙あああああああ!?!」

コントのようなその後、風牙はさつきと叢雲牙をしまい込む。そうして、岩から降りる。

「・・・さて、犬夜叉。それを渡してくれるか?それは俺に刀をうつと契約を交わしてい

る。別段、危害を加えるだとかしないさ。ほら、いい子だから。」

軟らかく微笑んだ兄を前に、犬夜叉は顔をしかめた。優しい声音が、耳に付く。

「ほら、かあいい、いい子。ほら、何もしやしない。兄ちゃんの言うことを聞こうな？」

犬夜叉はその時、改めて自分の無力さのようなものが腹にたまっていた。風牙の部下であるという、幼い少女に負けたこともまた無力感に膨らんでいたというのもある。

何よりも、鉄碎牙を作った刀々斎に再三、刀をたたき折ると言われていることに苛立っていた。

強くなりなさい。

もう一人の、兄の言葉を思い出す。

これでいいのか、無力さが腹にたまっていく。

自分の背後にいる少女。いつか、自分を矢で射って、そうして死んだ女。

ダブって、かき混ざるように苛立ちが募っていく。

「断る。」

吐き捨てるように犬夜叉がそういった。そうして、風牙をにらみつけた。

「刀々斎を渡して欲しけりや、俺に勝て！」

鉄碎牙を抜き、構えた犬夜叉に風牙は驚いた顔をする。それは、周りの存在も同じだった。

「い、犬夜叉!?!」

「そうか、ふむ。」

犬夜叉は大きく息を吐いた。

以前から、思っていたのだ。

殺生丸は強い。鉄碎牙がなくとも、次兄は自分を凌駕している。けれど、風牙はどうか。風牙が戦っている所など、一度だつて見たことはない。

戦う必要がないほどに、彼は強いのか？

けれど、たった一つだけわかるのは、今よりも強くならなければ奈落に勝つことさえもできないと言っただけだ。

何よりも、風牙も動きは見えないところがある。もしやすれば、敵対する可能性も犬夜叉は

考えていた。

風牙は犬夜叉を傷つけぬだろう。彼はどこまでも犬夜叉の幸せを願うだろう。

けれど、それだけではだめだ。

それだけではだめだと、わかるのだ。

「こつちから行くぞー!」

犬夜叉はそのまま大剣を振りかぶり、風牙に向かった。風牙は困ったような顔をし

て、それを躲す。

「犬夜叉、やめるんだ！」

弥勒の静止の言葉を振り切つて、犬夜叉は変わることなく鉄碎牙を振う。かごめはそれに、おすわりと叫ぼうとするが、それよりも先に犬夜叉が後方へと吹っ飛ばされた。

自分の近くへ転がった犬夜叉へかごめは駆け寄つた。犬夜叉は腹を押さえて、げほげほと咳き込む。

誰もが驚いた顔をした。

何故つて、それをしたのは風牙だった。誰も思つてさえもいなかった、あの風牙が犬夜叉に手を上げるなど。天地がひっくり返るような心地だった。

風牙は肩をふるわせて、けらけらと笑いだした。

「あつはははは！そうかあ、犬夜叉、お前ももう大人になつたんだなあ。」

風牙はうつとりと恍惚的な笑みを浮かべた。頬に手を当て、蠱惑的な笑みを浮かべるその様は、いつそ女よりもよつぽどに艶やかだった。

「ああ、そうだなあ。ああ、仲間を守るために強くなりたいんだな。ようし、ようし、健気で、愛おしくて、かあいいねえ。ようし、わかつたぞお。兄ちゃんがお前に稽古をつけてやろうか。お前は半妖だからなさあ。弱ちくくて、本気で稽古したら嫌われるかもつて不安だったんだが。もう、本気でやつてもいいんだな。よしよし、殺す気で行く

が。安心しなさい。」

腕、足、一本程度ならつなげてやるから。

にこりと笑った、無邪気な笑みを見てかごめの背に冷たいものが流れ落ちた。

「ま、まっつて、犬夜叉は……」

かごめがなんとか取り繕おうとする。けれど、それよりも先にかごめのすぐ隣を何かの衝撃波が通り過ぎていく。見れば、何かが通り過ぎたように荒れていた。

「でも、お前に俺も甘くしすぎたからな。きつと、心のどこかで俺が誰も傷つけないと甘えを出すかも知れない。それじゃあ、成長もできんだろう？だから、お前が少しでも甘えを出したら、ほかの奴らが怪我をする。安心しろ、痛いだろうが死にはしない、四肢もかけさせない。」

さあ、しつかり鍛えてやるからな？

深めた笑みはどこまで、御仏のように優しくして、子供のようは無邪気だった。

ああ、違う。そうではないはずだ。

かごめは、また、感じる明らかな齟齬にぞわりぞわりと背筋が寒くなる。

畏れて仕方がない、怖いと、明白に思う。

体に残らずとも、心に傷は残る。死ななければいいわけではない、問題なのは何が起こったかなのに。

それなのに、その笑みはやつぱり神様のように優しかった。

「があー！」

「ほら、だめだぞ、犬夜叉。足場を崩されればそれだけ攻撃も弱くなる。そうして、防衛だつてとりにくくなる。ふむ、下半身が弱いな。」

まるで蹴鞠でもするかのように犬夜叉が吹っ飛んでいく。

風牙は全くといっていいほど殴る蹴るだけであっさりと吹っ飛ばしていく。何よりも、やっかいなのは。

「そうら、自分のことばっかりじゃあだめだな。」

その言葉と共に風牙は手を一闪する。すると、小さな竜巻のようなものがかごめたちに向かっていく。

「くそがー！」

犬夜叉は急いで竜巻の前におどり出る。そうして鉄碎牙を振えば、竜巻自体は消えた。犬夜叉は血だらけでせえせえと息を吐く。

風牙は全くといっていいほど疲労を感じない。まるで子犬とじゃれ合うように安易で楽しげだ。それに、犬夜叉は改めて目の前の兄の強さを理解した。

（風牙から甘い匂いがしやがる。くそ、おかげであいつの居場所がわかりやすいはずな

のに。)

擦り傷だらけのせいとか、血の臭いが己から臭っていた。まるで、境のように甘い匂いと鉄くさい臭いが漂っていた。

どれだけ踏み込み、鉄砕牙を振おうとまるで全て見えているようにいなししていく。何よりも、鉄砕牙もなかなか重い。空ぶった瞬間に、腹に打撃がやってくる。

「ねえ、犬夜叉死んじゃうわよ!?!」

かごめが慌てたようにそう言うが、刀々斎はあーあため息を吐いた。

「こりゃあ、風牙のやつ、わしのことどうでも良くなってるな。」

「お嬢さん、まあ、落ち着け。あの竜巻もそこまでダメージがあるわけではないし。犬夜叉が気でも失えば攻撃はやむじやろう。」

「それまで犬夜叉のこと、ほっとけって言うの!?!」

かごめが叫ぶ中、弥勒が戻ってくる。

「だめですね。結界が張られていて出られません。」

「風牙が張ってるのか。」

「でしようね。」

そんな会話の中で、風牙は変わることなく犬夜叉をいなしては吹っ飛ばしていく。

「うーん、だが、風の傷が使えないのは痛いなあ。」

風牙は何を思ったのか、一気に犬夜叉に向けて距離を詰めた。そうして、おもむろに犬夜叉の左腕を切り落とした。

「あああああああ!?!」

絶叫が辺りに響き渡る。それに、かごめは目を見開いた。

「犬夜叉ああ!」

名を呼ばれた彼はその場にうずくまる。それに、風牙はやつぱり淡く笑った。

「ほら、あんまりにも弱いから腕を一つもらったぞ。どうしたものかなあ。犬夜叉。少しは強くなったかと思っただが全然だな。」

犬夜叉は風牙を見上げた。彼は、少しだけ呆れた顔をしていた。それに、犬夜叉は喉の奥に何かがつつかえるような感覚がした。

そんな顔をしたくないで欲しい。兄様、なあ、違う。俺は、ちゃんと一人で生きていける。だから、だから。

「仕方がない、家から出すのは、やつぱり早いかなあ、犬夜叉。帰ろうか? そんなんじゃない、誰のことも守れないぞ。」

優しい声がある。まるで、神様みたいな声だ。昔に聞いた、きつと何ものからも守ってもらえる。ただ、守ってもらえるだけで、愛されるだけ、慈しまれるだけの、そんな安寧。

初めて兄から受けた痛み。いくら表面上は邪険にしているても、犬夜叉にとって兄はまさしく神様のようだった。

父の代わりで、戦いの基礎の師匠で、勝つなんて考えてもいなかった絶対的な存在。それからの否定の言葉は確かに、犬夜叉の中に亀裂を生む。

「ほら、犬夜叉、帰りませんか？かごめちゃん、桔梗みたいになっても嫌でしょう？」
それはある意味で決定的だ。今を生きている彼女、自分の憎しみによつて長らえているあの人。

ぐらつく心に、絶対的であつた兄からの否定の言葉は、思った以上に効いた。

このままではと足掻いた末に、思う以上の実力差に犬夜叉は嫌な汗が垂れる。どくどく、と、血が流れる。掠れた視界の中で、弱った心に、甘い声が響いた。

「犬夜叉、兄ちゃんと帰ろうか？」

甘い声に、心がぐらついた。思わず頷いてしまいそうな何かが、その声にはあつた。

その時だ、犬夜叉に話しかけていた風牙を矢が襲う。紫の光をまとつたそれは、風牙を襲う。

「ありや。」

風牙はそれを慌てて避けた。突然のことに驚く犬夜叉の後ろから少女の怒りの声がかかる。

「風牙、あんたいい加減にしなさいよ！いつくらなんでもやりすぎってわかんないの!? これ以上やってみなさい、破魔の矢ぶつ飛ばすわよ!」

「わあ、桔梗より怖い……でもなあ、別に死んでるわけでもないしなあ。これぐらい追い込まないと強くはなれんだろう? 結果的に治るなら同じようなもんじゃないか。」

かごめはそれに思わずひるむ。けれど、それよりも先に怒り狂うように叫んだ。

「犬夜叉、あんたも何してんの!?! 自分でやるって決めたくせに諦めてんじやないわよ!」
発破の言葉に、犬夜叉は歯を食いしばり、起き上がる。

「うるせえーわかってんだよ、そんなことー!」

強くならなくては。強く、強く、そうしなければなくしてしまうものがある。何よりも、弱ければ、どこに行くかさえも選べない。

だから、犬夜叉は妖怪になりたいと思った。強く、強くなって、兄にもう大丈夫だと
言って欲しかった。

視界はかすんでいる、左腕はない。けれど、痛みで冴えた頭と、過敏になった精神で
ようやく理解した。

風牙の妖力の渦、そうして、風のこすれるにおい。風牙の放つ甘い匂い、自分からす
る血の臭い、その境。

(風の、裂け目!)

犬夜叉はそれに鉄碎牙を振り下ろした。

風が、逆巻く。まるで、何かの力があふれ出したかのような衝撃波が風牙を襲った。衝撃波の中に風牙は消えていく。

辺りに残ったのは地面がえぐられるほどの衝撃の後だった。

「犬夜叉!」

かごめは犬夜叉に駆け寄っていく。体力がなくなった犬夜叉はその場にうずくまっていた。

「あに、うえ……」

意識がもうろうとしているらしい犬夜叉はうろうろと兄の姿を探す。それに、皆が黙り込んだ。

あの衝撃で風牙が生きていると断言できなかつたのだ。

「動かないで、あんた、ひどい傷よ!」

「そうです、今は傷の手当てを。」

「さすがに無傷じゃないだろうが、死んじやいねえよ。ともかく風牙のやつはわしらを探しに……」

「いやあ、よかつた。犬夜叉、風の傷成功だな!」

弾んだ声が前方からする。それに、皆が視線を向けた。そこには、かすり傷一つない

風牙が満面の笑みで犬夜叉の腕を片手にひよつこりと立っていた。

「……犬夜叉、あんた、腕なんともないの？」

「ああ。」

風牙は颯爽と現れるとさっさと犬夜叉の腕を繋ぎ、そのまま立ち去った。そうして、刀々斎に刀は諦めると言い捨てて。

「あーいつ、まじで化けもんだぞお？」

そんなことを語ったのは、刀々斎だった。風牙が風の傷を受けても平気な顔をしていたのは、簡潔に言えば犬夜叉のためらいと、そうして風牙の技量によるものだった。

元々、風の傷は妖力のぶつかり合う部分に衝撃を与えることで爆発的な力を繰り出す。風牙はそれを利用し、風の傷が発生する寸前に自分の妖力の流れを操り、衝撃の方向をずらしていたのだ。

「あんな器用な芸当、犬の大将でも不可能だぞ？まあ、名で体を表すなんて言うとおろ、あいつは風の扱いが得意だったがな。」

それが刀々斎の感想だった。

犬夜叉は沈んだ顔で、今では綺麗に繋がっている左腕を見た。そうして、恐る恐る眩

いた。

「・・・なあ、風牙に近づかねえ方がいいのかな。」

犬夜叉は気を遣った珊瑚と弥勒、そうして七宝が離れて歩いているせいとか、やけに幼い声でそういつた。

それにかごめは、一瞬だけ、言葉を詰まらせる。

確かに、風牙は恐ろしい。今日のことだつてそうだ。

元に戻るからと言つて、行いが無に変えるわけではない。おそろしいと、ぼんやりと思つた。けれど、それ以上に、かごめは犬夜叉の幼い顔を見て思うのだ。

「でも、嫌いにはなれないんでしよう?」

こくりと、犬夜叉は頷いた。それに、かごめは微笑んだ。

「なら、それでいいじゃない。どんなことがあつても、あなたのお兄さんだもの。育ててくれたんでしよう。なら、嫌わなくなつていいわ。ただ、間違つたら止めてあげなくちやいけないけど。」

それに、犬夜叉は頷いた。うん、うんと、幼い子供のようこくりと頷いた。

強くなろうとそう思つた。

強くなつて、兄と対等になつて、そうして今度こそ正面から兄と向き合いたい。

妖怪でもいいから、半妖でもいいから、ただ、強くなつて。

犬夜叉は願うように、かごめの手を掴んだ。

「あの、主様。刀、よかつたんですか?」

かごめたちを拘束していた結界を解いた後、急いで風牙の後を追ってきた白縫はてとてと後を追っていた。

「うーん。まあ、対価は払った後だけど、かまわんさ。元々、俺はそこまで刀での戦い方は主にしてないしな。」

「おつかい……」

「それについてはかまわないつつたろ。どうせ、あいつがだだをこねるのはわかりきってたんだ。それに、犬夜叉が風の傷を使えるようになっただけでいいことだろう?」

にこにここと機嫌のよさそうな風牙に、白縫は不安そうではあったが、安堵するように頷いた。

(元々、刀々斎を犬夜叉に会わせるのが目的だったしな。まあ、殺生丸の元に行ってもそのときはそのときだ。)

刀々斎はきまぐれで自分が気に入った相手にしか刀をうたないというのを知っていた。だからこそ、今回、無理矢理に刀をうたせようとしたのは自分から逃れるために、風牙が甘い弟のどちらかに助けを求めるのは明白だった。

鉄碎牙とて道具だ。専属の研ぎ師が必要になる。が、正面からそんなことを刀々齋に望んでも素直に頷くはずもない。

ああやって目の前で実力を見せるのが最短であったのだ。

(これから、鉄碎牙を強化する上では良い助言役になるだろう。でもなあ、殺生丸の刀は考えてやらねえと。あいつ、元々の身体能力だけで戦ってるからな。さすがに、手数を増やした方がいいだろう。)

四魂の玉のせいか、この頃妖怪が活発になってきている。それだけではキツイだろうと、風牙は殺生丸に新しい武器を与えることを考えていたのだ。

(まあ、それについては追々だな。犬夜叉と違って、すぐに殺されるようなやつじゃないし。だが、四魂の玉なあ。)

「奈落に言つて玉の件は言つておくとして。調べてみた方がいいだろう。」
「え?」

風牙がぼそりと呟くと、白縫はそれに反応する。それに、風牙はにこりと笑い返した。

「白縫、殺生丸の所に行こうか? 弟の成長について話さないとな!」

弾んだ声に、白縫ははいと頷いた。

気まぐれの死

「せーつう?」

間延びした声が辺りに響く。森の中、二人の男と小柄な影がまた二つ歩いて行く。

殺生丸はその声に思わず眉間に皺を寄せた。

先を歩く殺生丸の後ろを、彼にとつては兄にあたる男が歩く。うり二つと言つていいほど容姿をしていた。

銀の髪に、黄金の目。

互いの纏う空気というはそれこそ正反対であった。

弟である殺生丸は月のように鋭く冷たい顔立ちをしている。が、兄である風牙はまるでお日様のように陽気そうで、にこにここと笑っていた。

「何だよ、聞いているのか?」

「……刀々斎の話ならば耳にたこができるほど聞いた。犬夜叉のこともだ。」

「えー、何だよ。我らが愛しい末子の成長だぞ。」

「貴様に相当絞られたせいであろうが。」

「えー、なんだよ。一人ででかくなりましたって顔してさあ。お前だって、俺やおやじに

ぼっこぼっこにされて強くなつたくせに。」

長兄である風牙の言葉に殺生丸は眉間に皺を寄せる。

「殆ど家に帰らなかつた貴様が何を言う。」

「親父だつて似たようなもんじゃんか。」

ぷくつと風牙は頬に空気をためる。それに殺生丸の眉間の皺が深くなつた。

それに、邪見はばくばくと心臓をならした。けれど、風牙のお付きである白縫は特別な動揺等もなく歩いていた。

殺生丸はため息を吐きたくなる。

(こいつは、こゝんなどころで油を売るぐらいならばやることなど山ほどあるだろうに。)

頭痛がするような気さえしたが、そんなものはない。

風牙はそれでも忙しいはずなのだ。

部下の指揮に、趣味でしている人間たちの管理。それにプラスして、新しい術などの研究も行っているはずなのだ。

唐突に、ふらつと殺生丸の元を訪れてはくだらない話をしていく。

放つておいて欲しいというのが殺生丸の本音なのだ。だが、そんなことをいつて取り扱ってくれるような存在ではない。

どうやって振り払うかと考えていたとき、進んでいた方向から血の臭いがしてくるこ

とに気づく。

殺生丸は、戦か何かだろうかと考えるが、人の血の臭いのほかに狼の臭いもしてくることに気づく。

「殺、俺、少し見てくるな。」

好奇心の強い風牙はそう言つて、さつさと駆けていく。その後、白縫が続く。殺生丸はようやくいなくなった兄にほつと息をつく。

このままさつさとその場を去るかと思えるが、それ以上にこの先で何があり、そうして兄がどんなことをやらかすかの方が気になってしまう。

殺生丸は額に手を添えて、風牙の後を追つた。

殺生丸が後を追つた先、風牙は座り込み、何かを見ていた。その横には白縫がおり、同じように何かを見ている。

風牙は殺生丸に気づいたらしく、彼の方を振り返つた。

「おお、殺！」

風牙が立ち上がったことで、彼が何を見ていたのか理解した。

それは、黒い髪をした幼子だった。ぼさぼさとした髪に、光のない目。すでに事切れていることを理解した。

「さつき、狼が来ててさ。かみ殺しちまったみたいでな。」

風牙が淡々とそう言った後、殺生丸はその幼子をのぞき込んだ。幼い少女だ。けれど、何故かその表情は夢を見るように、何故か幸福そうで。

「少し前までは意識もあつたみたいなんだがな。声をかける暇も無く死んだんだ。」
どうしたもんかなあと言いながら風牙が少女へと手を伸ばす。

「……待て。」

風牙の手が空中で止まる。彼はきよとりとした顔で殺生丸を見上げた。

「私がそれを預かる。」

「え、殺生丸様!？」

邪見が驚いたような声を上げる。が、そんなことを気にするような殺生丸でもない。

風牙は殺生丸の台詞を聞いた後、にこりと笑った

「ああ、かまわんさ。俺はこの子が逃げてきた方向に行ってみる。好きにしなさい。白縫はここに残れ。」

「……賜りました。」

風牙はさつきとその場から駆けていく。殺生丸は無言でそれを見送った後、また少女の遺体を見下ろした。

「あの、殺生丸さま?」

見下ろす少女は、特別なところなど一切無い。どこにでもいる、そうだ小汚い子供だ。けれど、殺生丸の脳裏には、ふと、幼かった頃の末の子供を思い出していた。

風牙の話を聞いていたせいとか、やたらと出会った時の愚弟のことを思い出していた。

少女は夢を見るように死んでいた。まるで、ひどく美しい物に焦がれるような、そんな顔をしていた。

殺生丸は己が腰から天生牙を引き抜いた。

(あの世からの使いか。この刀を使うときなど。)

そのままに殺生丸は天生牙を振り切った。ぼろぼろに崩れていくあの世の使いたち。天生牙を収め、彼は少女を抱き上げた。

とくりと、心臓が動き出す。少女は息を吐きながら、ゆつくりと目を見開いた。

「あ………」

掠れた声、非力な手足、それはひどく弱い物だ。けれど、それは殺生丸を見て、まるで御仏にでも会ったように、心の底から嬉しげに微笑んだ。

殺生丸にとって、何故それが笑うかなどわかりはしない。けれど、それに目を細めた。(まさか。)

死の時に笑うのではなく、生ある内に笑うべきだろう。そのほうがよほどましだ。

(あーあ。)

風牙は狼に襲われる村人を見て息を吐いた。たんと、村に降り立った風牙に、村人ももちろん、狼もまた警戒するように固まった。

「狼ねえ。こんな昼間に、堂々と人間の村を襲うはずがないとすれば。」

ゆつくりと目を細めた風牙は、ふむと頷いて懐から笛を取り出した。骨でできているらしい横笛を構えて、ゆつくりと音を出す。それは、まるで夜に鳴り響く何かの咆吼のように甲高く響いた。

狼たちはその声に、ぴたりと動きを止めた。そうして、まるで群れの長に従うように風牙の元に集まり出す。

風牙は笛から口を離した。

「ほら、これでもう大丈夫だ。」

村人たちは唐突に現れたそれに顔を見合わせた。何と言っても、風牙の様相から見てただの人間にはお世辞にも思えない。けれど、その美しい顔がゆるりと慈悲深く微笑む様を見れば、今まで張り詰めた何かが切れるような感触がした。

「あ、ありがとうございます！」

一人がそう言って、祈るように跪けばほかの人間も続いていく。風牙は跪いた人間の

肩をそつと叩いた。

「いいや、お前たちも災難だったな。ほかのものは？」

「あ、殆ど、狼にやられてしまつて。」

（確かに、見回した感じ生き残つてて数人。こりやあ、村の再開は厳しいな。なら、一坊に保護させるか。）

にしても、と風牙は考える。狼のおかしな行動や、そうしておいからして、妖狼族が村を襲つたのはわかる。ただ、彼らの縄張りからしてそこまで近いとは言えない。

（確か、傘下に加えた極楽鳥から妖狼族への助力に渡した物が。）

風牙はそんなことを考えつつ、先ほど事切れていた少女の特徴を村人に伝える。それに、彼らはりんだとざわつき始めた。

（なら、俺のところで保護するか。殺のあの様子だと天生牙を使う気で。）

そこで風牙は思い立つ。

あの殺生丸が？

わざわざ、あんな状態の、縁もゆかりもない人間に天生牙を使っている？

何かきつかけかはわからない。ただ、彼にとって先ほどの少女はひどく興味を惹かれているのは事実だろう。

「ですが、これからどうすれば……」

「そうだな、そうしよう。」

「え？」

風牙の言葉に村人たちは思わず、御仏のように優しげな彼を見た。

彼は笑っていた。確かに、笑っていた。耳まで避けたような口で、にたにたと、気分が悪くなるほどに、いやらしく、おぞましい笑みを浮かべていた。

風牙は狼たちに指示を出す。

「殺せ。」

それに狼たちは言われるがままに、先ほどの続きを続行した。

「た、たすけ……」

そんな声もすぐに途絶えてしまう。それを、風牙は悲しそうに見た。申し訳なきそうに、彼は首をかしげた。

「ああ、哀れで、弱くて、かあいいのになあ。だが、すまんな、助けてやろうと思ったんだ。だが、この村は滅んでくれた方がずっと楽しいことが起こりそうなのでな。」

風牙はそう言い放つと、うきうきとした足取りでその場から立ち去った。

「殺し！」

後ろから聞こえてきた声に殺生丸は眉間に皺を寄せた。その声に、殺生丸の腕の中に

いた少女がもぞりと動いた。

「おかえりなさいませ。」

「お、おかえりなさいませ。」

「お、やつぱし天生牙使ったのか。」

戻ってきた風牙に、殺生丸の周りにいた白縫と邪見が声をあげる。

風牙はそう言つて殺生丸の腕の中にいる少女をのぞき込もうとする。が、殺生丸は己が兄から引き離すように彼に背を向ける。

それに風牙は驚いた顔をした後、にたああああと楽しそうに笑つた。

「ん、なんだ。兄ちゃんにも紹介してくれないのか？ん？」

にたにたと笑いながら己に絡んでくる兄に、殺生丸の眉間の皺が深くなつていく。邪見はただらだと冷や汗を垂らしてそれを眺める。自分の肩に回つた風牙の手を振り落とす。

それに風牙は余計に機嫌がよさそうにぶるぶる震える。

（ああああああ！かあい！かあい！ぞ！殺、なんてかあいんだらうか！）

口に出せば、絶対に機嫌を損なうとわかつていて、風牙は頭の中でそう思う。

「それで、何があつた？」

「うーん？村があつたが。全滅だな。」

あつさりと告げたそれに、殺生丸は改めて少女を見た。ゆつくりと目を細めた殺生丸を、少女は不思議そうに見上げた

「……主様。」

「うん、なんだい？」

「この子のことですが。天生牙のおかげで目立った外傷はありません。ただ、汚れておりますし、着物もボロボロなので変えた方がよいかと。あと、衰弱しておりますので、食事と休養も。」

「そうか。ふむ、殺、どうする？」

「しれたこと。人間の村にでもあずければいいだろう。」

「預けんの？」

それに風牙は顎に手をやって首をかしげる。そうして、そのまま足を進めようとした殺生丸の肩に手を回して、耳元に口を寄せる。

「殺、孤児の扱いつてわかつてる？」

「……どういう意味だ？」

「まあ、村によつて扱いは変わるが。後ろ盾もない、非力な子供の扱いは悲惨だぞ。まあ、単純な仕事を任せられる程度ならいいが。人以下の扱いをすることもあるかな。」

さて、この子はどうなるかな？

殺生丸はぎろりと風牙を睨んだ。それに、彼はにつこりと笑った。

「殺生丸、お前は何故、それを助けた？」

ひどく穏やかな声で、それは言った。

「我らは所詮人でなし。己が欲こそ至高とせん獣に過ぎぬというのなら、それこそ真であるだろう。命の責を語るところこそこれ以上の笑い話であろうが。ただな、殺生丸。お前が、それを生かしたのだ。」

兄が笑っていた。いつもの、子供のような笑みではない。

静かで、飄々とした、古木のような老いた笑み。

それは、ああ、それは。

憎らしいほどに、父に似ていた。

「俺が引き取つてもいいが。お前は、それを生かしたという事実も、生かしていた理由も考えねばならんぞ。」

「何を……」

その時だ、蚊帳の外であつた少女が、殺生丸の衣服を掴んだ。それに二人は少女に視線を向けた。

「つ、いて、いく。いっしょ、に、いく。」

掠れた途切れ途切れの声に、殺生丸は目を見開いた。

これは、なんだろうかと、そう思う。

自分は人ではなく、そうして、目の前のそれをたやすく殺すことだってできる。

助けたのはそうだろう。けれど、それ以上のことをする気は自分には無い。

けれど、それでも、変わることなくそれは自分に手を伸ばしている。小さな手が、自分に伸ばされる。柔く、脆い手が、自分に向けられる。

振り払えば、飛んでいく。少し、手を動かすだけで殺すことができる。

それでも、その弱いそれは、自分に伸ばされる。

それは、記憶の中の小さな子供を思わせる。

風牙はそれに、やはり穏やかに微笑んで、そうして不躰に殺生丸の頭を乱雑に撫でた。

「お前は強い。傲慢であることも赦されるだろう。ただ、その傲慢のツケを払う時が来る。それは、お前の傲慢の証であり、そうして、お前の知らない己の何かの証でもある。」

殺生丸は乱雑に風牙の手を振り払った。そうして、睨んだ先で、父によく似た男が淡く笑っていた。

「己が力量を高めるのもいいが。今回は己の中の何かと向き合うがいい。殺生丸。守るべき物がないというのは、強いというわけではない。孤高であることはいいが、孤独であるのはただの怠慢だぞ。」

それに何かを言おうとした。何か、その兄に吐き捨ててやろうとした。

けれど、何故か言葉を飲み込んでしまった。

自分の着物を引つ張る感触がした。それにまた、目を向ける。血と泥に塗れた少女がじつと自分を見ていた。

それは、自分が傷つけられるなど欠片だつて考えていない、愚かで甘つたれた目だ。

それでも、何の怯えもない、愚直な目だ。強い眼だ。

小さな手が、ただ、強く、自分の着物を掴んでいる。

それは、どこまでも、銀髪の少年と似ていた。

ああ、ああ、弱き人よ、何故笑う。お前をたやすく殺す、獣へ何故笑う。

わかりはしない。けして、わかりはしないのに。それでも、その子供を振り払う気も起きなかつた。

抱えた腕の感触が、やけに熱いと感じた。

「……ねえ、一つ聞いてもいい？」

「なんだ、かごめ？」

犬夜叉たちとの旅の途中、狼の群れに襲われた村にたどり着いたかごめは、妖狼族の

鋼牙に攫われた。

助けが来るまでの間と、ふと、疑問に思っていたことを口にする。

「風牙って妖怪、知ってる？」

それに鋼牙は顔を大きく歪めた。

（知ってるんだ。）

かごめが何故、そんなことを聞いたかというと、単純な話村に風牙の匂いがすると犬夜叉が言っていたためだ。

（もしも、風牙さんの知り合いならなんとか逃がしてもらえないかな。）

そう、一瞬だけ考えたが、鋼牙の雰囲気にかごめは黙り込む。共に連れてこられた七宝はそれに身を固くして、かごめにしがみついた。

「……かごめ、お前はあいつの何だ？」

「ただの知り合い。」

鋼牙はそれに悩むように髪をかき回した後、口を開く。

「……かごめ、覚えとけ。もしも、お前に使い道が無けりや、殺してた。」

「な、何があつたんじゃ!？」

「襲ってきた鳥ども、極楽鳥は俺たち妖狼族の天敵だ。あいつらとの小競り合いが続いてたが、あるときから情勢がひっくり返った。あいつらが、白風の傘下に入ってから

だ。」

「白風？」

「なんだ、知らねえのか。風牙の野郎のあだ名だ。名前を呼んで縁を深めたくねえ奴らがひそひそ呼んでた名前だよ。話を戻すぞ、風牙の傘下に入ってから、あいつらは格段に勢力を大きくしやがった。誰もが畏れる、なんざうたい文句をしてやがるが。表に碌々出てこねえ腰抜けだ。」

憎々しげにそう吐き捨てた彼に、かごめと七宝はだらだらと冷や汗を流した。

（か、かごめ、どうしよう？）

七宝がこそりとそんなことを小さな声で言うが、かごめだってそう言いたい。自分たちは、よりにもよってあの風牙の傘下と敵対してしまうのだ。

（ど、どうなるの？）

かごめは頭を抱えたくなる。

なんといつても、どんな結果になつても、風牙がどうするかまったく予想がつかない。例えば、鋼牙と極楽鳥と倒したとして、怒るだろうか、怒らないだろうか。どちらとも言えるし、どちらとも言えない。

かといつて、極楽鳥に助けを求めて、自分たちを助けてくれるのか。

風牙への部下からの扱いというのも想像がつかない。

(犬夜叉！早く！)

かごめはなんとかそれだけを切に願った。

「鋼牙！てめえ、覚悟しやがれ！」

犬夜叉は怒号と共に立ち上がる。

なんとかかごめたちに追いつき、極楽鳥の住処にやってきた犬夜叉は四魂の欠片を持った一羽が飛び去った後、鋼牙と対峙する。

「俺は、化け鳥なんざどうでもいいんだよ！俺が用があるのはてめえだ！」

「はん。俺に用だど？のこのこやってきたと思やあいつたい。」

「てめえは、風牙のなんだ。」

犬夜叉はそれを言う声がひどく、静かで、けれど、何故かやたらとその場に響くような声だった。

鋼牙は聞こえてきた名前に犬夜叉の方に視線を向ける。

犬夜叉は先ほどの感情的な何かが凍り付き、うろんな瞳とそげ落ちた表情がやけに不気味に見える。

鋼牙は何か、それから感じる異様なものに一瞬だけ固まり、口を閉じる。

「な、なんだと!?それは俺の台詞だ!あいつが極楽鳥に肩入れしたせいで迷惑してんだ!」

それに犬夜叉は何故か、ほっとする。

「そうか、あいつが村にいたのは偶然か。そうか。」

よかった。

犬夜叉はまるで安堵するように肩を落とした。鋼牙はその場違いな様子に何をするかと悩んでしまう。

が、すぐに気を取り直す。

「ともかくだ!さっさと失せやがれ!かごめは俺の女だ!」

その言葉に、犬夜叉のがひくりと顔を引きつらせた。

「い、いま、なんて……」

「だから言ってるだろ、かごめはとっくに俺の女だ!」

その後が始まった二人の言い合いは、かごめの言葉も何のそのでどんどん続いていく。

その時だ、二人の頭上から影が来る。

「二人とも、上!」

叫ぶ声に、二人は頭上を見上げた。そうして、片割れの頭を失った極楽鳥は鋼牙を襲

う。

四魂の欠片を仕込んだ腕に噛みつかれ、鋼牙は引きずりあげられる。抵抗に牙を蹴り割ったが、そのまま地面にたたき付けられた。

「犬つころ、てめえ。」

「黙って見てろ、瘦せ狼！」

そう言った後、犬夜叉は極楽鳥に風の傷を放った。衝撃が、極楽鳥を襲う。

が、その衝撃はまるで鏡に跳ね返る光がごとく、極楽鳥に届かず空に向かって飛んでいく。

「な!？」

犬夜叉たちの反応に極楽鳥はにたりと笑った。

「はっはっは！風牙様に多くの力を授かったこの身にそんなものなど効かんど！さあ、四魂の欠片を……」

極楽鳥はそう言った後、鋼牙たちに向かっていく。だが、それよりも先に、極楽鳥をまるで引き裂かれるような痛みが襲う。

「あれは……」

極楽鳥の首の周りには、複雑な文様が描かれた陣に覆われている。それは、まるで警告を表すかのように赤く点滅し始めた。

(傘下に入るとき、約束したよな?)

「ふ、風牙さま!」

(どんなことでもそりやあ好きにすりやあい。お前が俺の庇護を望むなら、思うがままに愛でてやるつてな。たった一つの約束を守れば。)

頭の中で響く風牙の言葉に、極楽鳥は目を見開いた。

「し、知らなかったのです! そんな、あのものがあなた様の弟君であると!!」
必死な命乞いの声に頭の中で、また声がする。

(ふふふ、お前は本当に、かあいくて、そうして愚かだねえ。)

けたりと笑い声が響いた後、極楽鳥の頭が体からちぎれて、落ちた。

「・・・何だよ。今の。」

犬夜叉は鉄砕牙を鞘に仕舞った。かごめは傷を負った鋼牙に付き添っていたが、一人立った犬夜叉へ慌てて駆け寄った。

「犬夜叉、あれ。」

「風牙だろ。」

どこか、何かを欠いたような顔をしていた犬夜叉に、かごめは慌てる。

「おい、犬っころ!」

鋼牙の声に犬夜叉は振り返ることもしなかった。けれど、鋼牙はぎりぎり歯を噛みしめる。

「てめえ、どういふことだ。おい、応えろ。」

「さあな。ただ、風牙の手によつて死んだのは確かだ。」

「・・・風牙はてめえの何だ。」

「兄だよ。年の離れた。」

熱のない犬夜叉の言葉に、鋼牙は驚いたような顔をした。そうして、はつと嘲笑混じりの声を上げる。

「はっ！やけに風牙のことを気にしてると思ってたが。そういうことかよ。たかだか怯えてるつて事か！」

「怯えちやいねえさ。」

「はっ、まあいい。俺は犬が嫌いだな。あいつのことも、俺がぶつ殺してやるよ！」
血気盛んな、傲慢たるその言葉に犬夜叉は何も言わない。

「おい、犬つころ！」

「俺にさえ、勝てねえくせにか？」

「あ、!？」

「今、この場で這いつくばっているお前に何ができる？」

吐き捨てるように犬夜叉はそう言う、鋼牙は怒りに立ち上がる。が、すぐに体をふらつかせて、その場にへたり込んだ。

「俺が来なきや、かごめが死んでた。」

「何を……」

「覚えとけ、立ち上がることもままならねえてめえが。風牙を倒すなんざ夢でも見るな。」

惚れたなんざのたまうなら、守り切る力をつけてから言いやがれ！

黄金の瞳が、氷のように冷たく、鋭く光っていた。

「失せろ！」

たたき付けるような言葉に、鋼牙の子分たちは彼を引きずるほどの勢いで背負って逃げていく。

極楽鳥の相手をしていた弥勒や珊瑚もとほとほと近寄ってくる。

「大丈夫か、犬夜叉。」

沈んだ表情の犬夜叉に、弥勒が声をかける。

「……風牙と、あの村は無関係だったんだらう。」

「ああ。」

掠れた声で返事をする。それに、かごめがそつと犬夜叉のことを抱きしめた。

「大丈夫よ、犬夜叉。あんたの兄さんは何にもしてない。そりゃあ、妖怪同士のこととは別だけど。でも、何にもしてなかったのよ。だから、大丈夫。」

それに犬夜叉は抱きしめられたかごめの腕の中、こくりと頷いた。こくりと、子供のようには頷いた。

「……あー死んだなあ。」

「例の極楽鳥ですか？」

風牙は酒を飲みながら、一坊の言葉に頷いた。

彼は丁度、自分の持つ屋敷の一つの縁側でくつろいでいた。その傍らに一坊が控えている。

「傘下に加えて欲しいと言われてな。望まれるならば愛でてやるかと思つてなあ。丁度、四魂の欠片の威力について試したかったからやったんだが。」

極楽鳥に渡した四魂の欠片は、風牙の部下たちが必死にかき集めた分の幾つかに当たる。

「思つた以上の成果を出されなかつたので？」

「いいや、成果なんぞどうでもいいんだ。ただなあ、犬夜叉に手を出したからな。契約に

従って殺した。」

風牙は少々つまらなそうにこともなげにそういった。

犬夜叉には基本的に監視の目をつけているものの、万が一を考えて部下たちには枷をつけている。得に、近しい時期に部下になった物には必要に付けている。

ただ、基本的に風牙の気まぐれでも無い限りは、弟たちに危害を加えてもしない限りは咎めはそうそう受けない。極楽鳥は運が悪かったと言える。

「妖狼族はどうされるので？潰しますか？」

「いいや。犬夜叉には丁度良い刺激になるだろうし。何より、恋に試練はつきものらしいぞ!!」

「……そうですか。」

一坊はそれに妖狼族を監視対象の枠組みに入れておく。

「ま、そんなことより。ついに、殺が人間を気に入るなんてことがあったんだしな。りんちゃんに土産は持たせたか？」

「はい、着替え用の着物と、保存食や薬も、妖術の込められた袋に入れて渡しておきました。」

「そうか！いや、これで殺が人間のかあいさに気づいてくれればいいんだがな！」

風牙はウキウキとしていた。だって、あの人間嫌いの妖怪の弟が人間の命を助け、あ

まつさえ旅に同行させることにしたのだから。

（ああ！殺のやつ。りんちゃんのことどうするんだろうなあ！わかるぞ、わかる。幼い子は無垢でかあいいからなあ。無垢で、無邪気で、非力で、哀れで、かあいいよなあ！）
風牙はうっとりとした顔で酒をまた、一口すすった。

繰り返す代役

「……いやあ、思った以上に簡単に捕まえられたなあ。」

自分の前でにこにここと笑う男に桔梗は目を見開いた。銀の髪に、女にしては鋭く、男にしては美麗な顔立ちのそれは桔梗にとって忌々しい記憶の象徴のような存在だった。

奈落に囚われ、犬夜叉たちが厳格に囚われていたとき、好機だとも思った。

桔梗は死者である。生者とは違い、死んだ瞬間に囚われている。

犬夜叉という恋しい少年への感情はもちろん、自分が果たさなければならなかった役目にもまた囚われていた。

四魂の玉を浄化すること、そうして自分を殺した奈落を滅すること。そうして、憎い恋敵。

かごめを殺すまでには至らなかったが、四魂の欠片を奪うことに成功したため今回はそれでいいと思っていた。

死魂虫に乗り、空を移動していたとき。

何かに打ち落とされるまでは。

にこにここと目の前で笑う、男、いや妖怪に桔梗は目を見開いた。死魂虫を薙ぎ祓われ、宙に投げ出された桔梗はそのまま下に茂っていた木々へたたき付けられた。

枝が緩和剤となり、さほどの衝撃は来なかった。そうして、桔梗は自分が何によつて地面に引きずり落とされたのか理解した。

「おうおう、久しいじゃないか。桔梗。」

倒木に腰掛け、自分を見下ろすそれに桔梗は反射のように起き上がり、距離を取る。そうして、何のためらいもなく破魔の矢を放った。

至近距離での矢は確実にそれを襲う。けれど、その妖怪は手に持っていた短刀であったりとそれを弾き飛ばした。

桔梗は固まる。

相手は妖怪なのだ。それが、死人のために力が落ちたとは言え、霊力を纏ったそれを防いだことに驚いた。

妖怪は不思議そうに肘をついたまま桔梗を見つめる。

「私に何用だ、風牙。」

憎々しげにそう言い捨てれば風牙はきよとりと目を見開いた。そうして、うーんと首

をかしげた。

「昔よりも、ずいぶんとねじくれたな。」

そこにはやはり、何も無い。敵意もなければ蔑みもない。ただ、人好きのする笑みを浮かべた人でなしは何よりも薄気味が悪かった。

「久しぶりの顔見知りにするにはなかなかに厳しい対応だな。」

風牙はそう言つてゆつくりと倒木から立ち上がった。

風牙の言葉に桔梗は思わず嘲笑を浮かべる。顔見知りなど、そんな生ぬるい関係ではないはずだ。

桔梗は、その妖怪の本性を知つた件について結局犬夜叉に話すことはなかった。話したところで何かが変わることはない。桔梗も理解したのだ。元より、犬夜叉の態度からして風牙の有り様というものを理解しているようだった。

だから、何も言わなかった。何かを言うことさえも厭うていた。風牙は拒絶の言葉を一つ叫べば、それきり。

二度と、村にやってくることはなかった。ただ、まるで人間のように悲しげな顔を浮かべていた。

(また、会うことにならうとは。)

いや、わかつていたことだ。犬夜叉と関わるというならばそれは絶対的に会うことになる。

「……破魔の矢をどうやって防いだ。」

「さあ。何故だろうなあ。」

明らかにからかいに満ちた声に桔梗は顔を歪めた。けれど、すぐに考えを変える。

今は逃げなくてはいけない。目の前の存在とは関わる物ではない。どんな考えで近づいてきたかはわからないが、けして桔梗にとつてはろくでもないことには違いがない。

桔梗はちらりと自分の落ちてきた方向を見た。木々の隙間から死魂虫が覗いている。

すぐに離脱を考え、桔梗は傾合いを見計らう。

「私に何のようだ?」

時間を稼ぐためにそう言えば、風牙はにっこりとまた笑った。そうして、指を振る。その動作の意味を理解する前に桔梗の体に蔓のようなものが絡まり拘束をした。

桔梗は逃れようともがこうとするが、それよりも前に風牙がいつの間にか目の前に近づいており、その額に指で触れる。

針で刺されたような痛みが走る。

「動くことを禁ずる。」

その言葉と共に桔梗の体はまるで死魂を失ったかのように動かなくなる。指先までまったく動かないことに桔梗は動揺した。力を失った体はそのまま地面に横たわる。

「な、にを……」

息も絶え絶えの桔梗は目の前の風牙を見上げた。風牙はにこにここと笑って腰を下ろして両手で顔を支えた。そうして不思議そうな顔をした。

「何をつて。ふふふ、桔梗。お前さん、自分が本当に自由だなんて思っていたのかい？」
風牙はそう言つて、何かしらの文様が刻まれてた桔梗の額を指で叩いた。

「お前は確かにそうそうでないほどの巫女の才を持つている。死人とは言え、かごめちゃん魂を少しでも取り込んだお前なら下手な存在よりも巫女としての力を行使できるだろう。でもな、お前をこの世に止めるのは裏陶の術でしかない。」

術のイロハを知っていれば、自由を奪うことぐらい簡単だろう？

それに桔梗は歯がみする。そうだ、確かに桔梗は早々の妖怪に害されることはないだろう。けれど、彼女は所詮は理の外にある。彼女を生かす理、裏陶の術に逆らうことはできないのだ。

風牙はそう言いながら桔梗の懐を探る。そうして、彼女がかごめから奪った四魂の欠片を抜き出した。

「ほお、短期間にずいぶんと集めたな。いや、集めたんじゃないのか。集まった、の

か……」

風牙が四魂の欠片の欠片をのぞき込むように見つめていると桔梗の絶叫が混じる。

「返せ！それは私のものだ!!」

「かごめちゃんから奪った物だろう。凶々しい女だな。」

「いいや、それは本来私が持たねばならないものだ。あの女ではない！風牙、貴様それで何をする気だ？貴様もそんなものに頼るほどの願いがあつたか！」

最後につれて混じる嘲笑に塗れた言葉に風牙はふふふとまた愉快そうに笑つた。そうして、哀れむように目を伏せて地に倒れる女を見た。何かを見いだすように風牙は桔梗を見つめた。その目つきが腹立たしいのだ。

桔梗は死人の今を、そう悪いこととは考えていなかった。

生きていたこと、桔梗には多くのしがらみがあつた。巫女としてのあり方、妖怪との因縁。

それに誇りは持っていた、不幸だとは考えなかつた。

けれど、ずっと息苦しかった。だからこそ、桔梗は犬夜叉に恋したのだ。自分と同じ、あり方から抜け出せない少年。

彼ならば、彼と一緒にならば。

自分でも。幸せに、なれるのだと。

「桔梗、お前はずつと見当違いなことばかりだね。」

夢想の中で風牙の、やたらと優しいげな声がした。風牙は桔梗の前で膝をつき、じつと彼女を見ていた。

「俺が？俺が、こんな訳もわからない物に頼らねばならないほどに脆弱であるなんてどうして思うんだ？桔梗、お前はずつと変なところでずれているな。自分が四魂の玉を浄化できると思っっていることも、死人の分際でかごめちゃんにとって変わろうとしたり。本当に、お前さんは愚かだねえ。」

やたらと優しい声だった。まるで、きかん坊の子供に言い聞かせる母のような声だった。それが、その声音が告げる言葉は桔梗の神経を逆撫でる。

妖怪に、あんなにもおぞましい妖怪に道理を語られている今が、ひどく腹立たしい。

それが犬夜叉とかごめのこととなれば桔梗の冷静さなど簡単に奪われていく。

「とって変わるだど!?違う、あの女が私の代用品なのだ。犬夜叉は私を想っている！あの女が私にとって変わろうとしているだけだ！犬夜叉は私の物だ！」

たたき付けるような憎悪、ばちりとかすかな閃光が鳴る。それに風牙はきよとりと目を開いて、そうしてうわ言のように言った。

「桔梗、お前さん、犬夜叉のことを好きだと思っっているのか？」

それはどこかおかしな台詞だった。桔梗が風牙を見上げればそれは口元だけを歪に

「そうか、桔梗。お前は信じていたんだな。自分が犬夜叉に恋していたのだと。共に幸せになると、信じているのだと、そう思っていたんだ。そんなことはなかったのになあ。」

「きさ、ま。何を、こんきよに。」

あらがう桔梗に風牙はうつとりとした顔で囁いた。

「だってそうじゃないか。お前が犬夜叉に信じ、そうして恋していたというなら。どうしてお前は犬夜叉の姿をした存在に疑いを持たなかったんだい？」

その声はひどく甘くて。まるで、子守歌を口ずさむように響いていた。耳を塞がなくてはいけないと思った。聞いてはいけない気がした。けれど、その言葉は否応もなく桔梗に囁かれる。

「そうだ、四魂の玉を持つお前と親しい犬夜叉は弱みと想っていた妖怪はいたはずだ。なら、あの子を策略に使うものもいたはずだと。お前には考える頭はあつたはずだ。さけれど、お前は犬夜叉を矢で射った。」

お前は結局、最初から最後まで犬夜叉を滅ぼすべき妖としか想っていないかつたんだ。欠片だって、恋しいなどと思っていなかったんだよ。

それに何かが崩れる音がした。

50年前、犬夜叉に襲われたとき、桔梗は裏切られたと強く思った。けれど、姿を自由自在に変えられる妖怪は存在した。

それは、果たして犬夜叉であったのか？

四魂の玉を持つようになり多くの妖怪から狙われた桔梗はそれに思い足らなかつたのか。

とつくに憎しみに思い潰された記憶の中で、それがどうだったか思い出せない。

桔梗が覚えているのは、裏切られたという強烈な憎しみ、そうして悲しみ。

感情に飲まれる桔梗を見て、風牙は愉快そうにくすくすと笑う。

「そうだなあ、確かにお前は恋していた、焦がれていた。犬夜叉ではなく、ただの人のように何かに恋する自分に恋していたなあ。」

耳障りな、騒がしい声が桔梗を襲う。違うのだと拒否しようとしても風牙の音が耳から離れない。体に力が入らず、拒否しようにも巫女の力は行使できない。

憎しみも、怒りも、強い感情も、その声を聞いていると薄れていく。

違うのだ。

自分は確かに犬夜叉を想っていたのだ。その傷ついた心を癒やしてやりたかつた。その孤独を自分ならば理解できると思っていた。

何者かであれなれない自分たちだとしても。確かに。

振り払おうと、否定しようとして口を開けようとするが、風牙の吐いた言葉に反論が浮かんでこない。

違う、違う、違う違う違う違う違う違う!!

「恋をしない、妖怪が。私の何を語るといふのだ……!!」

せめてもの反抗にそう言えば、風牙は幼子のように首をかしげた。そうして、当たり前のように告げた。

「いいや。俺は知っている。恋を知っている。」

断言するようにそう言って、光の消えた目で桔梗をのぞき込んだ。

「恋とはな、他人を思い続ける心だ。他のために全てを捧げて、そのことを思い続ける健気さだ。お前はどうか？死ぬ最後まで、犬夜叉に裏切られたと、なにゆえと問うこともなく死んだお前にそんな心などあるはずがない。」

桔梗は呆然とそれを見つめた。自分に覆い被さるように言葉を吐き捨てた風牙の喉からはまるでうなり声のような獣のそれが聞こえてくる。

「貴様が恋を語るな。十六夜の抱えた情が、そんな脆く、利己的で、破れかぶれな物であるはずがない。」

掠れた声が喉の奥から漏れ出した。恐怖、などと言える感情はとつくに潰えたはずだというのに。体は固まり、裂けた口から漏れ出る、赤いそれから目が離せない。

けれど、それはまるで夢であつたかのように消えてしまふ。氣づけば、そこには麗しい美丈夫がいるだけだつた。

それは今までの激情など夢であつたかのように、にこにここと上機嫌に笑つた。

「ほら、かごめと犬夜叉を見てみる。健気で、幼くて、淡い心で互いを思っているじやないか。ああ、そうだ。確かに、お前がいたから、犬夜叉はようやくお前のような不義理の存在よりも、あんなにも愛らしいかごめちゃんに出会えたのだな。」

そうして、彼はまるで幼子にするように桔梗を抱き上げた。

その手つきはまるで今までの乱雑さが嘘のように優しい。それがひどく気味が悪い。けれど、桔梗の体に力が入ることはなくされるがままに、人形のように抱き上げられた。風牙は、それこそ愛らしい何かにするように桔梗の髪に頬を寄せて少女のように笑い声を立てた。

怒りがこみ上げてくる。先ほどのすくむような感情を押しつけて、死人のあり方として憎しみに苛まれる。

その妖怪の言うことが腹立たしい。自分の存在がまるで、最初から幸福なることなどなく、ただかごめのためにあるような台詞が、ひどく憎い。

けれど、桔梗の体は少しも動いてはくれない。

その時だ、風牙はまるで愛おしいものを見るような目で桔梗を見た。

「ふふふ。そうか、そうかあ。桔梗、だがお前は愚かでも、かあいいねえ。」
甘く、どろどろとしたそれに吐き気さえこみ上げてくる。

若い少女にするがごとく風牙は桔梗の頬にすり寄り、そうしてその額にまた何かを書き込んだ。

「なにを、する気だ。私を……」

「安心しろ。なあ、なあんにもしない。そうだな、本当は邪魔になるなら壊してもよかつたんだが。気が変わった。」

自分をのぞき込む、懐かしいときえ感じる金の瞳。欠片だって似ていないのに。なのに、同じ色。

「殺しはしないさ。殺すには惜しいしな。」

甘い声の後に、意識は薄れていく。

「そうだな。気が変わった。お前は四魂の玉を奈落に渡す。そうしたと、思わせておこうか。安心するといい。桔梗、愚かで、哀れなお嬢さん。幸せな夢をお前に見せてあげよう。」

それは、忌々しいことに。きつと、桔梗が知っている中で誰よりも優しい声だった。ただ、幼子にかけるような、守られるべき物にかけるような優しい声だった。

「……これは？」

「うーん？四魂の、確かに欠片っていうにやあでかいか。」

奈落は己が拠点としている城にて風牙を出迎えていた。そうして、彼の手元には欠片と言うには大きな紫の結晶が握られていた。

奈落はそれをどう受け止めればいいのかわからなかった。結晶の大きさからして、それはかごめが持っていたはずの物だ。

彼らが集めていた物を奪い、何故自分に渡すのか。

ころりと手のひらの中に転がしてもわかるはずはない。そんな疑問は風牙の口からあつさりと告げられた。

「いや、桔梗の奴がかごめちゃんから奪っていた物をかすめ取ってきたんだがな。」

「桔梗が？」

「ああ、どうもお前さんに渡そうとしていたようだし。」

それに更に疑問が残る。何故、桔梗がわざわざ自分にそれを渡そうとしていたのか。

奈落はわざと風牙を見上げるために低くした姿勢のまま風牙を見た。

彼は変わることもなく、奈落にさえも慈愛に満ちた、甘やかな視線を寄越す。それを見ていると、体がどこかぐずぐずと溶けていくような心地がした。

何かを考えることもなく、その妖怪から与えられる物を享受してしまいたいと考え

る。けれど、そんなことを奈落自身が赦すはずもない。

「……何故、儂に？」

「ああ。さすがに犬夜叉たちに持たせておくのは少し危険だしな。お前さんに持たせておいた方がいいだろう。」

あつけんからんとしたそれに、奈落は目尻をひくつかせた。

四魂の玉は元より、汚れることも、浄化されることもある。どちらにも転ぶそれを過保護な風牙がするとは確かに思えない。

けれど、と。

奈落は四魂の欠片をぎちりと握りしめた。

ならば、自分はいいのだろうか。

元より、四魂の欠片を望んでいたのは自分だ。都合がいいはずだ。これで奈落はまた自分の願いに一歩進むことができる。

なのに、なのに。

手のひらに握られた紫色のそれが、ひどく疎ましくてたまらない。

それは風牙にとって奈落というそれがどうだっていいという証のようだった。欲していたというのに、今はそれが無価値に思えてたまらない。

儂のことなどどうでもいいのですね。

そんな皮肉が口から漏れ出そうになる。けれど、奈落はそれをなんとか飲み込んだ。そんなことを言って何になる。自分の感情さえも、目の前の存在にとってどんなものになるかわからない。

何よりも、奈落は確かに風牙にとって従順な態度を取っているが確かに犬夜叉にとって敵なのだ。

けれど、風牙は犬夜叉について気にもとめていない様子だった。確かに何くれとお守りを持たせてはいる様子ではある。けれど、この世に絶対など無いことは理解しているだろう。

奈落にとって理性の部分で、目の前の存在から距離を取るべきだと理解している。奈落にさえも何を考えているのか理解しきれないそれ。

けれど、どうしようもなくその前から動くことができない。微笑まれば嬉しいと思う。四魂の欠片へ嫉妬がある。

今でさえも、犬夜叉と自分を比べている。

(どんな、顔をするだろうか。)

もしも、ここで。犬夜叉と自分を天秤にかけたとき、風牙はどんな顔をするだろうか。選ぶだろうか、選ばないだろうか。

それで、彼は傷つくだろうか。

そんな想像に薄暗い笑みが漏れ出そうになる。けれど、奈落はその考えを鼻で笑った。

比べたところで無駄なのだ。鬼蜘蛛であつたときでさえ、風牙にとって犬夜叉と殺生丸以上の存在などないだろう。

わかつているのだ。わかつている。

自分が彼ら以上になることはない。風牙は、血族と言うだけでその二つを一等に特別視する。生まれたときから、絶対的な違いに奈落は苛立ちを込める。

けれど、何を言ったところで変わることがないことも理解していた。

そういう人だ。

血族を別にして、他に対して徹底的に平等であるが故に彼は鬼蜘蛛を愛したのだから。

(いつそのこと、犬夜叉を殺してみれば。)

などと考える。いつか、殺すことを考えているというのに、目の前のそれに嫌われることを考えると嫌だと考える自分がいる。

その愚かしさに奈落は笑いをこぼした。

「どうかしたか?」

「……いいえ。ただ、先生は本当に犬夜叉を大事にしているのですね。」

自分の考えを飲み込んで、奈落はごまかすようにそういった。それに風牙はああと頷いた。

「ああ。それはな。だって俺の血を分けた兄弟で。何よりも、犬夜叉は十六夜の息子だからな。」

今まで何よりも弾んだ声に、奈落は思わず風牙を見た。彼は、まるで仏に夢を見る僧侶のように澄んだ目をしていた。

そうして、十六夜という人間がどれほど美しく、優しく、かあいいかを熱っぽく語った。

奈落はそれを見て、思わず笑った。

だって、そうだろう。

ああ、なんだ。そうなのか。

犬夜叉さえも、結局は誰かの身代わりに過ぎないのではないか。

いや、風牙は犬夜叉を心底大事にしているのだろう。けれど、彼の語る十六夜というそれへの熱弁に奈落はそんなほの暗い楽しさを見いだした。

嬉しい、嬉しい。

だって、風牙が本当に愛した物がいないなら。彼の一番は、一生埋まることがないのなら。

それはとつても嬉しいじゃないか。

「奈落、どうして？」

「……いいえ、何も。何もありませんよ。」

「そうか。にしても勝手に話し続けて悪かったな。それよりも、お前にはもう一つ話があるんだよ。」

「何でしょうか？」

「奈落、四魂の玉以外で完全な妖怪になる気は無いか？」

「……それはどういう意味でしょうか？」

奈落の言葉に風牙はふむと彼に顔を寄せた。

「この世に代価の存在しない物がないと、言いたいことはわかるな？ 四魂の玉は確かに力を与える。だが、無から有は生まれん。本当に危険が無いと思っているわけではないだろう？」

奈落はそれに少しだけ心を動かされそうになる。けれど、すぐに首を振った。

「私は、すぐにでも完全な妖怪になりたいのです。先生も、今すぐに私を妖怪にする術など知らないでしょう。」

まるでおもちゃを取られることを恐れる子供のようにな落は四魂の欠片を握りしめた。それに風牙はそうかと頷く。

「そうか、まあ、そうしたいならそれでいい。」

風牙はゆつくりと立ち上がり、奈落の頭を撫でた。

「奈落、ただ覚えておけよ。何かあれば俺に頼れ。助けてやる。だから、ちゃんと俺を呼ぶんだぞ?」

「・・・はい、先生。」

幼いものへの態度にどこかすぐつたさを覚え、そうして居心地の良さを覚えて奈落は目を伏せた。

けれど、彼は四魂の欠片を握りしめたままだった。

早く妖怪になるのだ。完璧な妖怪に。

今度こそ、今度こそ。

誰にも置いていかれないように。

「・・・よろしかったのですか?」

風牙は奈落の城から帰り道、一坊に話しかけられてああと頷いた。

「大方、あいつは四魂の欠片を手放さないだろうから。それなら持たせといた方がいいだろう。」

「犬夜叉様に危険が及ぶのでは?」

一坊の言葉に風牙はそうだなと頷いた。50年前の遺恨により、彼らが争うのは必然だ。だが、風牙としてはそれで構わないと思っていた。

犬夜叉もそろそろ鍛えねばならんと思っていたため、奈落は鍛錬のために丁度良いと思っていたのだ。

「それに、おそらく、犬夜叉は死ぬ確率は低いのやもしれんしな。」

「と、いうと?」

風牙は自分よりも一歩下がって歩く一坊に返事をした。

「四魂の玉にまつわる物語には、巫女と妖怪、そうして女に恋する男が出てくる。あまりにも都合がいいと思わないか?」

「物語を繰り返している、と?」

「そうそう。何だって周りの奴らはおかしいと思わないんだろうな。翠子の物語、桔梗の物語、そうしてかごめちゃんの物語。全部が似通っている。が、犬夜叉という存在だけが異端だ。」

風牙はずつと疑問であつた。四魂の玉の話はもちろん昔から知っていた。けれど、対価の存在しない願望器などあるはずがない。なのに、それを持つ物は欠片だつて四魂の玉を疑わない。それを風牙はずつと薄気味悪いと思つていた。

けして愚かではない奈落でさえも、四魂の玉について疑いを持たない。

(四魂の玉は物語を繰り返している。なら、犬夜叉たちの話の結末は?)

その応えを得るにはあまりにも材料が足りない。ただ、風牙は犬夜叉が死ぬ確率は低いのではないかと考えている。

桔梗、かごめのあり方を見るに、犬夜叉は巫女の欲を煽るための餌のような位置づけの可能性がある。

「さてさて、しばらくは観察か。それとも。」

風牙は奈落に渡す前に少しだけ砕いておいた四魂の欠片をじっと見つめた。

母に勝てる息子はおらず

「ご機嫌はいかがかなあ、お袋？」

その日、その女は珍しく訪ねてきた長男の姿に久方ぶりだと挨拶をした。

その日、女は、仮にここでは女としよう。

もう、その女を名前で呼ぶものはないのだから、それだけで十分だろう。

女が外出から帰り、空の上にある己が宮殿に足を踏み入れた。そうすれば、警備をさせていた部下が慌てて走り寄ってくる。

「どうした？」

「そ、その、申し訳ありません！ 実は、息子君が訪ねてこられました。」

息子、という単語に女の脳裏には二人の顔が浮んだ。けれど、二男の方はすぐに頭から追いだした。それは良くも悪くも、自分の眼をかくぐつて宮殿に忍び込むなんて器用なことなど出来ない。

本来ならば、配下たちに罰の一つでも下すところだ。

けれど、女はすぐにその考えを捨てた。

「あれに言うことを聞かせるなど、あれの父親でさえも難しかったのだからな。」
気だるそうにため息を吐き、女はそのまま宮殿を進んだ。

「お袋、久しぶりだな。」

「久しぶりというぐらいならば、もう少し会いに来ればいいだろう。」

「そう？なら、毎日顔を出そうか？」

「そこまで行けば、鬱陶しいわ。」

女は宮殿の奥、そこにある座に腰掛けた。息子である風牙は、いつも通り、愛想良く笑いながら、座に向かう段に腰掛けていた。

肘を突いて、女は目の前に座る息子を見た。その、後ろ姿は本当に父親によく似ていた。

風牙は特に振り返ることもなく、広間の天井を眺めている。

「俺に何かついてる？」

「……どうやって入った？目くらましも、結界もあつたはずだ。」

「めくらましがあるのなら、よく見える目を使えばいいし。それが無理なら、臭いを辿ればいい。結界も抜け道がないわけじゃないしな。」

「相も変わらず、器用なことだ。」

「周りが不器用すぎるだけだろう。」

のんびりとしたそれは、平然とそんなことを言った。それが出来ないからこそ、女はわざわざ言葉をかけたというのに。

「それで、何のようだ？」

「母親に会いに来ただけだろうか？」

それを女は鼻で笑おうとした。妖怪であるお前が会いたいというだけで来るなんてあり得ないだろうと。

けれど、そう言いかけて、まじまじと不服そうに頬を膨らませた息子の姿があった。

夫の顔でそんなことをするなと思いつつ、その、変わり者の息子を見た。

(いいや、こやつならあり得るか。)

ただ、母親を慕って会いに来る。妖怪ならばあり得ないが、それならばあり得るか？女は気を取り直した。そうして、ふと、嗅ぎ慣れない臭いがあることに気づいた。

「……風牙、来なさい。」

「うん？ああ。」

立ち上がった風牙はそのまま母の座る玉座のようなそれに近づいた。そうして、男は自然にその場に跪いた。

それを、女は、ああ変わっているなあと思う。

それは基本として、おもねるような行動に戸惑いがない。跪くなんて仕草、自分より、弟や父親などしたことさえないだろう。

自分が母であるから？

それは確かにあるだろう。事実、それは産まれた頃から独立心の固まりのようだった殺生丸とは違い、長子である風牙は非常に甘ったれだった。

幼い頃から、己の膝の上で甘えるのが好きだった。

女はとんとんと己の膝を叩いた。そうすれば、風牙は何のためらいもなく、その膝に頭を乗せて甘えるように目を細めた。

その光景は、風牙の容姿が父親似のためか、見る存在によるだろうが、鬨牙王が生き返ったように感じただろう。

女はそのまま男の髪を梳つてやった。そうすると、かすかに、それが付けるには甘ったるい匂いがした。

「女のところにもいたのか？」

「何故？」

「甘い匂いがする。」

それに夫によく似た顔をした息子は少しの間、考えるような仕草をした後、くすくすと楽しそうに笑った。

「ああ、あれだな。女、ではないな。昔、命を助けて懐かれたものがいてな。それが、つけたのだろう。」

「父親に似て女に手が早いとは思ったが。お前は男にまで手を出しているのか？」
「ひどいなあ、まあ、こだわりがあるわけでもないけれど。」

気だるそうに己の膝の上で目を細めるそれに女はふむと頷いた。

それを見て、女は考える。

これは、本当に己の子どもであるのだろうか。

その子どもが産まれたとき、感慨深さはあった。

何せ、己が腹を痛めた子どもだ。それ相應に情は芽生えた。けれど、育つにつれて、子どもは予想外の方向に進んだ。

子どもは、徹底的に甘ったれたった。父親がいれば父にじやれつき、母がいれば母に甘える。

それは、ある意味で幼体としては正解であったのだろう。

けれど、女にとって疑問だった。これは、本当に自分の子どもであるのだろうか？

山犬というそれを元にした妖怪である自分たちは、そういった上下関係は是としている。例えば、夫である鬪牙王を長にして、部下たちも多くいる。けれど、女は別に鬪牙

王を長としているわけではなく、彼女は彼女なりの群れを構成している。

自分たちは、そう言った部分で上に立つ者としてしか生きられないと思っていた。

けれど、その子どもは特別に己の群れを作りたがるとか、反発心も持つことはない。

いいや、女は知っていた。

温厚で、愛想も良く、甘ったれな幼子は群れの中で軽んじられていた。

それは表に出るようなものではない。

暴力を振られるだとか、食事を抜かれるだとか、そんなあからさまなものではない。

子どもの性格はさておいて、何よりも後ろ盾である鬪牙王は風牙のことを可愛がっていたというのもある。

そうして、女はというと、夫に似た息子は可愛かったのは事実だ。

けれど、息子が軽んじられているということを覚えようとは思わなかった。

軽んじられていると言っても、陰口だとか、無視だとか、そういった類いのものだ。

命の危機というほどのものでもなく、この程度で力を貸してはという想いがあつた。

何よりも、当人は何を言われてもにこにここと笑っており、悔しいだとかを思っている様子もない。

女は不思議だった。

自分の子であるのなら、そんなことを言われて我慢できるはずがないのだ。けれ

ど、それは争いを好まず、どちらかというど妖術を好んでいた。

さすがに、鬪牙王も息子がまったく戦えないというのは不安だったのか、鍛えようとしてはいた。

けれど、争いの苦手な風牙はそれから徹底的に逃げ回っていた。

そんな態度であれば鬪牙王も好きにしろとしか言えなかつた。戦闘を好まないと言っただけで、妖術などは使えたそれは人並みに身を守ることは出来ているようだったためだ。

そんなある日のことだ。

その日、風牙は母の膝の上でゆるゆると微睡んでいた。それに女はぼんやりと、子どもものことを眺めていた。

未だ幼いそれは、変わることも無く甘ったれで、まるで人間の子どものようだった。それに、女は以前から考えていたことを口にした。

「風牙よ、お前の家を用意しようと思っっているんだが。」

「どつどつ。」

ふくふくとした頬を膨らませてそれは言った。

父親そっくりの瞳に、少しだけ癖のある髪は肩までそろえられている。女が用意した華やかな衣装のせいか、いつそのころ少女のようだった。

「ぼく、母様といっしょにいたいのに。」

これまた可愛らしいことを言うなあと、女は驚きさえあった。

「お前は私と一緒にいたいのか？」

「はい、ぼく、母様と一緒にいたいです。」

風牙は女の膝の上によじ登り、体に抱きついてくる。ふくふくとしたほつぺたを胸に押しつけてふにやふにやと笑った。

それに女も、こんな甘ったれならまだいいだろうかと考えるがすぐにそれを打ち消す。

「……いいや、だめだ。」

「どうして？母様、ぼくのこと、きらい？」

「そうではない。」

女はため息を吐きながら、風牙を下ろした。そうして、向かい合ってため息を吐いた。「鬪牙と話をしたのだ。お前も、いつまでも守られているわけにはいかないだろうが。ならば、一度、離れて暮らさせるのも手だろうとな。」

「……でも、ぼく、そんなに弱くないよ？」

「周りから侮られているようでは、認めることができん。」

女はそのまま風牙を部屋から追いだした。ただ、意外だったのは子どもは特別泣き出

すことだとかもなく、さっさと部屋を出て行った。

女は、その様子を不思議に思ったが、そのまま家をどこに用意し、使用人として誰をいかせるかと考え始めた。

全てがひっくり返ったのが、次の日のことだ。

用事のために出かけた先で夫と会い、風牙との別居について改めて話すことにしたのだ。

そうして、帰った先に宮殿は、まさしく蜂の巣を突いたような有様だった。

「ふ、ふうが様がー」

「ご乱心ですーご乱心をー」

慌てた様子の側仕え達がやってくる。それに、鬨牙王が宮殿の中に走り出す。それを女も追った。

そうして、奥の部屋、風牙の生活区域のそこは、血の海になっていた。

そこにいたのは、側仕えをしていた女中であり、護衛の男であり、古参の妖怪もいた。血だまりの中に、その中心で、何かを大事に両手に抱えた風牙がいた。

「風牙ー」

叩きつけるような鬨牙王のそれに風牙はにつこりと、愛らしく微笑み、そうして近づいてくる。

「風牙、何があつた？」

鬪牙王がそう言つて風牙と目線を合わせるように座つた。それに、風牙は満面の笑みで両手に抱えていたそれを差し出した。

それに鬪牙王と、そうして、後から来た妻である女は目を見開いた。手の中にあつたのは、複数の目玉だった。

それに鬪牙王たちは、何故、部屋に転がる人間達が顔を覆つてうめき声を上げているのか理解した。

「……何故、こんなことを？」

「だって、父様も、母様も、愛らしいだけの子どもは好みじゃないんだろ？」

今までの舌つ足らずな口調とは違い、それはどこまでも流暢なものだった。にこにこと笑つたそれは、そつと目玉を鬪牙王たちに差し出した。

「ねえ、これで。」

母様と父様と、一緒に暮らせる？

にこりと笑つたそれに、女はああと思つた。

なるほど、これは確かに、どこまでも獣でしかないのだと。

風牙よ。

うん？

なぜ、目玉をくりぬいたのだ？

だって、殺すのはかあいそうだから。

殺す気だったのか？

うーん。別に。ただ、軽んじられないように、ある程度のごときは示さないといけなかったから。俺、馬鹿にされるのはどうでもいいんだ。蔑まれるからこそ、知れることがあつて面白かったから。

ああ、そうだな。あの場にいたのは、特にお前を軽んじていたものたちだった。

・・・それはどういうことだ？

父様、いいんだよ。大体、俺がふざけてたのが悪いから。

・・・風牙よ、何故、軽んじられることに甘んじていた？

だって、母様が。

私か？

弱くて、幼い間は、側にいてくれるって。

呆れたことだ。お前は、私と共にいたいから愚かな振りをしていたのか？

まあ、そう怒ってやるな。可愛らしいことだろう。

その日、結局、鬪牙王は風牙のそれを赦し、そのまま母と暮らすことを許可した。確

かに、やったことは苛烈であれど、強者である風牙を軽んじた彼らへの蛮行を鬪牙王は赦した。

目をくりぬかれた妖怪達はそのまま追い出された。

その後は、風牙は鬪牙王からの扱きにも素直に応じた。強くなろうと、母親や父親と暮らすことを許可されたからだ。

それはいいことだろう。女とて、それが強くなることに不満はなかった。

けれど、疑問に思っていることがあった。

「風牙よ。」

「なに？」

それはいつも通り、その甘ったれの息子が女の膝に甘えてきていたときのことだ。いつも通り、髪を手で梳いてやっているときのことだ。

「……お前は、あの日、お前を軽んじていた者たちの目玉をくりぬいたな？」

「そうだね。」

ふくふくとしたほっぺた、まあるい瞳、柔らかな髪。

それは、まるで、この世の穢れなど知らないというように微笑んだ。

「だが、あの日、あの場にいたものの中にはお前を尊重してたものもいたはずだが？」

そうだ、あの日、その場にいた妖怪達は全て、風牙を軽んじていたわけではない。中

には、風牙を庇っていた者も存在していた。それには打算があれど、わざわざ、そんな彼らを害する理由もないはずだ。

それに、風牙はきよとんとして顔をした後、ああと頷いた。

「だって、飽きちゃったから。」

くすくすと、幼子の軽やかな声を今でも覚えている。

女は、己の息子が、楽しそうに。まるで、楽しい遊び方を思いついたときのような、そんな顔をしていたのを覚えている。

それに女はふむとうなずき、そのまま子どもの頭を撫でてやった。そうすれば、それはくすくすと変わらず笑った。

「飽きたか？それは、何にだ？」

「いいえ、皆、それ相応に面白かったです。自分の実力は柵に上げて、俺のことを軽んじていた妖怪も、俺を庇っていた、俺に見返りを求めていた妖怪も、俺の言動一つで態度が変わって楽しかったんです。でも。」

子どもは柔らかな光を宿した瞳を女に向けた。

「あんまりにも、思った通りに動きすぎて、飽きちゃったから。」

いらないうて、思ったんだな。

それに女はああと納得した。これは確かに、人でなしであるのだと。

「お袋?」

ぼんやりと幼い頃のことを思い出していた女の耳に息子の声が飛び込んできた。

「どうかしたの?」

自分を見上げる息子の顔を女はまじまじと見た。

ああ、なんて、夫に似ていて、けれど、誰にも似ていない息子だろうか?

元より、さほど甘ったるい関係ではなかった鬪牙王と女は子どもは一人で十分だと感じていた。けれど、それでも二人目である殺生丸を作ったのは、偏にそれを一人にするには危うすぎたということもある。

そうして、産まれた二男は驚くほどに、良くも悪くもまともな息子だった。

それ故にだ、己の似た二男のことも出すたびに、これは本当に己の息子なのかと疑問に思う。けれど、その顔はどこまでも夫によく似ている。

「いいや、何でもない。それで、どうかしたのか?」

「ああ、殺の奴に刀でもうってやろうかと思ってな。牙に使いそうな、丁度良い妖怪知らないか?」

「あれには天生牙があるだろう?」

「お袋だって、親父の意図ぐらい知ってるんだらう?」

珍しく呆れの混じったそれに女は意外に思った。

「ほお、なんのことやら。」

「嘘吐かないでくれよ。親父が、犬夜叉のために残したものについては文句ないが、殺の八つ当たりは全部俺に来るんだぞ？ 気持ちもわからんくないがなあ。」

我らは獣なれば、所詮は、振う牙は己のものでなければならん。

物憂げに目を細める様は少しだけまともに見えた。

「それがわかつているのならば、無視していればよかろう？」

「親父にとってはなんの心配も無い、独り立ちずみの息子だろうが、俺にとっては手のかかる弟なんだよ。そんなことできん。」

風牙は女のそれにため息を吐き、そうして、立ち上がる。

「行くのか？」

「うーん、まあ、覚えがないのなら、それでいいんだけど。俺も、他に刀を用意しないといけないよ。」

「……お前も、父親から残されたものがあるはずだろう？」

「叢雲牙？ あれ、使いにくいから嫌いなんだよ。」

「ふ、殺生丸が聞けば怒り狂うだろうな。」

「まあ、殺にも使えるだろうが。殺の成長には邪魔だろうしな。」

「大体、お前はとつくに自身の牙を手に入れてるだろう?」

その言葉に風牙はくるりと振り向いた。そうして、目を細める様は、珍しく苛立ちが混じっているようだった。

「……あれもまた使いづらいんだ。戦うに、あまりにも一点特化すぎる。自分の牙のことを思えば、確かに鉄砕牙も欲しくなるよなあ。使いやすいし。」

「ある意味で、お前らしいと思うがな。」

楽しそうな声に風牙は不満そうに顔をしかめた。

そこで女は、ふと、ずっと考えていた疑問を口にした。それは、ただの気まぐれだ。

「なあ、風牙よ。」

「なんでですかい?」

「お前は、私のことが好きか?」

それに風牙は楽しそうに笑って、座の肘置きに手を突いた。そうして、母を覆うように顔を近づけた。

それは丁度、獣が親愛を表すような気安さだった。

「お袋だから、それは当たり前だ。」

「何故?」

それに風牙は本当に不思議そうな顔をした。

「母を子どもが愛するのは当然だろう？」

それは、心の底から言っているようで、まるで、何かの節をそらんじているようだった。

女は、それにそつと風牙の首に手をかけた。

「お前の命が欲しいと言ったとき、どうする？」

その言葉に風牙は首を傾げ、そうして、すぐに答えた。

「お袋が望んでいるのなら。」

あつさりとした、それ。その表情は、その瞳は、あつさりと自分のそれを受け入れていた。男を育てた母親にはわかる。

風牙は母が望めば、それを受け入れるのだと。

それに女は少しだけ笑った。

ああ、やはりと、思うのだ。これは、本当に自分の息子なのかと。

まるで人間のように情というものを求めて、母や父に縋るくせに。その理由はまるで、この世の理とはこうであると学習した空虚さだ。

情がないと言うわけで無いのに、執着というものがない。

かあいと笑うくせに、その滑稽さをさめぎめと見つめている。

人も、妖怪も、見つめる様はまるで逸脱しているようであり、そのくせどこまでも醒

めている。

ああ、これはなんなのだろうか。

そう、思う。

それ故に、それを周りは熱狂の内に信奉するか、理解が出来ないと遠ざける。

ならば、女はどうなのか？

「間拔けな顔だ。」

女はそう言つて、父親そっくりの息子の鼻をつまんだ。

「いって！」

「ふん、お前も結局母のご機嫌伺いだけに来たのではないだろうか？用が済んだのなら、さつさと帰れ。機嫌伺いに来たというのなら、土産の一つでも持つてこい。」

「……手厳しいなあ。わかったよ。でも、また来るからさ。あと、土産の一つぐらい、持つてきてる。」

そう言つて、風牙は不満そうな顔をして、女に花を差し出した。

「ほう、これは……」

「物を水晶に出来る奴と知り合つてさ。お袋、こういうの好きだろ？それじゃあ、俺は行くからさ。」

それが手渡してきたのは、美しい水晶で出来た、赤い花だ。正確に言うのなら、水晶

になった花なのだろう。

「ふふふふ、こういうものがあるのなら、もつと来るといい。」

「調子いいなあ。まあ、いいけど、じゃあね、お袋。」

そのまま、広間を後にする息子の後ろ姿を見つ、女は機嫌伺いの花を見つめた。

それが恐ろしいか？

気味が悪いか？

忌避するか？

(何を、くだらん。)

女はその息子を、変わり者だと、毛並みが違うと思うことがあれど、恐ろしいなどと

思うことなどありはしない。

所詮は、己が腹を痛めた、子なのだ。

「母に勝てる息子など、この世にいるはずもないのだからな。」

くすりと笑った女はそう言って、手の中でその花を弄んだ。

虚像の愛

「風牙様。」

「うーん？」

しんと静まりかえった屋敷の中で、風牙はごろりと転がっていた。気だるそうに目を細めながら、風牙は自分に話しかけてきた一坊を見た。

「どうかしたのか？」

「東の方に構えていた拠点の一つが襲われたとのことですよ。」

それに風牙は少しだけ不思議そうな顔をした後、ゆっくりと起き上がった。そうして、がりがりとした頭を搔いた後、あくびをした。

「あー……」

物珍しそうな顔をした後、立ち上がった。寝起きそのままにはだけた服装のまま、腹を搔く。

そうして、楽しそうに宙を見た。

「八つ当たりするぐらいなら、後追いで済めばいいだろうに。」

風牙は島中に拠点を構えており、そのほとんどは人間や半妖、または弱い妖怪たちが使用人のように暮らしている。

人間の間でも、妖怪の間でも有名な風牙の庇護に入った者を襲うものなどいない。強者さえも、そののやつかいさを理解してのことだ。

「……やはり、あなたか。」

襲われたという知らせに立ち寄った先は、ただの焼け野原が存在していた。ごろごろと転がる死体を見下ろして風牙は疲れたようにため息を吐いた。

そこにいたのは、一人の美しい女だ。

銀のそれは結い上げられ、非常に華やかだ。澄んだ緑の瞳はまるで宝石のように輝いている。

美しい人の姿をしていたが、その本性がそんなものではないことは理解している。「是露殿、わざわざ我が領域にやってきて、目的は何だ？」

その言葉に、その妖怪は、是露は顔をしかめた。

「……西側がだいぶ騒がしいようなので。少し、気になりました。」

是露のそれに風牙はうろんな瞳でそれを見た。もしも、その場に彼を知る人間がいれ

ば珍しいことだと思つていただろう。

風牙が浮かべるにしては珍しく、不機嫌さを前面に出した顔のせいだ。

「人も、妖怪も、跋扈する時代において、騒がしいのは当たり前のはずだ。ああ、そういうのならば、そちらの一派が静かなせいで余計に騒がしく感じるのやもしれんな。」

その様は、皮肉なことと言おうか。

普段のへらへらとした笑みではなく、泰然自若とした静かな笑みと落ち着いた口調は、是露にとつては忌々しいほどに父親である鬨牙王に似ていた。

嫌悪。

それが、是露にとつて風牙を表す言葉だった。

「あなたが、是露殿か！ いやはや、聞きしに勝る美しさとはこのことだな！」

最初にあつたとき、なんとも、父親に似ていながら、それと同時に似ていないのだからと驚いた。

鬨牙王が、静かに、けれど時に激しく燃える焔ならば、それはつかみ所の無い風のような男だった。

いつだつてへらへらして、のらりくらりとしていた。

弟の麒麟丸は、それでも強く、一見は陽気な男を気に入っていたようだった。是露も、最初はそうだったのだ。

それは、明るく、陽気で、ほがらかで。

そのくせ、どこか、甘ったれで、幼子のような顔をしていた。

いいや、何よりも、会うことは滅多になかったが、是露自身、風牙に会えば悪くない気分であったのだ。

「是露殿。」

淡く笑ったその顔があまりにも似ていたからだ。

ああ、けれど。

「是露殿、ああ、そんな顔をされて。」

楽しそうに笑っていた。

「どうしてそんな顔をされるのか。あなただって知っていたのでしょ？」

親父が死ぬ事なんて。

それが、彼の人に似ていないことに自分はずっと気づかなかったことを後悔した。

「ああ、本当に……」

茫然と呟いた是露がいたのは、その想い人であった妖怪が死んだ場所だ。

焦土になったその場所は、もう、何の気配もない。死んだという彼の人も埋葬されたようでは存在しない。

彼女は茫然とその瓦礫の山を見つめていた。そんなとき、朗らかな声がした。

「おお、是露殿。」

その声は、あまりにも、愛しい彼の大将そのもので。振り返った先でさえも、そこには、鬪牙王が変わること無く佇んでいた。

ああ、嘘だったのだ！

そうだ、嘘であつたのだ！

あの人が死ぬはずがないのだ！

あの、強く、情深く、優しい人が死ぬはずなんてないのだ！

是露は、一歩、足を踏み出した。

「親父の墓参りだろうか？」

その言葉に、是露は今まで感じていた希望が潰えていくのを理解した。それは一抱えもある花を持って是露の隣に立った。

「さすがは耳が早いな。麒麟丸殿も知っておられるのか？」

「・・・ええ。」

「そうか。親父は、そのまま駆けて行ってしまったからな。あの人らしい。」

しみじみとしたそれに是露の中で、確実に、彼の大将が亡くなったことが事実として浸食していく。

風牙はそのまま花をその場に放り投げた。ばさりと、広がったそれが、花びらが宙を舞う。

「……悲しまれているのか？」

「悲しい？」

是露はそれに笑った。何せ、それは涙を捨ててしまった身だ。それに失笑さえ浮びそうだった。けれど、それは、柔らかに微笑んだ。

それに、是露は黙り込んでしまう。だって、その様は、あまりにも 父親にそっくりだったのだ。

けれど、それは、違うのだ。

己の焦がれた存在ではないのだ。どんなに似ていても、ああ、その笑みは、狂おしいほど似ていた。

是露はぐらりと、傾ぎそうになる体に急激な喪失を感じた。それを、風牙はそつと支える。

「是露殿。」

声がする。彼の人と同じ、声がする。

違ふとわかるのに。その微笑みは、その優しげな瞳は彼の人と同じで。縋りたくなつた。それに、残された存在に、どうかと。

あの人と同じ、情深き、妖怪に。

是露は男の腕で、少しだけ過ぎたかつたのだ。それだけ、だつた。

風牙は淡く微笑みを浮かべたまま、是露の唇を自分のそれを重ねた。ばしりと、音が響く。

是露は茫然と、それを見た。鬨牙王によく似た、彼の息子を。

「な、にを……」

理解が出来なかつたのだ。何故、そんなことをしたのか。

それに対して、風牙は不思議そうな顔をした。

「何故つて、うーん。そう、望んでいたと思つたんだが、違つたか？」

「違ふに決まつている！ そのようなこと、望んでなどいるはずがない！」

「そうか？ いやはや、てつきり、そうだとばかり。」

親父のことを見殺しにして、結局惜しくなつたとばかり想つていたんだが。

その言葉に是露は固まり、そうして、目の前のそれを見た。

それは、やっぱり笑つていた。

穩やかで、豪傑な、犬の大将と同じような笑みを。けれど、ああ。

「だから、丁度いいだろう？ほら、俺は親父とそっくりだ。なら、親父の代わりの慰めぐらいなら担ってやれると想っていたんだが。」

そう言つて、風牙は是露の腰を抱き寄せた。抵抗は出来た、振り払うことは出来た。けれど、是露は、何か腹の底が冷たくなっていくような感覚がした。

視界にあるのは、彼の人と同じ、そのものであるのに。

紡がれる言葉は、どこまでも乖離していて。

「ああ、でも、確かにあんたが抱かれないのは親父だものな。ふむ、できるだけ、似せるようにしようと思うが。」

「何故だ!？」

「何故?」

「貴様とて、父を亡くしたはずだ!そのくせ、恥も知らずにこのようなことを!」

確かに妖怪とは情が薄い部分がある。けれど、自分や麒麟丸のようにそれは確かに身内である父を慕っていたはずだ。なのに、男の瞳には欠片だつて悲しみなんてものはなかった。

そこにあるのは、不思議そうな、いいや、いつそのことそれは好奇心と言えた。

風牙は是露のことをのぞき込んだ。

「何故なあ、皆、それをよく聞きたがるが。俺の方こそ、何故、と言いたい。是露殿こそ、どうして、そんなに怒るんだ？あなたこそ、親父が死ぬのを知っていて、何もしなかったんだらう？」

冷や水を被せられた気がした。

何故、それを知っている？

何故、それを平然と自分に突きつける？

何故、何故、何故、何故!!!

「ああ、どうした、そんな顔をして。もしや、親父が死んだのが自分のせいだと思ってるのか？ああ、それなら、気にしなくていい。俺も親父が死ぬのは、知っていたからな。」
わからない、是露は初めて、そうだ。

恐怖を、覚えたのだ。

腹の底から湧き上がってくる不快感。

そののを知っている。数度だけとは言え、幾度も、会話をしてきた。

弟を可愛がり、父を慕っていた。

そうだ、確かに、彼は二人を愛していた。それは、愛を抱いていた。

なのに、目の前のそれはなんだ？

愛を抱きながら、それは喪失に苦しんでいない。

それは、父を捨て去って。

「し、って、いた？」

「ああ、親父の死が近づいていたのは知っていたが。」

「ならば、何故、防ごうとしなかった!?! 貴様は、父を慕っていたはずだ! ならば、何故! 彼の人を見捨てた!?!」

それに風牙はやはり、不思議そうな顔をした。心底、わからないという顔で。

「だって、そっちのほうが目白いだらう?」

時が止まった気がした。是露はふらふらと後ろに下がる。これはなんだ?

犬の大将に誰よりも似た、存在。

その笑みも、その声も、その表情も、何もかもが似ていた。なのに、なのに、なのに。「親父がいなくなれば、やっかいな後処理もあるが。それと同時に、抑止力と言えるものがないなくなれば、それ相應に騒がしくもなる。混沌とは、何よりも、愉快なお祭り騒ぎだ。親父が死んだことは、悲しいが。」

この悍ましい生き物は、何だろうか?

悲しいと語りながら楽しみを語り、喪失はあれど執着は無く。

何かが、確実に、是露にとって乖離していた。

知っていたはずなのだ。わかつていたはずなのだ。触れていたはずなのだ。

なのに、なのに、なのに！

「黙れ！悲しいだど!?犬の大将の死を受け入れ、彼を見捨てた貴様が、何をそんな戯れ言を！」

狂わんばかりの声音では露はそれに吐き捨てた。それに、風牙はにたりと、にたにたと、嫌らしく笑った。

「ああ、是露殿は、ほんとにかあいいいな！」

喜悦を含めて、それは、まるで駄々つ子を見るように目を細めて是露の首を掴んだ。

「助けられたというのに助けず！知らせられたのに、無視をして！結局、親父の死から目をそらして！自分を柵に上げて、俺を責めて！」

あなたは、やっぱり、かあいいよ！

「離せ！」

振り払ったその後に、一瞬だけ、風牙の表情が髪に隠れて見えなくなる。それに、風牙はまた笑った。

それは、あの、父親が浮かべていたような、静かで穏やかな笑み、そのもので。

「是露殿。」

声の作り方まで、父親に似せたそれは微笑んだ。

「あなたはそれでいい。是露殿のまま、変わらないでいてくれ。」

ああ、それは、なんて、気色の悪い、悍ましい生き物なのだと、是露はようやく理解したのだ。

「是露殿、どうされたのか？」

是露はまた、それを見た。

その日、男の拠点の一つを焼きはらったのは、ただの気まぐれだ。

西の国で明らかな妖怪達の動きが活発になっていたために探りを入れるためだった。今のところ、穏健派と、一応は言っている風牙が舵取りをしているため、均衡が保たれている。だが、この頃は弟である殺生丸も活発に動いているのを見るに、何かがあったのは明白だ。

「……どうもしません。何も無いと言うのなら、それでけっこうです。」

「それにしても、手荒いことをされたのだな。」

「人が亡くなったからといって、なんの問題が？この程度が死んだとして、嘆くなど、まるで人のようですね。」

それに風牙は首を傾げて、不思議そうな顔をした。

「是露殿。」

あなたは、変わりませんね。

是露はそれに風牙を睨んだ。それは、くつくつと喉の奥で笑った。

「あなたには、私が人のように見えるのですね。相も変わらず、かあいまままだ。」

心底、楽しそうに吐かれたそれは、変わることに無く悍ましいままだった。

「……よろしかったのですか？」

「何がだ？」

隠れていた一坊のそれに、風牙は女が去って行つたはずの方向を見つめながら答えた。

「彼の君を帰して。」

「いいさ。是露殿の言うとおり、この頃西の国は騒がしかったからな。大方、殺生丸が後を継ぐための準備じゃないかって疑われたんだろう。俺のどこを狙つたのは、反応を見なかったのと、どうせ、ここを焼いたのは八つ当たりだからな。」

「八つ当たり？」

「そうそう。自分の強さや、誇り高さにつけ込まれて己の本当に大事なものを亡くしてな。ああいや、本当にかあいいだろう？」

風牙は立ち上がり、そうして、首を傾げた。

父が死ぬのは知っていた。それ故に、風牙は父に問うたことがある。

親父よ、死期が近いが、どうするか？

それに彼の父は笑ったのだ。死ぬとしても、その時はその時だと、

何故だろうか、風牙は考える。

妖怪も、人も、終わりが来る。それは当たり前前の話だ。散々に対策を立てることも、覚悟を決めるための時間もあるはずだ。

父のように、母のように、置いていく存在も、置いていかれる存在も、ああであるべきなのだ。

けれど、何故だろうか。

麒麟丸も、是露も、そうなることぐらい予想が付いたのに、結末を迎えてようやくこんなはずではなかったと嘆くのだ。

彼らは人を、半妖を蔑んでいる。それは、多くの要因があつてのことだ。

けれど、風牙は思う。

そうやって、人を蔑んで、結局後悔を抱えた彼らの方がずっと人間のようにしか見えない。

麒麟丸も、そうして、是露も、本当にかあいと思うのだ。

だって、自分で手を離しておいて、惜しくなつて駄々をこねるその様はまるで幼子のようではないか？

その様が、かあい、かあいく、そうして、哀れなものだから。

(だめだな、是露殿を前にすると、どうしてもいたぶりたくなる。)

その女が、まるで、自分を前にすると幼い子どものような顔をするものだから。

だから、父のまねをしてしまうのだ。

せめて、その女の心が少しでも慰められるように。いたぶりたくなる気持ちを抑えるために。

(でも、うれしがってくれないんだよなあ。やっぱし、似てないのかね?)

かあいいいのだ、たまらなく、かあいいいのだ。

自分のことを、父を見捨てたのだと蔑みながら、そのくせ、この顔に惑わされて。自分を見るたびに、遠い昔の何かを懐かしんでしまう、哀れな女。

かあいいい、たまらなく、かあいくて仕方が無い。

だが、風牙にはそれを慰める手段は無い。

いらないと、おんなはそれをきりすててしまったのだから。ならば、風牙は女に出来ることは無い。

風牙はそんなことを考えつつ、上を見上げた。

「……でも、犬夜叉も起きたし。やっかいな、縁が繋がってるのも事実だよなあ。」
麒麟丸が眠っている間は、自分や殺生丸に対して敵対行動を取ることはないが、それはそれとして今後のことは考えておいた方がいいだろうか？

「……出来れば、あれは使いたくないんだがなあ。」

「何をされるので？」

「俺の牙、取りに行こうと思ってな。」

気だるそうにため息を吐いたそれは、あーあと、心底嫌そうな顔をした。一坊はそれを見た後に、周りを見回した。

風牙は、周りの惨状にも、そうして、是露にさえも興味を失っていた。

牙の本性

「……何だろうなあ。」

その日、鞘と呼ばれる妖怪はなんとも言えない顔で目の前の光景を見つめていた。目の前にあるのは、彼が親方様と慕う大妖怪、鬨牙王から封印を賜った叢雲牙だ。

それは、下手をすればこの世さえも滅ぼしかねない。

そんな剣の、はずなのだが。

「……いつそ、殺せ。」

「いや、そんなこと言わんでも。」

刀のくせに自害を望むそれは現在、物干し竿になっている。そうして、ばつちりとそこには洗濯物がぶら下がっている。

鞘はそれ相応に大変だった。鞘に宿り、その牙を封じ込めていた自分としては、それがけして善きものでないことは知っている。

だが、目の前のそれを見ると、さすがになんともいえない気分になる。

「鞘よ、貴様に、貴様にわかるか!? 我が名は叢雲牙! 多くのものがこの身を求めた! あの

殺生丸でさえもだ！だというのに！見ろ、この現状を！」

「ごてごてとした装飾のされた剣には当たり前のように着物だとかがぶら下がっている。」

鞘はさすがに哀れになって来た。それが猛威を振うのは確かに困る。困るのだが、なんとも言えない気分にはなる。

(にしても、風牙の奴、いったいどんな手を使つたんだが。)

叢雲牙は、強力な剣だ。実際、人や力の弱い妖怪が触ればすぐに操られてしまうだろう。けれど、物干し竿にしている時点で洗濯物を干す人間がそれに触れるのだ。だが、それでも人が操られることも無い。

叢雲牙もそれが何故かわからないのだ。

叢雲牙もなんとかしようとしていたが、何故か出来ないまま、物干し竿に甘んじている。

(・・・だーから、やなんだよなあ。)

別段、風牙は鞘を酷使することは無い。封印の役目が無いのだから、彼自身は気楽な者でのんびりとしている。

正直に言えば風牙はよい主人と言える。酷使されることも無ければ、やりたいことをすればいいと放置してくれる。

ただ、ひどく、気味が悪い。

風牙に懐く者は、彼を誠実だという。嘘をつかず、望みに対して真摯に答えてくれる。そうして、風牙を厭う者は彼をねじ曲がっているという。言うべきことに口を噤み、真意を理解すれどねじ曲げる。

それは、どこか、ひどくゆがみ、そうしてずれている。

それ故に、救われる者がいるのだろうか。それ以上に、破滅に導かれる者もまた多いのだ。

「風牙め、何故、我を使わん。我以上の牙など、このようにあるはずがないと言うのに。何故、何故だああああああああ！」

見てみる、目の前で一匹の妖怪に狂う天下霸道と謳われた剣を。

全てを蔑み、自身を振う存在さえも所詮はと扱っていた剣がだ。

鬪牙王が見れば何と言っていただろうか？

驚くか、賞賛するか。いいや、いっそ、笑い転げていたかもしれない。

「鞆？何してんだ？」

「うっおう!!」

考え事をしていた鞆の後ろから声がした。振り返れば、そこには物干し竿を担いだ風牙がいた。

「ふ、風牙か。」

「ああ、俺だが?」

「風牙よ!おい、ようやく現れたか!いつぶりだ!」

風牙はそのまま叢雲牙にかかった洗濯物を、物干し竿に移していく。その、時折する人間のような仕草が感覚をバグらせるのだろう。

人はそれに親しみを覚え、妖怪は侮りを持つ。

「ふ、風牙よ!なんだ!到頭、我を使う気になったのか!?ふっふっふっ、いいだろう!どのような敵も我と貴様ならば打ち倒すことが出来るだろう!」

「……..やっぱし、使いにくいよなあ。」

風牙は気だるそうにため息を吐くと、そのまま叢雲牙を背中に収めた。

「…….自分の牙、取りに行かないとなあ。」

ぼやくようなそれに鞘は驚いた。長い間、叢雲牙とそれの側にいるが、風牙が牙をすでに取得していることを知らなかったのだ。

そうして、次に叢雲牙が叫んだ。

「どういうことだ!?!我という者が有りながら、他の剣を使うなど、絶対に許さん!!」
「だって、お前、つまんねえんだもの。」

風牙は淡々とそう言い切った。

「姿が見えない、妖怪、ですか？」

弥勒法師の言葉に、目の前の村人はほとほと困り果てた顔をした。

その日、犬夜叉一行は、とある村でおそらく妖怪の仕業だろう事についての相談を受けていた。

そこで村人がしてきた相談というのが、透明人間がいるというのだ。

食料や金などがなくなってしまう、見張りを付けてもだめという。

「中には怪我をした者もおりまして、ほとほと困っております。」

「なるほど、原因と思うものはありますか？」

「……そうですね。」

村の長老は少しだけ考えた後に、ちらりととある方向を見た。

「一つだけ、あるにはあるのですが。」

「本当に獣はおろか、虫さえいないね。」

そう言って珊瑚は周りを見回した。

村長の言っていた原因になりそうだというのが、村近くのとある山だった。

その山は、不思議なことに妖怪も出なければ、獣も、ましては虫さえ見当たらないのだという。おまけに、山の奥を目指してもすぐに麓にまで戻ってしまうのだという。

また、山に入った者の殆どは行方不明になっているのだそう。

村としては、少なくとも、妖怪達が寄りつかないため平和な生活を送れているため、土地神か何かがいるのではと祠を作ってまつているのだという。

「この山におそらく、村に盗みに入っている存在のてがかりがあると思いますが。犬夜叉、どうですか？」

「……おかしい。」

犬夜叉は山に入ってから鼻をすんすんとならしていたが、不機嫌そうに顔をしかめた。

「においがしねえ。」

「鼻が利かなくなつたの？」

「ちげえよ、お前らのおいはわかる。ただ、この山、気味がわりいほど、なんのにおいもしねえ。」

ぼやくようなそれにかごめは首を傾げた。

「なんの？」

「ああ、強いて言うなら、草だとかのにおいはするが。生き物のおいがしねえ。」
「おかしな話じゃな。」

神というのならば動物さえもないというのはおかしい。妖怪というのなら、そういった痕跡も見当たらない。

「ふむ、ともかく、奥に向かつて見ますか。」

弥勒の言葉に一行はともかくはと山奥に進み始める。

が、歩けども歩けども、頂上にたどり着くことが無い。同じ道をぐるぐると回っていることに気づいたが、元いた道を引き返しても変わらないのだ。

試しに、風の傷や風穴を使ってみたが、周囲の木が吸い込まれるだけで、結局うっそうした景色が広がっているだけだ。

「どうなってるんだ!？」

「雲母で飛んでも、いつの間にか、戻ってきてるし。」

「かごめえ、何か感じんのか?」

「妖力も、何も感じない。四魂の欠片の気配もないし。」

「日が傾いている、ということは時間は経っているのでしょうか。幻術にしてはその気配もない、ということですよね。」

「どーなっとんじゃ!」

歩きづめのせいか、また、疲れもあつてのことか七宝はその場に座り込んだ。それに犬夜叉たちは顔を見合わせた。このまま歩き続けるのもいいが、確かに日も暮れている。

「今日はひとまず、ここで休みますか。」

「いいの、法師様？」

「ええ、それに、もしかしたら待つていた方が動くこともあるでしょうか。」

それが、暗に相手をおびき寄せる意味合いであることを察して、皆で顔を見合わせて頷いた。

「なら、一旦は野営としましょうか。」

犬夜叉たちはそのまま野営の準備をしていた。かごめは犬夜叉と、そうして七宝と共に川に水を汲みに向かった。

「にしても、けつたいな話じやの。姿も見えず、存在さえわからんとは。」

「においがしねえのは気になるが。」

「そうよね、少なくとも四魂の欠片の気配はないんだけど……。」

そう言つて川に屈み込んだ。何かがあるわけではない、気配も、音も、何も無かつたはずなのに。

かごめの鼻に、なにか、キツイ臭いが突き刺さる。それと同時に、意識が薄れていく

のを感じた。

「……かごめ？」

頭痛を感じながら、眼を覚ました先に広がる光景にかごめは自分が攫われたことを理解した。ごつごつとした岩肌に、固い地面。起き上がれば、蠟燭の火でなんとか周囲を見回すことが出来た。

そこは、簡素な牢だった。木枠で覆われたそこは、お世辞にも丁寧なものではなかったが、頑丈なものだ。

周囲に気配は無い。

攫われたことを理解し、そうして、縛られていないことに安堵する。さすがに荷物は奪われている。

「……やってやろうじゃない。」

攫われること自体はいつものことだと、かごめは覚悟を決めてそつと周囲を見るが、人の気配も無い。牢屋の格子を見るが、かごめの細腕では到底壊すことは難しそうだ。

「もう、どうすれば……」

「もっし。」

突然かけられたそれに、かごめはびくりを肩をふるわせ、そうして、声の方に振り向いた。自分を攫った存在かと思つたが、その声の主はひどく静かにかごめに声をかけた。

そこにいたのは、ひどく小柄な存在だつた。声自体はしわがれており、老人のようだ。そうして、見据えた先にいたのは、古びた布を被った何かだつた。古い布から伸びる手や、そうして顔は包帯で覆われている。

つんと、刺すような薬の匂いがした。

「もしや、かごめ様、でしょうか？」

「あ、あんた、誰?!」

「おお、これはご無礼を。私は、風牙様に仕えております、一坊と申します。深々と頭を下げたそれから出てきた、風牙という単語にかごめは固まつた。

「ふ、風牙さん？」

「ええ、そうです。かごめ様こそ、何故、ここに？」

「あ、あの。姿の見えない妖怪がいるつて、聞いて。」

「ああ、なるほど。そういうことですか。」

一坊と名乗つたそれは一度頷き、そうして、改めて気づいたように頷いた。

「ともかく、ここから出られた方がいいですね。」

「だ、出してくれるの？」

「あなた様に何かあれば、私が叱られてしまうので。」

その言葉と同時に、一坊と名乗ったその右腕を差し出した。それと同時に、その手が肥大化し、鋭い爪に覆われていた。

ばきりと、そんな音と共に格子はその手によつて破壊された。

「どうぞ、出てこられてください。」

「あ、ありがとう。」

砕けた木片を越えてかごめが廊下に出ていると、一坊の手はまたすると小さくなる。そうして、かごめは、元に戻った手がぐずぐずに腐敗していることに気づいた。

思わず固まったかごめのそれに一坊は恥じるようにそれを包帯で覆った。

「お見苦しいものを、申し訳ございません。」

「え、あ、あの、そんなことはないです。」

「よいのですよ、気分のよいものではないでしょうから。」

静かなそれにかごめは思わずと言えども、反応してしまったことを恥じた。

「さあ、参りませうか。ともかく、犬夜叉様たちと合流された方がいいですね。」

「道、わかるんですか？」

「ええ、ここは私の旧知の仲の人間がおりますので。」

「一坊さん、透明な妖怪と知り合いなんですか!？」

「・・・ああ、相手はどう思っているのかしりませんが。」

苦々しい言葉と共に一坊は歩き始めた。

のそのそとした歩き方ではあるが、そこまで遅いというわけでは無く一坊は進んでいく。

（この人、よう、かい？それとも、うーん、でも、人間じゃ無いわよね？）

「あの、一坊さんは、どうしてここに？」

「村で悪事を働いているという存在に風牙様があるとあるものを預けておりました。それを返し、お届けするように使いを命じられているのですよ。」

「あるもの？」

「風牙様の宝、でしょうか？」

かごめは風牙の大事にしているものに興味が出たが、さすがにそれに突っ込む勇気が出ずに、口を開いた。

「その、その、存在ってどんな妖怪なんですか？」

「ここにいるのは、妖怪では無く、人ですよ。」

「え、人間!？」

驚きに満ちあふれたそれに、一坊は軽く首を振った。

「まあ、すでに妖怪になり果てているのでしょうか。」

「人間が妖怪になることなんてあるの?」

「ありますよ。死人の無念が妖怪になるように、生者であれど強力な念を抱えて生きれば、成り果てられるのですよ。私も、同じような者です。」

かごめは前を歩く存在の手が大きくなったことを思い出す。

風牙という存在についてかごめは考える。

風牙について、どう思っているかと言われると困る。

確かに、恐ろしいものは恐ろしい。それは、良くも悪くも、人では無いのだから。

けれど、人ではないというのなら、殺生丸はどうだろうか?

彼のことは、確かに人では無いが、けれど、なんだかんだで犬夜叉への不器用な気遣いが見て取れる。

人間については好ましくは思っていないようだが、距離さえ保てば何もしてこない。

けれど、風牙は違う。

遠く、けれど、近しく。

自分を殺すために振り上げた手を、気まぐれで、抱擁に変えるような気まぐれさ。

(恐ろしくは、ないのかしら。)

今日は生きていることが、けして、明日への肯定に繋がらない在り方。

恵みを与え、慈悲深く笑いながら。どこかその牙が自分の首に突き立てられる日を考えてしまう。

「風牙様の元にいる私を、変わっていると思われませんか？」

「え、いや、そんなことはないわ！」

「いいえ、よいのです。あの方についてある程度よく知れば、そう想われる方もおられますので。」

こつりと、足音がする。

小さくて、静かな音がする。

「……あの方は月のようなものですので。」

「月？」

「多くのものは日の下を生きるものでしょう。妖怪も、確かに夜に活動する者もおりますが、太陽の下で動けないわけではございません。ただ、日の下ではどうしても、生きづらいものもおるのです。あの方は、夜に生きること赦してくださいました。」

一坊はそう言つて包帯に覆われた手をかごめに見せた。

「私は、病魔に冒され、肌は溶け、肉は腐っております。寺の軒下に転がり、死を待つだけの身でした。その時、あの方は私を見つけてくださりました。あの方は、そんな私を見て、微笑みかけてくださいました。」

おお、なんともまあ、哀れでかあいいことだ。

一坊の脳裏には、その時の、神様みたいな美しい人のことが鮮明に記録されている。「あの方は、優しい方ですよ。ただ、それを受け取る側が愚かなだけのことです。」

穏やかな声音に、かごめが何か言おうとしたとき、洞窟のどこかで盛大な爆発音がした。

「な、何!?!」

「………急いだ方がいいですね。」

かごめたちが走った先は、なかなか開けた場所だった。一坊曰く、かごめたちがいるのは、山をくりぬいた大きな洞窟の中らしい。

そうして、その開けた場所では、犬夜叉と弥勒、そうして、珊瑚が武器を構えている。彼らが何と対峙しているのかとみるが、そこには何故か縄で縛られた七宝が泣きながら転がっているだけだ。

「七宝ちゃん!?!」

その言葉に犬夜叉たちはかごめの存在に目を見開いた。

「かごめ、無事か!?!」

「私は無事! だけど、いったい……」

「来るな!」

「え？」

かごめが通ってきた通路から犬夜叉たちのほうに駆け寄ろうとしたとき、何か飛んでくる。

「危のう、ごいいます。」

強烈な爆発音の後、かごめは自分を庇う一坊の存在に気づいた。そうして、ようやく一坊の存在に気づいた犬夜叉もまた目を見開いた。

「一坊、なぜ、てめえがここにいる……!？」

「風牙様のお使いで来たのですが。はあ、まったく、愚かなことをしたものだ、守番よ。」
一坊は呆れたようにそう言った後、どこからか朱い玉を取り出し、そうして、それを七宝側に放り投げた。

カッ!

その玉は宙で光り、そうして、砕け散る。欠片が辺りに飛び散った。
それに犬夜叉は声を上げる。

「このにおい、まさか、風牙の血？」

光に眩み、目を一瞬だけ庇う。そうして、改めて見た視界の中には今まで存在しなかった一人の男がいた。

瘦せ、すさんだ目をしたそれは、犬夜叉たちの視線に気づき、恐れるように七宝を掴

んだ。犬夜叉は明瞭に、においも、目も、すっかりと男を認識し始めたことに驚いた。けれど、犬夜叉たちはすぐに男の存在さえも忘れそうになる。

なぜならば、男の手には、それはそれは美しい刀が握られていたのだ。

それは、白と、それだけで表現が出来そうなほどに白い刀であった。

握る柄も、柄から伸びた燻るような布も、すべてが雪で出来たような白い、刀。

何よりも目を引いたのが、その刀身だ。

鋭く、華奢に見えるそれは、まるで夢幻のように、それこそ光を放っているかと幻視するほどに真白に輝いている。

男はその刀を無作法に振り回し、一坊を睨んだ。

「……愚かなことをしたものだな、守番よ。風牙様の慈悲にすぎりながら、なんということを。」

「くそー！ 化け物の腰巾着が、今更何をしにきた！」

「貴様こそ、何をしている！ 貴様の目の前におられるのは、風牙様の弟君、犬夜叉様なるぞー！」

その言葉に男は顔を青ざめさせて犬夜叉を見た。犬夜叉はそれに、今回の出来事がまた、己の兄が関わっていることを理解した。

重苦しく、そうして、喉からこみ上げてくるような感覚がした。

愛した兄の、罪が、己を見ている。

男はせせら笑うように犬夜叉を見た。

「は、あの化け物の弟か、ずいぶんと可愛らしいことだ！あいつのせいで、俺は散々だ！」
「……風牙は、いったい、お主に何をした？」

犬夜叉の様子を慮り、弥勒がそう言えば、男は憎々しげに吐き捨てる。

「あいつが、俺のことをここに閉じ込めたんだ！この刀の守番をしろつてな！それから、俺は何故か、誰にも認識されなくなりやがった！声を発しても聞こえやしねえ！目の前にいても、誰にもみえねえ！生きていくために盗みだつて働かなきゃならなかつたんだ！この、刀のせいだな！」

憎しみをたぎらせたその男の言葉に犬夜叉は怯むが、それに一坊は犬夜叉の前に躍り出た。そうして、犬夜叉にかごめが駆け寄る。

「黙るがいい！全て、貴様が望んだことであろうが！」

「話が違う！」

「夜盗として、侍達に追われた果てに、一人でひっそりと暮らしたいと、誰にも見つからないようにしてくれと懇願してきたのは貴様のはずだ！」

「俺は隠れ家を望んだだけだ！」

「ふん、よく言うわ！姿が見えないことに関しても、最初は堂々と盗みが働けると喜んだ

のであろう！風牙様が、人よけをしてくれていたというのに、山に入ってきた者を襲い、殺し、盗みを働きおつて！貴様を哀れんだ、この身の愚かしさを呪うぞ！」

「ああ、最初は感謝していただき！村が焼け出され、そうして、夜盗に落ちたと懇願すれば、同情したお前にはな！」

「神隠しに会つたつて人は、こいつが!？」

「……ええ、盗んだものが堆く、つまれておりましたよ。」

一坊のそれに、犬夜叉たちは男を睨む。けれど、その腕の中で泣きわめく、七宝の姿にどう動くかと考えていたとき。

男はにやつきながら方を掲げた。

「はははあはあはあはあ！一坊よ、お前は俺のことをなめているな!?確かに、俺の力は、ちんけな妖術や、札。お前には勝てねえだろう！だがな、俺は誰よりも、この刀の側にいた！力の使い方も、十分にわかつてるんだよ！」

その言葉と共に、男は刀を振った。それと同時に、また、男の姿が消えていく。

「あいつ！」

犬夜叉が一步前に飛び出す、それに一坊が静止する。

「……犬夜叉様、追う必要はございません。」

「一坊、何言つてやがる！」

「……風牙様が、来られましたので。」

男はそのまま洞窟の中を走り出す。それは、もう、幾年も過ぎした、馴染んだ住処だ。入り組んだ、ありの巢のようなそこさえも、男にとつては支障は無い。

「なんでじゃ！犬夜叉！かごめえ、みろくう、さんごお!!わしのが見えんのか!?!」
「黙つてろ!」

男は走る。

何故だと考えながら。

最初に、かごめと呼ばれる女を攫つたのは、偏に物珍しい衣装が高値で売れそうだったから。

そうして、子狐を攫つたのは、毛皮が目当てであつたから。

ばれることなどあり得るはずが無い。この山で、洞窟の出入り口に自分以外がたどり着けるはずが無いのだ。

だというのに、犬夜叉たちはそれを見つけ、そうしてあまつさえ追ってきたのだ。

誰も、男のことを、見ることも、聞くことも、においさえもわかるはずが無いのに。

それ故に、男は見えないことをいいことに術の籠つた札などを投げて何をしのいでいたのだ。犬夜叉たちからすれば、目に見えない攻撃が飛んでくるのと同様であつた。

(いいや、今度は違う。)

失敗ばかりだ。村が焼け出され、夜盗になり、そこさえも侍達に潰された。けれど、自分には、その刀がある。

この力さえあれば。

別に、山を下りれないわけではない。ただ、ここでなら好き勝手にできたから居着いただけだ。

ならば、この刀の力を使って、好きかってするのもいいだろう。

そう思って、男は洞窟から抜け出した。外はすでに朝日が昇っている。

明るさに、目を瞬かせた、その、先で。

「久方ぶりだな、守番よ。」

穏やかに微笑む、人でなしがいた。

「気になるか、狐の小娘よ。」

その言葉に、狐の妖怪である白縫はなんとも言えない顔をした。

どう、応えていいのか、わからなかったのだ。

白縫の目の前には、風牙の母、通称は御母堂と呼ばれる大妖怪がいた。それは、楽し

そうに目を細めて、座に座っている。

「……いいえ。」

「嘘を言え。大方、あれが取りに行つた牙のことが気になるのであろう。正直に言つてみよ。」

その日、白縫は御母堂への使いに出されていた。ただ、出てくる際に、風牙が牙を取りに行くと言つていたことが気になっていた。

それを言い当てられ、何よりも、御母堂の言葉には素直に従うことを言われていたため、口を開く。

「……あなた方の一族は、己の力の結晶である牙を使うことを主としてしていると聞き及んでおります。ですので、風牙様が、何故、その牙を手放しているのか、気になっております。」

「素直で良い。そうよなあ。」

御母堂は目を細め、どこともいえない宙を見つめる。

「牙とは、いわば、己の妖力の象徴だ。強い力を持てば、強い牙を持つことになる。だが、風牙の牙は少々特殊でな。戦いには向いておらん。」

「それは、弱い、ということですか？」

御母堂は子どもの素直な言葉にころころと笑つた。無礼千万な言葉であるが、その子

どもが厄介な長男の気に入りで、よくよく仕えていると知つてゐるため、それを見無視する。

「弱いか、ふっふっふ、確かにそうとも言ひ切れる。だが、あの牙と対峙するのは、叢雲牙よりも厄介やもしれんな。」

御母堂は笑つた。

「……風牙の牙、無牙の力は、簡潔に言えば縁切りと、縁結びなのだ。」

「縁、ですか？」

「久しぶりだな。」

「風牙、の旦那……」

男はがたがたと震えながら、刀を握りしめた。それに、七宝はたんとその場から抜け出した。

犬夜叉たちの方に逃げようとしたが、正直に言おう、腰が抜けて動けなくなる。

けれど、風牙は特別、何も気にならないように言葉を発する。

「はあ、確かに放つておいた自覚はあるが。だからといって、これはどうなんだ？」

「いいえ、何を言つておられるんですか？俺は、ただ、刀を守ろうと。」

「ああ、わかつてゐる。だが、仕方が無いだろう？」

「お、弟君とも、争う意図なんてなかったんです！」

「ふむ、だが、だからといっておいたが過ぎたな。まさか、ここまでのことをするとはな。」

七宝はずるずるとその場から腹ばいになって逃げ出そうとする。

けれど、そこで気づく。

二人の会話は、かみ合っているようで、かみ合っていない。

何か、ちぐはぐに、乖離している。

「わかった、わかった、だから、帰ってくるといい。」

その、風牙の言葉と共に、風牙の刀が鳴った。

「は、なんで!？」

刀はふわりと浮き上がり、そうして、風牙の手元に収まった。それに七宝は風牙が、刀に話しかけていたことを理解する。

「はあ、やつぱり、わけのわからん奴だな。さて、守番よ。お前は、どうする?」

七宝は、振り返ることが出来なかった。だって、その声音があんまりにも普通であるためだ。

七宝は、これでも妖怪だ。

だから、力を持った妖怪達の、傲慢さだとか、人への蔑みだとか、理解している。

だからこそ、恐ろしい。

だって、風牙の声には、欠片だって怒りだって、なんにも存在しなかった。

人に、高々、人に好き勝手にされて、何にも感じていない声音。

「お、お許しください！」

「ふむ、ゆるす、か。どうして欲しいんだ？お前は、この生活に満足していなかったみたいだが。」

「死にたくない！いやだ、死にたくない！もう、誰にも認識されずに、一人でいるのは嫌だ！痛いのも、嫌だ！」

震えるそれに、風牙は笑った。

「そうかい、ああ、わかった。お前の願いを、叶えてやろう。」

それと同時に、かちやりと、刀の音がした。それに七宝は目を白黒させた。何故って、視界に唐突に多くの糸らしきものが映り込んでいたのだ。

それは、自分の周りであったり、そうして、遠くに伸びていたり様々だ。

見れば、男の周りにも、自分よりも少なくあるが糸がいくつつか、漂っている。

それを、風牙は振りかぶった刀で、切った。

「へ、う、あああああああああああああだだあさあだふあああぎやあうえああ
!!?」

意味のわからない言葉を男が発した、それと同時に、その、肌が、ぐずぐずに腐っていくのを、七宝は見た。

「お、れの、おれ、の、か、がら、だ!?!」

腐臭がする、死の臭いがする、どろどろに体が溶けていく。なのに、七宝は理解する。それは、死ぬことも無く。のたうち回り、そうして、山の中に消えていく。

「……変だなあ。望むようにしてやったのに。」

風牙はそう言った後、すつと七宝に微笑みかけた。

「やあ、狐の坊主。どうした、迷子か?」

柔らかなそれは、まるで、七宝の喉に牙を突き立てるがごとく、恐ろしかった。

「そうだ。」

御母堂は笑った。

「この世には、多くの縁がある。それは、わかるな?」

「はい、それは、わかります。」

「だがな、あの愚息曰く、縁とは単に人や妖怪同士だけではないそうさ。」

「人や、妖怪以外の縁、ですか?」

白縫ははてりと首を傾げた。それに御母堂はころろと笑った。

「ああ、武器や物にも縁があるそうさ。そうして、因果や運命にも縁というものは存在する。」

それは婚姻などの出会いに関するもの、良縁と悪縁といっても、それは個々人に限らず、金や地位などもまた縁というものは存在する。

そうして、死や、病魔もまた、破滅さえも、それぞれに縁が存在する。

「あれの牙である無牙はその運命さえも、縁を切ることが出来るのだ。」

「そ、それは、不死が可能と言うことでしょうか？」

「……そう、都合のいいものではない。死ねなくなると言うことは、どんな状態でも生きてしまうと言うことだ。下手をすれば、永劫の苦しみを味わうはめになる。」

何よりも、と御母堂は笑った。

「あれの牙は、切り捨てる刃というのはあくまで一側面。あれの牙の本質は、どんな縁をも縫い付けることに本質があるのだ。」

「……それは。」

「ああ、そうさ。」

御母堂は、ころころと楽しそうに笑った。長男のまったくと違っていいほど奇怪な牙を思い出し、そうして、その運命さえも理解できる力を持つことを退屈だと言い切つて放つておいたそれに笑いが起こる。

「あれの牙は、刃であり、そうして、針なのだ。死ぬ運命を、崩壊する因果を、あれは他人の運命を容易くいじれる力がある。」

退屈な力だろうか？

そう言つて、御母堂は美しい顔をほころばせて、幼い狐に言つてのけた。